滿蒙紹介



其利斷金

辛酉秋日題

素空伊

語ニ曰ク百聞ハ一見ニ如カズト、斯語千古ノ格言トシテ人口ニ膾炙シ、余モ亦平常心服セシ所ナリ。然レトモ此次任ニ滿洲ニ蒞ミ、親シク滿蒙ノ地ヲ踏査スルニ及ンテ、更ニ悟ル所アリ。以爲ラク、生來未タ嘗テ此ノ如ク、斯語ノ深味ヲ體得セシコトアラスト。本書題シテ『滿蒙紹介』ト曰フ、雖然、是レ唯區區ノ文字ノミ、若シ夫レ之ヲ觀ル者モ、其ノ得ル所ハ亦只百聞ノ一タニ如カサルナリ。親歷ノ一見ニ比センヤ、唯其レ然リ、乃チ期スル所ハ、人ヲ引イテ滿蒙一遊ノ心ヲ誘致スルニ過キサルナリ、豈多キヲ求メンヤ。付印成ルヲ

告ク、乃チ數語ヲ卷首ニ題スト云フ。

大正十年十月

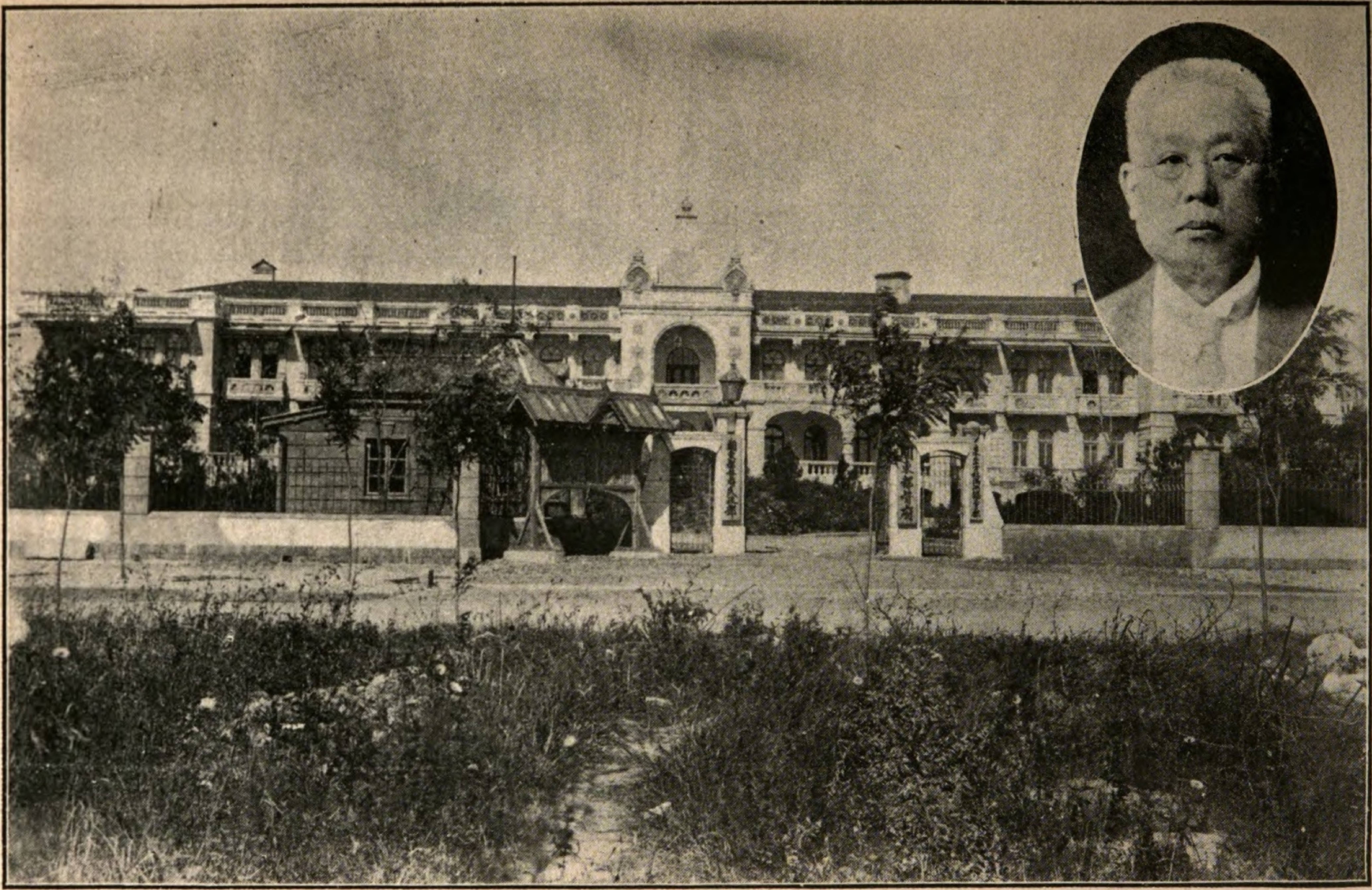
南滿洲鐵道株式會社

社長　早川千吉郎



(東三省略圖)

東三省巡閲使張作霖閣下



關東廳及關東長官山縣伊三郎閣下



滿鐵本社及早川社長

取引所運道一覽

錄運主張者

南滿洲鐵道會社
三井物産會社
三菱商事會社
鈴木商店
大倉商事會社
古河商事會社
日清製油會社
大阪商船會社
日本棉花會社
湯淺貿易會社

正金銀行
正隆銀行
龍口銀行
大連商業會議所
大連華商公議會
大連取引所取引人組合
大連錢鈔取引人組合
大連株式商品取引所株式取引人組合
大連油房聯合會
滿洲重要物産同業組合

316,000,000円

1,129,000,000円

目次

第三編　地方經營

第四編　交通運輸

第五章 營業

附録

第一編　地理及歴史

第一章　地理

滿洲ハ、支那本部ノ東北部ニ在リ。面積約三八二、〇〇〇方哩、南ヨリ北ヘ盛京、吉林、黑龍江ノ三省ヨリ成リ、支那人ハ、一般ニ、東三省ト稱セリ。

東ハ、鴨綠江、豆滿江、烏蘇里江等ヲ以テ、朝鮮竝ニ露領沿海州ニ境シ、北ハ、黑龍江ヲ以テ、露領黑龍州竝ニ後貝加爾州ニ接壤シ、西ハ、東部内蒙古ニ連ナル。南ハ、遼東半島斗出シテ、遙ニ山東半島ト相呼應シ、共ニ渤海灣ヲ抱ク。


長白、大興安嶺二大山脈ノ間ニ橫ハレル谷地ハ、所謂滿蒙ノ大平原ニシテ、南部ハ遼河ノ流域、北部ハ松花江ノ流域トス。此兩流域ハ、低キ分水嶺ヲ隔テテ、南北ニ連ナリ、自然ノ良交通路ヲ形成シ、南滿、東淸兩鐵道之ヲ貫通シ、大連ヨリ哈爾賓ニ至ル、六百哩ノ間、一箇ノ隧道ヲモ見ズ。

滿洲ハ、北緯三十八度四十分ヨリ、同五十三度三十分ニ亙リ、佛蘭西、伊太利ト、略同緯度ニ位スレトモ、其氣候ハ、著シク大陸的ナリ。

一般ニ、滿洲ノ氣候ハ、農業ニ好適シ、大豆、小麥、高粱、粟、玉蜀黍等ノ產出夥シ。現在滿洲ノ耕地面積ハ、約二六、六三〇、〇〇〇「エーカー」ニシテ、之ヲ可耕地面積ニ比スレハ、其半ニモ達セス。

人口總數二〇、一一〇、〇〇〇人餘、支那本部ニ比シ、密度頗ル小ナリ。(一平方哩ニ凡五三人)其分布狀態、南方ニ密ニシテ、北方ニ著シク疎ナリ。(奉天省一一、九八〇、〇〇〇人、吉林省五、六四〇、〇〇〇人、黑龍江省二、四九〇、〇〇〇人)是レ、一ハ、氣候ノ關係ニ依ルモ、元來、滿洲ノ開發ハ、支那本部ヨリノ、移植民ノ力ニ負フ所大ナルヲ以テ、支那本部ヨリ、遠隔ナル、此滿洲地方ノ發達遲キハ、自然ノ數ナリ。在滿洲日本人總數一七〇、〇〇〇人、白人六〇〇〇人トス。

滿洲ニ於テ、日本ト最モ密接ノ關係ヲ有スル、南滿洲ノ所在ヲ明示スル事ハ、稍困難ナレトモ、吾人ノ大體了解セルモノハ、西曆、一九〇九年、日露兩國間ニ概略協定セラレタル所ニ基クモノニシテ、大略、琿春ヨリ寧古塔ヲ通シ、洮南北方ノ洮兒河ヲ以テ、北方ノ境界トシ、西境ハ、洮南、白音太來、遼河河口ニ至ル線ヲ以テ、劃セラルル地域トス。更ニ、他ノ標準ヲ以テ說ケハ、東支鐵道ノ屬スル部分ヲ、北滿洲トシ、南滿洲鐵道ノ屬スル部分ヲ、南滿洲ト謂フヘシ。北滿洲ハ、以前ハ、露國ノ勢力圈內ニ屬シ、我利害


河南
運河
四國


吉
長
白
四
國
日
本
大

ト密接セルモノヲ、南滿洲トス。然モ、其面積タルヤ、一一七、九二一方哩ニシテ、北滿洲ニ比シ、三一%ノ一小部分ニ過キサルナリ。尙ホ、租借地關東州ハ、遼東半島ノ先端ニ位シ、其面積僅ニ一、三〇四方哩ニ過キス。而シテ、滿鐵會社カ、鐵道沿線ニ有スル附屬地ノ面積ハ、總計一〇〇方哩ニ過キサル小區域ナリ。

第二章　滿洲ノ歷史的考據

一、滿洲ノ歷史

支那人種ヲ、風俗習慣ニヨリ、之ヲ滿洲及漢人ノ二ニ大別ス。滿洲ハ、近世ニ至ルマテ、滿洲人ノ占居スル所ニシテ、數千年ノ久シキ間、滿洲人ハ、此ノ地ニ原始的生活ヲ營ミ、殆ント、文化ノ見ル可キモノナクシテ近世ニ至レリ。

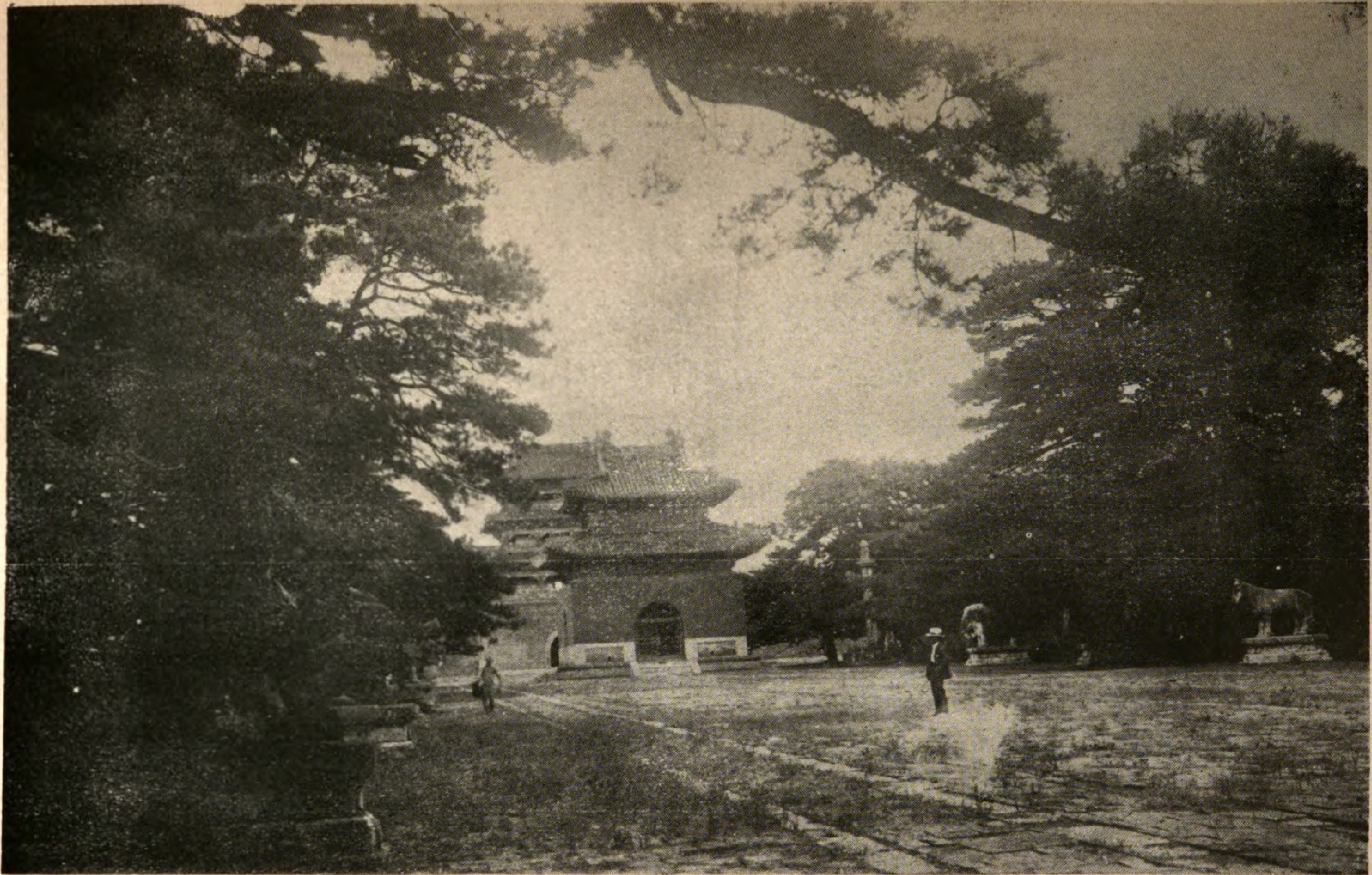
滿洲人ハ、今ヨリ略千八百年前、高句麗國ヲ建設シ、次テ、扶餘、渤海、契丹、金ト、其ノ建國ヲ代ヘ、金ハ當時次テ朝鮮ノ北部ヲ略シ、東部蒙古ヲ取リ、更ニ支那北半ヲ征服シテ、頗ル優勢ナリシカ、後百餘年ヲ經テ、外蒙古ニ興レル元朝ノ指揮下ニ降リ、後明朝ヨリ清朝ニ至ル。清國ノ支那本土ヲ征朝平定スルヤ、殆ント、其ノ國人全部ヲ擧ケテ、支那本土ニ移住シタルカ、滿洲ノ故地ハ、其ノ祖先發祥ノ地タルノミナラス、高價ナ

ル野生人蔘ノ產地ニシテ、淸國政府ノ重要ナル財源タリシカハ、漢人ノ之ヲ採取スルヲ防カン爲、遂ニ滿洲封禁ノ令ヲ出シ、漢人ノ滿洲ニ入ルヲ禁シ、關ヲ設ケテ之カ取締ヲ爲シ、同時ニ、朝鮮ト條約ヲ結ヒ、豆滿江及鴨綠江ノ西部沿岸ハ、兩國ノ間衝地帶タラシメタリ。

斯ノ如クシテ、爾後百年ノ間、滿洲ハ無人ノ境ニ歸セリ。漢人ハ、淸朝ノ滿洲封禁政策ニ依ツテ、滿洲ニ入ルヲ許サレサリシカ、支那本土ニ於ケル人口ノ增加ハ、漸次生活ヲ壓迫スルニ至リ、滿洲移住ヲ希望スルモノ多ク、遂ニ、政府ノ禁令ヲ犯シ、竊カニ滿洲ノ地ニ入ルモノ少ナカラス。之カ爲、滿洲モ漸次開發ノ機運ニ進ミ、次テ、到底漢人放逐ノ不可能ナルヲ見テ、滿洲封禁ノ令ヲ解キ、漢人ノ滿洲移住ヲ許スニ至レリ。漢人ノ滿洲ニ入ルニ及ヒ、鴨綠江方面ノ間衝地帶ハ、漢人ニ依ツテ占領セラレ、遂ニ、支那ノ領土トシテ認メラルルニ至レリ。尙、豆滿江方面ニ在ル所謂西間島ハ、朝鮮支那間ニ幾多ノ交涉ヲ重ネタルモ、其ノ歸屬未タ明ナラサリシカ、日本カ朝鮮ヲ保護國ト爲ニ及ンテ、一九〇九年間島協約ニヨリ、支那ノ領土タルコトヲ認メ、次テ、朝鮮人ノ移住ヲ許容セシムルコトトナレリ。

二、露支關係

沿道ノ風光



北陵　奉天北二哩太宗帝ヲ祀ル

露國ニ於テ、ロマノフ王朝ニ至リ、領土擴張ヲ策シ、盛ニ西伯利經略ヲ行ハシメタルモ、當時、清朝ハ、支那ヲ統一シ、其ノ國威隆々タル時ナリシカハ、露國ノ勢力ハ、以テ支那ニ對抗スルニ足ラス。一六八九年黑龍江上ニ於ケル清露ノ折衝ハ、全然露國側ノ失敗ニ歸シ、其ノ黑龍江畔ニ築キ上ケタル要砦ハ、二世紀ノ久シキニ亙リ、空シク風饕雪虐ノ間ニ放置セラレタルモ、ムラヴイエフノ極東太守トナルヤ、露國ノ勢威ヲ負ヒ、清國ノ英佛聯合軍ニ苦シメラルルニ乘シ、一八五八年、愛琿條約ヲ訂結シテ、黑龍江左岸一帶ノ地ヲ奪ヒ、竝ニ、黑龍江航行權ヲ獲得ス。次テ、烏蘇里江東ノ地ヲ加ヘ、浦鹽斯德港ヲ開キテ軍港兼商港トナシ、太平洋岸ニ出ツルヲ得タリ。カクテ、露國ノ勢力ハ、駸々乎トシテ極東ニ及ヒ、黑龍、烏蘇里、二江ヲ距テテ、滿洲ト相對スルニ至ル。後、日支間ノ下ノ關條約成ルニ乘シ、支那ヲ動カシテ、一八九六年、清國トノ間ニカシニー條約ヲ締結シ、東支鐵道ノ布設權ヲ得、次テ、一八九八年春、遂ニ關東州ノ二十五箇年間租借ヲ爲シ、哈爾賓ヨリ、旅順、大連ニ至ル鐵道敷設權ヲ獲得セリ。後、アレキシーフ大將ノ極東太守トシテ旅順ニ來リ、文武ノ大權ヲ統フルニ至ルヤ、露國ノ決心ハ動カス可カラサルモノアルニ及ンテ、遂ニ、日露戰爭ノ發生ヲ見タリ。其ノ結果、一九〇五年八月五日、ポーツマウスニ於ケル日露媾和條約ノ締結ニヨリ、我國ハ、露

國ノ權利ヲ承繼スルコトトナレリ。

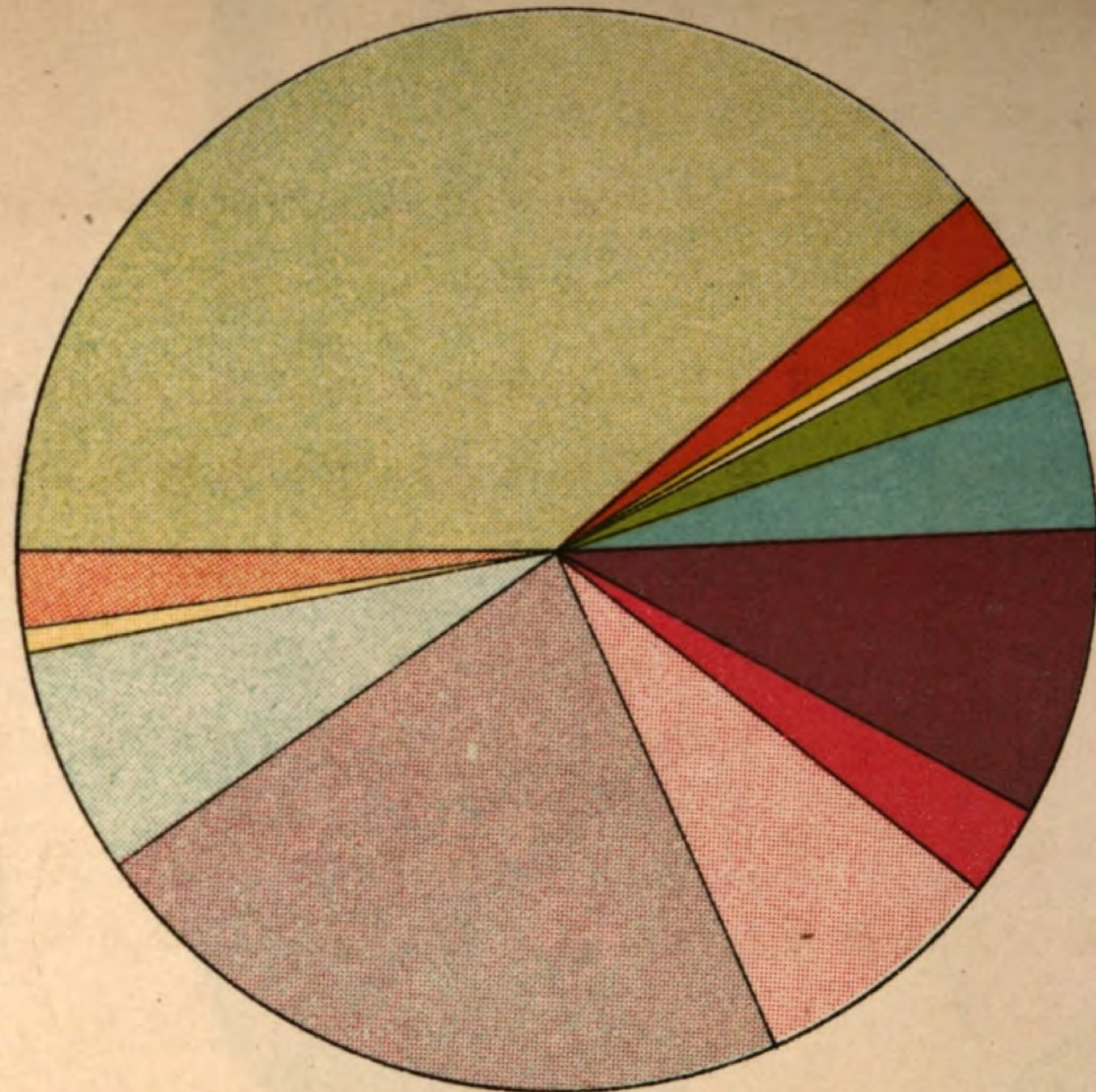
三、滿鐵ノ創立

卽チ同條約第六條ニ據リ、露國ヲシテ、從來東支鐵道會社ニ屬シタル長春、旅順口間ノ鐵道、及、其ノ一切ノ支線、竝、同地方ニ於テ、之ニ屬スル一切ノ權利、特權、財產、及、同地方ニ於テ、該鐵道ニ屬シ、又ハ、其ノ利益ノ爲ニ經營セラレタル一切ノ炭坑ヲ、擧テ日本ニ移轉讓渡セシメタリ。之レ、戰前兩國關係ヲ考察スレハ、當然ノ歸結ト云フヘキナリ。

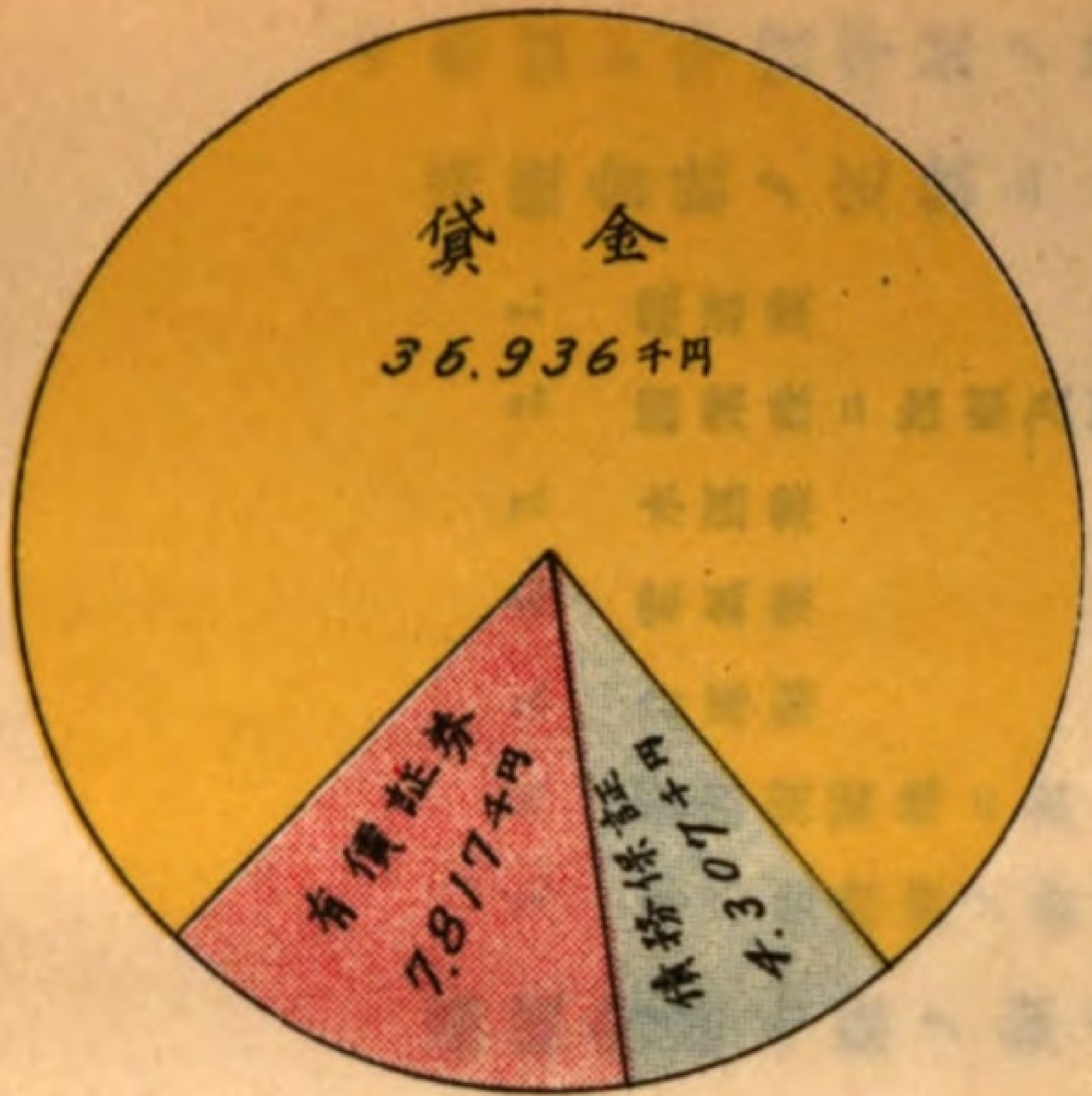
次テ同年十二月、日清善後條約ヲ締結シ、南滿洲ニ於テ、日本カ露國ヨリ受ケタル讓渡ニ對シ、支那ノ承諾ヲ得ルト共ニ南滿洲鐵道株式會社ヲ設立シテ、鐵道及其附帶事業ヲ經營セシムル事トナレリ。同鐵道ノ經營組織ニ付テハ、本鐵道所カ、支那ノ領土內ニアルコトニ付愼重ナル考慮ヲ用ヒタルハ言ヲ須タス。又本鐵道ハ北東支鐵道ヲ通シテ西伯利鐵道ニ連絡シ、歐亞連絡ノ最短路ヲナス鐵道系統ノ一部ヲナシ、世界交通ノ重要ナル地位ヲ占ムルト共ニ、南滿洲開發ノ基本ニシテ、南滿ノ文化經濟ノ發達上、至要ノ地位ヲ占ムルニ鑑ミ、是ヲ純然タル營利會社トナスハ、本鐵道カ有スル、文化的經濟的使命ヲ全フスル故以ニアラサルヲ思ヒ、支那株主ノ參加ヲ

興業費事業別

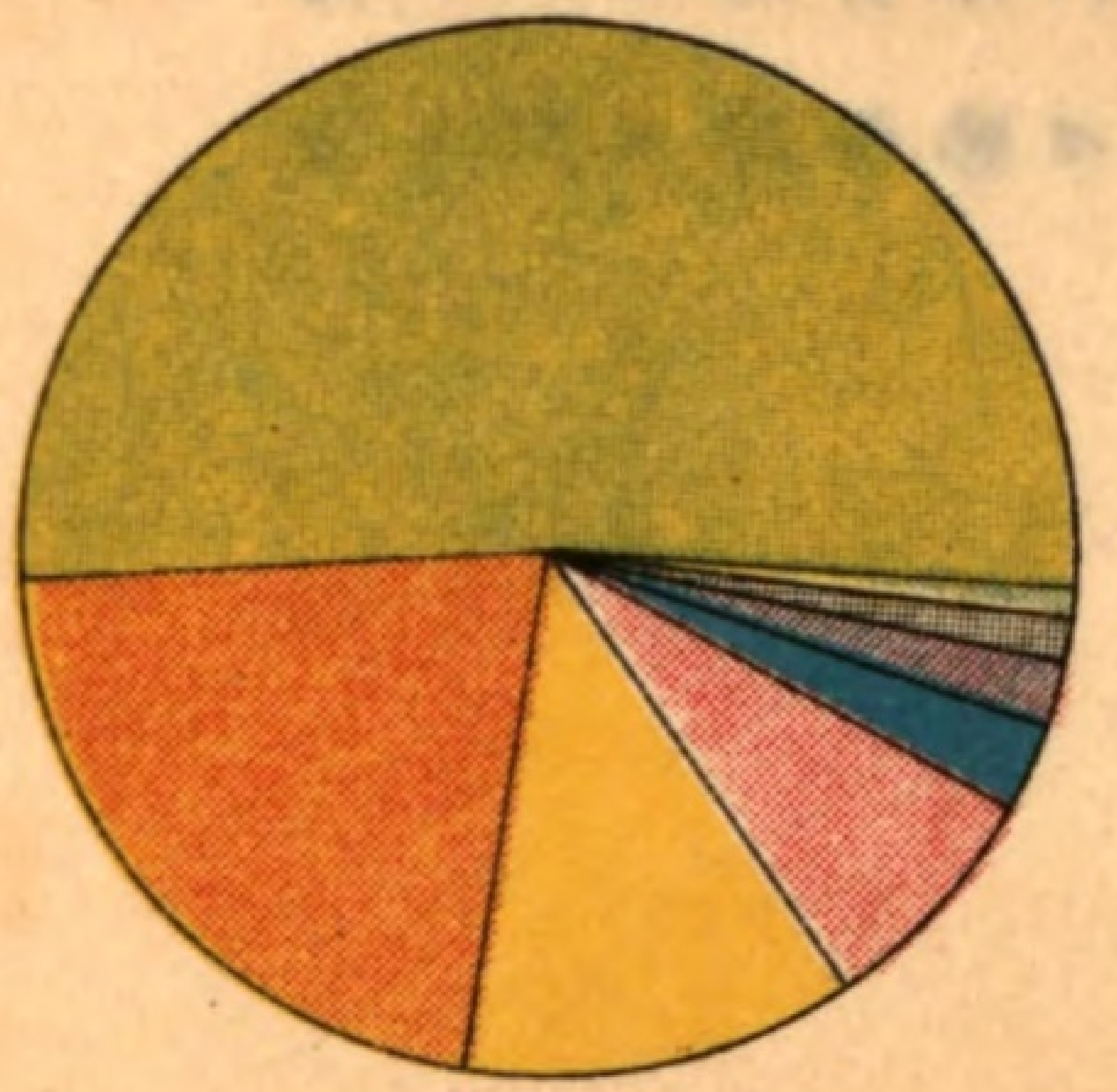
大正九年度

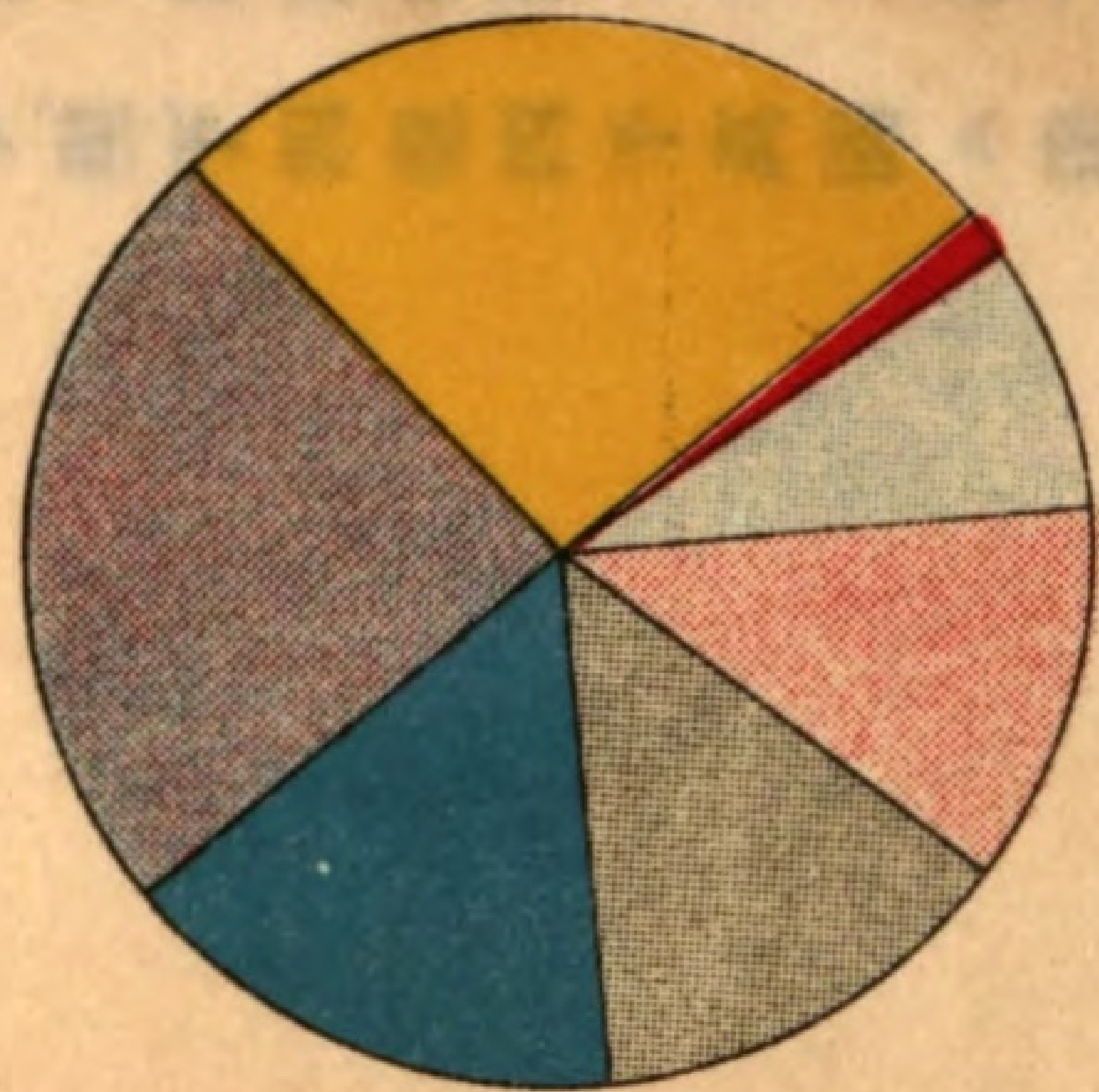


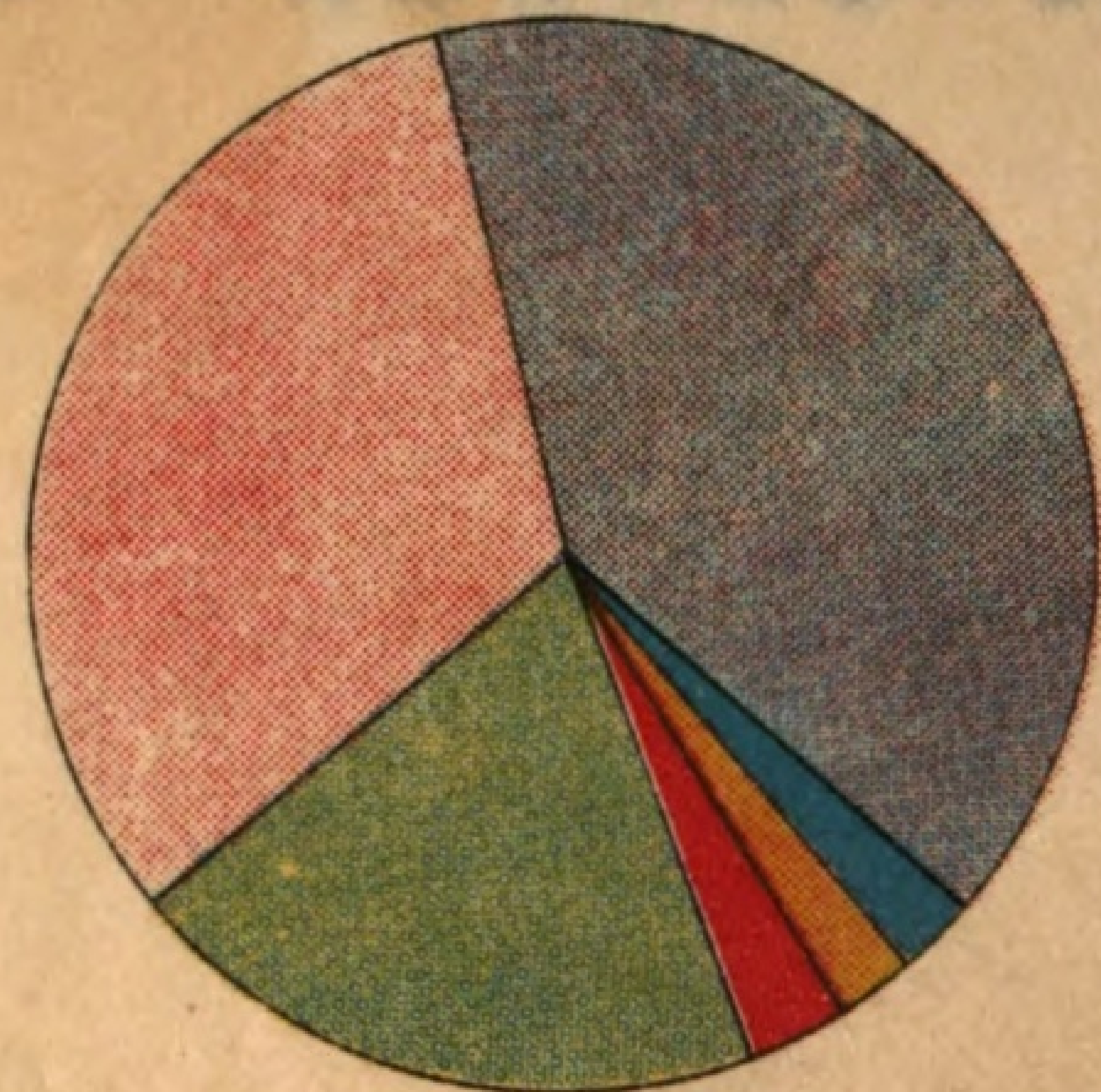
鐵道	166.225.463
工場	9.795.220
船舶	2.392.002
港灣	30.692.418
鑛山	94.076.227
製鉄所	32.647.334
工業	11.580.678
電氣	10.303.118
瓦斯	2.949.984
旅館	2.280.832
地方營造物	11.347.116
土地	18.752.159
諸建物	37.648.697
計	430.691.247



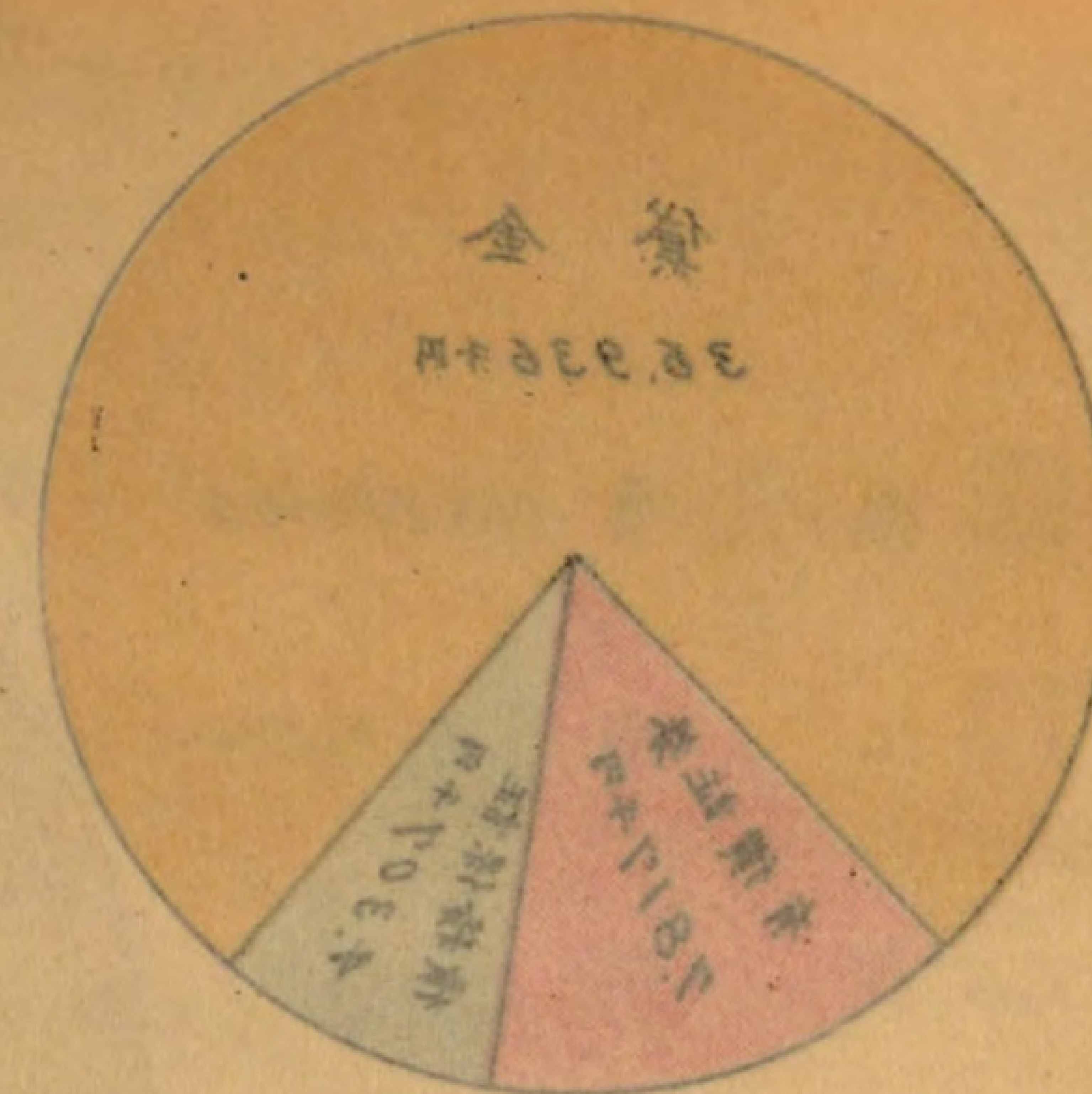
種別	有價證券	貸付資金	債務保證資金	計
公債	1.049.827円	—円	—円	1.049.827円
取引所	674.600	—	—	674.600
電気	1.219.005	1.065.739	75.000	2.359.744
工業	1.863.558	783.227	1.750.000	4.396.785
運輸	2.050.000	4.424.395	—	6.474.395
市場	65.000	—	151.000	216.000
鉄道	—	19.235.556	—	19.235.556
鑛業	—	7.929.704	113.000	8.042.704
農業	—	497.058	—	497.058
旅館	—	221.523	835.000	1.056.523
雑口	895.076	2.778.386	1.382.500	5.055.962
計	7.817.066	36.935.588	4.306.500	49.059.154

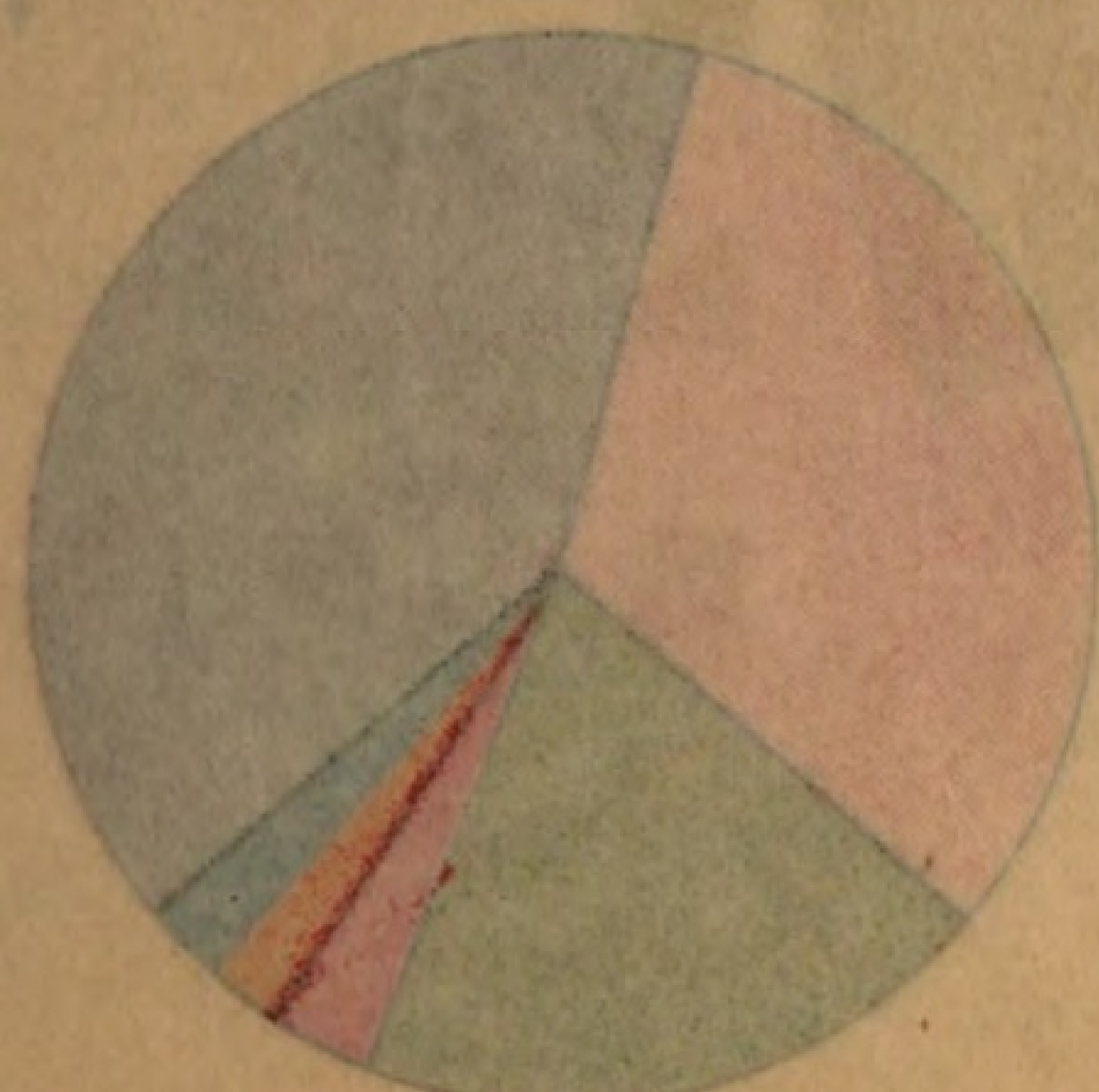

貸金


有價證券


債務保證

種別	有價證券	貸付資金	債務保證資金	計
公債	1,049,827円	—円	—円	1,049,827円
取引所	674,600	—	—	674,600
電氣	1,219,005	1,065,739	75,000	2,359,744
工業	1,863,558	783,227	1,750,000	4,396,785
運輸	2,050,000	4,424,395	—	6,474,395
市場	65,000	—	151,000	216,000
鐵道	—	19,235,556	—	19,235,556
鑛業	—	7,929,704	113,000	8,042,704
農業	—	497,058	—	497,058
旅館	—	221,523	835,000	1,056,523
雜口	895,076	2,778,386	1,382,500	5,055,962
計	7,817,066	36,935,588	4,306,500	49,059,154

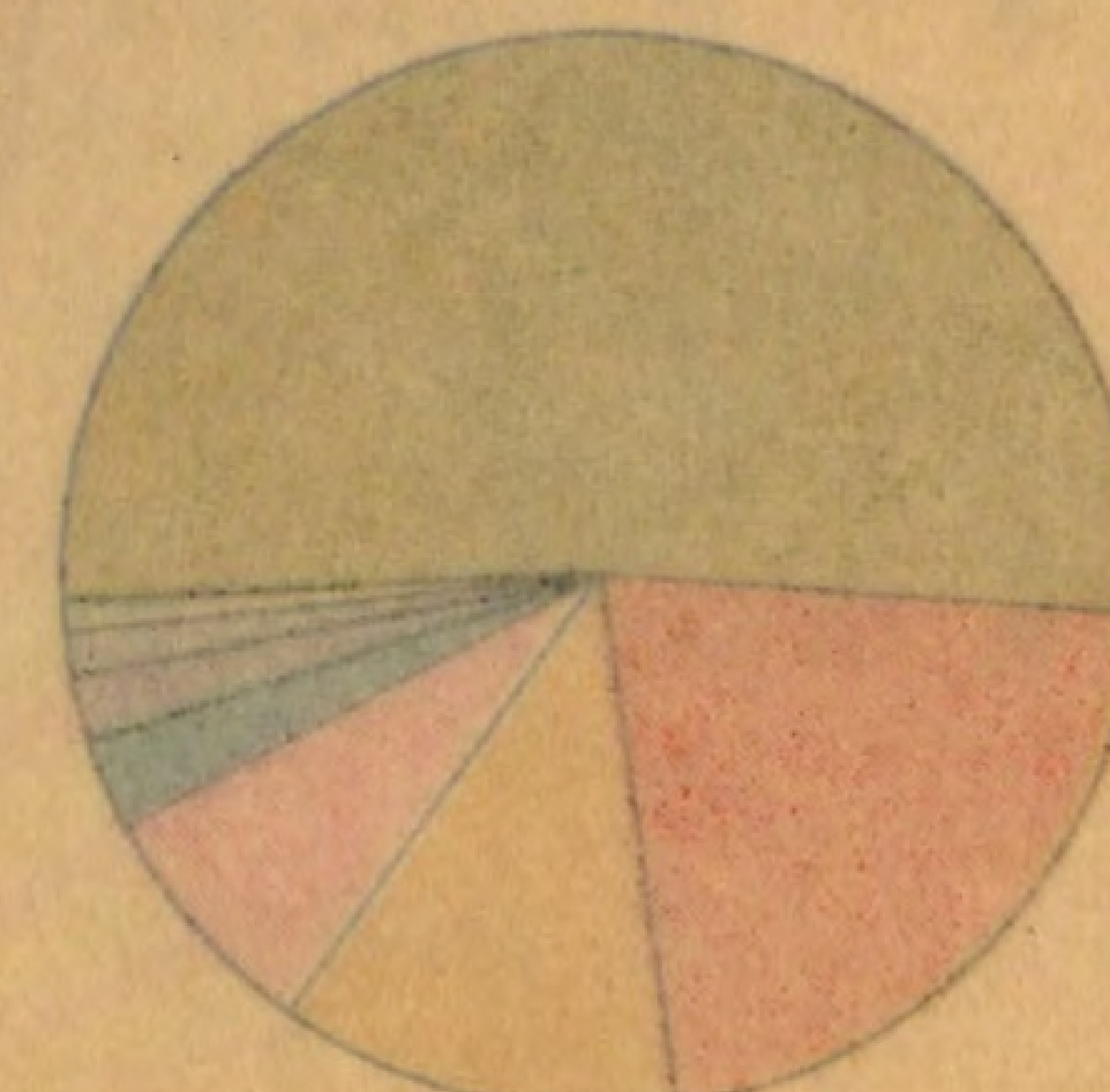




債務保證



有價證券



貸金

モ希望シ、半官半民ノ株式會社ヲ設立シテ本鐵道ヲ經營スル事トナセリ。

滿鐵會社ノ定款ニハ會社ノ行フ可キ事業トシテ、次ノモノヲ列擧ス。

1. 鐵道業
2. 鑛業殊ニ撫順及煙臺ノ炭坑採掘
3. 水運業
4. 電氣業
5. 倉庫業
6. 鐵道附屬地ニ於ケル土木、教育及衞生ニツキ必要ナル施設
7. 其ノ他政府ノ許可ヲ得タル事業

滿鐵會社ハ斯ノ如クシテ、營利的經濟的事業ト、公共的文化的事業トノ、二方面ヲ兼ネタル、資本金二億萬圓ノ株式會社トシテ、設立セラレタリ。其後、漸次、規模ヲ整フルニ及ヒ、資本金ヲ增加シ、現下四億四千萬圓ニ達セリ。

第二編　產業及貿易

第一章　滿蒙ノ資源

一、豐富ナル滿蒙ノ資源

滿蒙ノ地ハ、農產、畜產、鑛產、林產、水產等、頗ル豐富ニシテ、近時文化ノ進步ニ伴ヒ追追發展ノ經過ニ在リ、從來ノ原始的產業ニ徹底的一大變革ヲ見ルモ遠キニ非ルヘシ今序ヲ追ツテ滿蒙資源ノ主ナルモノヲ列擧說明スヘシ。

二、農　產

（イ）耕地面積

現在、滿蒙ニ於ケル耕地面積ハ三三、五八五、〇〇〇英畝ニシテ、其ノ內譯左ノ如シ。

奉天省	一一、三九二、五〇〇英畝
吉林省	七、八四七、五〇〇
黑龍江省	七、九三五、〇〇〇
東部內蒙古	六、四一〇、〇〇〇
計	三三、五八五、〇〇〇

而シテ、此ノ既耕地ノ外、尙肥沃ナル可耕未開地面積ハ、滿洲東蒙ヲ通シテ、四二、五〇〇、〇〇〇英畝ナリ。

（ロ）　農產物

滿蒙ニ於ケル農產物ノ種類ハ、高粱、大豆、粟ヲ第一トシ、玉蜀黍、稗、小麥等、凡テ耕作ニ適ス。

作付步合、及、產額、次ノ如シ。

地方名	大豆	小豆	高粱	粟	玉蜀黍	小麥	大麥
關東州	一五、五〇〇噸	四、二〇〇噸	一六、〇〇〇噸	一七、九〇〇噸	六〇、〇〇〇噸	一、一〇〇噸	一、八〇〇噸
奉天省	一、七六二、〇〇〇	一三二、〇〇〇	三、三四〇、〇〇〇	一、八五三、〇〇〇	一、〇三三、〇〇〇	一四三、〇〇〇	五八、〇〇〇
吉林省	一、一三五、〇〇〇	一一六、〇〇〇	二、一四八、〇〇〇	一、九二九、〇〇〇	四二八、〇〇〇	三六八、〇〇〇	一、二三三、〇〇〇
黑龍江省	五五一、〇〇〇	五二、〇〇〇	六七八、〇〇〇	八九三、〇〇〇	一五四、〇〇〇	五一五、〇〇〇	一七八、〇〇〇
東部內蒙古	三二六、〇〇〇	五七、〇〇〇	五五一、〇〇〇	四三六、〇〇〇	四九、〇〇〇	六六、〇〇〇	七五、〇〇〇
合計	三、七八九、五〇〇	三六一、二〇〇	六、七三三、〇〇〇	五、一二八、九〇〇	一、七二四、〇〇〇	一、〇九三、一〇〇	一、五五二、〇〇〇

作付步合（％）

	南滿洲	北滿洲	計

産業施設（其三）



刈入ノ實況（公主嶺）



五龍背ノ水田

五龍背ハ安東ノ西方十五哩ノ地點ニ位ス



滿洲ノ高粱

長春野積實況



大豆野積



葉煙草野積

高粱	二六・六	二四・八	二五・七
大豆	二〇・〇	一七・九	一八・九
粟	一六・一	二五・〇	二〇・五
玉蜀黍	二五・六	四・一	一四・八
小麥	二・五	一四・五	八・五
大麥	〇・五	一・四	〇・九
小豆	三・二	三・一	三・一
其他	四・三	九・〇	七・六
計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

(八) 產額

主重農產中、最モ大ナルハ、高粱ニシテ、土民ノ食糧、燃料、建築用トシテ、必須ノモノナリ。粟、之ニ次ク。大豆ハ、世界的名聲ヲ博シ、高粱ト共ニ、滿洲農產物ノ主要ナルモノナリ。北滿ニ於ケル小麥ハ、近時著シク需要ヲ喚起セラル。卽チ、一九二〇年中、大連港ヲ經テ輸出サレタル小麥ハ、總額三九〇、〇〇〇噸ニシテ、其ノ殆ト全部ハ、歐洲ニ仕立テラル。如何ニ、歐洲大陸ノ、滿洲小麥ニ期待スル處、益々大ナルカ知ルヘキノミ。

(二) 滿鐵ト農業ノ開發

右ノ莫大ナル農產物ハ、從來、貧弱ナル水運ト、支那在來ノ荷馬車ニ依ツテ、運搬セ

ラレツツアリシカ、滿鐵其ノ他鐵道ノ開通ト、完全ナル大連埠頭設備トハ、從來ノ運送ヲ、根本ヨリ變革シタリ。

此ノ外本社經營ノ各農事試驗場ニ於テハ、直接滿蒙農業開發ノ爲ニ、一九一三年創立以來、各種農作物ノ改良、增殖、竝、新作物ノ適否試作ニ、力ヲ盡シ、大豆ノ如キ、旣ニ、優良品種ノ育成ヲ完了シ、其ノ種子ヲ、一般支那農家ニ配付シ、之ニヨリ、支那農家ハ、在來大豆ノ成績ニ比シテ、二割以上ノ收入增加ヲ示セリ。此ノ結果ヲ推測スルニ、作付面積ハ、假リニ從來ノママトスルモ、其ノ產額三、八〇〇、〇〇〇噸ニ對シテ、年生產額六〇〇、〇〇〇噸ノ、增收ヲ得ヘシ。果シテ然ラハ、支那農家ノ受クル利益、及、世界ノ之ニ依ツテ得ル處實ニ大ナルヘシ。

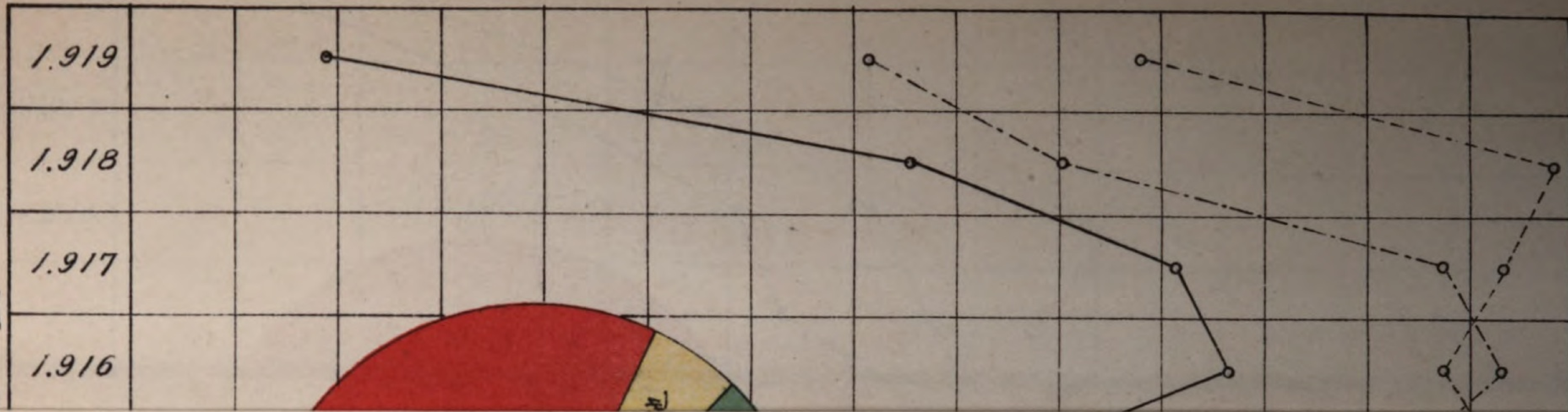
（註）第三編第八章產業施設參照。


（ホ）有望ナル滿蒙農業ノ將來


滿蒙ノ地、尙豐富ナル未開墾地ヲ有シ、農民ハ、體軀頑健ニシテ、拮据黽勉、勞力ノ供給頗ル潤澤ナリ。唯之ニ、資本ノ投下ト、科學的指導方法ヲ以テスレハ、滿蒙農事ノ將來ハ、寔ニ洋々タルモノアリ。

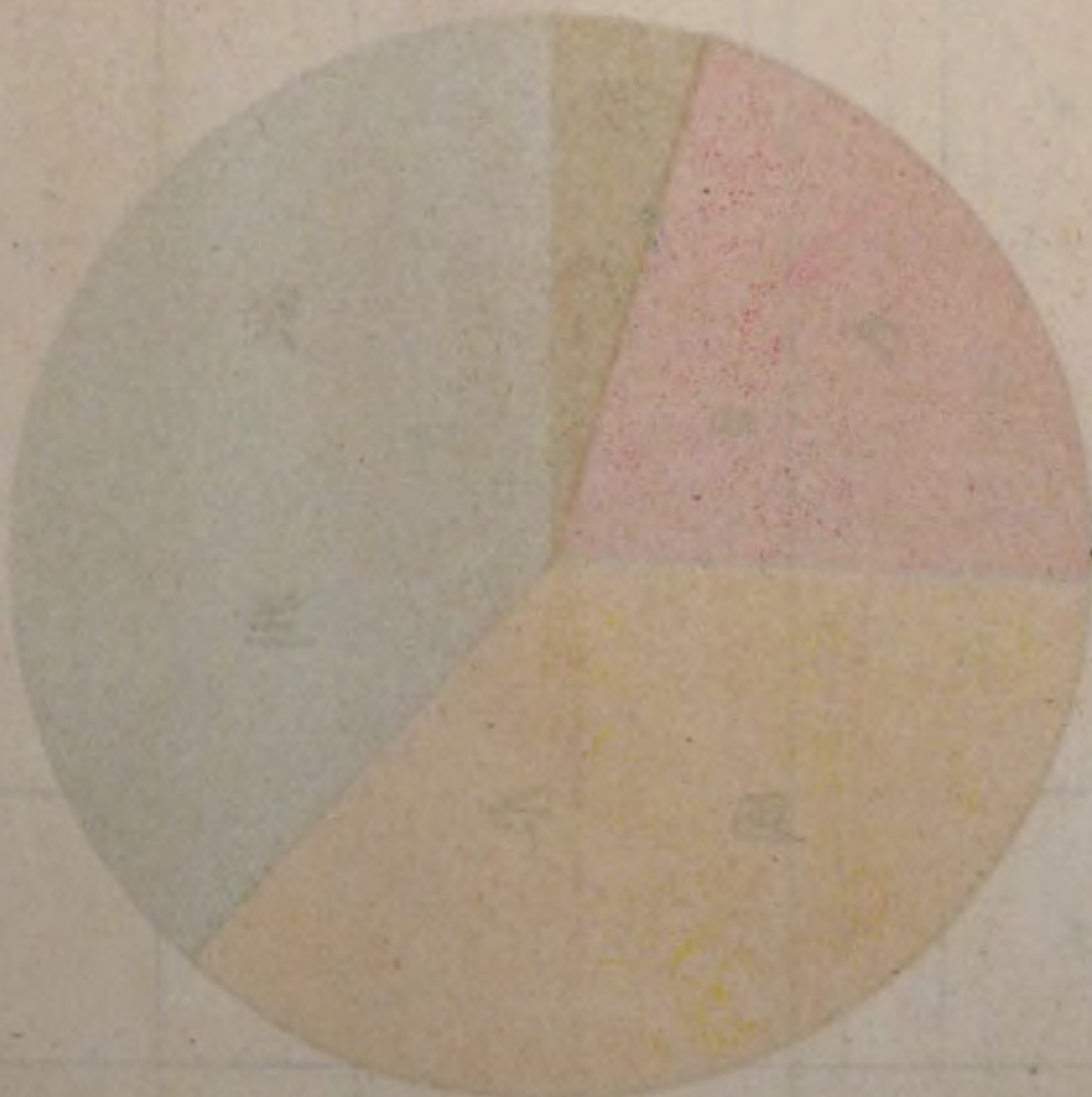
三、畜產業

豆




輸出噸数
1.915
1.916
1.917
1.918
1.919

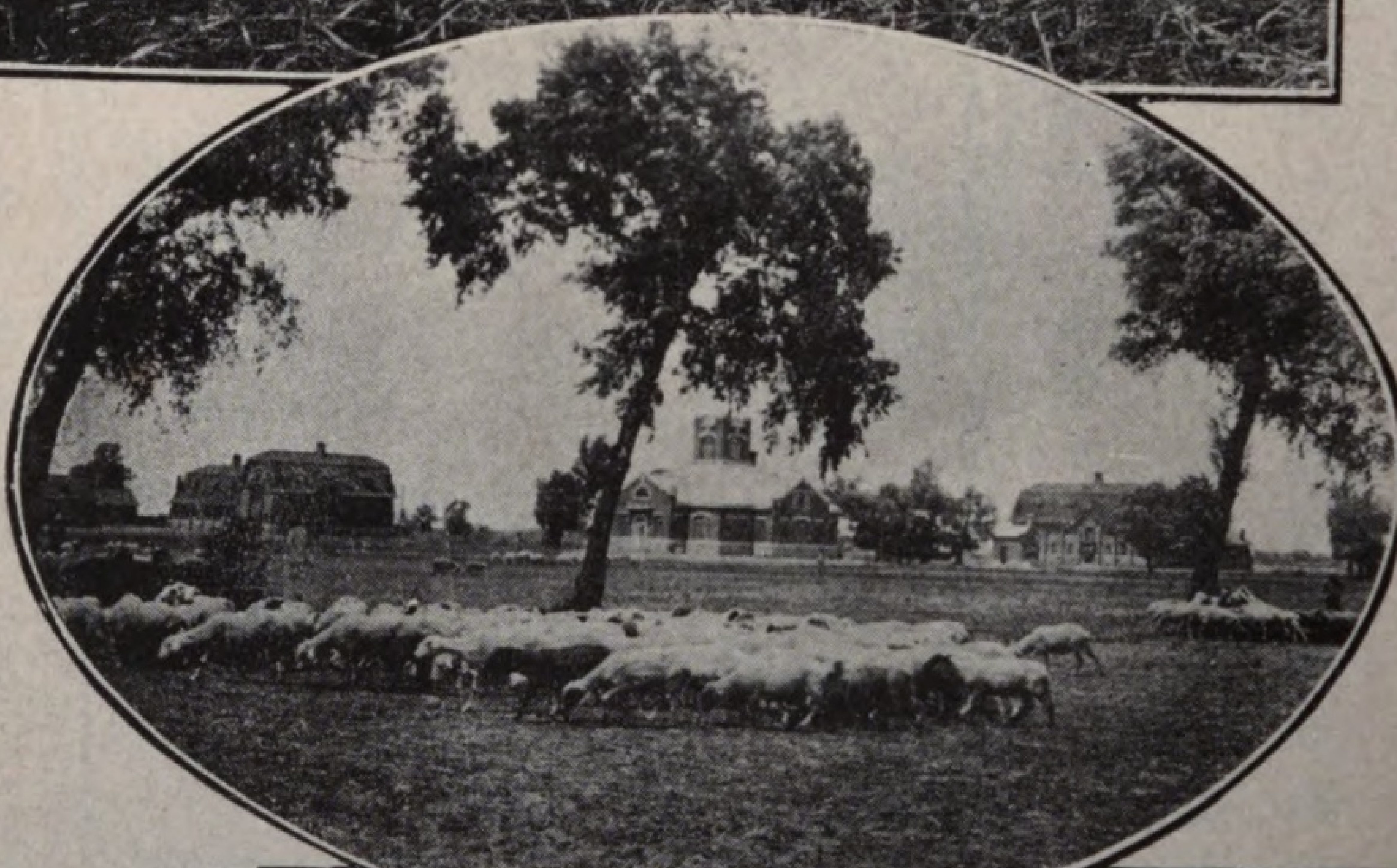

1.910
1.911
1.912
1.913
1.914
1.915
1.916
1.917
1.918
1.919
20
18
16
14
1919年仕向地図別
歐洲
米



産業施設（其二）



牧羊（公主嶺農事試驗場）



放羊（同上）



滿洲ノ放牧

(イ) 滿蒙ニ於ケル家畜ノ普及

滿蒙ニ於ケル養畜ハ、農耕用及交通用トシテ、勞力及動力ノ不備ヲ補充シ、他方、劇烈ナル寒氣ハ、毛皮需要ヲ喚起セリ。然レ共、未タ大牧場ヲ現出セス、僅ニ、副業タルニ止レリ。其ノ後、農業ノ發達ト相俟チテ、此ノ方面ノ改良モ、著々行ハレツツアリ。

(ロ) 滿蒙ニ於ケル家畜ノ頭數

	奉天省	吉林省	黑龍江省	東部內蒙古	計
馬	千頭 七五〇	千頭 五〇〇	千頭 五一〇	千頭 八一〇	千頭 二、五七〇
騾	二〇〇	二五〇	一一〇	七〇	六三〇
驢	三三〇	一二〇	七〇	一〇〇	六二〇
牛	五〇〇	九〇	二一〇	一、一三〇	二、〇〇〇
駱駝	—	—	—	四	四
羊	四〇〇	一〇〇	六〇	二、〇〇〇	二、六六〇
豚	三、五五〇	一、三五〇	四九〇	一、〇〇〇	六、六九〇
家禽	千羽 四、五八〇	千羽 二、一六〇	千羽 一、九三〇	鈌	千羽 八、六八〇

卽チ一五、〇〇〇、〇〇〇頭以上ノ家畜ト八、六〇〇、〇〇〇羽ノ家禽ヲ有ス。

（ハ） 滿蒙ニ於ケル畜產業ノ將來

滿蒙ニ於ケル畜產業ハ、家畜ノ種類、竝、飼養管理等ノ改良發達ヲ圖ラハ、實ニ、世界ニ於ケル、有數ノ畜產地タラシムルコトヲ得ヘシ。

本社農事試驗場ハ、一九一四年、種羊及滿蒙在來種二八六頭ヲ購入シテ、緬羊ニ關スル試驗ニ著手シ、一九一四年、再度、種羊ヲ米國ヨリ輸入セリ。其ノ他、種豚ノ配付、產品試驗場ノ設置等、時宜ニ應シ、種々ノ施設ヲ企テタリ。

四、林產業

（イ） 森林ノ分布

滿蒙ノ平野ヲ貫通スル、河川ノ上流沿岸地方ニハ、未タ斧鉞ヲ入レサル大森林蔚然タリ。卽チ、南滿松花江、及、豆滿江上流一帶、長白山麓、竝、鴨綠江上流、及、渾江上流ノ一圓地、東支鐵道東部線ノ森林地方、吉林省三姓地方ノ如キ、其ノ代表的ノモノナリ。

（ロ） 森林面積及蓄積

鴨綠江流域、松花江豆滿江沿岸、東支鐵道沿線、三姓地方、興安嶺地方ヲ通シ、森林面積ハ、概算二八、四〇〇、〇〇〇英畝、蓄積大略五、二〇〇、〇〇〇、〇〇〇石、平均一英畝二〇〇石ヲ算ス。樹種亦十數種ニ及フ。混淆步合ハ、針葉樹四割、濶葉樹六割トス。針葉樹

中、朝鮮松過半ヲ占メ、樅、トウヒ類、三割ト目セラル。濶葉樹中、檜、柏等、七割ヲ占ム

(ハ) 滿蒙森林ノ開發ト保護

滿蒙ノ森林開發ハ、近代ノコトニ屬シ、露西亞カ東方經營ト同時ニ、其ノ沿線地方ノ、森林ノ濫伐ヲ行ヒシモ、東支、滿鐵ハ、森林勞働者ノ輸送及木材ノ搬出ニ、便宜ヲ與ヘシ結果、滿蒙ノ森林開發ハ、著シク進ミタリ。然レトモ、林政擧ラス、之ニ加フルニ、警察ノ不備アリ。稍々モスレハ、火災濫伐ニ傾キ、森林ノ荒廢ハ、開發ト相並行スルノ狀態ニ在リ、仍テ、本社ハ、支那人ノ間ニ、殖林ノ思想ヲ鼓吹シ、機會アル毎ニ殖林造林ヲ宣傳シ、苗木ノ無代配付等、盡力怠ラス。關東廳、又州內ニ、殖林ノ計畫ヲ樹テ、著々實行ヲ進メツツアリ。斯クテ、滿蒙ニ於ケル森林ハ、開發ト同時ニ、其ノ保護宜シキヲ得テ、滿洲ニ綠林ノ美ヲ添ヘンコト、近キニ在リ。

五、水產業

(イ) 滿蒙ニ於ケル水產漁場及產額

滿蒙ニ於ケル水產業ハ、農、畜產等ノ產業ニ比シテ、世人ノ注意ヲ惹クコト尠キモ、渤海及黃海ニ接スル五百浬ノ沿海、竝、南北滿洲ニ於ケル河川ノ魚貝ノミニテモ、年產額二五、〇〇〇噸以上ナルヘク、其ノ價格、又、一、二〇〇、〇〇〇圓ヲ下ラス。且又、製鹽

業モ、最モ有利ナル產業ノ一ナリ。

（ロ）　水產業ノ大要

一般海產漁業ハ、鴨綠江口ヨリ、滿洲南海岸、關東州海岸線ヲ經テ、渤海灣ニ及ヒ、地域頗ル廣大ナリ。暖流魚介亦豐富ナリ。又、捕鯨業ハ、東洋捕鯨株式會社ノ手ニ依ッテ行ハレ、支那人ニ依ッテ海獸業モ行ハレツツアリ。

河產漁業ハ、滿洲內地ニ於ケル、唯一ノ魚ノ供給法ニシテ、斯業モ亦盛ナリ。

滿蒙ニ於ケル製鹽業ハ、海水製鹽、鹽池製鹽ヲ合シテ、年額六〇〇、〇〇〇、〇〇〇斤ヲ上下ス。

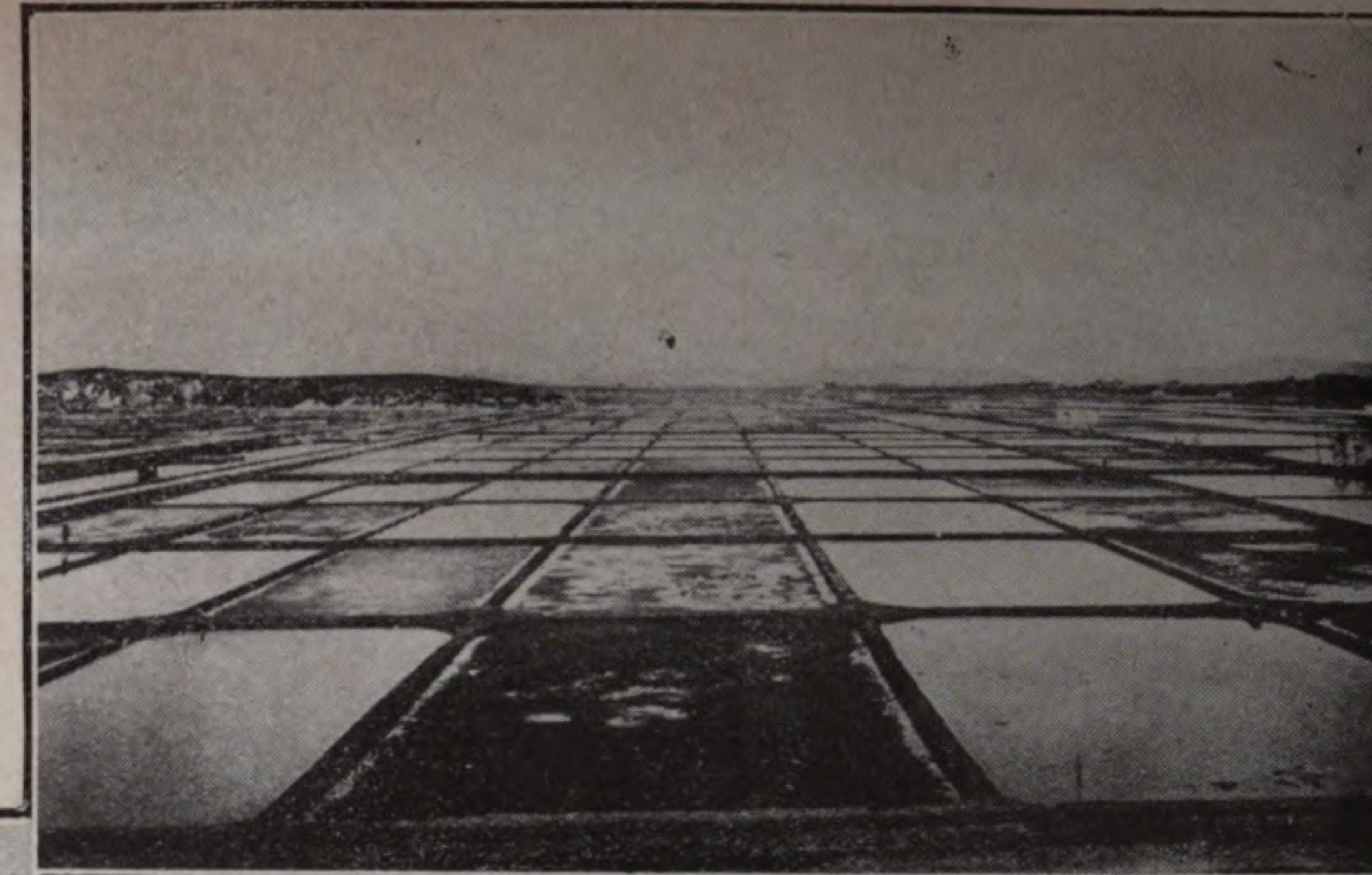
水產製造業ハ、頗ル幼稚ニシテ、前途尙開拓ノ餘地多シ。僅カニ、鹽漬又ハ干乾ニヨルノミニシテ、未タ科學的製法ニヨルモノナシ。

（ハ）　水產ノ指導奬勵保護

日本カ關東州ヲ租借スルニ至ッテ以來、滿洲ノ漁業ニ意ヲ用ヒ、關東州水產組合、魚市場、及、水產試驗場ヲ設立セリ。

老虎灘水產試驗場ハ、一九〇七年ノ、設立ニシテ、關東廳ノ經營スル所ナリ。漁撈及製造加工ノ兩方面ニ於ケル、實際的作業ノ試驗ヲ行フ。

産業施設（其四）

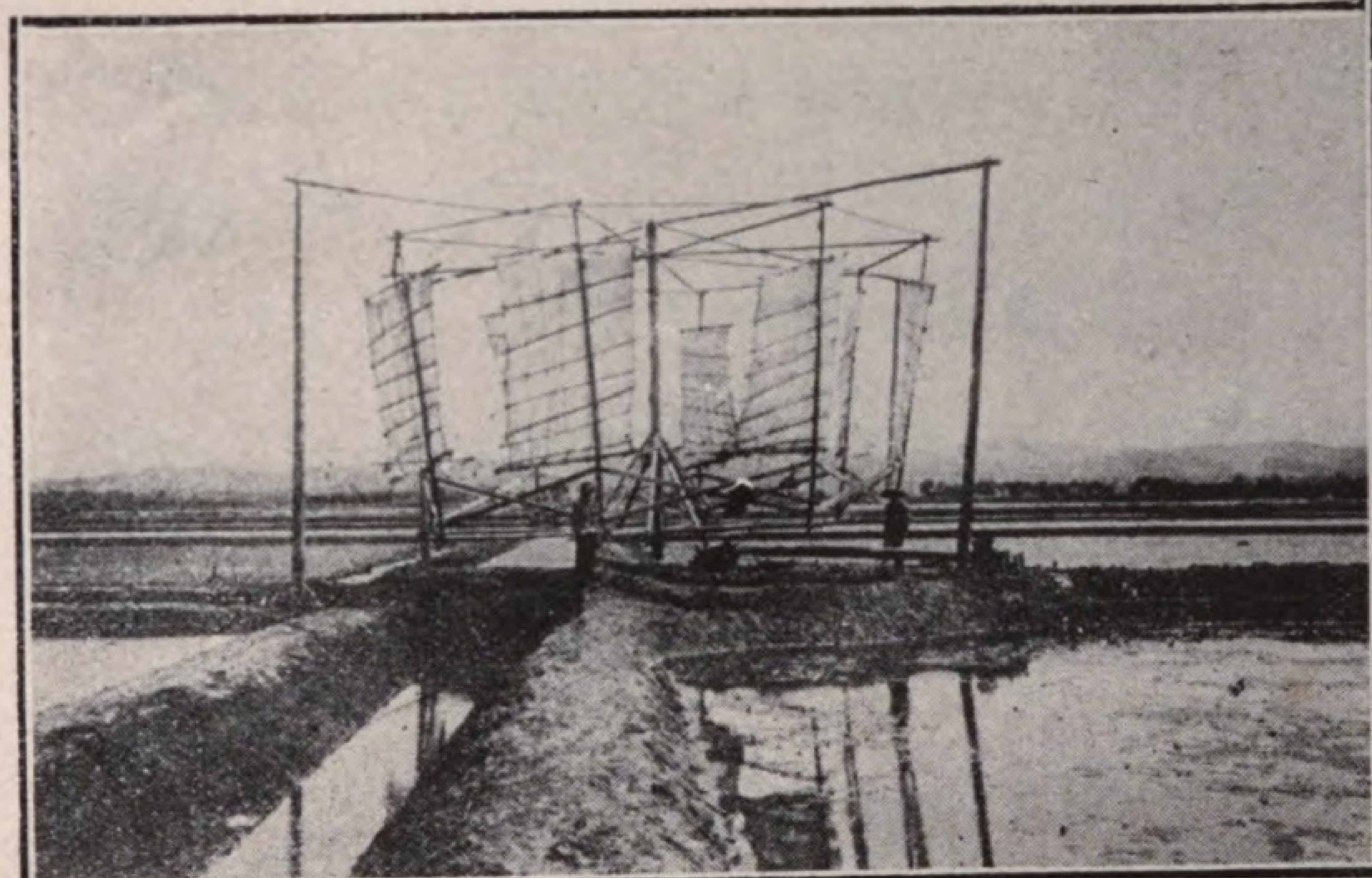


普蘭店ノ鹽田（其一）

關東州ノ界境線ニ位ス

鹽田面積　二四、〇〇〇英畝

年産額　三二〇、〇〇〇圓



普蘭店ノ鹽田（其二）

(二) 水産ノ將來

既ニ述ヘタル如ク、關東廳其ノ他ノ指導奬勵ニ依ツテ、幼稚ナル水産業モ、漸ク進步シツツアルモ、尙更ニ、漁撈法ノ改良、及、水産製造業ニ、新式技術ヲ利用スレハ、其ノ將來ハ、誠ニ有望ナリ。

第二章　鑛業

一、滿洲鑛業ノ過去

由來、滿蒙鑛物ノ數量ハ、極メテ大ニシテ、金屬鑛物トシテハ、鐵及金ヲ重ナルモノトシ、非金屬鑛物ハ石炭ヲ主トシ、其ノ他ノ鑛產ニツキテモ、極メテ豐富ナレトモ、鑛業發達ヲ顧ルモノナク、此ノ天賦ノ寶庫ハ、輓近ニ至ルマテ、空シク地中ニ封鎖セラレテ世界ノ文明ニ貢獻スル所ナカリキ。露國ノ東漸ニ至ルモ、餘力尙此ノ點ニ達セス。日露戰後、滿蒙ノ鑛業ハ滿鐵ニヨリテ漸ク一轉機ヲ與ヘラレタルモノニシテ、滿鐵ハ、一方露國ヨリ繼承セル撫順、煙臺等ノ諸炭礦ニ對シ、理想的施設ヲ爲スト同時ニ、地質研究所ヲ開設シ、專ラ、鑛產地質ノ調査、及其ノ經濟的價値ヲ、研究スルノ機關トナス傍ラ、應用地質、及工業建築等ニ要スル、諸原料ノ調査ニ從事シ、漸ク、滿洲ニ於

ケル、鑛業發達ヲ促進セシムルニ至レリ。

二、滿洲鑛業ノ現在

滿鐵關係ノ鑛業中其主ナルモノハ撫順、煙臺ノ二炭礦及鞍山製鐵所ナリ。

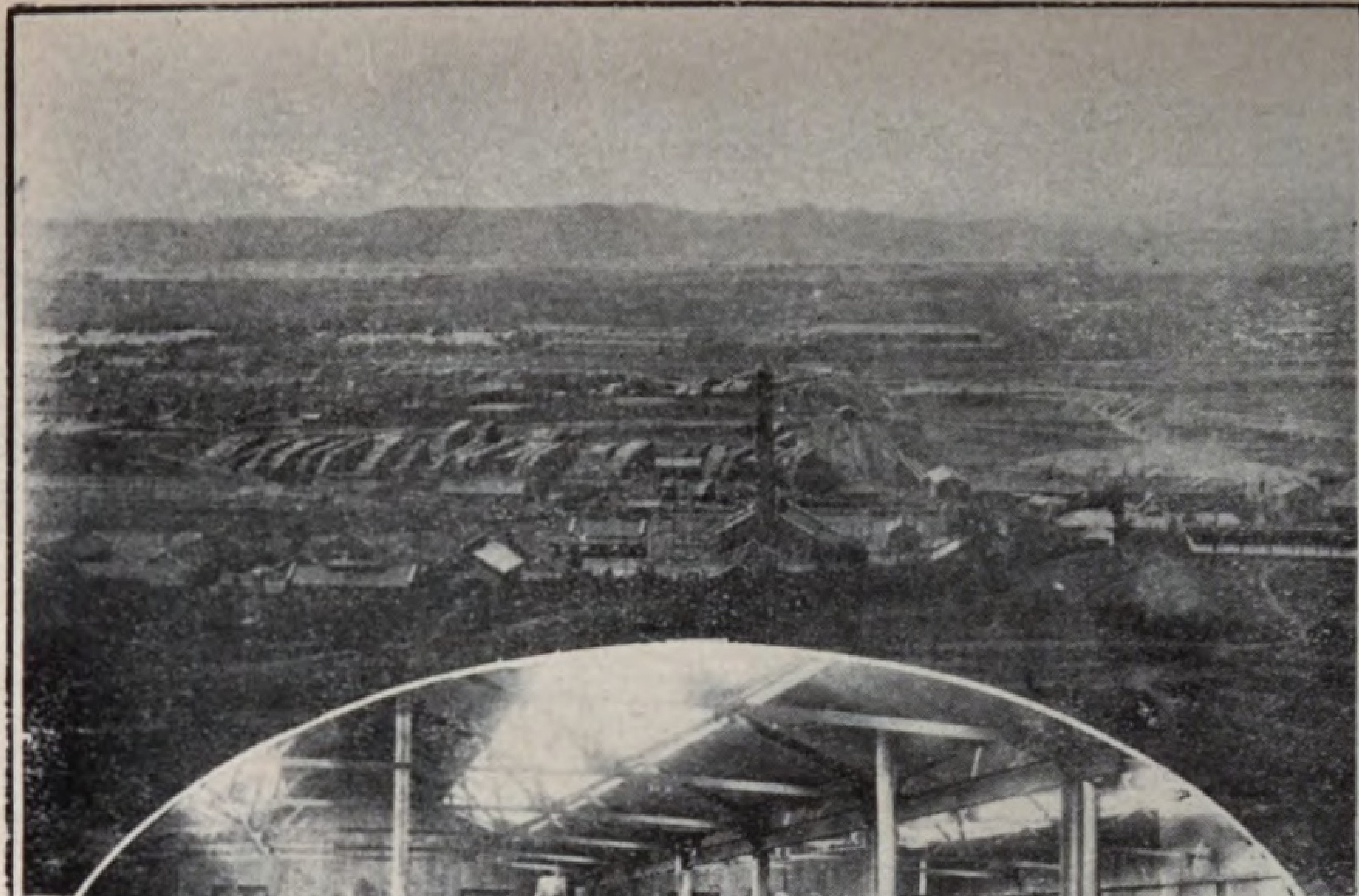
(イ) 撫順炭礦

滿洲石炭ノ最大供給地タル撫順炭礦ハ奉天ノ東約二十二哩ノ地ニアリ。礦區ハ、渾河ノ峽谷ノ中ニ在リテ、東西約十哩、南北二哩ニ亙ル。石炭量ハ、約十億噸ト推定セラル。

會社カ、撫順炭礦ノ引繼ヲ受ケタル當時ハ、其ノ規模極メテ小。千金寨、楊柏堡、老虎臺ヲ合セテ、一日出炭僅カニ三六〇噸ニ過キサリシカ、一九一一年ヨリ一九一二年ノ間ニ豫算九、二〇〇、〇〇〇圓ヲ以テ、第一期開發計畫ヲ立テ、千金寨、楊柏堡ニ大山坑及東鄕坑ノ二大竪坑ノ開鑿ヲ完成スルト共ニ、各種設備ノ改善ヲ行ヒ、一日能ク出炭五、〇〇〇噸ニ達スルニ至レリ。然レトモ、四圍ノ事情ハ、益需要ヲ増加シ、到底其ノ現狀ニ止マルヲ許サス。仍テ、第二期計畫ヲ立テタリ。其ノ主ナルモノハ、萬達屋斜坑ノ開鑿、古城子露天掘、麗砂充塡法ノ實施、モンド瓦斯發電所ノ建設、運炭線、採砂線ノ電化、龍鳳斜坑ノ開鑿、千金寨露天掘、新屯斜坑開鑿ノ八箇所

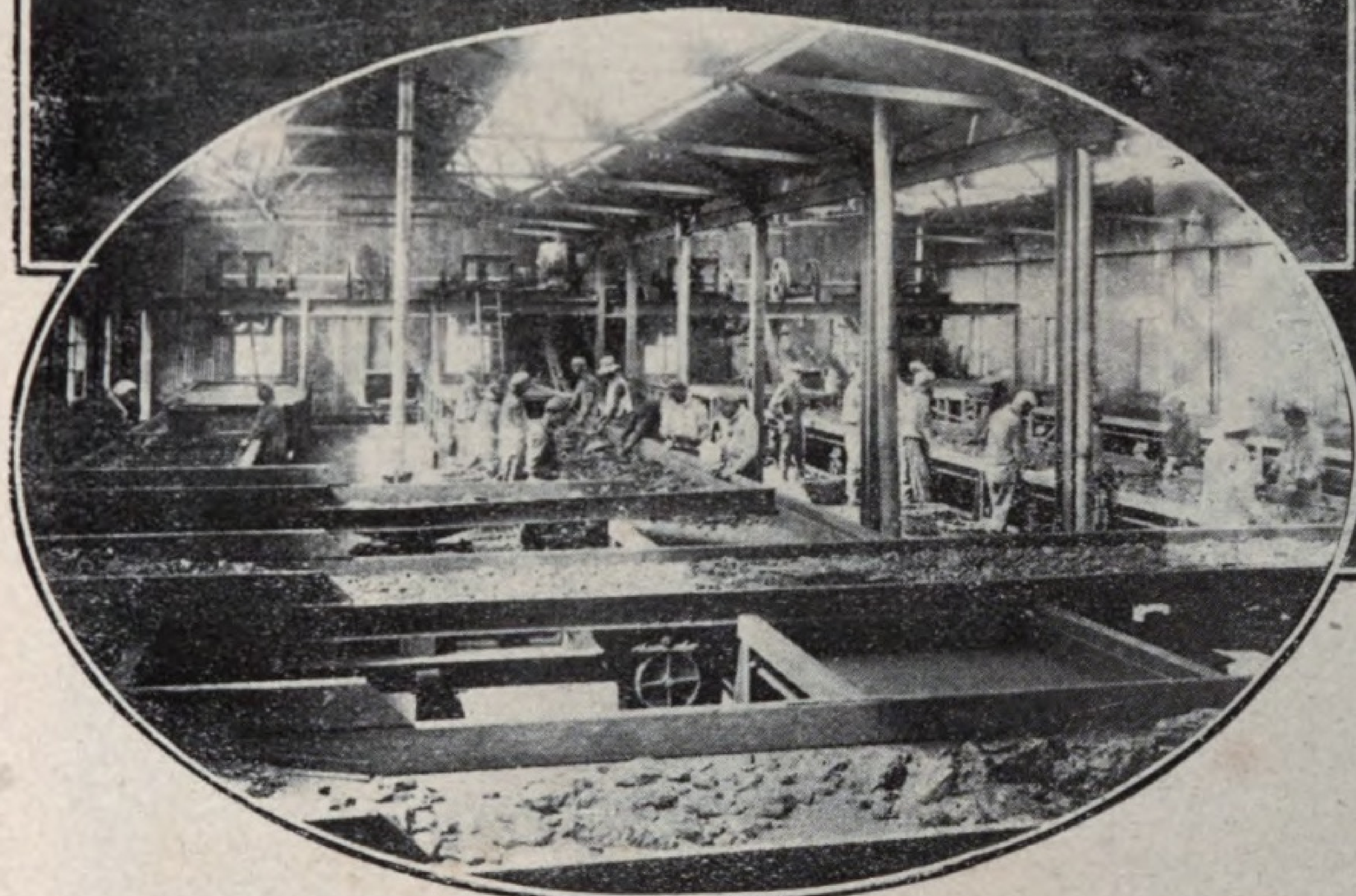
一九〇七年露國ヨリ引受ク炭量拾億萬噸ト算セラル

撫順炭礦大觀（其一）





（其二）

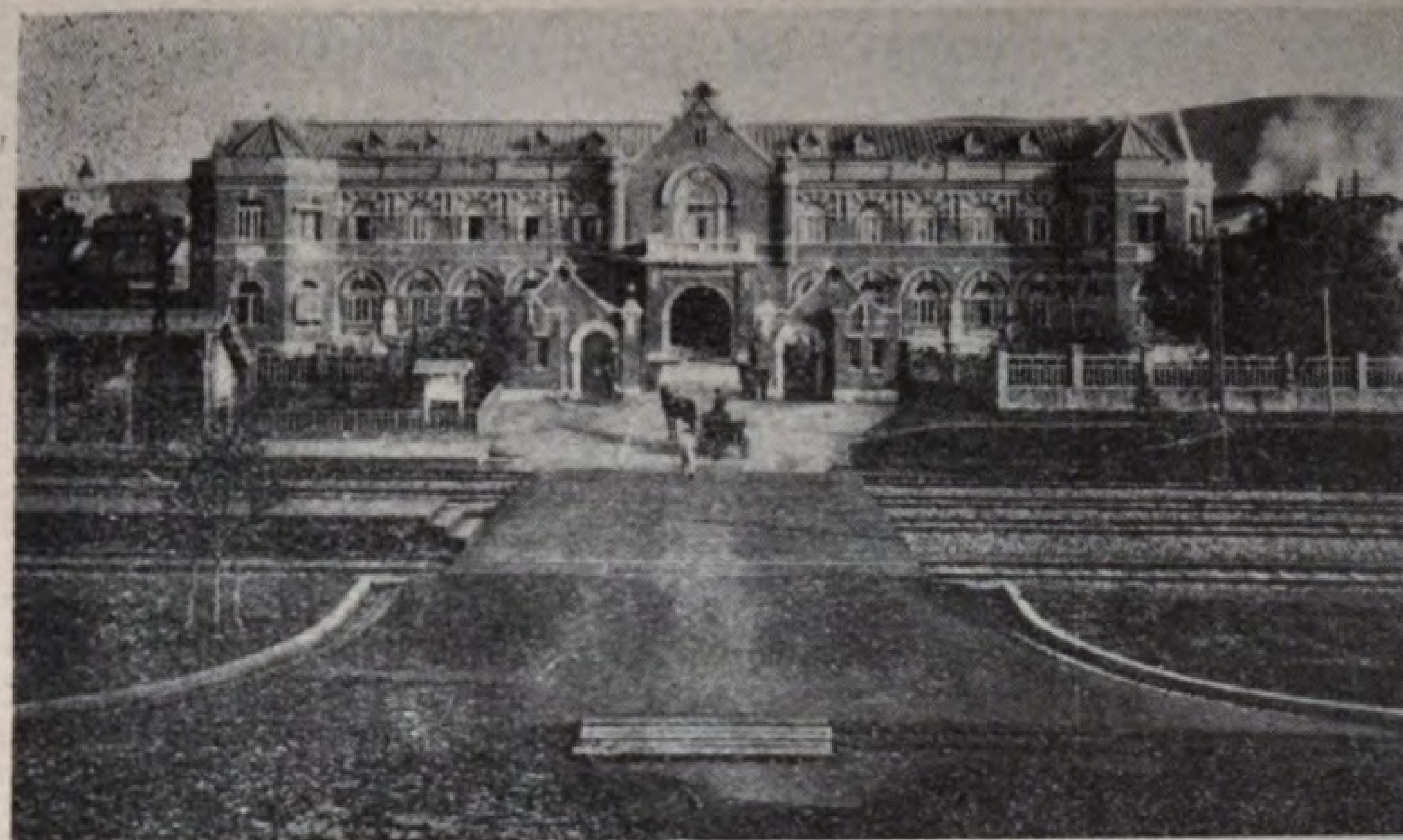


（其三）

工業施設(其二)



撫順炭礦電氣鐵道



撫順炭礦事務所



撫順炭礦大山坑



撫順炭礦東鄉坑

也。斯クテ、一九一八年度ニ於テハ、一日約七、〇〇〇噸ノ出炭ヲ爲シ得ルニ至レリ。

一方、支那地方住民ノ燃料ハ、漸次、高粱桿ヨリ石炭ニ移ルニ及ンテ、各種ノ工業勃興シ、到底滿洲炭ノミヲ以テハ、滿鮮ノ需要ニ應シ能ハサル現象ヲ呈シ、一九一八年度一五〇、〇〇〇噸、一九一九年度四九〇、〇〇〇噸ノ、輸入ヲナササルヘカラサルニ至レリ。加フルニ、滿鮮需要ノ前途、殊ニ、鞍山製鐵所ノ需要ノ大増加ヲ考察スルトキハ、滿洲石炭供給ノ前途、寒心ニ堪ヘサルモノアルヲ以テ、一九一九年、所謂十箇年計畫ヲ立テタリ。

コハ將來ノ需要ニ應シテ、急速ノ出炭ヲ期シ、且出炭費ノ節約、出炭率ノ有利ヲ計ラン爲ニ、露天掘ヲ擴張スルヲ最有利ナリトシ、今ノ古城子、千金寨ノ露天掘ヲ合併シ、他ニ三大竪坑口ヲ計畫シ一九一九年ニ於テ約八、〇〇〇、〇〇〇噸二十年後ノ一九四一年ニ於テ一一、〇〇〇、〇〇〇噸ノ出炭ヲ豫定スルモノナリ。斯クテ、撫順炭礦ハ、現在、二露天掘、二竪坑、六斜坑ニシテ、其ノ出炭能力ハ、一日約一〇、〇〇〇噸見當トス。

一九〇七年以降、一九二〇年迄、年度別、各坑出炭表ヲ示セハ、左ノ如シ。

撫順炭礦年度別各坑出炭表

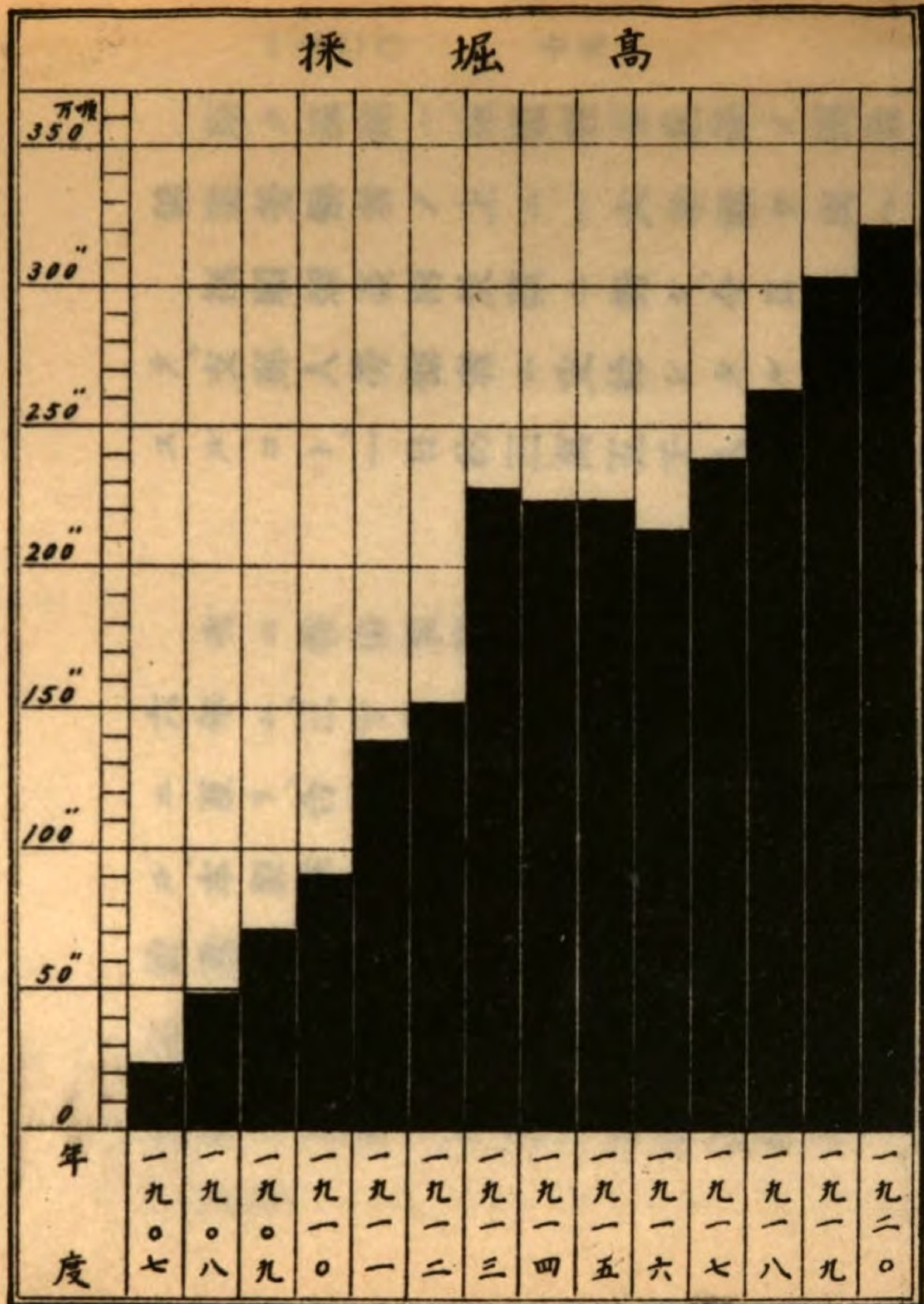
(單位千噸)

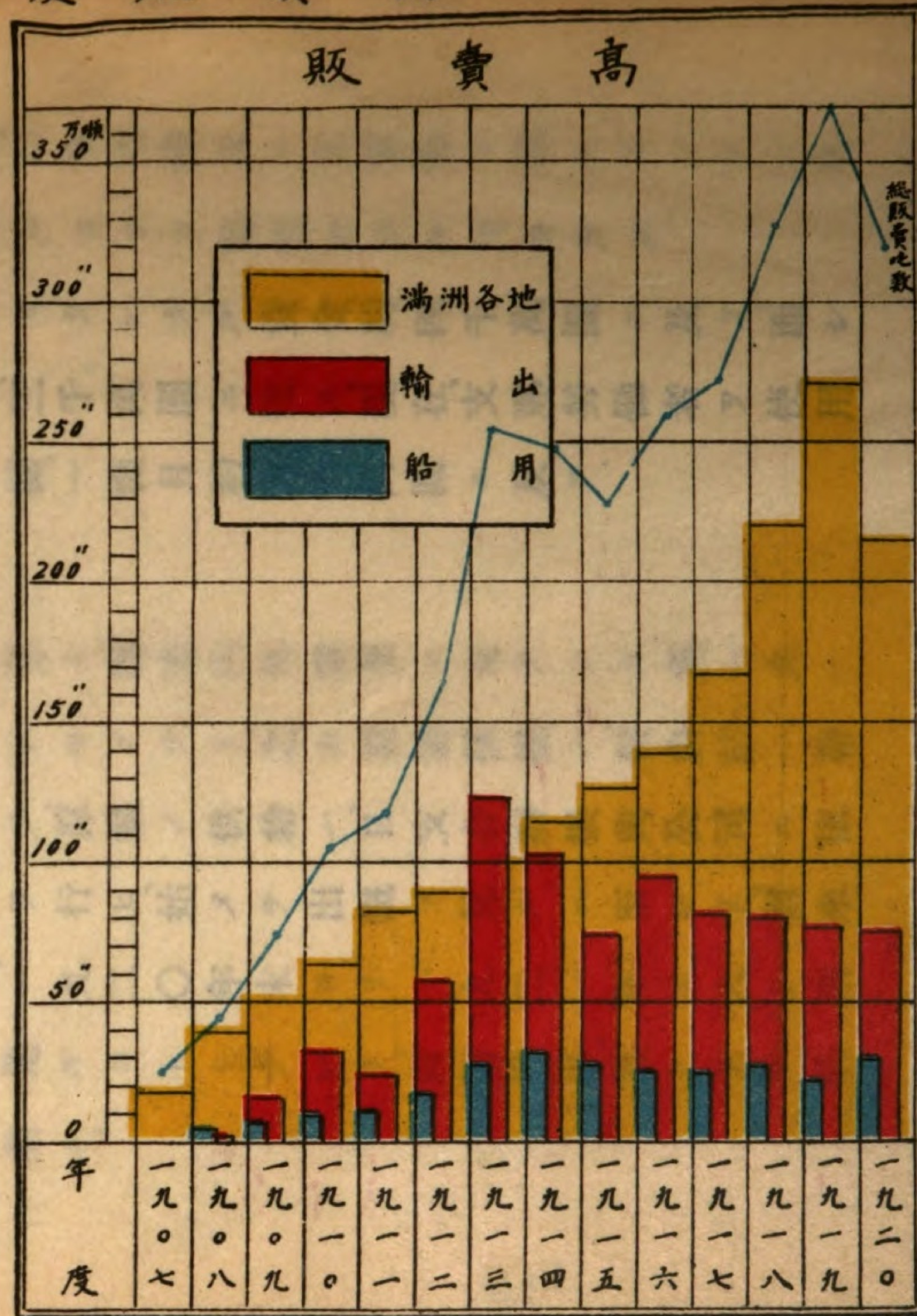
年度		第一露天掘	第二露天掘	千金寨	大山	東郷	楊柏堡	老虎臺	萬達屋	新屯	龍鳳	合計
一九〇七	明治四〇	—	—	一〇三・三	—	—	六四・五	六五・五	—	—	—	二三三・三
一九〇八	四一	—	—	二三八・八	—	—	一三七・三	一三四・六	—	—	—	四九〇・七
一九〇九	四二	—	—	三二四・一	〇・一	—	一七六・一	一九二・七	—	—	—	六九三・二
一九一〇	四三	—	—	三七〇・四	一四・四	一七・四	二一七・八	二七九・〇	—	—	—	八九九・二
一九一一	四四	—	—	四〇四・九	一八六・四	一四六・六	三〇一・六	二八五・〇	—	—	—	一、三二四・五
一九一二	四五	—	—	三八四・八	三五九・五	二五二・〇	二一九・二	二六一・五	—	—	—	一、四七一・一
一九一三	大正二	—	—	五七九・五	四二一・一	四一四・九	二九〇・七	四七三・〇	—	—	—	二、七一九・二
一九一四	三	二・一	—	六八三・六	二三五・〇	四七二・二	三八一・八	四二〇・一	—	—	—	二、一四九・八
一九一五	四	一〇二・七	—	六二三・一	三〇一・六	四三〇・四	四七一・八	一七九・四	五三・四	—	—	二、一六二・六
一九一六	五	一七三・五	—	五七二・三	三〇五・二	一七〇・八	四九九・一	二五七・八	六五・六	—	—	二、〇四四・四
一九一七	六	二七二・三	〇・二	六〇二・七	一三五・七	二九一・四	五九八・〇	二九五・五	一一〇・七	—	五・一	二、三一一・四
一九一八	七	二六〇・七	六六・八	四八六・〇	三二八・二	三一九・五	五〇一・五	三九三・七	一五七・〇	—	七四・五	二、五二一・二
一九一九	八	二三一・三	三〇〇・四	三〇七・六	四〇六・四	三一九・五	四五四・七	四〇五・〇	一六四・七	一八・一	一五五・二	二、七六二・七
一九二〇	九	二三九・四	三七七・一	三九〇・六	五一四・八	二七八・六	四八〇・二	四六九・四	二〇六・八	五七・九	一五三・七	三、一五八・四
計							—	—	—	—	—	二四、四〇〇・七

煙臺炭礦ハ、專ラ補助礦ニシテ、其ノ設備及出炭量モ、撫順ニ比スレハ、同日ノ論ニアラス。今一九一四年以來ノ、出炭額ヲ示セハ、次ノ如シ。

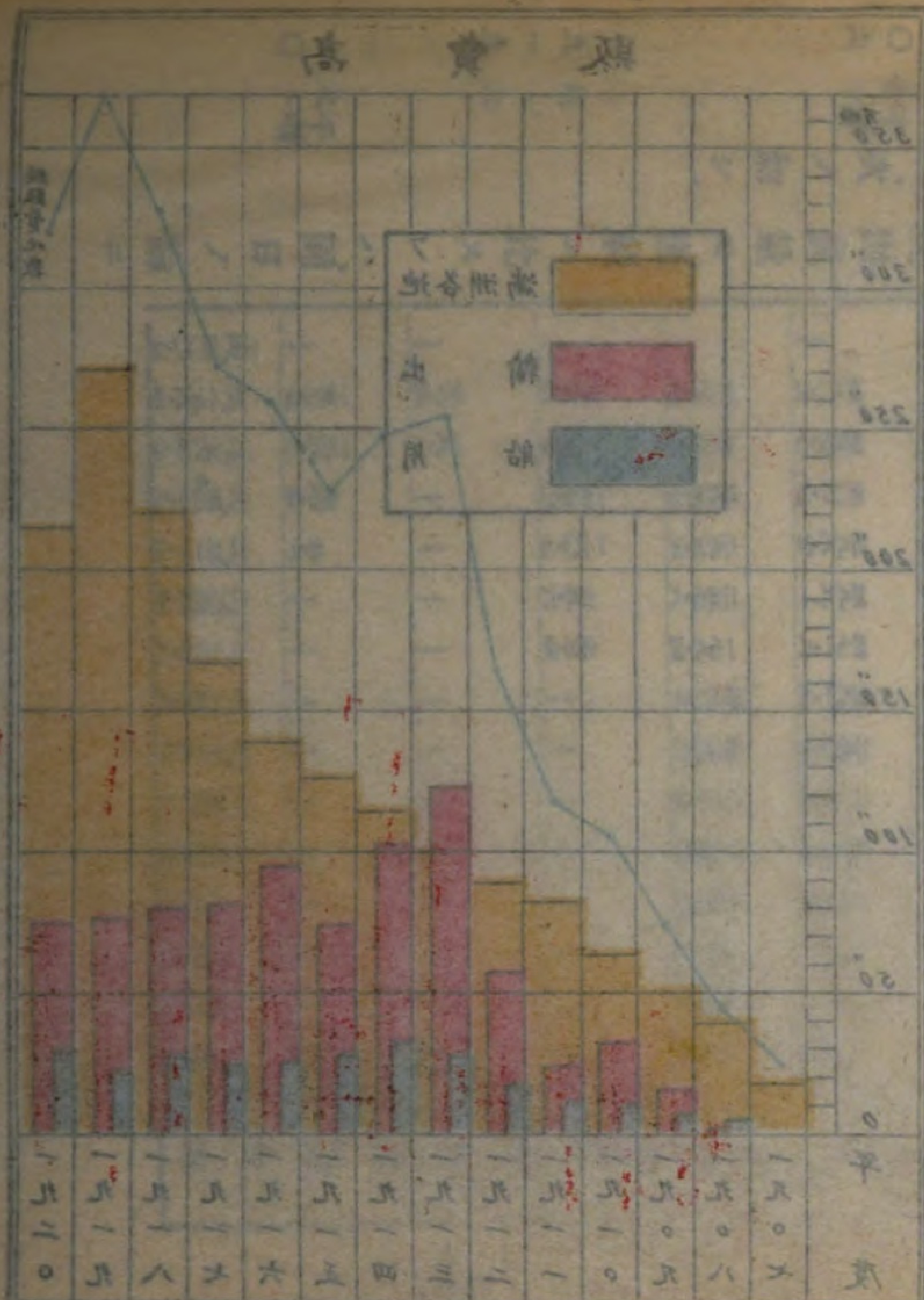
一九一四	九六千噸	一九一五	七一千噸	一九一六	九一千噸
一九一七	一一三	一九一八	一〇六	一九一九	一一〇

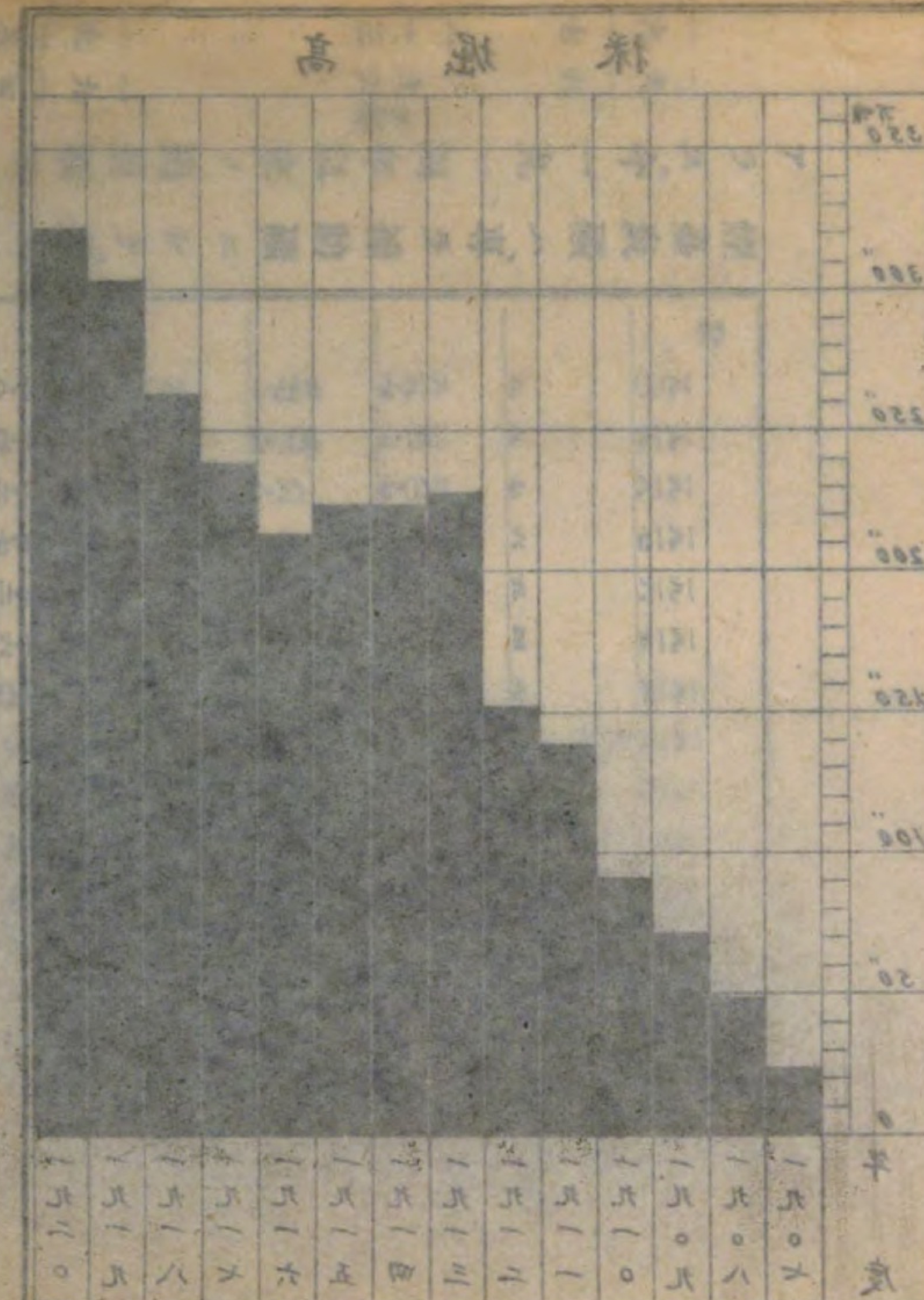
石炭採掘高及販賣高


採掘高
万噸
350
300〃
250〃
200〃
150〃
100〃
50〃
0
年度
一九〇七
一九〇八
一九〇九
一九一〇
一九一一
一九一二
一九一三
一九一四
一九一五
一九一六
一九一七
一九一八
一九一九
一九二〇


販賣高
万噸
350
300〃
250〃
200〃
150〃
100〃
50〃
0
滿洲各地
輸出
船用
總販賣屯數
年度
一九〇七
一九〇八
一九〇九
一九一〇
一九一一
一九一二
一九一三
一九一四
一九一五
一九一六
一九一七
一九一八
一九一九
一九二〇

石炭採掘高及販賣高





斯ク滿鐵ハ、撫順煙臺炭礦ノ開發ニ依リ、日支兩國民ニ大貢獻ヲ爲シツツアル外、鑛業勞働者ノ上ニ、一大幸福ヲ與ヘツツアルコトヲ記憶セサル可カラス。

撫順煙臺兩炭礦ニ對シ、今日迄、採炭ニ投セラレタル資金、約四千萬圓ニ及フ。而シテ、支那人勞働者ニ支給シタル勞銀ハ、實ニ、三千萬圓ニ達ス。現在、支那勞働者ヲ使用スルコト、一日約三萬五千人、支拂賃金二萬圓、一箇月約六十萬圓ニ及フ。

（ロ）　鞍山製鐵所

次ニ鞍山製鐵所ハ、這般歐洲戰亂ノ交ニ當リ、將來内外需要ニ充テンカ爲、一九一六年ニ、三千八百萬圓ヲ投シテ、創立セラレシモノナリ。之カ原鑛採掘ハ、鞍山站一帶ニ亙リ、含有鐵量ハ數億噸ト註セラル、而シテ、原鑛ノ供給ハ、日支合辦振興公司ニ依ル、本製鐵所ハ、一九一九年、第一號爐ノ火入ヲ行ヒ、始メテ出鐵ヲ見ルニ至レリ。爾來、鋭意、品質改良ト、出鐵增加ニ努メタル結果、一九二〇年末ヨリ一九二一年ニ入リ、稍品質モ良好トナリ、一日約二百噸ノ出銑ヲ見ルコトトナレリ。尚、附屬事業トシテ、骸炭爐ヲ完成シ、硫安工場、鑛滓煉瓦工場ヲ兼營ス。

（備考）

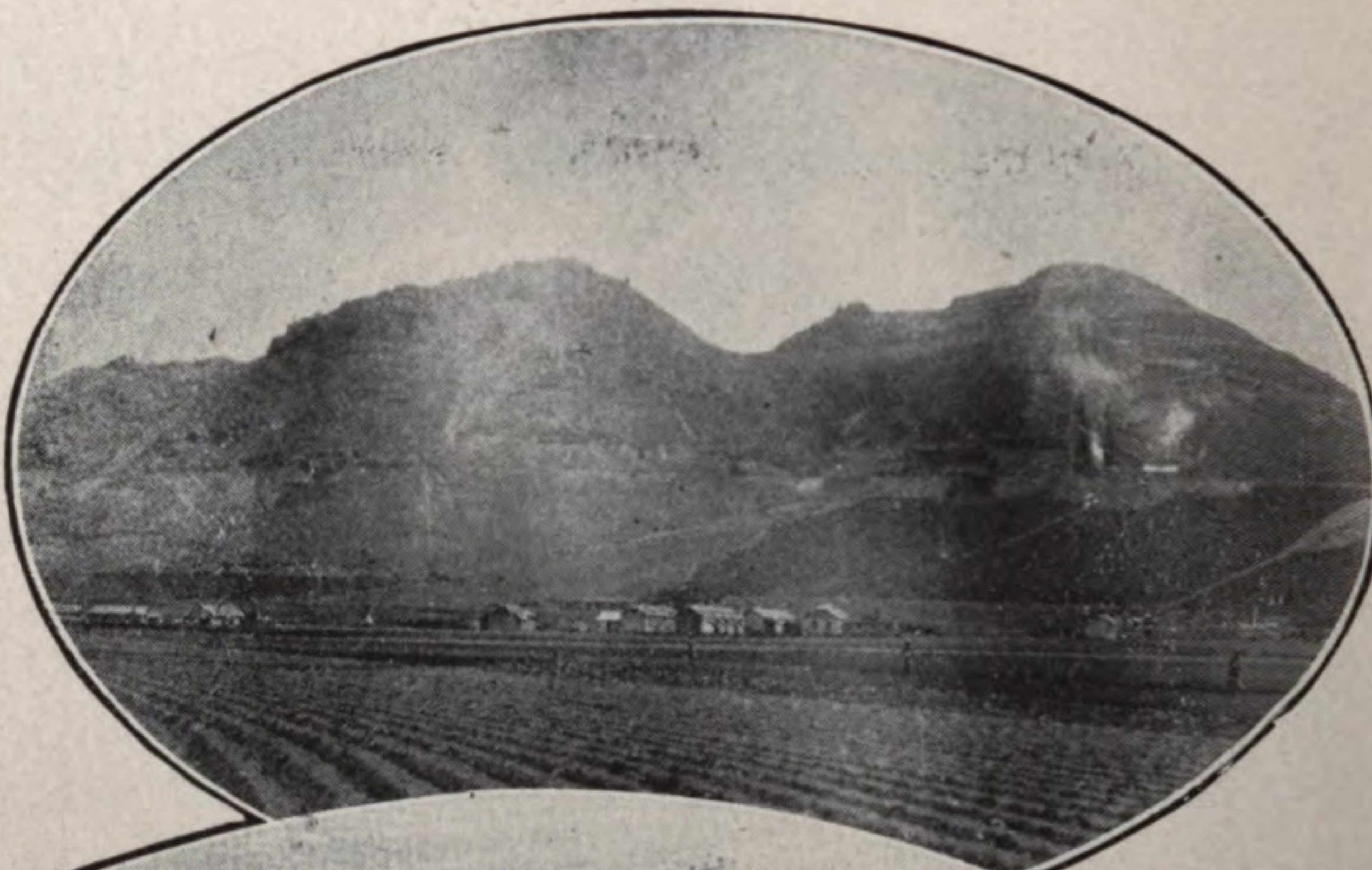
滿鐵ハ撫順煙臺ノ賣炭事業ヲ始メ、其以外ノ石炭、其ノ他ノ鑛產物賣買營業ノ必要アルヲ認メ、一九一一年七月、石炭及雜鑛物ノ賣買業ヲ開始シタリ、一九二〇年度炭種別賣炭數量左ノ如シ。

		社用炭	滿洲地賣炭	輸出炭	船舶焚料炭	計
石炭	撫順炭	九八六,〇〇〇噸	八一三,〇〇〇噸	四九九,〇〇〇噸	一八五,〇〇〇噸	二,四八五,〇〇〇噸
	煙臺炭	三八,〇〇〇	九,〇〇〇	—	—	四九,〇〇〇
	他種炭	一九九,〇〇〇	一六〇,〇〇〇	二四七,〇〇〇	五四,〇〇〇	六五三,〇〇〇
	煉炭	一,〇〇〇	六〇〇	—	—	二,〇〇〇
	計	一,二二四,〇〇〇	九八二,六〇〇	七四六,〇〇〇	二三九,〇〇〇	三,一八九,〇〇〇
骸炭		二,〇〇〇	四,〇〇〇	一〇〇	—	六,〇〇〇
合計		一,二二六,〇〇〇	九八六,六〇〇	七四六,一〇〇	二三九,〇〇〇	三,一九五,〇〇〇

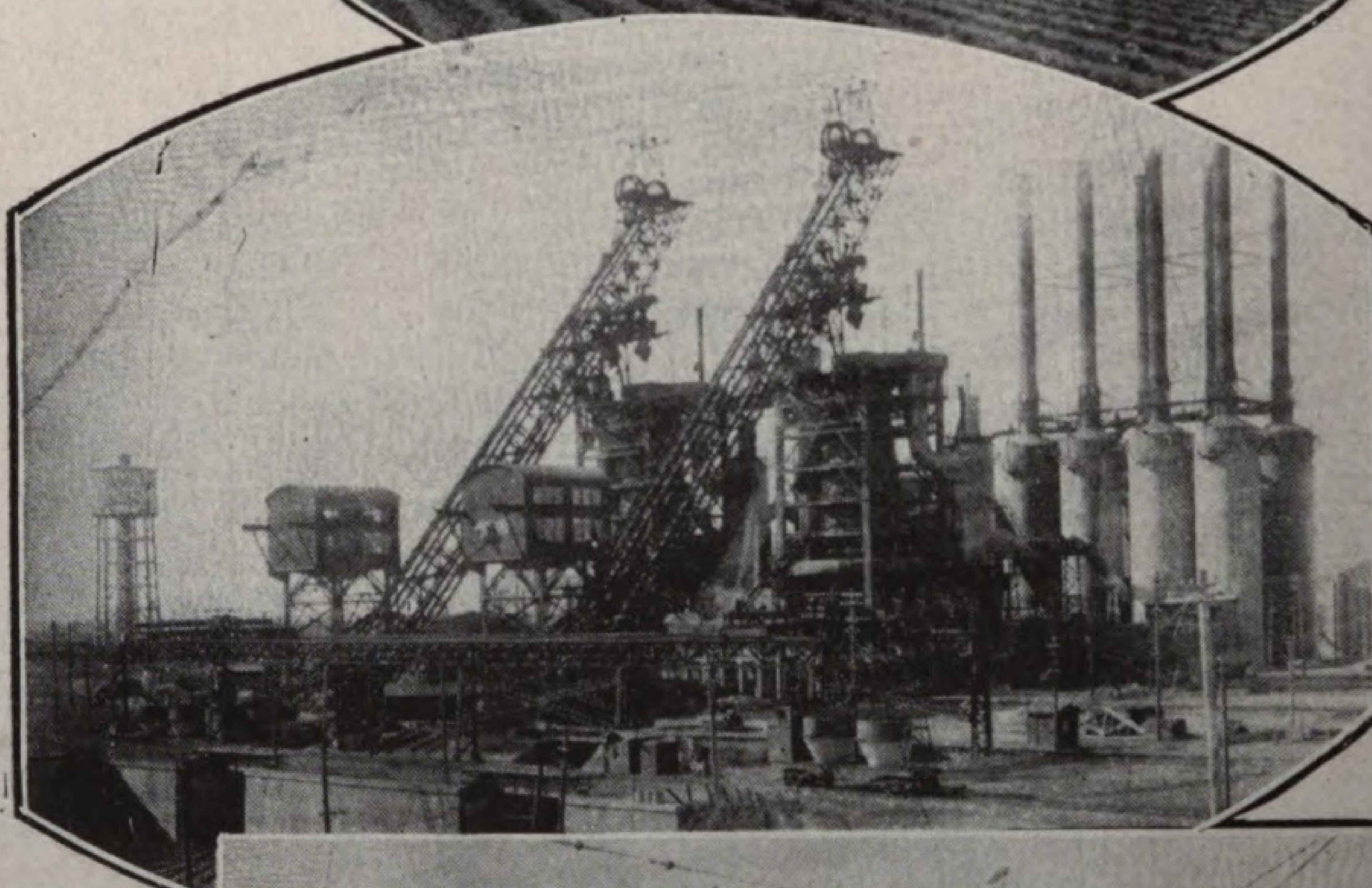
(八) 滿鐵關係以外ノ鑛業

滿鐵關係以外ノ鑛業又見ルヘキモノ尠カラス、金、鐵、石炭及苦土ニ就テ略述センニ、滿蒙ノ金ハ殆ト砂金ニシテ、金鑛ヨリ精錬スル方法行ハレス。產額、黑龍江省ニ多ク、鑛區百十二、大部分支那政府ノ有スル所ナリ。關東州十鑛區、奉天省五十四鑛區、吉林省三十九鑛區ヲ數フ。滿蒙全部ノ產金額ハ不明ナレトモ、黑龍江省ノミニテモ、年一千萬圓ト稱セラル。

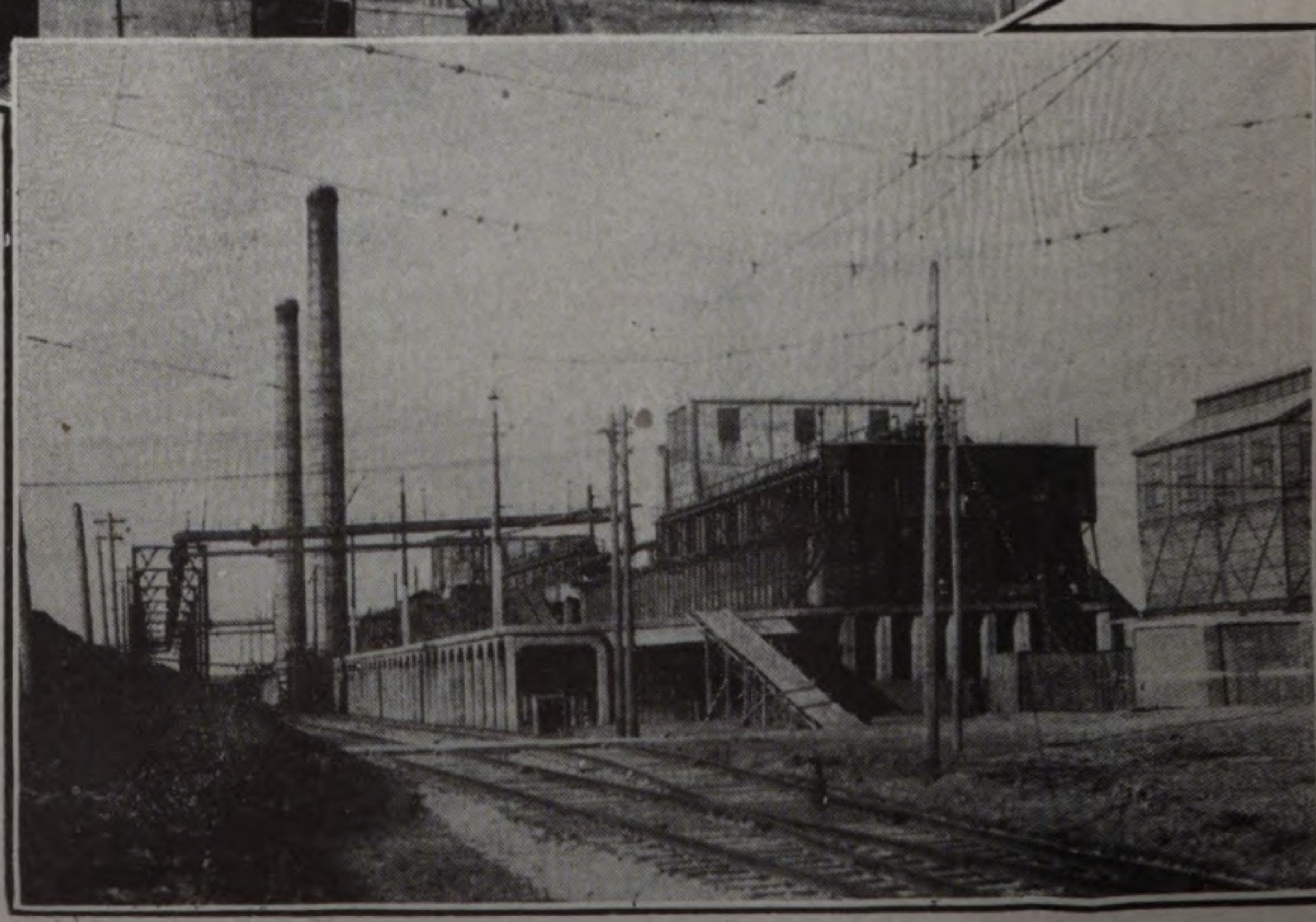
工業施設（其四）



鞍山製鐵所（其一）一九一六年設立
年額銑鐵生産ノ豫定一、〇〇〇、〇〇〇噸



鞍山製鐵所（其二）



鞍山製鐵所（其三）

鐵ノ埋藏量ハ極メテ莫大ト想像セラルレトモ經營中ノモノハ、鞍山製鐵所ノ外、本溪湖煤鐵公司アルノミ煤鐵公司ハ、日支合辦ニシテ、本溪湖ノ石灰、石炭、廟兒溝ノ鐵鑛ヲ原料トシ、一九一五年、熔鑛爐ノ火入ヲ行ヒ、目下一日二百噸ノ銑鐵ヲ製出ス。

石炭ハ、滿蒙鑛産中、最重要ナルモノニシテ、撫順炭田ノ外、本溪湖新邱ノ兩炭田著名ナリ。本溪湖炭ハ、火力強ク、埋藏量二億噸、炭層ノ厚サ二呎乃至九呎ト目セラル。新邱ハ、三四年前ノ開坑ニ屬シ炭層六枚、厚サ五呎乃至三十呎、埋藏量不明ナリ。

又耐火煉瓦用トシテ好適ナル苦土ハ關東州ノ石灰岩ニ含有サル、量頗ル大ナリ。

其ノ他ノ有用鑛物、亦少カラサレトモ、其ノ利用ハ、今尙不充分ナリ。

三、滿洲鑛業ノ將來

之要滿洲ノ鑛業ハ、二三鑛山ヲ除ク外ハ、極メテ幼稚ナル狀態ニ放置セラル。日露戰爭後滿鐵其ノ他ノ努力ニヨリ、次第ニ開發ノ機運ニ向ヒ、長足ノ進歩ヲ見タレトモ寧ロ將來ニ俟ツヘキモノ多シ。

第三章 工業

一、滿洲工業ノ過去

既ニ述ヘタル如ク、滿洲ハ資源ト勞力潤澤ナルカ故ニ、工業ノ發達、夙ニ見ルヘキモノアルノ理ナレトモ、元々文化ノ恩惠ニ浴スルコト尠ナク、豐富ナル天產ハ、土人ノ單純ナル、自給自足經濟ニ、提供セラレ、搾油、製粉、酒造等ノ外見ルヘキモノナク、日常ノ需要品サヘ、多クハ、海外及ヒ南支那地方ヨリノ輸移入ニ、俟チタル次第ナリ。然ルニ日露戰爭後、邦人ノ此ノ地ニ來住スルヤ、科學的方法ト、企業資本トヲ輸入シテ、各種工業ノ開發ニ力ムルニ及ヒ、漸ク、滿洲工業界ノ、黎明期ヲ劃スルニ至レリ。又會社ハ、調査課、中央試驗所、地質調査所、東亞經濟調査局ヲ設ケテ、科學的研究ヲ試ミ、其ノ結果ノ重要ナルモノハ、之ヲ發表シテ、專心、事業界ノ指導ヲ爲シタリ。

爾來、歲ヲ閱スル事十四、滿蒙ノ文化ハ、今ヤ、昔日ノ俤ナク、各種ノ施設、漸ク殷盛ナラントス。此ノ間會社ニ於テ、調査指導ニ要シタル費用ハ、實ニ、八百萬圓、此間投資ニ應シタル金額、正ニ、三千八百萬圓ニ達セリ。

二、滿洲工業ノ現在

(イ) 化學工業

燃料タル石炭、及、モンド瓦斯利用ニヨル、電力ノ低廉ナル關係上、化學工業ハ、主トシテ撫順ニ發達スヘキ運命ヲ有シ、現ニ同所ニハ、本社經營ノ、モンド瓦斯發電所附

屬硫安工場ノ外、電氣化學工業會社工場ニ於テ、炭化石灰、石灰窒素、硫安製造工業ヲ起セリ。

又、關東州ニ於テハ、同州產鹽ヲ利用シテ、曹達工業ノ研究ヲ進メツツアリ。

（ロ）　油脂工業

大豆油ヲ原料トシテ、硬化油、**ステアリン**、**グリセリン**、石鹼等ノ製造ヲ目的トシタル、大連油脂工業會社、**ゼラチン**、獸油、植物油ヲ扱フ、奉天化學工業會社ヲ擧クヘシ。

（ハ）　製造工業

製造工業ノ第一ニ位スルモノハ、製油業ナリ。

製油業ハ、從來、家內工業的ノ、幼稚ナル搾油法ニ依リシモ、輓近、工業ノ發達ハ、汽機ニ依リ、又、水壓法ニヨル大規模ノ工場ニ進步シ、更ニ、化學的ニ、**ベンチン**抽出法ニヨル、鈴木商店ノ大連油房ヲ見ルニ至ル。

滿鐵沿線油房ノ年產、實ニ、三千六百萬圓ニ達ス。豆油ハ、主トシテ、米國ニ於ケル、石鹼、人造牛酪、塗料ノ原料トシテ需要セラレ、粕ハ、肥料トシテ、殆ント、全部日本ニ入ル。

油房ハ、大連ニ於テ、最モ發達シ、大小六十ノ工場ヲ有ス。

油房業ト、相對立スルモノハ、之ヲ釀造業トス、大部分ハ、高粱酒ナリ。該釀造所、即、支

那在來ノ燒鍋ハ奉天遼陽附近ヲ中心トシテ各地ニ散在シ年產額一千三百萬圓ト推測セラル每年支那本部ヘ輸出サルルモノ少カラス近年邦人ノ需要ニ應セントスル淸酒味噌醬油等ノ釀造ヲ企ツル者モ多シ猶滿鐵中央試驗場ノ發見ニ係ル高粱酒粕ヲ原料トスル乳酸石灰ノ製出法及滿洲產ホツプスヲ利用スル麥酒ノ釀造モ次第ニ行ハル更ニ將來有望ノモノニ窯業ヲ數フル事ヲ得滿洲ノ地質ハ良ク窯業ニ適シ奉天公主嶺大連初メ各地ニ窯業會社普通煉瓦及耐火煉瓦ノ製造會社續出スル有樣ナリ。

其ノ他石灰岩ヲ原料トスルセメント工業硅石ヲ原料トスル硝子工業製陶工業等順調ナル發展ヲナス而シテ此等ノ指導機關ハ主トシテ本社經營中央試驗所之ニ當ル。

(二) 農產物加工業

本業ノ最モ大ナルモノハ製粉工業ニシテ原料ノ關係上哈爾賓ヲ中心トシテ北滿ニ其ノ緖ヲ開ケリ支那人經營ノモノハ未タ家內工業ノ域ヲ脫セサルモ長春開原奉天吉林等南滿ニ於ケル大規模ノ製粉業ハ邦人ノ創設セシ所ニシテ北滿製粉業ハ露人ノ經營ニ屬ス昨今年產額一五〇〇〇〇〇〇圓ト稱セラル其他煙草製造

業、皮革業、紡績業等ノ、發達スヘキ餘地多シ。殊ニ、柞蠶紡織ハ、繭ノ產額、八千萬斤、價額二千萬圓、絲ノ生產六百萬圓ニ達ス。唯本業ハ未タ機械工業ニヨラス、專ラ、支那人ノ特種工業トシテ放置シアレトモ、若シ、之ヲ、化學的方法ニヨル、大規模ノ方法ヲ採ラハ、其ノ將來ノ有望ナルコト、疑ヲ容レス。

北滿及ヒ南滿ノ氣候風土、能ク甜菜ノ栽培ニ適スルタメ、製糖業ニ於テモ、已ニ、露人ノ阿什河工場、支人ノ呼蘭工場ノ設立アリ。又、奉天ニハ、邦人ノ南滿洲製糖會社ノ創立ヲ見タリ。甜菜栽培ノ普及ト共ニ、將來益々發達スヘシ

(ホ) 鐵工器械工業

鐵工場ニハ、滿鐵沙河口工場、及、遼陽分工場カ、鐵道、車體、車輛其他各種器械ノ、工作修理ヲ爲ス外殆ント、他ニ見ルヘキモノナシ。

三、滿洲工業ノ將來

叙上ノ如ク、日本カ代リテ、南滿ヲ經營スルニ及ヒ、滿洲ノ工業頓ニ開發シ、各種ノ工業、漸次ニ、勃興ノ機運ヲ生シタリトハ云ヘ、今尚、農業本位タルヲ免レス。

然レトモ、石炭勞力及各種原料ノ、豐富低廉ナル事實ハ、交通ノ發達、資本ノ流入ト相俟ツテ、此地工業ノ隆盛ヲ招來スヘキヲ豫期セラル。

第四章　商　業

一、滿洲商業ノ過去

古來支那ハ、士農工商ノ差別強ク、殊ニ、滿洲ハ、清朝發祥ノ地トシテ、封禁セラレ、久シク、漢人ノ移住ヲ許サス。爲ニ、支那本部ニ比スレハ、其ノ經濟組織ハ、長キ眠リノ裡ニアリタリ。其ノ後、漢民ノ、禁令ヲ犯シテ、移住スルモノ漸ク多ク、一方、又露國ノ勢力、北方ヨリ侵入スルニ及ヒ、遂ニ、清朝ハ、解禁ヲ餘儀ナクセラレタリ。斯クテ、豐穰ナル沃野ノ開墾セラルルニ伴ヒ、商賈ノ、市ヲナスモノ多ク、拓地植民ハ、著々其ノ功ヲ擧ケ、其ノ經濟組織ハ、專制主義ヨリ、漸次、自由主義ニ推移セリ。

然ルニ、一八六二年ニ於ケル、營口ノ開放ハ、俄然、滿洲商業變化ノ大轉機ヲナシ、南方支那、殊ニ、其ノ中心市場タル上海ト、連絡スルニ至レリ。茲ニ於テカ、滿洲ノ生産物ハ、新販路ヲ發見シ、南支ノ製産品、及、外國ノ製品ハ、始メテ滿洲ニ輸入セラレ、滿洲ノ産業ニ、莫大ノ刺戟ヲ與ヘタリ。殊ニ、上海方面ト天津營口間ノ汽船交通ノ創始ハ、南北支那經濟上ノ、大革命ヲ來シ、滿洲ヲ、支那本部ノ經濟的中心ニ、連絡シタルモ、一ニ此ノ交通ノ變化ニ原クモノトス。次テ、本社カ、南滿線ヲ承繼スルニ及ンテ、舊來露國

ノ馴致シタル、帝國主義ヲ一蹴シ、極力内地産業ノ發展指導ニ盡瘁シタルヲ以テ、滿洲全産業ノ促進上、殆ト、前古未曾有ノ效果ヲ擧ケタリ。尙本社ハ、北ハ、東支鐵道ト連絡運輸ヲ協定シ、南滿洲鐵道ヨリ分岐シテ、支那本部ニ入ル、京奉鐵道、蒙地ニ入ル四洮鐵道、及、吉林ニ入ル吉長鐵道ヲ、援助シ、或ハ、朝鮮ヲ通シテ、日本ニ連絡スヘキ安奉線ヲ築設シ、或ハ、又、中部支那ト接續センカ爲、上海大連間ニ、連絡航路ヲ開始セリ。更ニ、大連ノ築港ヲ完成シテ、理想的輸出入港タラシメタリ。滿鐵ハ、此ノ外、社外ノ各種實業ヲ助成スルノ必要ヲ感シ、大連、營口、奉天、安東、長春ニ於ケル、日本側商業會議所ニ補助金ヲ支出シ、附屬地ノ、支那側商務會ノ整成ヲ助ケ、商品陳列館ヲ設置スル等、直接間接ニ、有力ナル援助ヲ與ヘタリ。又滿洲特産物ノ市價ヲ定メン爲、長春、及、公主嶺ニ、特産物現物市場ヲ開始セシメ、或ハ、滿洲ノ殖産興業ニ資スルノ目的ヲ以テ、之等原料ノ運賃ヲ低廉スル等、アラユル盡力ヲ惜マス。更ニ、事業資金ノ融通、及、事業後援ノ投資ニ至リテハ、商工鑛凡テニ亙リテ、殆ト、三千萬圓ニ達ス、滿洲ノ商業經營ハ、古來僅カニ、營口ノ一港ニ過キサリシカ、日本カ、大連港ヲ開キ、露國カ綏芬河及滿洲里ヲ開キテ、浦鹽斯德ニ通セシメタリ。斯クテ、廣ク、滿蒙ノ物資移動シタリ。就中、大連浦鹽ハ自ラ、商權ノ分野ヲ定ムル形ヲ爲セルヲ以テ、其ノ結果ハ自然ニ、滿洲ノ總貿

易ヲ、膨脹セシムル原因ヲ作レリ。

一九〇四年	四、一五一、八〇〇海關兩
一九〇七年	五〇、九五八、〇〇〇
一九一〇年	一五三、三二五、〇〇〇
一九一二年	一七〇、〇二七、〇〇〇
一九一九年	三五四、九九五、〇〇〇

二、滿洲商業ノ現在

(イ) 商業機關

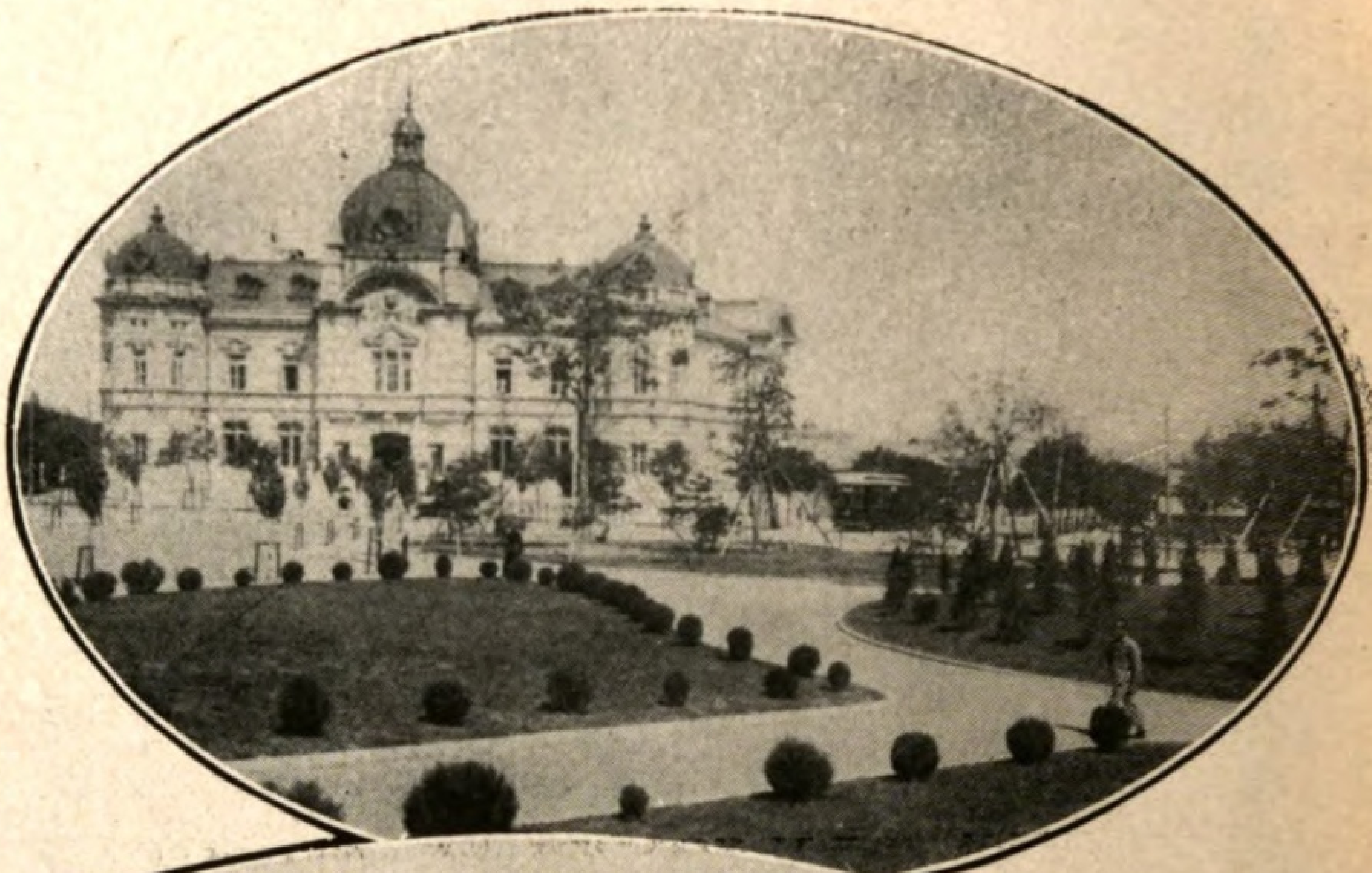
現在、南滿洲ニハ、日本側ニ大連、奉天、安東、長春、營口ノ五商業會議所ヲ有シ、支那側ハ、商務會、又ハ、公議會ト稱スル、商業會議所ヲ重要都市ニ設ク。取引所ハ、一九一三年以降、大連、開原、長春以下、重要ナル都市ニ之ヲ設置シ、一般特産物、及、金票等ノ取引ヲ行フ。

(備考) 詳細ナル說明ハ第三編第九章商工施設ノ部ニ於テ、之ヲ爲シタリ。

(ロ) 銀行

滿洲ニ於ケル外國銀行トシテ、主要ナルモノハ、露亞銀行ニシテ、其ノ他ハ、悉ク、日本人經營ノモノナリ。

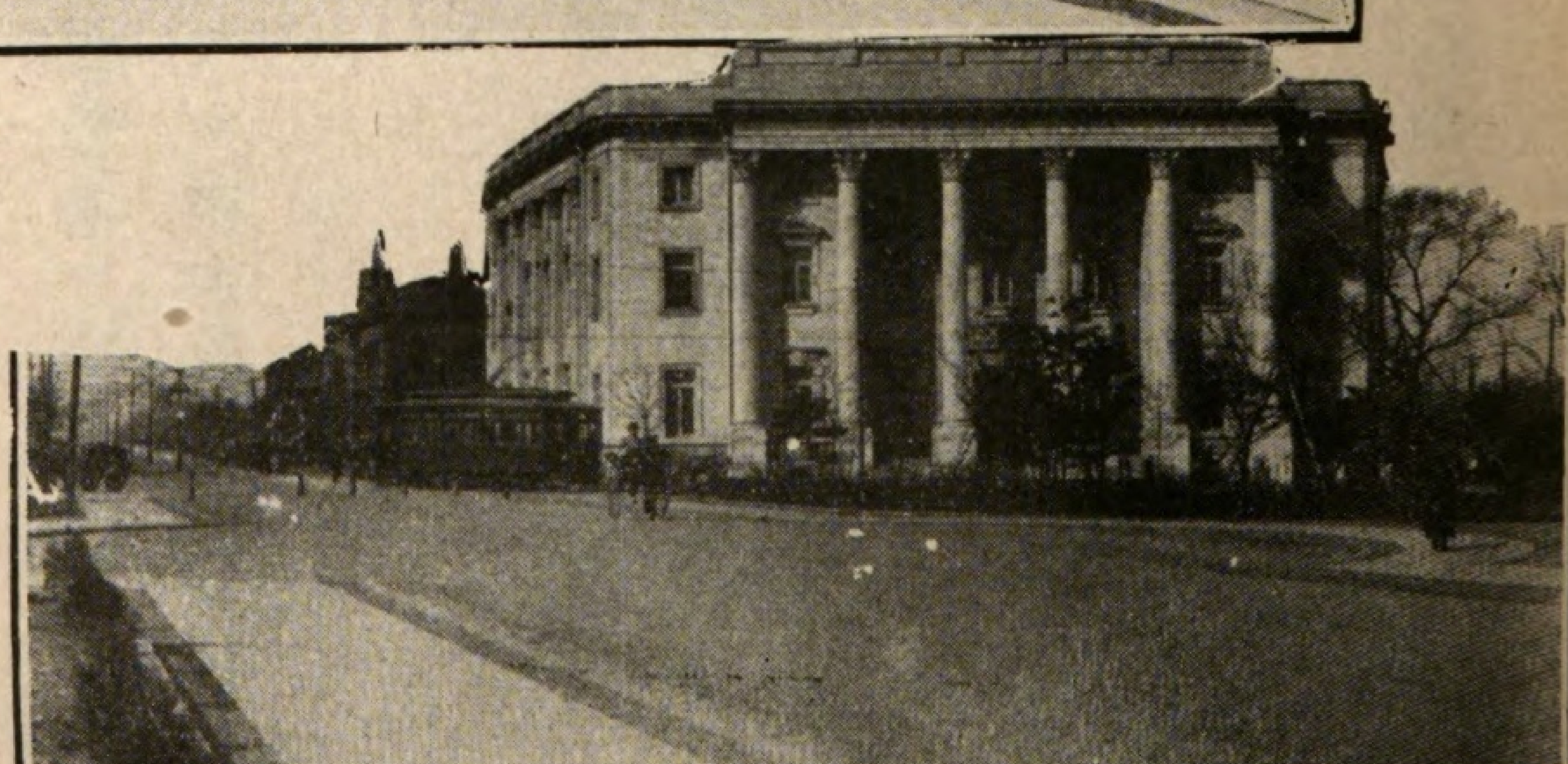
大連市街（其二）



橫濱正金銀行大連支店
資本金一億萬圓
大連支店設立 一九〇六年三月



中國銀行大連支店
資本金四千六百萬元
大連支店設立 一九一三年九月



資本金八千萬圓
大連支店設立 一九一三年八月

朝鮮銀行大連支店

銀行中主要ナルモノヲ擧クレハ、朝鮮銀行、正金銀行、中國銀行、交通銀行、露亞銀行、庶民銀行、西伯利商業銀行、莫斯科國立銀行、香港上海銀行及花旗銀行トス。

（備考）

	本店	資本額	支店	出張所數	派出所
日本側	二六	六一、九〇〇、〇〇〇円	五一	八	一
支那側	一一	小洋錢 一〇、四五〇、〇〇〇元 大洋錢 一、〇〇〇、〇〇〇元 吉林官帖 一、五〇〇、〇〇〇吊 六三〇、〇〇〇兩	七〇	―	―

其ノ他、金融機關ニハ、舊式ノ錢莊、滙莊、錢舖、銀爐等アリ。近年、支那經濟界ノ發達ニ伴ヒ、爲替及貸付資金ノ需要增加スルト共ニ、各省財政ノ紊亂ヲ彌縫スル爲ニ、支那側各銀行、競フテ紙幣ヲ濫發シ、爲ニ、財界ハ、常ニ動搖シテ休マス。

（ハ）　信託業

銀行以外ノ金融機關トシテハ、東洋拓殖會社、東省實業會社アリ。猶、大連始メ、各取引所附屬ノ信託會社ノ外、最近事業熱旺盛ナルト共ニ、證劵信託會社ノ、創立セラレルモノモ尠カラス。

（ニ）　倉庫業

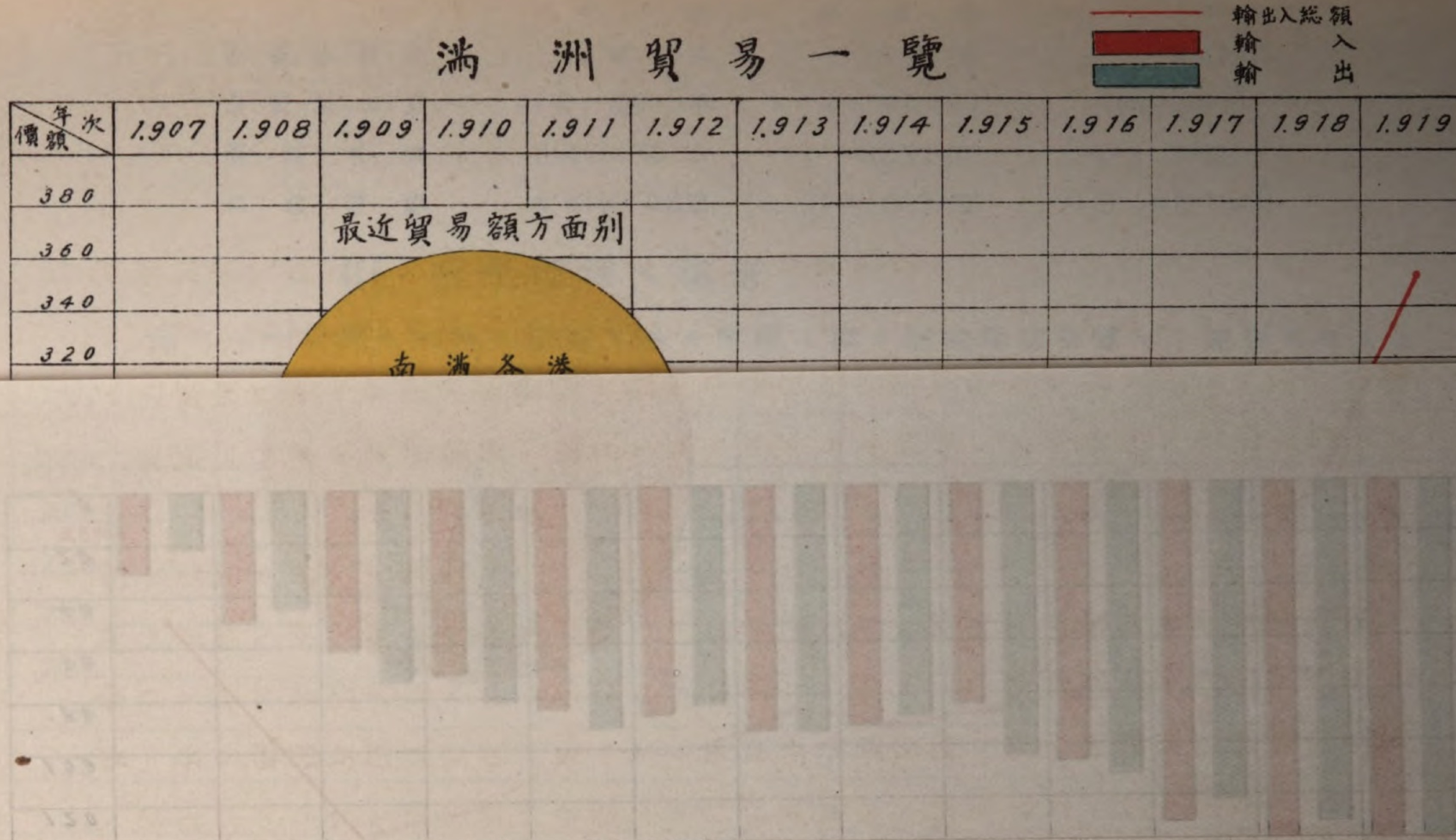
滿鐵ハ、沿線主要驛、及、大連埠頭ニ於テ、倉庫業ヲ經營シ、保管貨物ノ輸送、到著貨物ノ保管ヲナシ、之ヲ發送預、到著預トニ區別ス。而シテ、保管方法ハ、倉庫保管ト、野積保管ニ分ツ。輸出豆粕、及、豆油ニ對シテハ、所謂混合保管制ヲ採リ、滿鐵埠頭事務所、之カ檢査ヲ行フ。最近、大豆ノ混合保管ヲモ、取扱フニ至レリ。一般倉庫業ハ、輓近ノ發達ニ屬シ、貨物ノ保管、竝ニ、金融ヲ目的トシ、大連、奉天、長春、撫順、吉林、哈爾賓等ノ、主要驛ニ、之カ設置ヲ見サル處ナシ。

(ホ) 保險業

滿洲ニハ、未タ、保險會社ノ創立ヲ見ス。總テ、日本內地ノ保險會社ノ支店、出張所、又ハ、代理店乃至ハ、歐米保險會社ニ於テ、生命及損害保險事業ヲ行フ。而シテ、茲ニ特筆スヘキハ、滿鐵ノ埠頭構內保管貨物ニ對スル特別保險ナリ。卽チ滿鐵ハ、一箇年五百萬圓以內ノ範圍ニ於テ、見舞金ノ名ヲ以テ、損害補償ヲナスコト之也。之レ又、滿洲產業助成ノ一途ナリ。

(ヘ) 運輸業

滿洲經濟界ノ動脈ト見ルヘキ、滿鐵ノ、一九二〇年度客貨運輸成績ヲ示セハ、左ノ如シ。


滿洲貿易一覽
輸出入総額
輸入
輸出
年次
價額
1.907
1.908
1.909
1.910
1.911
1.912
1.913
1.914
1.915
1.916
1.917
1.918
1.919
380
360
340
320
最近貿易額方面別
南滿各港

滿鐵ハ、沿線主要驛、及、大連埠頭ニ於テ、倉庫業ヲ經營シ、保管貨物ノ輸送、到著貨物

	本線	安奉線	計
平均營業哩	五二四・五	一七一・四	六八六・二哩
營業延日哩	一九一、四四二・七	六二、五六一・〇	二五〇、四六三・二哩
乘車人員	七、四〇九、四一一	一、一三〇、〇八三	八、一二三、四一一人
貨物噸數	九、八三二、六四四	一、七八〇、〇二四	一〇、一五四、二五九噸

三、滿洲商業ノ將來

思フニ土地廣ク、人多ク、物更ニ多キ滿洲ハ、實ニ、世界原料市場ノ、一權威タラスンハアラス。殊ニ、開港開市ノ多數ナルコトハ、滿洲ノ特色ニシテ、四開港、二十六開市ヲ存スル上、南滿東支兩鐵道ノ各驛ハ、事實ニ於テ、一種ノ小開市場ト云フヘク、外國ノ商品カ、如斯多數ノ、集散場ニ配布セラレ、同時ニ、地方生產品カ、收買セラルルハ、全ク他ノ各省ニ見サル所ナリ。斯クテ、滿洲ノ外國貿易カ、將來共ニ一等優勝ノ地位ヲ占ムヘキハ、疑フヘカラス。若シ夫レ、西比利亞ノ平靜ヲ囘復シ、太平洋、亞細亞大陸、及、西歐ノ、直接連絡成ルノ曉ニ於テハ、蓋シ、東洋貿易ノ中心點タルヘシ。

第五章　貿易

一、滿洲貿易ノ概觀

(イ) 滿洲貿易ノ二大分野

滿洲ニ於ケル外國貿易ノ狀態ヲ概觀スルニ、奉天ヲ中心トシ、京奉、南滿本線、竝、安奉線ニ聯絡スル、所謂南滿貿易ト、哈爾賓ヲ中心トシテ、浦鹽、其ノ他ノ露領各地、東清南部線ニ接續スル、所謂北滿貿易トノ、二大系統ニ類別スルヲ得ヘシ。別ニ、朝鮮蒙古ニ對スル貿易アリト雖、前二者ニ比スレハ、其ノ額、眞ニ、微々タルモノナリ。而シテ、南滿貿易ノ圈內ニ屬スルモノトシテハ、大連、牛莊、安東、及ヒ、大東溝ノ、四開港場ヲ擧クヘク、北滿貿易ノ圈內ニ屬スルモノトシテハ、滿洲里、綏芬河、哈爾賓、三姓、愛琿ノ五開港場ヲ擧クヘシ。其ノ他、間島地方ニ、琿春、龍井村ノ二開港場アルモ、主トシテ、朝鮮ニ對スルモノニシテ、自ラ別箇ノ系統ヲ形成スルモノトス。

(ロ) 滿洲對外貿易ノ沿革

抑、滿洲ニ於ケル外國貿易ハ、天津條約ニ依リ、一八六〇年五月、牛莊ヲ開港シタルニ始マル。爾來、同港ハ、自ラ市場ノ中心トナリ、滿洲ノ農產物ハ、海陸共ニ、牛莊ニ搬出セラレ、滿洲第一ノ物產呑吐港トシテ、非常ノ發展ヲ示シタリ。次テ、一八九八年、露國カ關東州ヲ租借シ、東清鐵道ノ支線ヲ、哈爾賓ヨリ南走シテ、大連、旅順ニ、接續セシメ、



大連埠頭船車聯絡



大連埠頭客船着景

更ニ大連ニ築港シテ、自由貿易港トナスコトヲ宣言シタリシモ、港灣ノ修築、未タ成ラサルニ、日露ノ開戰トナリタリ。戰後、日支兩國ノ協約ニ依リ、一九〇七年七月、支那海關ヲ、大連ニ置キタリシカ、當時、戰禍ノ餘響ヲ受ケテ、滿洲ノ産業、容易ニ興ラス、且ツ、大連奥地間ノ交通ハ、尙未タ、整備セサリシ爲、同年下半期ノ大連貿易ハ、輸出入僅ニ、一四、〇〇〇、〇〇〇兩ヲ計上セルニ過キス。之ヨリ先、南滿洲鐵道株式會社創立セラレ、邦人ノ商權漸次滿洲ニ扶殖セラルルニ及ヒ、滿洲ノ財界ハ、頓ニ面目ヲ一新シ、他面、大豆、豆粕、豆油ノ、新ニ、日本内地、及ヒ、歐米ニ、輸出セラルルアリ。特産物市場ハ、爲ニ、急激ノ發達ヲ來シ、貿易増進ノ勢、年ト共ニ、頗ル顯著ナルニ至リタリ。一九一四年、其ノ貿易額、八九、〇〇〇、〇〇〇兩ニ達シ、更ニ、一九一八年ニ於テ、一躍、二〇六、〇〇〇、〇〇〇兩ノ巨額ニ上リ、支那海關中ノ、第二位ニ進ミタルハ、以テ大連港ノ地位、頗ル好望ナルヲ認ムルト共ニ、滿洲開發ノ、異常ナル速度ヲ、知ルニ足ルモノアリ。而シテ、一九〇七年、大連ト、同時ニ海關ヲ設置セラレタルモノニ、安東、大東溝アリ。一九〇八年ニハ、滿洲里、綏芬河アリ。一九〇九年ニハ、哈爾賓、三姓、愛琿アリ、一九一〇年ニハ、琿春、龍井村アリト雖、到底大連ニ及ハス。

額累年比較

單位海關兩

滿各關					間島	合計
三姓	滿洲里	哈爾賓	芬河	計	琿春 龍井村	
—	—	—	—	—	—	50,958,155
—	3,829,785	—	11,985,705	15,815,490	—	95,812,627
1,062,264	7,449762	3,564,472	22,355,590	34,715,711	—	142,022,455
2,914,746	10,466,057	6,345,922	19,429,858	39,718,580	423,104	153,325,006
2,454,370	12,227,749	3,979,041	25,688,703	44,862,234	724,161	176,203,628
2,328,752	14,512,508	6,223,593	22,276,587	46,508,751	1,239,179	170,026,751
3,170,158	14,703,960	8,417,587	21,177,263	48,700,995	1,742,775	187,747,431
3,496,018	13,670,786	6,690,532	17,405,869	42,878,515	1,282,448	180,588,785
2,703,166	6,431,083	4,928,398	21,951,013	37,660,168	989,070	187,166,460
971,724	19,426,087	4,160,517	30,423,909	56,546,644	1,003,511	217,583,268
2,037,462	11,438,872	4,234,241	21,631,487	41,524,836	1,760,716	250,989,595
1,484,690	1,883,704	9,560,557	10,656,683	27,446,586	3,714,844	267,203,601
2,212,063	5,283,151	8,269,614	17,209,070	37,186,462	4,279,926	354,995,346

滿洲各港貿易

年次	南滿各港				北
	大連	牛莊	安東 大東溝	計	愛琿
一九〇七年	13,837,739	32,294,663	4,825,753	50,958,155	—
一九〇八年	32,258,461	41,199,027	6,539,649	79,997,137	—
一九〇九年	43,562,814	55,018,080	8,725,850	107,306,744	283,623
一九一〇年	50,940,242	53,012,200	9,230,880	113,183,322	561,997
一九一一年	62,062,096	58,082,531	10,472,606	130,617,233	512,371
一九一二年	60,524,303	50,385,326	11,369,192	122,278,821	1,167,311
一九一三年	72,346,891	50,064,454	14,892,316	137,303,661	1,232,027
一九一四年	78,717,791	37,395,530	20,314,501	136,427,822	1,615,310
一九一五年	83,834,162	40,395,539	24,287,521	148,517,222	1,646,508
一九一六年	99,776,790	31,479,156	28,777,167	160,033,113	1,564,407
一九一七年	135,945,180	28,829,499	42,929,364	207,704,043	2,182,774
一九一八年	165,824,207	29,988,161	40,229,803	236,042,171	3,860,952
一九一九年	210,748,036	41,341,286	61,439,636	313,528,958	4,212,564

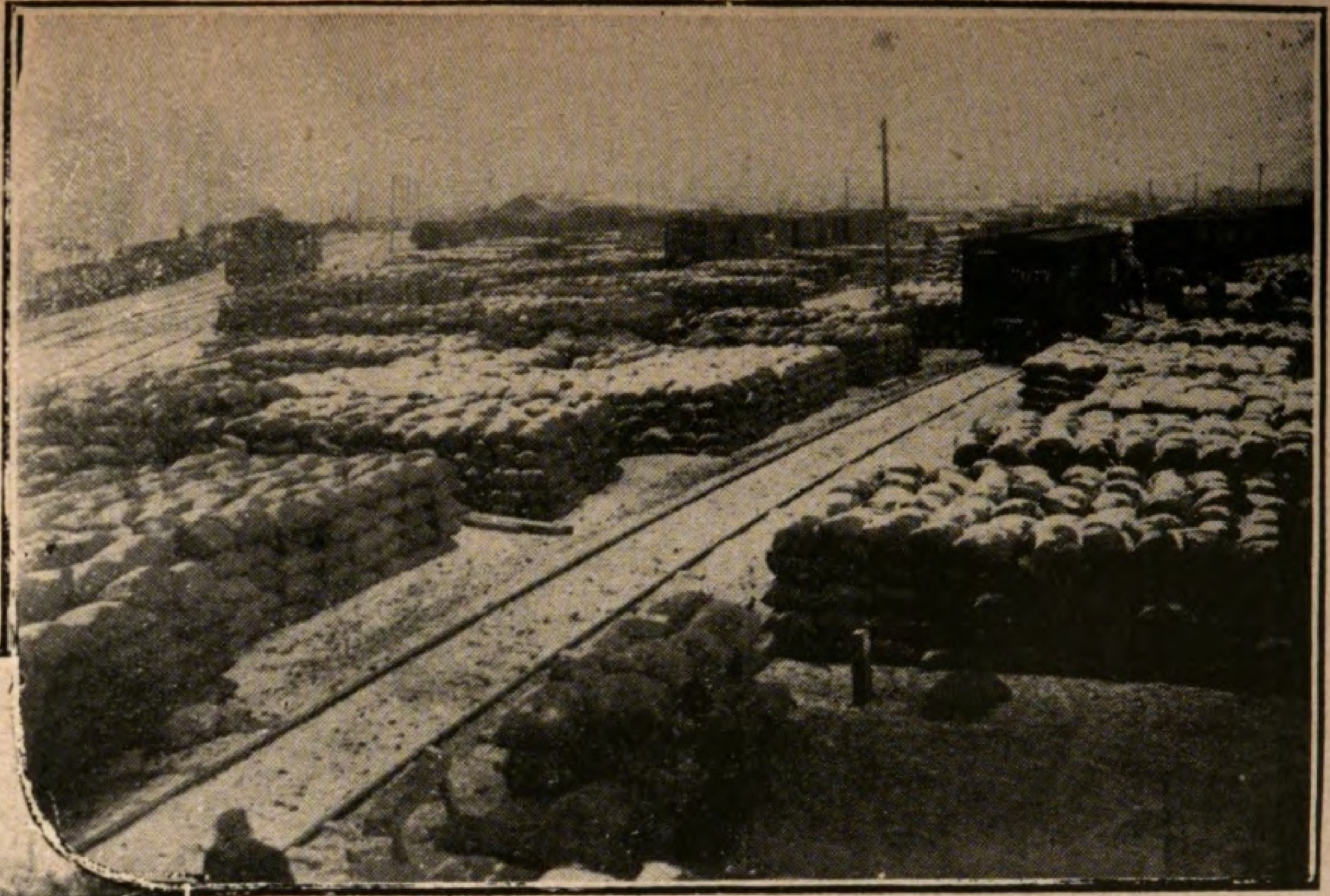
尚、逐年推移ノ狀況ヲ、一層明瞭ナラシメンカ爲、一九一〇年ノ貿易額ヲ「一〇〇」トシ以下、毎年ノ指數ヲ、表示スレハ次ノ如シ。

年次	南滿				北滿						間島	合計
	大連	牛莊	安東大東溝	計	綏芬河	愛琿	三姓	ハルビン	滿洲里	計	琿春龍井村	
一九一〇年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九一一年	一一三	一一〇	一一三	一一五	九一	八四	一一七	六三	一三三	一一三	一七二	一一五
一九一二年	一一九	九五	一一三	一〇八	二〇八	八〇	一三九	九八	一一五	一一七	二九三	一一二
一九一三年	一四二	九四	一六一	一二一	二一九	一〇九	一四〇	一三三	一〇九	一一三	四一三	一一三
一九一四年	一五五	七一	二一〇	一二一	二八九	一二〇	一三二	一〇五	九〇	一〇八	三〇三	一一八
一九一五年	一六五	七六	二〇三	一三一	二九三	九三	六二	七八	一一三	九五	二三四	一一三
一九一六年	一九六	五九	三二一	一四一	二七八	一三三	一八六	六六	一五七	一四二	二三七	一四三
一九一七年	二六七	五四	四六五	一八四	三八八	七〇	一〇九	六七	一一一	一〇七	四一六	一六四
一九一八年	三三六	五七	四三六	二〇九	六八七	五一	一八	一五一	五五	六九	八七八	一七四
一九一九年	四一四	七八	六六六	二七七	六五〇	七六	五〇	一三〇	八九	九四	一、〇一三	二一三

（八）滿洲貿易ノ趨勢

由是觀是、滿洲ニ於ケル貿易ハ、逐年發展ノ狀況ニ在リ。一九一〇年ヨリ、一九一九年ニ至ル十一箇年間ニ、一五三、〇〇〇、〇〇〇兩ヨリ三五五、〇〇〇、〇〇〇兩ニ卽チ

大連埠頭野積ノ實況



埠頭大豆野積ノ大觀



埠頭豆粕野積ノ大觀

二倍三分ノ増加ヲ來シタリ。之ヲ、大連開港以前タル、一九〇四、五年頃ノ、牛莊ノ貿易額、僅ニ四五千萬兩ナリシニ比スレハ、洵ニ、隔世ノ感アリト謂フヘシ。蓋シ、主トシテ、大連港ニ於ケル貿易ノ、異常ナル發展ニ基クモノニシテ、最近、南滿各港ノ貿易額ハ、全滿洲總貿易額ノ九割ヲ占ム。斯ク、南滿、殊ニ大連貿易ノ年ト共ニ殷盛ヲ極ムルニ到リシハ、南滿洲鐵道ノ整備ニ負フ所、最モ多キハ、言ヲ俟タス。加フルニ、一九一四年、歐洲戰爭ノ勃發シテヨリ、東支鐵道ハ、露國ノ軍需輸送ニ追ハレテ、一般貨物ノ運送意ノ如クナラス。後、西比利ノ擾亂トナリ、茲ニ、浦鹽ノ貿易、一時硬塞スルニ及ヒ、北滿ノ特產物ハ、南滿洲鐵道ニ南下スルニ至リタルコト、竝ニ、近年未曾有ノ銀價暴騰ヲ現出スル等、突發的原因ヲ交ヘテ、財界ハ、茲ニ、空前ノ好況ヲ呈シタルトニヨリ、南滿貿易ハ、一層隆盛ヲ見タル次第ナリ。然レトモ、民國創始以來、政變擾亂續出セルト、南方支那ニ於ケル災厄ノ發生、及ヒ、各地盜匪ノ出沒アリ、殊ニ、時局以來、內外船車ノ缺乏、運賃ノ暴騰、流入露貨ノ崩落、內外諸國ニ於ケル貿易制限、銀價ノ續騰、及、現銀ノ缺乏、地方金融ノ硬塞ニ伴フ支那銀行ノ兌換停止、歐洲交戰與國ニ於ケル生產減少、竝、價格ノ騰貴等、消極的原因ノ偶發セシモノ、又尠カラサリシヲ以テ、開戰後ノ滿洲貿易ハ、最モ大ナル波瀾狀態ヲ演出セリ。平和克復後ノ今日、世界ハ、再、生產組織ノ回復

ヲ見タルヲ以テ、滿洲カ、從來獲得シタル世界貿易上ノ地位ハ、依然何等ノ動搖ヲ見サルヘク、殊ニ、原料輸出地トシテノ地位ハ、印度ト併行スル地位ニ在ルモノナリ。唯近時ノ貿易ハ、次第ニ、原料ヨリ製品ニ推移スル傾向アルカ故ニ、滿洲ハ、此點ニツキ、何程ノ程度迄、工業化シ得ルヤハ、將來ヲマチテ論スヘキ問題ナリ。

最近八年間ノ對外國輸出入額ハ一三六、〇〇〇、〇〇〇兩ヨリ三一四、〇〇〇、〇〇〇兩ニ卽チ二倍三分ヲ增加シ、又、對支那各港輸出入額ハ九〇、四六〇、〇〇〇兩ヨリ一二五、〇〇〇、〇〇〇兩ニ、卽チ、約四割ノ增加ヲ告ケタリ。

滿洲對外國及支那各港貿易額 （單位一、〇〇〇海關兩）

年次	對外國貿易額			對支那各港貿易額		
	輸入	輸出	計	輸入	輸出	計
一九一三年	四二、六八〇	四五、四三五	八八、一一五	三五、五八八	三六、六八七	七二、二七四
一九一四年	四九、三七三	四八、六一三	九七、九八六	三二、八一四	三〇、四六五	六三、二八〇
一九一五年	四三、一六一	四八、三一九	九一、四七九	四三、一四六	四七、四五三	九〇、五九九
一九一六年	五六、七六九	四九、七五九	一〇六、五二八	四一、二〇一	三四、七四九	七五、九五〇
一九一七年	九一、六四三	六六、〇二七	一五七、六七〇	四七、三六〇	三九、三一五	八六、六七五
一九一八年	九三、四八九	一〇一、六三六	一九五、一二五	五八、六七二	三八、六六〇	九七、三三二

南滿四

港	一九一九年	一二六、九五五	一四七、八一一	二七四、七六七	七二、一五三	三〇、一三〇	一〇三、二八三
	一九二〇年	一〇九、八五九	一四一、八四三	二五一、七〇一	六三、九七七	四七、一一六	一一一、〇九三
北満洲	一九一三年	二〇、五一〇	二四、九〇三	四五、四一三	一一、九八八	六、一九三	一八、一八二
	一九一四年	一八、三二三	二三、二八五	四一、五九八	一〇、八五一	六、一〇八	一六、九五九
	一九一五年	一三、五五七	二五、〇四一	三八、五九九	七、四七九	八、八九九	一六、三七七
	一九一六年	二三、二九五	三七、二九八	六〇、五九四	七、三三〇	八、二七九	一五、六〇九
	一九一七年	八、八三七	四七、〇八一	五五、九一八	九、四四一	七、三九五	一六、八三六
	一九一八年	五、三六〇	一五、五一一	二〇、八七一	一七、五三〇	九、二〇二	二六、七三三
	一九一九年	一三、〇六〇	二五、七一一	三八、七七一	一六、一七九	六、七六二	二二、九四二
	一九二〇年	八、一八八	二四、二八三	三一、四七一	二〇、八七四	一一、八七八	三二、七五二
計	一九一三年	六三、一九〇	七〇、三三八	一三三、五二七	四七、五七六	四二、八七九	九〇、四五五
	一九一四年	六七、六八六	七一、八九八	一五九、五八四	四三、六六六	三六、五七四	八〇、二三九
	一九一五年	五六、七一八	七三、三六〇	一三〇、〇七八	五〇、六二五	五六、三五一	一〇六、九七六
	一九一六年	八〇、〇六四	八七、〇五八	一六七、一二一	四八、五三三	四三、〇二八	九一、五七九
	一九一七年	一〇〇、四八〇	一一三、一〇八	二一三、五八八	五六、八〇一	四六、七一〇	一〇三、五一一
	一九一八年	九八、八四八	一一七、一四八	二一五、九九六	七六、二〇二	四七、八六二	一二四、〇六四
	一九一九年	一四〇、〇一五	一七三、五三三	三一三、五三七	八八、三三二	三六、八九二	一三五、三三四
	一九二〇年	一二八、〇四七	一六六、一二五	二八四、一七二	八四、八五一	五八、九九四	一四三、八四五

(ニ) 全支那貿易ニ對スル滿洲貿易ノ地位

而シテ、其ノ全支那外國貿易ニ對スル地位ヲ觀察スルニ、一九一九年中ノ滿洲外國貿易ハ、輸出一七四、〇〇〇、〇〇〇兩、輸入一四〇、〇〇〇、〇〇〇兩計三一四、〇〇〇、〇〇〇兩ニシテ、之ヲ同年中ノ、支那各海關外國貿易額一、二七八、〇〇〇、〇〇〇兩ニ比スレハ、約二十五%ニ相當シ、之ヲ一九〇八年ノ一割一分ニ比スレハ、著シク、地位ノ向上セルヲ見ルヘシ。


(ホ) 滿洲貿易ニ於ケル大連貿易ノ地位

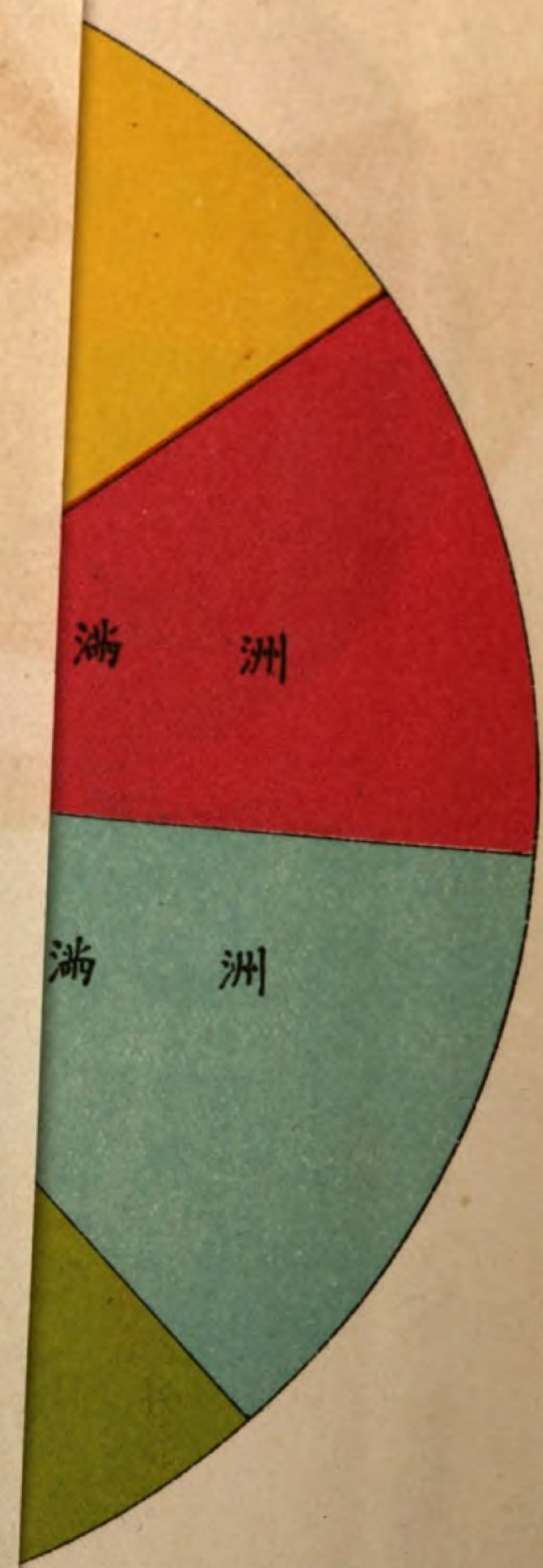
殊ニ、大連港ノ如キ、一九一八年ニ於テ、其ノ外國貿易額ハ、一五〇、〇〇〇、〇〇〇兩ノ巨額ニ上リ、滿洲全外國貿易額ノ七割ヲ占メ、先進諸港ヲ拔キテ、支那貿易港中ノ第二位ニ進ミ、第一位ノ上海ニ比スレハ、尙遜色アルヲ免レサルモ、其ノ隆々タル勢ハ、終ニ天津ヲシテ、後ヘニ瞠若タラシムルニ至レリ。隨テ、滿洲貿易近時ノ發展ハ、主トシテ、大連港ノ膨脹ニ職由スルコト明カナリ。

而シテ、大連貿易ノ膨脹ハ、又、對日本貿易ノ進歩ニ負フ所、頗ル大ナルモノアリ。

(ヘ) 滿洲貿易ノ對手國別

次ニ、滿洲貿易ヲ、相手輸出入國別ニ就キ觀察ヲ下セハ、北滿貿易ハ、主トシテ露國


1.920年輸出入國別貿易額
輸入
輸出
計
日本
那
亜米利加
香港
朝鮮
一九一三年
一九一四年
一九一五年
一九一六年
一九一七年
一九一八年
一九一九年
一九二〇年
5000 万両
1,0000
1,5000


滿 洲
滿 洲



入額ノ満洲
対スル割合

トノ輸出入關係ヲ有シ、從テ、現在ハ、露國ノ擾亂ニ依リ、極メテ不振ノ狀態ニ在リ。之ニ反シ、南滿・貿易ハ、主トシテ日本ト關連スルハ、注目ニ値ヒスヘシ。

南滿洲四港輸出入價額國別

（單位海關兩）

		一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
輸入	日本	二九、七七五、〇八九	三二、三三〇、六八二	三〇、六四三、一九〇	四三、七四二、三四五	七二、〇七四、六六九	六九、四五一、七三九	九二、〇五八、一六三	八二、三八五、一二七
	朝鮮	二、一六五、六一八	二、五八三、三七四	二、九四九、二一八	四、一四五、八九七	五、二六四、一八〇	四、九三四、〇七三	五、三三八、五六八	五、八九四、〇八六
	支那	三五、五八七、八九八	三二、八一四、三〇二	四三、一四六、二四五	四一、二〇一、二〇三	四七、三六〇、四一四	五八、六七二、二三八	七二、一五三、一〇八	六三、九七六、九三九
	香港	二、三七九、九二三	二、五〇三、四一九	二、六六三、五二七	三、五五一、七一〇	四、一五七、一九五	四、六三九、五〇九	三、三二三、二四〇	四、四一五、一二三
	歐羅巴	四、七六四、五三九	四、九一八、五二七	一、〇一五、六六五	一、二七三、二〇九	一、三六二、五七八	七九九、五四〇	二、五五〇、八二〇	二、四七一、八三〇
	亞米利加	二、五〇三、五四〇	五、〇三九、〇一七	二、六四三、四一六	二、四七八、六五五	六、一一〇、六二三	三、一六一、七六八	一九、九一三、三一四	二二、七九九、六四〇
	其他	一、〇九二、三九五	二、二〇八、四三五	三、二四五、一三四	一、五七七、七九五	二、六七三、四〇八	一、五〇二、〇〇三	三、八六二、二四九	一、八九〇、五四八
	計	七八、二六七、九九九	八二、一八七、七五六	八六、三〇七、〇〇五	九七、九六九、八一四	一三九、〇〇三、〇四七	一五三、一六〇、八六〇	一九九、一〇八、四六二	一七三、八三六、二九三
輸出	日本	三五、一六六、六八七	三六、四八九、〇七三	三三、四九八、二五五	三三、一二九、三三二	三八、六八八、四四〇	五八、四九一、八三〇	九六、七九二、七四三	八一、二九五、四三五
	朝鮮	四、四二三、四一三	三、二五七、〇三五	五、二六九、三五六	五、一九一、三六三	七、三六五、七八三	一〇、六六三、四八七	一八、二六五、六九二	一九、〇一六、四〇八
	支那	三六、六八六、五四八	三〇、四六五、三八〇	四七、四五二、五八一	三四、七四八、八三一	三九、三一五、〇三四	三八、六五九、八三六	三〇、一三〇、三九〇	四七、一一六、四〇五
	香港	一、五〇〇、〇三七	一、一八四、三七四	一、四九八、七四四	一、二七九、六九〇	一、二一〇、四五一	一、六三七、七一六	九八二、六四八	一、五四〇、一八四
	歐羅巴	二、一七五、二〇六	四、〇〇九、三五〇	四、二六四、〇八四	六、〇七五、〇九五	一、四七二、九八二	八三二、九七五	一一、三八九、一八六	一七、九四七、五五九
	亞米利加	一三二、三〇三	七一一、〇七一	四一五、五四三	二、五五四、二〇九	一五、九二一、六五二	二八、三八六、二〇七	一〇、四一三、五六四	七、〇七一、八〇四
	其他	二、二二九、二七一	二、九六一、九九四	三、三二七、二二七	二、五三九、三九六	一、一六八、七八五	一、六三六、一三六	九、九六七、四六四	一四、九七〇、五一三
	計	八二、三一三、四六四	七九、〇七八、三三七	九五、七一二、二九〇	八四、五〇七、九一六	一〇五、三四二、一二七	一四〇、二九六、一一七	一七七、九四一、六八七	一八八、九五八、三〇八

（ト）南滿貿易主要輸出入品價額

尚南滿貿易ニ於ケル主要輸出入品貿易價額ヲ示セハ次ノ如シ。

主要輸出品價額

（單位千兩）

	一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
大豆	一〇、九一四	一五、七四二	一七、一九〇	二一、三七一	九、六六五	一五、一九四	二九、五〇八	二八、三〇六
小麥	—	—	—	三七〇	四四四	一、三七一	二、九三三	三三、七五四
玉蜀黍	六五七	一、三〇一	一、九六四	六七一	一、五八〇	一、六五九	一、[illegible]三五	二、一五[illegible]
高粱	三、三〇五	一、〇九一	二、九三八	一、八二二	五、六二九	五、七二八	一、九五七	五、七四四
雜穀及種子	六、二四三	四、六六四	四、二八二	三、六四一	五、一九八	六、一九七	一五、五三四	一五、一三五
豆粕	二九、三七八	二四、六七六	二八、九六四	三三、九四七	二九、二九三	三六、四七一	四八、一四七	四八、五七八
豆油	七、三五二	七、七二九	八、九九四	一〇、六八一	一八、三四二	二五、六二三	二〇、二二二	一七、八四八
繭	一、六七九	一、〇四五	二、四八[illegible]	一、五五九	二、〇七〇	三、〇八九	二、七〇六	二、一一九
柞蠶絲	四、〇七二	二、四三五	四、四〇八	二、六一九	四、五九七	五、七四〇	六、六九七	六、一九四
木材	一、三六七	一、八五一	二、九一一	三、七一八	一、五二九	二、二〇九	二、八九二	三、一七四
金屬及金物	一六二	一九八	一、〇四五	三、五四一	二、九四三	四、四六一	五、〇一五	二、〇三六
石炭及コークス	六、五七九	七、五〇二	五、五九三	五、二五八	四、五九四	五、四九〇	三、七四四	七、〇〇七
雜品	一〇、四一三	一〇、八四四	一四、九九三	一六、三二一	一九、四五八	二七、〇七五	三七、〇六二	二七、九〇九

計	八二、一三一	七九、〇七八	九五、七七一	八四、五〇八	一〇九、三四二	一四〇、二九六	一七七、九四二	一八八、九五八

主要輸入品額價格額 （單位千兩）

	一九一三年	一九一四年	一九一五年	一九一六年	一九一七年	一九一八年	一九一九學	一九二〇年
綿織物	二三、七〇六	二二、九七七	二四、一三九	二一、九六三	二九、四九一	三五、五一八	五四、〇六八	五〇、〇八〇
雜織物	三、三八〇	二、六五六	四、〇九〇	三、四五三	七、二三七	五、九一九	八、三四九	六、五二〇
綿絲	四、六二七	五、六二三	四、八〇九	五、〇七三	七、六〇九	八、八九〇	一四、一六四	一三、七一七
煙草	二、四六三	一、九九三	三、五八六	五、二九六	六、七四一	六、二三九	七、二五三	七、三三一
家具	三〇〇	三六三	二六八	四六二	六四四	七一三	一、一五八	一、二二六
石油	二、三三九	二、七五三	二、一三〇	二、五四七	四、四一四	二、三六六	五、二七九	四、九〇九
金屬及金物	四、〇一七	四、一七六	三、六八六	六、五八五	一〇、七三〇	一五、二一六	一五、二五七	一一、六七五
機械及器具	一、三二六	一、九二二	一、一五三	一、三九五	二、六七八	五、一七五	一〇、七二五	六、八八〇
麻袋及袋物	一、五四五	一、七七七	三、三一〇	二、〇二五	四、一五七	二、七一〇	五、六九三	五、九二五
雜品	三四、五六五	三七、九六一	三九、一三六	四九、一七一	六五、三〇二	六九、四一五	七七、一六二	六五、五七三
計	七八、二六八	八二、一八八	八六、三〇七	九七、九七〇	一三九、〇〇三	一五二、一六一	一九九、一〇八	一七三、八三六

二、日本トノ貿易

(イ) 日滿貿易

滿洲對日本ノ貿易ハ、日露戰爭以後、急速ノ發達ヲ示シタルコト、既ニ屢述シタル所ノ如シ今試ニ、南滿四港ノ日本ニ對スル貿易ヲ見ルニ、一九〇七年ニ於テ、輸出入合計四三、四一〇、〇〇〇兩ナリシモノカ、一九一七年ニ至リテ、一躍一一〇、九六〇、〇〇〇兩ニ上リ、其ノ間二倍六分ニ增加シ、更ニ一九一九年ニハ、一八九、〇〇〇、〇〇〇兩ニ達セシカ、一九二〇年ニ及ヒ、世界的ノ不景氣ニ際會シ、稍減少ヲ來シタルモ、尙一六四、〇〇〇、〇〇〇兩ノ巨額ナリ。

更ニ、輸出入ニ分チ、之ヲ示セハ次ノ如シ。

南滿四港對日本輸出入額

（單位一、〇〇〇海關兩）

年次	大連 輸出	大連 輸入	大連 計	牛莊 輸出	牛莊 輸入	牛莊 計	安東及大東溝 輸出	安東及大東溝 輸入	安東及大東溝 計	合計 輸出	合計 輸入	合計 計
一九一〇年	一一、九二八	一三、四七一	二五、三九九	一〇、〇六九	四、三九七	一四、四六六	六五八	二、八九五	三、五五三	二二、六五六	二〇、七六三	四三、四二〇
一九一一年	一九、七〇三	一八、四四三	三八、一四六	一〇、三三一	四、九八七	一五、三一八	一、六一七	一、九六七	三、五八四	三一、六五二	二五、三九七	五七、〇四八
一九一二年	一七、一一三	一九、三三五	三六、四三七	七、九五六	三、九六一	一一、九一七	一、六六五	二、三四六	四、〇一一	二六、七三四	二五、六四二	五二、三七六
一九一三年	二四、五二〇	二一、七九一	四六、三〇一	九、一六〇	三、一三九	一二、二九九	一、四九七	四、八四五	六、三四二	三五、一六七	二九、七七五	六四、九四二

一九一四年	二八、九八七	一七、三〇六	四六、二九三	五、八三四	三、六八六	九、五三〇	一、六六七	一一、三三八	一三、九九五	三六、四八八	三三、三三〇	六八、八〇八
一九一五年	二七、二七七	一七、四七九	四四、七五六	四、五〇四	二、〇八五	六、五八九	一、七一七	一一、〇七九	一二、七九六	三三、四九八	三〇、六四三	六四、一四一
一九一六年	二五、七五五	二五、六六一	五一、四一六	三、八九〇	二、六四九	六、五三九	二、四八四	一五、四三二	一七、九一六	三二、一二九	四三、七四二	七五、八七一
一九一七年	三一、一五六	四四、二五五	七五、四一一	二、四八八	二、六一六	五、一〇四	五、二四五	二五、二〇三	三〇、四四八	三八、八八九	七二、〇七四	一一〇、九六三
一九一八年	四九、五七〇	四八、三〇〇	九七、八七〇	三、九〇三	二、五四〇	六、四四三	五、〇一九	一八、六一三	二三、六三二	五八、四九二	六九、四五三	一二七、九四四
一九一九年	七八、三四八	六一、四七〇	一三九、八一八	八、九六一	三、四四八	一二、四〇九	九、四八三	二七、一四一	三六、六二四	九六、七九二	九二、〇五九	一八八、八五一
一九二〇年	七二、二三〇	五一、六六四	一二三、八八四	二、一五三	三、五〇〇	五、六五三	六、九二九	二七、二一八	三四、一四七	八一、三〇一	八二、三八二	一六三、六八三

(ロ) 日滿貿易ノ趨勢

一九一〇年以降、十一年間ニ、輸入ハ二〇、七六〇、〇〇〇兩ヨリ八二、三八〇、〇〇〇兩ニ上リテ、約三十割ヲ增加シ、輸出ハ二二、六六〇、〇〇〇兩ヨリ八一、三〇〇、〇〇〇兩トナリテ、約二十五割ヲ增加セリ。其ノ間ノ經過ヲ檢按スルニ、輸入超過ヲ現出シタルコトアレトモ、思フニ、日滿貿易ニ在リテハ、大豆、豆粕ノ如キ、原生品乃至粗製品ヲ日本ニ輸出シ、綿絲布、金屬製品ノ如キ、製造品ヲ、日本ニ仰クノ狀態ニ在ルヲ以テ斯ク、輸入超過ヲ現出スルニ至リタルモノニシテ、畢竟、日本人ノ、滿洲ニ於ケル經濟的勢力、近時益確立セラレ、關東州及滿洲線沿線ヲ中心トスル、各種企業ノ勃興、特產物市場ノ活躍ニ基ク、滿洲財界ノ好況、竝、一般購買力ノ增加等、相俟ッテ、輸入貿易ノ

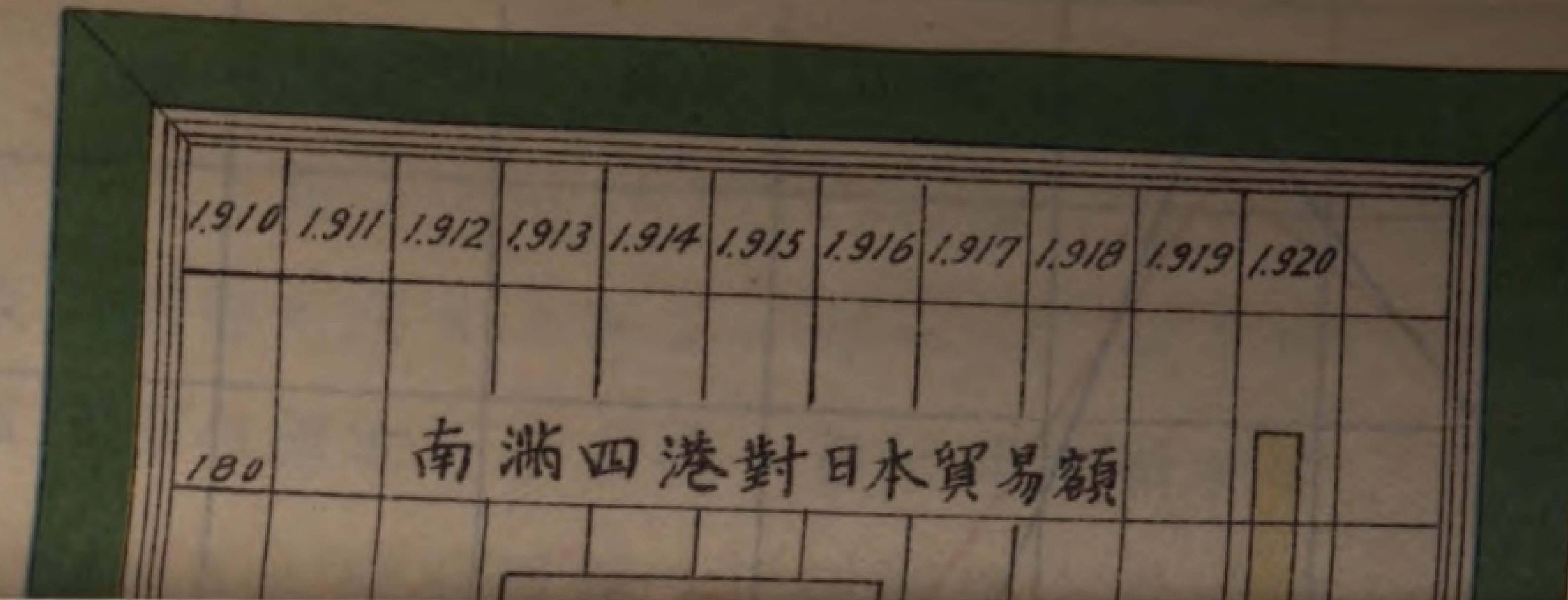
旺盛ヲ、促カスニ至リタルモノト云フヘシ殊ニ、戰亂勃發以來、歐米諸國ヨリノ輸入品ハ、悉ク日本商品之ニ代リ、茲ニ、對日本貿易關係ニ於テ、巨額ノ輸入超過ヲ示スニ至レルモノナリ。而シテ、一九一九年ニ於ケル輸出超過ハ、日本內地ニ於ケル、豆粕ノ需要激增ニ職由スルモノナリ。且近時、日本內地ニ於ケル、各種製造工業ノ發達ハ、益滿洲生產原料品ノ需要ヲ、喚起シ得ヘキカ故ニ假令、一九二〇年ノ如ク、一般經濟界ノ不景氣ノ爲、一時減退ヲ見ルノ止ムナカリシモ、將來、日滿貿易ノ益發展スヘキハ、逆睹スルニ難カラス。


(ハ) 貿易徑路ノ變遷


茲ニ最モ注目スヘキハ、之等貿易徑路ノ變遷ナリ。日露戰爭後、安奉鐵道ハ、政府ヨリ南滿洲鐵道株式會社ニ引繼カルルト共ニ、在來ノ輕軌式ヲ標準軌間式ニ改築シ、次テ、鴨綠江ノ架橋竣成シ、同時ニ、南滿洲鐵道ノ他ノ本枝線モ、夫々改良工事ヲ竣リ朝鮮鐵道トノ聯絡輸送開始セラレタリ。越ヘテ、一九一三年六月、滿鮮國境貿易ハ、關稅三分ノ一ヲ低減セラレ、且、一九一四年五月、日本內地國有鐵道、朝鮮鐵道、南滿洲鐵道ノ、所謂三線聯絡輸送貨物中、綿織物外十品ヲ限リ、運賃三割減ヲ實施スルニ及ヒ、安東經由輸入貿易ハ、俄然激增ヲ告ケ、同港ノ輸入貿易ハ、一九一〇年以降一九一二

南滿四港主要貿易品價額








1,910
1,911
1,912
1,913
1,914
1,915
1,916
1,917
1,918
1,919
1,920
輸出
輸入
千萬圓
1
2
3
4
5
6
7
8
9



年ニ至ル三箇年ハ、二、〇〇〇、〇〇〇兩內外ヲ算スルニ過キサリシモノ、一九一二年、前記國境關稅低減ノ實施ニ伴ヒ、五、〇〇〇、〇〇〇兩ニ增進シ、更ニ、一九一四年、特殊輸入貨物ニ對スル特定運賃制度ノ採用ト共ニ、一躍一一、三〇〇、〇〇〇兩ニ、卽チ前年ニ比シ、二倍三分、前々年ニ比シ、四倍八分ノ激增ヲ示スニ至レリ。次イテ、一九一五年一一月、安東經由ノ、內地及滿洲間直通貨物中、金物外二十一品ノ輸入品、竝、豚毛外六品ノ輸出品ニ對シ、新ニ特定割引運賃ヲ設ケタリ。卽チ、從來ノ特定運賃ハ、輸入品ニ止マリシヲ、更ニ、之ヲ、特殊輸出品ニ擴張セル結果、適用品種ノ擴張ト相俟チテ、內地對滿洲貿易ノ發達ニ資スルコト、極メテ大ナルモノアリ。卽チ、翌一九一七年ニ於ケル、安東經由貨物ハ、輸出入共ニ異常ノ膨脹ヲ示シ、輸入ハ二五、二〇〇、〇〇〇兩ニ、輸出亦五、二五〇、〇〇〇兩ニ增進スルニ至レリ。之ヲ、國境關稅低減、及、特定運賃實施以前ノ、一九一二年ノ輸出入合計四、〇〇〇、〇〇〇兩ナリシニ比スレハ、其ノ間約八倍ニ上リタリ。

(二) 日本ノ貿易統計ヨリ觀タル日滿貿易

以上ハ、專ラ、支那海關報告、竝、北支那貿易年報ニ基キ、滿洲ノ對日本貿易ヲ觀察シタルモノナルカ尙、日本ニ於ケル、大藏省ノ貿易年報ニ依リ、其ノ日本內地ヨリ觀タ

ル滿洲輸出入額ヲ一言スヘシ。即チ一九一三年以降一九一九年ニ至ル七箇年間ニ於テ、日本ノ滿洲ニ對スル輸出ハ三九、二四〇、〇〇〇圓ヨリ二一八、〇〇〇、〇〇〇圓ニ即チ五倍五分ニ增加シ、滿洲ヨリ日本ヘノ輸入ハ四五、五〇〇、〇〇〇圓ヨリ二一三、五〇〇、〇〇〇圓ニ、即チ四倍六分ニ增加セリ。日本ノ對滿輸出ノ增加ハ、同輸入ヲ遙ニ凌駕セルコト、並、一九一五年以前ノ貿易差額ハ、常ニ滿洲ヨリノ輸入超過ヲ繼續セシニ、一九一六年以後ハ、年々滿洲ヘ、巨額ノ輸出超過ヲ見ルニ至リシコトハ、前述セル所ト、全ク符合セルハ、固ヨリ其ノ處ナリトス。

日本ヨリ滿洲ヘノ輸出品中、其ノ首位ヲ占ムルハ、各種綿絲布類ニシテ、一九一九年中、滿洲ニ對スル輸出ハ、九九、二〇〇、〇〇〇圓ノ巨額ニ上リ、日本ノ對滿輸出額ノ四割六分ヲ占ム。尙、各種綿製品中、從來需要ノ多カリシ粗布ノ外、時局中ニ於ケル、獨逸品ノ供給杜絶、及、英米品ノ出廻リ減少ノ爲、日本製品タル綾木綿、其ノ他ノ織布類、綿製莫大小類ノ、新需要旺盛ヲ極メ、其ノ結果、最近五六年間ニ、一躍十五割以上ノ急進ヲ告クルニ至レリ。又、近來、關東州、並、南滿洲鐵道沿線地方ニ於ケル、企業ノ興隆ト共ニ各種企業用品ノ、日本ヨリ入ルモノ次第ニ多ク、機械類ノ如キ、戰前ニ比シ、十一倍ノ躍進ヲ示セリ。其ノ他、北滿方面ニ於テ、新ニ市場ヲ開拓セルモノニ、精糖、淸酒、革

製品、窓硝子等ノ諸品アリ、

就中、精糖ハ、戰前ニ比シ、約十六割ヲ增加シ、鐵製品、亦、十七倍ノ激增ヲ告ケ、其ノ他、琺瑯鐵器ノ如キモ、前途頗ル有望ノ形勢ニ在リ。

次ニ、日本ヨリ滿洲ヘノ輸入品中、主ナルモノハ、大豆豆粕、柞蠶絲、豆油、雜穀、石炭ノ如キ原料品、又ハ、原料用ノ粗製品ナリ、就中、大豆ハ、一九一九年ニ於テ二七、〇〇〇、〇〇〇〇圓、豆粕ハ、一〇〇、〇〇〇、〇〇〇圓ヲ突破シ、貿易品中ノ大宗ニシテ、戰前ニ比シ、何レモ約四倍ニ達ス。惟フニ此ノ狀勢ハ多少戰時ノ特例ニ屬シタルモノナキニアラサルモ概シテ、持續性ヲ有スルモノ多ク、將來、尙發展ノ餘地綽々タルモノアリ。

(ホ) 北滿取引ノ進展

斯クノ如ク、日本內地ト滿洲トノ商取引ハ、極メテ圓滿ナル發達ヲ示シ、南滿鐵道沿線地方ハ勿論、漸次、東支線ノ沿道、奧地方面ニモ、商勢ヲ伸張シ、其ノ關係、頗ル密接ヲ加フルニ至レリ。殊ニ、一九一八年下半期ニ於テ、日本軍ノ西伯利進出ト共ニ、北滿方面ノ秩序、漸ク恢復セラレ、我駐屯軍ニ依テ初メテ安寧ヲ維持セラレテ以來、一時非常ノ硬塞ヲ感シタル商取引モ、逐次緩和ノ狀態トナリ、特產物ノ荷動キヲ見ルニ至リタリ。

(ヘ)

日用雜貨等、日頃缺乏ヲ訴ヘツツアリシ諸物資ノ需要ハ、翕然トシテ日本品ノ上ニ鍾リ新ニ我商權ノ扶植セラレタルモノ、頗ル多ク、日本内地ヨリ、北滿各地ヘ仕向ケラルル商品ノ輸出額、年一年增加ノ傾向ヲ呈スルニ至レリ。惟フニ、東淸沿線ニハ廣漠タル肥沃ノ農業地ヲ有シ、大豆、高粱、小麥、燕麥、粟、包米等ヲ產スル外、貿易品トシテ、木材、生牛、羊毛及小麥粉、各種皮革等ヲ擧クルヲ得ヘク、貿易、人口、都市、村落ノ分布等ヨリ推算シテ、年產少クトモ二五〇、〇〇〇噸以上ニ達シ此ノ價額四五、〇〇〇、〇〇〇圓ヲ下ラサルヘシトノ說ハ、蓋シ眞ニ近キモノナランカ。隨テ東支線ノ利用ハ、北滿開發ト、至大ノ關係アルハ勿論、極東露領方面ノ產業經濟ノ發達ニ伴ヒ、物資ノ需要、益增加スルニ至ルヘキハ明カナリ、

三、朝鮮トノ貿易

(イ)　朝鮮貿易ノ經過

仍テ按スルニ、一八七六年、日韓修好條約ノ締結以來、過去四十有餘年間ニ、釜山、仁川、元山ヲ始メ、前後十箇所ノ貿易港ヲ開放シ、國境貿易ニ關シテハ、淸國及露國政府トノ協約ニ依リテ、彼我ノ通商ヲ認メ來リシカ、日韓併合ト共ニ、陸接國境貿易ノ整

本社引繼前ノ輕鐵



黑坑嶺附近

鷄冠山ノ北方ニ位シ安奉線改築工事ノ一大難處タリ



橋頭附近　安東起點一一四哩ノ地點ニ在リ

理ヲ行ヒ、一九一三年ヨリ、新令ノ實施ヲ見ルニ及ヒ鮮滿貿易ハ、爲ニ、其ノ面目ヲ一新スルニ至レリ。由來、滿洲ハ、朝鮮ト接壤シ、往古ヨリ、交通上特殊ノ情形ヲ有ス。而シテ近時

(1) 安奉線ノ改築
(2) 鴨綠江ノ架橋
(3) 朝鮮ニ於ケル陸接國境關稅制度ノ實施
(4) 鮮滿國境關稅三分ノ一輕減ノ協定
(5) 滿蒙地方ニ於ケル、日本通貨ノ普及、竝、在滿日本側金融機關ノ整備、改善
(6) 東洋拓殖會社ノ對滿蒙進出
(7) 新會縣ノ開通
(8) 北滿及間島地方ニ於ケル朝鮮人ノ活躍

等ニヨリテ、一層經濟的聯絡ノ實現ヲ促進シ、滿鮮貿易關係モ亦、茲ニ、一新生面ヲ劃スルニ至レリ。

(ロ) 貿易成績

今一九一〇年以降ニ於ケル、南滿四港對朝鮮輸出入額ヲ示セハ次ノ如シ。

南滿四港對朝鮮輸出入總額　（單位一、〇〇〇海關兩）

年次	輸出	輸入	合計
一九一〇年	六二四	一、八四三	二、四六七
一九一一年	八八六	二、一七四	三、〇六〇
一九一二年	一、九三六	二、六五六	四、五九二
一九一三年	四、二四二	二、一六七	六、四〇九
一九一四年	三、二五八	二、五八五	五、八四三
一九一五年	五、二六九	二、九四九	八、二一八
一九一六年	五、一九一	四、一四五	九、三三六
一九一七年	七、三六六	五、二六四	一二、六三〇
一九一八年	一〇、六六二	四、九三三	一五、五九五
一九一九年	一八、二六六	五、三三九	二三、六〇五
一九二〇年	一九、〇一六	五、八九四	二四、九一〇

尙之ヵ港別輸出入額ヲ示セハ次ノ如シ。

對朝鮮港別貿易表　（單位一、〇〇〇海關兩）

年次	牛莊			大連			安東及大東溝		
	輸出	輸入	計	輸出	輸入	計	輸出	輸入	計
一九一〇年	二	三六	三八	三四〇	八五八	一、一九八	二八三	九四九	一、二三二
一九一一年	八二	六四	一四六	二八〇	一、二五〇	一、五三〇	五二四	八六〇	一、三八四

一九一二年	五〇	六〇	一一〇	七二七	一、六三六	二、三六三	一、一五九	九六〇	二、一一九
一九一三年	一七	三五	二二	一、六五二	一、〇八三	二、七三五	二、四一三	一、〇四九	三、四六二
一九一四年	二〇七	二二	三八	一、一五一	一、一一〇	二、二六一	一、九〇〇	一、四五四	三、三五四
一九一五年	九一	七	九八	二、五九二	一、三三一	三、八二三	二、五八六	一、七一一	四、二九七
一九一六年	一	四	五	二、六三五	一、八六七	四、五〇二	二、五五五	二、二七四	四、八二九
一九一七年	—	三	三	二、九六八	二、二四四	五、二一三	四、三九八	三、〇一七	七、四一五
一九一八年	—	六	六	三、二四三	二、〇一〇	五、二五三	七、四一九	二、九一七	一〇、三三六
一九一九年	三三	三	三五	五、八一九	一、三一一	七、一三〇	三、三三五	四、〇二五	一六、二五〇
一九二〇年	六〇〇	一	六六一	五、一五五	一、五五〇	六、六五五	一三、二〇一	四、三九三	一七、五九四

卽チ、南滿洲四港ニ於ケル對朝鮮貿易ハ、一九一〇年以降一九二〇年ニ至ル十一箇年間ニ輸入ハ一、八四〇、〇〇〇兩ヨリ五、八九〇、〇〇〇兩ニ、卽チ約三倍シ、輸出ハ六二〇、〇〇〇兩ヨリ一九、〇〇〇、〇〇〇兩ニ、卽チ約三十一倍ノ激增ヲ示セリ。而シテ、鮮滿貿易ノ主ナルモノハ、輸出ニ在リテハ、粟、石炭ヲ首位トシ、高粱、豆粕、木材、煙草、麥粉、包米等、之ニ次ク。又、輸入ニ在リテハ、米ヲ其ノ大宗トシ、綿織物、木材、水產物、皮革類、煙草等、之ニ次ク。

今、一九二〇年ニ於ケル、主要輸出入品價額ヲ示セハ、次ノ如シ。

一九二〇年南滿四港對朝鮮主要輸出入品價額

（單位 一、〇〇〇海關兩）

輸出品	
粟	六、〇六四（千海關兩）
石炭及コークス	三、六七一
高粱	一、四六一
豆粕	一、一〇六
木材	八六五
煙草	四六〇
麥粉	三八五
包米	三五四
輸入品	
米	一、一九二（千海關兩）
綿織物	八四〇
木材	六五五
水產物	四〇八
皮革	三三六
煙草	三二四

四、露國トノ貿易

（イ） 露支關係

露支ノ交渉ハ、尼布楚條約ニ初マル。時ニ、西紀一六八九年ニシテ、露國ノ西伯利經營ニ依リ、滿蒙ノ邊境、漸ク多事トナレリ。次テ、西紀一七二八年恰克圖條約ヲ締結シ、恰克圖ヲ以テ、清露兩國ノ互市場トナシ、更ニ愛琿條約ニ及ヘリ。同條約ノ要旨ハ

(1) 黑龍江左岸一帶ノ地ヲ、露領トシ

(2) 右岸ノ全土ハ、烏蘇里江ニ至ル迄ヲ、淸領トシ

(3) 烏蘇里江東韃靼海岸ニ至ル地ヲ、露淸兩國ノ雜居地トスルコト

(4) 黑龍江、松花江、烏蘇里江ノ三流ハ、露淸兩國ノ自由航路トスルコト

(5) 前條三流ハ、他國船舶ノ航通ヲ禁スルコト

ト云フニアリ。次テ、北京條約ニ依テ、淸國ヨリ、烏蘇里江東ノ地ヲ、露國ニ割讓セシメ、翌年、其ノ南端ニ、浦鹽斯德港ヲ開ケリ。之レ、實ニ、一八六一年ナリ。

（ロ） 北滿貿易ノ發達

斯ノ如クニシテ、露國ノ南下策ハ、著々實現セラレ、西比利亞鐵道ノ建設トナリ、滿洲及關東州ノ攻略トナリ、大連灣ノ築港トナリテ、之ヲ助クルニ武力ヲ以テスルニ至リタルカ故ニ、終ニ日露ノ衝突ヲ惹起シ、露國敗戰ノ結果、滿洲ニ於ケル勢力ノ一

半ハ、確實ニ帝國ノ占有ニ歸シタリト雖、露國ハ尙東淸鐵道ニ依リテ、北滿一帶ノ勢力ヲ維持シ、且、外蒙古ト結ンテ、鋭意露領亞細亞ノ開拓ニ盡シタレハ、滿蒙トノ貿易關係ハ、比年向上ノ途ヲ辿リタリ。

(ハ) 露國ト北滿

北滿地方ノ開發ニ伴ヒ、哈爾賓ハ、北滿農產物ノ一大集散市場トナリ、浦鹽斯德ハ、北滿大豆ノ輸出ニヨリテ勃興シ、殆ト南滿ノ大連ニ雁行シテ、覇ヲ爭フノ狀ニアリ。然ルニ、歐洲戰亂ノ大波動ニヨリ露國ノ崩潰ヲ見、同國財界ノ秩序破壞スルニ及ヒ、貿易徑路亦一變シテ、日本ノ商務、露國ニ代リテ、北滿及ヒ西伯利ニ擴張スルニ至レリ。

(ニ) 貿易成績

支那稅關ノ統計ニ依ル、最近十箇年間ノ露支貿易額左ノ如シ

露支貿易十年對照 (單位一、〇〇〇海關兩)

年次	輸出			輸入		
	陸路經由	黑龍江各口	太平洋各港	陸路經由	黑龍江各口	太平洋各港

一九〇八年	三、二二五	—	二一、二二九	三、〇三三	—	五、四八七
一九〇九年	四、七八六	三、七二一	二七、〇三三	六、一三二	一七九	八、八五六
一九一〇年	五、〇三〇	九、八〇八	二四、六三三	八八九	二三三	六、〇二四
一九一一年	三、一一四	九、八三二	二九、五八五	九、三四六	四五五	七、三三〇
一九一二年	三、六四〇	一二、二〇四	二五、七〇〇	一二、七八八	四七〇	八、七二二
一九一三年	三、〇九六	七、九六九	二八、八六九	一三、二五八	五一五	九、〇八六
一九一四年	三、九六六	八、三五〇	二六、七八五	一二、三九九	六四一	九、二六七
一九一五年	六、二四六	六、二五三	四二、三四九	六、七九〇	四五三	九、七五四
一九一六年	六、二四六	三、七九〇	三七、〇五七	六、七三五	三一五	一八、五八八
一九一七年	一三、四五八	七、〇八六	二八、七四九	二、九三四	一五四	八、〇九四

(ホ) 對露陸路貿易

由之觀之、滿洲ニ於ケル陸路經由對露貿易ハ、一九〇八年、北滿稅關開始以來十箇年間ニ於テ、輸出ハ約三倍ニ增加セルニ反シ、輸入ハ却テ幾分ノ減退ヲ示セリ。蓋シ、陸路貿易ハ、南滿、東支兩鐵道ヲ主力トシテ行ハルモノニシテ、哈爾賓、滿洲里、綏芬河等ノ各海關地ハ、之カ中心タリ。而シテ、南滿洲、若クハ、南滿洲ヲ通過シテ、日本內地、朝鮮、支那、其ノ他ノ諸外國ヨリ、北滿、殊ニ哈爾賓ニ移出セラルル貨物ノ徑路ハ、大體ニ

於テ、

(1)南滿、東支兩鐵道ニ依ルモノ

(2)支那馬車ニ依ルモノ

(3)松花江ノ舟運ニ依ルモノ

ニ區別セラル。之等三徑路ノ内、鐵道輸送貨物ノ最モ多量ナルハ、自然ノ數ニシテ、南滿、東支聯絡扱ノモノ、及、日滿聯絡扱ノモノ、竝、長春打切貨物ニシテ、同驛ヨリ、更ニ、東支各驛ニ發送スル貨物ノ全部ヲ、包括ス。隨テ、對露貿易ノ大部分ハ、鐵道輸送ニ依リテ行ハルルト見テ、不可ナカルヘシ。

(ヘ) 對露貿易ノ推移

不幸ニシテ、一九一四年夏、歐洲大戰ノ勃發ト共ニ、戰禍東西ニ波及シ、日獨交戰、露國崩潰等、意外ノ障害ヲ亨ケ、大豆、豆油等ノ歐洲輸出ハ、爲ニ一大打撃ヲ蒙リタルノミナラス、戰亂ノ擴大ニ伴ヒ、洋貨需要者タル、在滿露國人ノ引揚ケニ次キ、鐵道輸送ノ硬塞アリ、且ツ歐洲品ノ輸入杜絶スルト共ニ、一時一二、〇〇〇、〇〇〇兩ノ多額ニ上リタル陸路經由輸入貿易額ハ、一九一五年以降、半額ノ六、〇〇〇、〇〇〇兩ニ激減シ、更ニ、一九一七年ニ於テ、三、〇〇〇、〇〇〇兩弱ニ急下シ、最盛時ニ比シテ、僅ニ四分


ノ一ノ小額ヲ維持スルニ過キサルノ狀態トナレリ。由來、哈爾賓、滿洲里、綏芬河ハ、北滿地方ニ於ケル露國商勢ノ本據トシテ、牢固拔クヘカラサルモノアリシカ、歐洲時局發生以來、極東露領方面ニ於ケル、一般物資ノ缺乏、海陸交通ノ閉塞、露貨ノ暴落、各地ノ動亂等、直接間接、對露貿易ニ及ホシタル影響尠カラサルモノアリ。自然、露國商勢上ニ、一大動搖ヲ來タスト共ニ、從來北行セシ滿洲產品ニシテ、東支線ヲ南下スルモノ激增スル等、對露貿易ノ一大變化ヲ齎ラセル爲、前記輸入ノ激減ニ反シテ、輸出ハ、寧ロ、昂進ノ狀態ニ在リ。

（ト） 黑龍江貿易

次ニ、黑龍江各口ニ於ケル、露支貿易ヲ見ルニ、其ノ消長ノ徑路ハ、略ホ、陸路經由ト同一ニシテ輸出入共、戰時中ニ一頓挫ヲ來シタルモ、一九一七年ニ入ルヤ、輸出ハ七、〇八五、〇〇〇兩ニ達シ、前年ニ比シテ、一躍三、二九五、〇〇〇兩ヲ增加スルト共ニ、殆ト、戰前ノ貿易額ヲ恢復セリ。之ニ反シ、輸入ハ更ニ激減シテ、僅ニ、一五四、〇〇〇兩ヲ算スルニ過キス。之ヲ戰前ニ比スレハ、三六一、〇〇〇兩少ク、陸路貿易ニ比シテ、遙カニ實勢ノ劣レルヲ認ム。

（チ） 主要貿易品

今、陸路經由貿易品ノ主ナルモノヲ擧クレハ、石油、油脂、麻袋、紙、食鹽、生果、米、落花生、包蓆、蠟及蠟燭、砂糖、綿織物、茶、鐵製品、陶磁器、牛肉、珈琲、軌條、皮革、紙卷煙草等ナリトス。


輸入品總價額
12,000
10,000
8,000
6,000
4,000
2,000
0両
2,000万
0両
大正八年
〃七年
〃六年
〃五年
〃四年
〃三年
〃二年
〃元年
六年
七年
八年
其他積
支那積



第三編　地方經營

第一章　緒　言

滿洲地方經營ノ事業タルヤ、實ニ我民族ノ經濟的生存ヲ確保スル上ニ於テ重大ナル意義ヲ有スルモノニシテ、我南滿洲鐵道株式會社カ、其ノ一面ニ於テ公法的法人タルノ職責ハ、實ニ茲ニ存シ、文化的機關タルノ期待モ亦、是ニ外ナラサルコトヲ慮リ、業務開始ト共ニ、各種ノ制度ヲ作リ、諸般ノ計畫ヲ立テ、施設ヲ進メ、工事ヲ起シ、爾來十餘年、孜々營々事ニ從ヒ、今ヤ多少經營ノ實ヲ擧クルヲ得、面目ヲ新ニスルヲ得タリ。

會社カ、從來地方經營ノ目的ヲ以テ、土地及各種ノ營造物ノ爲ニ投下セル資金ハ、一九一九年度末迄ニ、約貳千參百餘萬圓ニ上レリ、卽チ左ノ如シ。

市街經營ノ土木工事費	八、七九〇、〇〇〇円
醫院、學校等ノ公共的施設費	七、五五〇、〇〇〇
貸付家屋費	六、一四〇、〇〇〇

第二章　經　營

一、組織

地方經營ノ機關トシテ、當初、從來ヨリ存在セル、居留民會ヲシテ公共事務ヲ處理セシメタリ。會社ハ、政府ノ命令書ニ依リ、一方ニ於テ、附屬地內ニ於ケル、土木、敎育、衞生等ノ施設ヲ爲スヘキ義務ヲ負擔スルト同時ニ、他方ニ於テ、附屬地內ノ居住者ニ對シ、手數料ヲ徵收シ其ノ他費用ノ分賦ヲ爲スヲ得ルノ權能ヲ、賦與セラレタリ。

次ニ附屬地居住者規約ヲ設ケテ、一般ノ歸向スル處ヲ示スト共ニ、從來ノ民會ノ成績ノ擧ラサルニ鑑ミ、地方事務ハ、會社自ラ之ニ當ルコトトシ、本社ハ、地方部ヲ設置シテ、鋭意產業ノ開發ト、住民ノ文化的向上ニ、努力シツツアルモノニシテ、現在、瓦房店以外十箇所ニ、地方事務所ヲ置キ、全附屬地ヲ二十四ノ公費賦課地ニ分ツ。今ヤ全ク、往時ノ陋態ヲ脫シテ、地方ノ風態、ソノ趣ヲ一新スルニ至レルハ、世界人文ノタメ、慶賀至極ト云ハサルヘカラス。

地方經營ノ收支ハ、人口ノ增加及經營ノ進捗ニ伴ヒ、收入漸次增加ヲ示スモ、支出ノ增加、一層著シキヲ以テ、會社ノ補給金亦、從テ增加スルヲ免レス。今從來ニ於ケル收入及會社ノ補給金額ヲ示セハ左ノ如シ。

年度	收入	補給金
一九〇七年	二七、〇〇〇円	八八五円
一九〇八年	一四五、〇〇〇	四一、〇〇〇
一九〇九年	二〇二、〇〇〇	八四、〇〇〇
一九一〇年	二六八、〇〇〇	一五三、〇〇〇
一九一一年	三五〇、〇〇〇	二一八、〇〇〇
一九一二年	四〇六、〇〇〇	二七〇、〇〇〇
一九一三年	七三二、〇〇〇	五四〇、〇〇〇
一九一四年	七三三、〇〇〇	四七三、〇〇〇
一九一五年	七〇八、〇〇〇	四七六、〇〇〇
一九一六年	八五九、〇〇〇	六〇九、〇〇〇
一九一七年	一、〇三八、〇〇〇	七三四、〇〇〇
一九一八年	一、二六三、〇〇〇	八七三、〇〇〇
一九一九年	二、〇一二、〇〇〇	一四七二、〇〇〇
一九二〇年	二、六八二、〇〇〇	二、一四〇、〇〇〇

備考　大正九年度分ハ豫算額ニシテ其ノ他ハ決算額ナリ


二、戸口

附屬地ニ於ケル戸口ハ、經營ノ進捗ニ伴ヒ、逐年增加スルヲ見ル。一九〇八年三月

末ニ於テ、戸數八、六〇〇人口二七、〇〇〇人ニ足ラサリシモ、一九二〇年三月末ニ於テハ戸數三九、〇〇〇、人口一七〇、〇〇〇ニ達シ、十一年間ニ、戸數三〇、〇〇〇、人口一四六、〇〇〇ノ增加ヲ來セルハ、長足ノ進步ト云ハサル可カラス。以テ地方經營カ、健全ナル發達ヲ遂ケツツアルヲ知ルヘシ。

戸口增加ノ狀況ヲ示セハ左ノ如シ。

年度	戸數	人口
一九〇八年	八、六〇〇戸	二六、八〇〇人
一九〇九年	一〇、〇〇〇	三七、七〇〇
一九一〇年	一二、〇〇〇	四二、八〇〇
一九一一年	一五、〇〇〇	五九、三〇〇
一九一二年	一五、〇〇〇	六四、〇〇〇
一九一三年	一七、四〇〇	七四、〇〇〇
一九一四年	二〇、六〇〇	八九、五〇〇
一九一五年	二一、〇〇〇	九〇、〇〇〇
一九一六年	二二、〇〇〇	一〇〇、二〇〇
一九一七年	二四、三〇〇	一一〇、〇〇〇
一九一八年	二九、七〇〇	一三〇、〇〇〇
一九一九年	三三、〇〇〇	一五一、〇〇〇
[illegible]	三九、〇〇〇	一七三、八〇〇

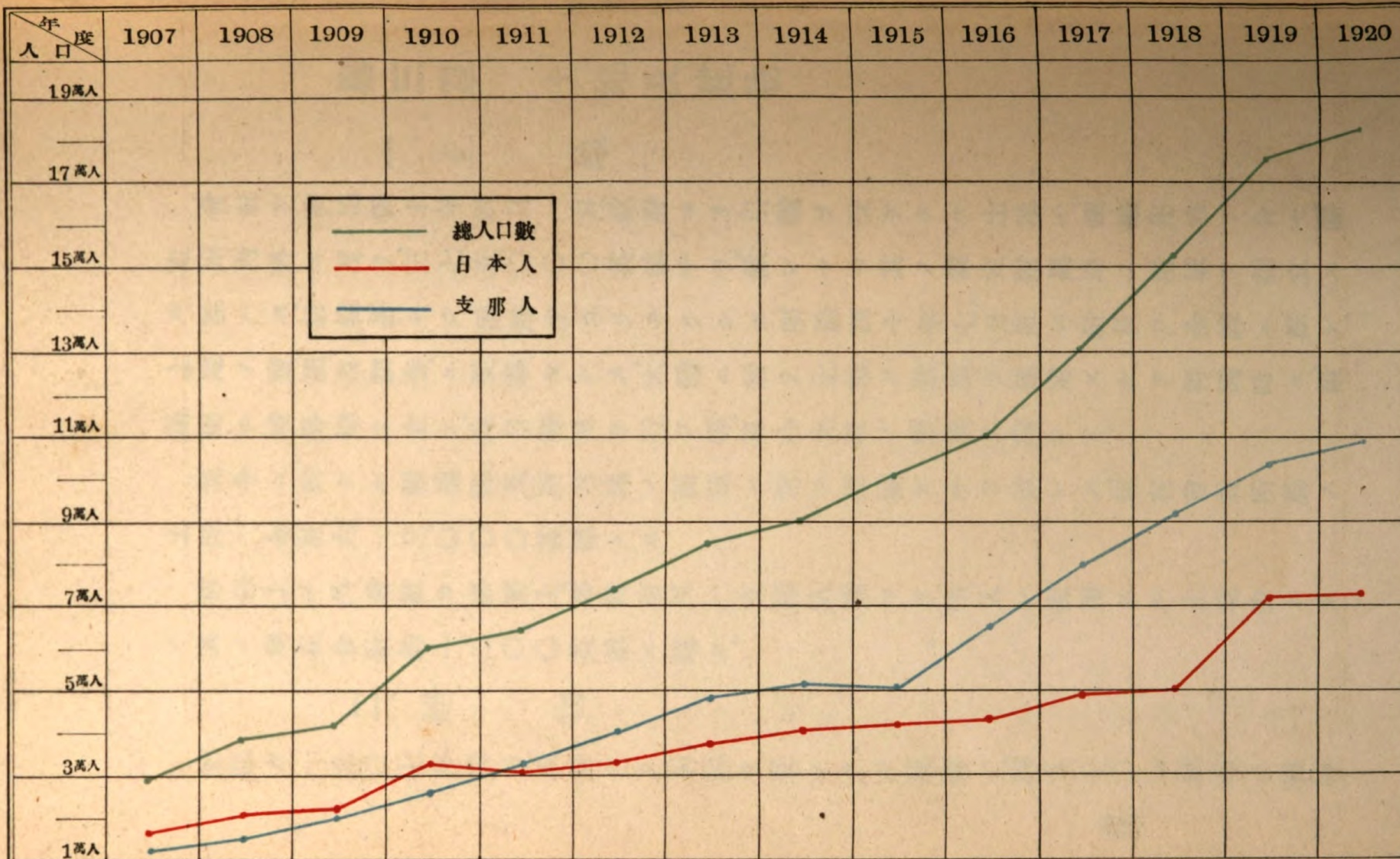


年度
人口
1907
19萬人
17萬人
15萬人
13萬人
11萬人
9萬人
7萬人
5萬人
3萬人
1萬人

末ニ於テ、戸數八、六〇〇人口二七、〇〇〇人ニ足ラサリシモ、一九二〇年三月末ニ於テ、戸數三九、〇〇〇、人口一七〇、〇〇〇ニ達シ、十一年間ニ戸數三〇、〇〇〇、人口一



南滿洲鐵道附屬地人口數



一九二〇年　三九、〇〇〇　一七三、八〇〇

第三章　土地及建物

一、土地

會社カ、明治四十年四月一日、政府ヨリ引繼ヲ受ケタル土地ハ、鐵道用地ヲ合セ、關東州内外ニ亙リ、三七五、〇〇〇英畝ナリ。然レトモ其ノ確定附屬地ノ境域ヲ劃立スル能ハス。紛雜甚シク、困難少カラサリシカ、明治四十年七月直ニ社員ヲ全線ニ派シ、土地ノ實測及調査ニ從事セシメ、大體ニ於テ土地ノ狀態ヲ確定スルヲ得、同時ニ、附屬地ニ境界標ヲ立テ、地目變換ヲ行フ等、專心土地ノ整理ヲ圖レリ。

現今ニ於ケル附屬地及所有地ノ面積ハ、常ニ增減アルヲ免レス。現在會社所屬ノ土地ハ、合計六一三、〇〇〇英畝トス。

尚以上ノ外、會社カ必要上、都督府又ハ支那人等ヨリ、借入レ使用スル土地少カラス。其ノ現在合計約一、二〇〇英畝ニ達ス。

二、建物

會社カ、一九〇七年四月、政府ヨリ引繼ヲ受ケタル建物ハ、約五、〇〇〇棟其ノ敷地

面積一八〇英畝ナリ。然レトモ、當時ニ在リテハ、何等實際ノ狀況ヲ詳ニスルヲ得サリシカ、一九〇七年七月、大體ニ於テ、實際ニ引渡ヲ受クルヤ、社員ヲ全線ニ派シ、土地ト共ニ實地ノ調査ニ從事セシメ、爾來、業務ノ進捗ト共ニ、建物ノ增加著シク、各種營業用諸建物、地方營造物、其ノ他會社所屬ノ一切ノ建物ヲ合算スレハ、一二、五〇〇棟ニシテ、此ノ敷地面積四二〇英畝ニ上ル。

三、土地及建物ノ貸付

土地及建物ハ、會社ニ於テ之ヲ獨占使用スルノ方途ニ出テスシテ、良ク地方ノ開發ト滿洲發展ノ立脚點ヨリ、力メテ之ヲ貸付クルコトトナセリ。

而シテ、土地竝ニ建物ノ如キハ、兎角獨占的傾向ヲ帶フルモノナルカ故ニ、會社ハ、夙ニ此點ニ留意シ、土地ノ貸付ニツキテハ

(イ) 轉貸ヲ防止シ、
(ロ) 耕地ヲ整理シ、
(ハ) 貸付面積ニ限度ヲ定メ、
(ニ) 殊ニ果樹栽培ト水田奬勵

ノ四目的ヲ目安トシテ、貸付事務ヲ行フ。コレ、滿洲人士ヲシテ、洽ク、天然ノ恩澤ニ浴

第四章　市街經營

一、概況

面積一八〇英畝ナリ。然レトモ、當時ニ在リテハ、何等實際ノ狀況ヲ詳ニスルヲ得サリシカ、一九〇七年七月、大體ニ於テ、實際ニ引渡ヲ受クルヤ、社員ヲ全線ニ派シ、土地

一、概況

面積一八〇英畝ナリ。然レトモ、當時ニ在リテハ、何等實際ノ狀況ヲ詳ニスルヲ得サリシカ、一九〇七年七月、大體ニ於テ、實際ニ引渡ヲ受クルヤ、社員ヲ全線ニ派シ、土地

セシメ、滿洲ノ人文ヲシテ、力メテ一般的、普遍的ニ、向上セシメントスル趣旨ニ外ナラサルナリ。

且ツ、賃貸料ノ如キモ、土地ノ地位耕作乃至使用能率ノ如何ニ徴シテ、之ヲ定ム。現今行フ處ヲ示セハ、耕地ヲ一等乃至十等ニ分チ、一箇年一坪(約六フィート平方)八厘以下五毛ヲ納メシメム。

尚、市街ニツキテハ、ソノ效用ヲ全カラシムルタメ、家屋ノ過度ナル密集ヲ防遏シ夫々特定ノ規定ヲ定メテ、ソノ目的ヲ達セムコトヲ計ル。

貸付ハ漸次増加ヲ示シ、一九〇七年度前半期ニ於テ、土地貸付面積約六、一六七英畝、貸付料約二四、〇〇〇圓ナリシモ、一九一九年度ニ於テハ、一三、〇〇〇英畝貸付料三八五、〇〇〇圓ヲ算ス。殊ニ、宅地ノ貸付著シク増加ノ趨勢ヲ來シ、十二箇年半ニシテ、四十六倍强ニ上レルモノ、全ク市街ノ發達經營ノ順調ヲ示スモノナリトス。尚建物ニ在リテハ、一九一九年度ノ貸付、五〇二棟此面積一七英畝餘ニシテ、貸付料八八、〇〇〇圓ナリ。

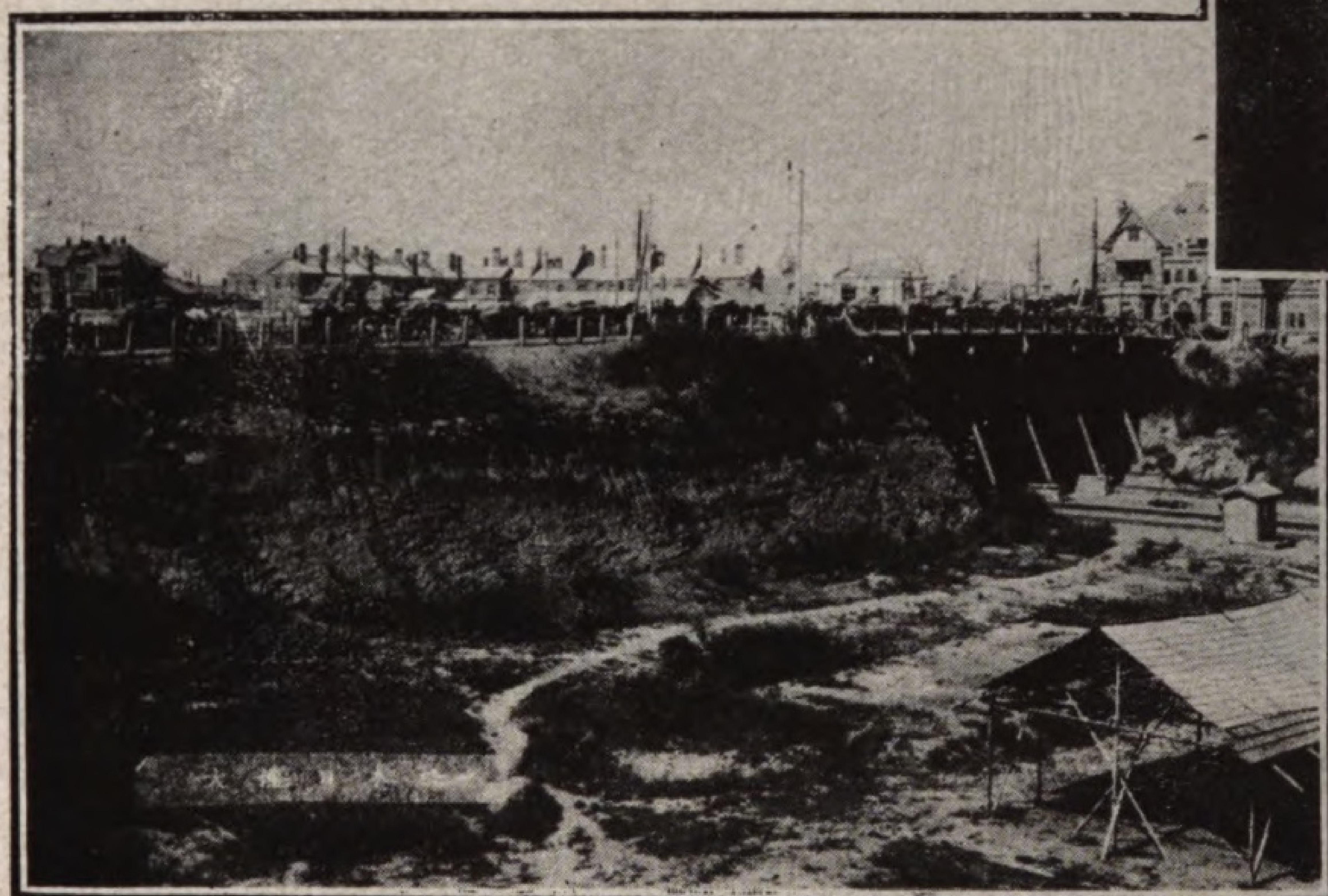
第四章　市街經營

一、概　況

市街經營ハ、地方事業中ノ最重要ナルモノタリ。然リ而シテ、我鐵道ハ南滿洲ヲ貫通シ、蜿蜒七百哩ニ亙ルノ間、停車場所在地ハ、概ネ地積廣ク、市街ヲ經營スルニ足レリ。會社開業當時ニ於ケル、是等附屬地ノ狀況タルヤ、大連ヲ除キ、沿線ニ在リテハ、遼陽、公主嶺ノ如キ、其ノ局部稍市街ノ體裁ヲ具ヘタルモノナキニアラサリシモ、尙蕞爾タル一小聚ニ過キス。其ノ他ハ、多少ノ露式家屋ノ各所ニ點々タルアルノミ。道路ノ修築セラレタルナク、排水ノ設備亦備ハラス。一陣ノ朔風ハ晦冥沙塵ヲ捲キ一朝ノ降雨ハ泥濘馬脚ヲ沒シ殆ト交通ノ途ヲ絕チ居住ノ便ヲ缺ケリ。會社ハ、早ク既ニ、重要ナル附屬地ニ、文明的市街ヲ建設スルノ大方針ヲ決シ、業務開始ト共ニ、先ツ市街區劃ヲ立ツルヲ以テ急務ナリト認メ、十五ノ樞要地ヲ選ヒ、之カ實測ヲ遂ケ、市街區劃ヲ立テ、設計ノ大小、施設ノ精粗、取捨按排屢々變改ヲ免レサリシモ、一九〇七年後半期ニ入ルニ迨ヒ、大體ノ確定ヲ見ルニ至レリ。而シテ、所謂市街經營トハ、市區ノ區劃ヲ始トシ、道路、堤防、護岸、橋梁、溝渠等ノ築造、水道、下水、公園、市場、墓地、火葬場、便所屠畜場等ノ設備、其ノ他街衢ノ施設、宅地ノ修築等市街ニ屬スル一切ノ工事ヲ包含シ、緩急ヲ圖リ、前後ヲ覈ヘ、其ノ施設ヲ進行セシメ、今ヤ、沿線到ル處、往時ノ遺影ヲ認メス。



大連新日本橋



大連舊日本橋附近
一九〇七年時代

大連市街（其三）



大山通



奥町通



監部通

奉天及鐵嶺



現今ノ奉天城内



現今ノ奉天新市街

奉天ハ南滿線、京奉線、安奉線ノ聯絡地ニシテ中部滿洲ノ樞要地點ナリ



現今ノ鐵嶺城內

且ツ、市街經營ト同時ニ、學校及病院ヲ建設シ、地方住民カ、ヨク心神及肉體上ノ幸福ヲ享有スルニ至レルハ、全ク此ノ點ニ職由セスンハアラス、爾來、專心刻苦疆域ヲ拓キ畚築ヲ進メ、現ニ市區ノ設計ヲ畫立シタルモノ、本線ノ沿線四十八箇所、及撫順竝安奉線主要驛所在地ニシテ、既ニ目下必要ナル部分ノ道路溝渠等ヲ竣工シ、一九一九年度末迄ニ、地方營造物ヲ除キ、市街經營ニ費ス所、八百七拾八萬六千圓ニ達ス。

二、附屬地市街

本邦カ、南滿線ノ承繼ヲ爲シタル當時ハ、大連ヲ初メ沿線各地ハ、唯見ル廣茫ノ原野タルニ過キサリシカ、本社カ、委任ヲ受ケテ都市經營ヲナスニ及ムテ、各種ノ文化機關ヲ設置シ、諸般ノ文明施設ヲ企テタルニヨリ、今ヤ沿線各驛ヲ初メ、ソノ附屬地一帶ハ、悉ク歐米都市ノ態樣ヲ備フルニ至レリ。本社ノ都市經營ヲ企ツルヤ、先ツ停車場ヲ中心トシテ、道路市區ノ配置ヲ爲スト共ニ、衛生、敎育、娯樂ノ機關ヲ併置シタリ、殊ニ大連ノ如キハ、殆ト總テノ設備ヲ完成シ、海外連絡タル埠頭設備ノ完全ト相俟ツテ、歐米都市ト比シ、殆ト遜色ヲ見サル程ナリ。

尙之ヲ地方附屬地ニ就キ、之ヲ見ル時ハ、京奉、安東、南滿本線ノ連絡地タル奉天、南

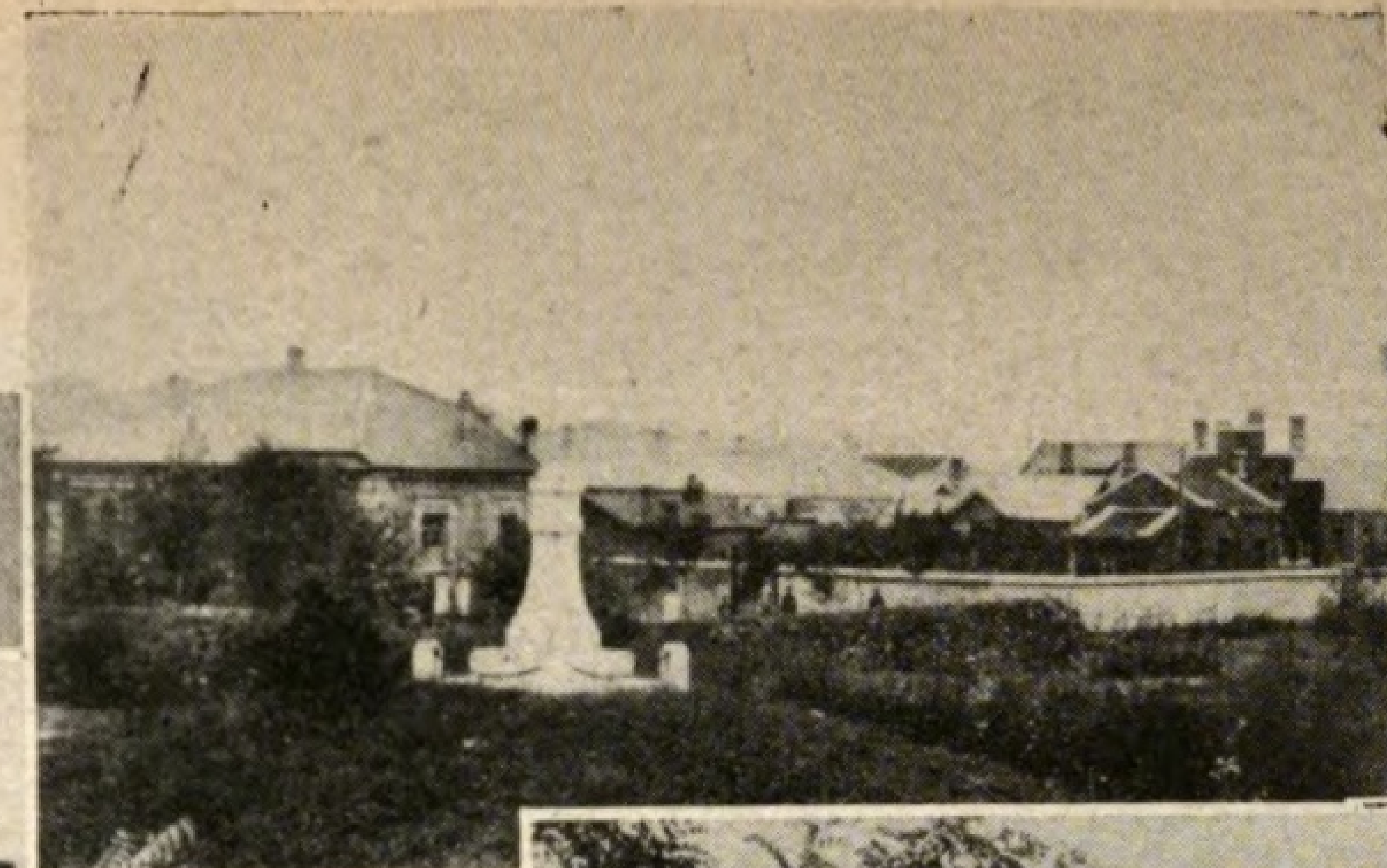
滿線ノ日露連絡地點タル長春、東亞第一ノ炭礦地タル撫順、滿蒙最大ノ製鐵地タル鞍山ヲ初メ瓦房店、大石橋、遼陽、鐵嶺、開原、四平街、公主嶺、安東、本溪湖等何レモ近世都市タルノ盛観ヲ呈セリ。且本社ハ、都市經營ヲ爲スニ當リ、從來ノ支那人カ極メテ非衛生的ナル家屋ニ居住スルニ鑑ミ、新ニ現代式家屋ヲ建築シテ之ヲ貸與スルノ方針ヲ採レリ。カクテ爾來朔北ノ風雪ニ委棄セラレタル滿洲奥地モ、茲ニ一變リシタリ。今ヤ附近住民ノ生活モ漸次改良セラレ、昔日ノ醜陋ヲ見ルコトナキニ至レリ。

第五章　衛生施設

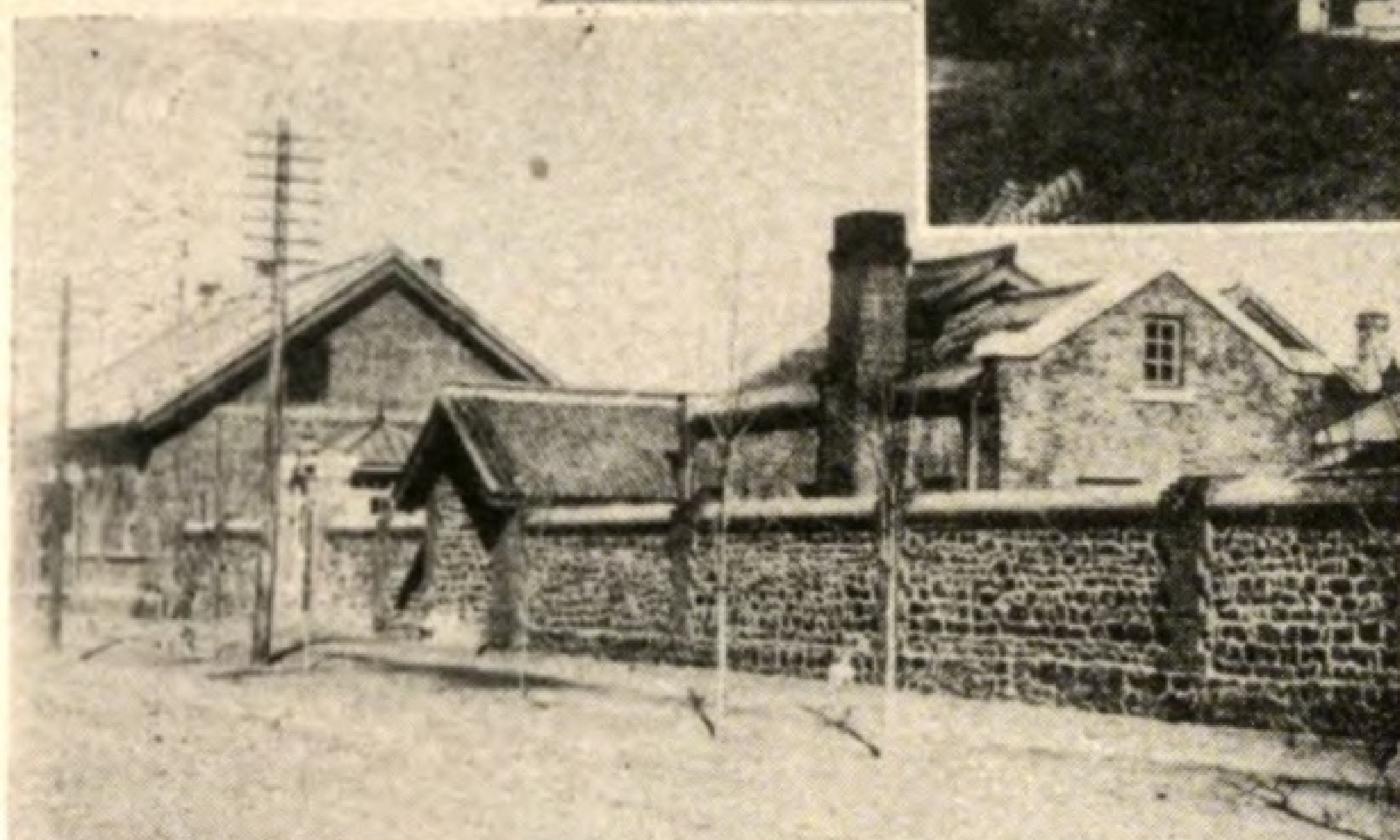
一、概説

醫院其ノ他衛生施設ノ完備ハ、居留民ノ安心ヲ買ヒ、內外人ノ移住ヲ奬メ、延テ會社ノ業務ヲ發展セシムル所以ニシテ、應ニ、地方經營ノ第一歩タルヘキコト明ナルヲ以テ、業務開始以來、費用ヲ客マス、煩勞ヲ辭セス、汲々トシテ事ニ從ヒ、漸ク完備ノ域ニ達セントス。殊ニ、醫院ハ、其ノ設備整頓シ、濟生ノ實ヲ擧クルニ遺憾ナキニ至レリ。殊ニ支那土民間ニ於ケル衛生思想ノ普及ニ就テハ、深甚ノ考慮ヲ費シ、從來、之カ爲ニハ幾多ノ努力ヲ惜マス。唯、文化幼稚ニシテ、土地廣ク、且常ニ移動シテ止マサル、

衛生施設(其一)



瓦房店醫院
一九〇七年四月設立
患者收容能力四〇名



大石橋醫院
一九〇七年四月設立
患者收容力四〇名



大連醫院 一九〇七年四月設立 患者收容力二五〇名

衛生施設（其二）



開原醫院
一九〇九年十二月設立
患者收容能力一五名



營口醫院
一九一三年一月設立患者收容能力六〇名



遼陽醫院
一九〇七年四月設立患者收容能力八〇名

苦力ノ大群アリテ、之レカ徹底ヲ期スルコト、容易ノ業ニアラサリシモ鐵道附近ニ於ケル衞生ノ施設ハ、近時漸ク完備ノ域ニ近ツキ、衞生ノ狀態、年ト共ニ、改善ノ跡ヲ示シ來ルハ、吾人ノ欣快ニ堪ヘサル所ナリ。

二、醫　院

(イ) 施設ノ大要

滿蒙ニ於ケル診療ノ機關ハ、個人經營ノ病院及診療所ヲ除キ、關東廳、赤十字社、滿鐵ノ三大系統ニ分カタル。

關東廳ノ直轄ニ屬スルモノトシテハ、旅順ニ關東廳醫院アリ。大連旅順ニ、法定傳染病患者收容ヲ目的トシテ、各一箇ノ療病院ヲ置ケリ。

此外、特ニ、婦人病患者收容ノ爲ニ、大連ニ婦人病院ヲ設ケラル。

日本赤十字社所屬ノモノハ、奉天、吉林等南北滿洲ニ渉リ、十九ノ日本赤十字病院散在シ、總テ、支那城內ニ設置セラレ、下層支那人救護ノ目的ノ下ニ、活動ヲ續ク。

會社經營ノモノニハ、現在ニ於テ、一五ノ醫院ト、五箇ノ分院、竝ニ此等ノ醫院及分院ノ所在地以外ニハ、尙、公醫ヲ配置シテ、以テ完璧ヲ期シツツアリ。尙、支那人ニ對シテハ、特ニ、仁術ノ德澤ヲ普及セシムルタメ、特別ナル分院三箇ヲ別ニ設置ス。

而シテ、一九二〇年三月末ニ於ケル從事員ハ、醫長及醫員ヲ合セ一七二名、藥局長、藥劑員及技術員八三名、事務長及事務員七五名、看護婦及助產婦四六七名ナリ。

此外一般療養ノ改良保安ノタメ看護婦養成所產婆講習所ヲ設ケ、尙冬期ニ於テハ醫學並ニ藥學講習會ヲ開催シテ刀圭界ノ啓蒙ニ力ム。

（ロ） 患者

醫院ノ整頓ト共ニ、患者ノ增加モ亦著シク、一九一九年度ニ於テハ、入院延人員五四四、〇〇〇人一日平均一、四九〇人、外來延人員ハ一、一五五、〇〇〇人一日平均三、一六〇人ニ上リ、前年度ニ比シ、入院七分八厘、外來六分八厘ノ增加ヲ示セリ。

（ハ） 收支成績

本社經營ノ病院施設ノ、收支相償ハサルハ次ニ揭クル收支表ニ徵シ明ナリ。素ヨリ、本社カ營利ヲ目的トセハ、他ニ有利ナル投資ノ存スル事、敢テ疑ノ餘地ナシ然レトモ、本社病院事業ノ本旨ハ、利益ヲ擧ケン事ニ、拘泥スルモノニアラスシテ、元來、滿洲ノ衞生施設ノ統一ト、地方住民ノ衞生思想ノ開發ヲ、目的トナスモノナルカ故ニ、不足額ノ增加ハ、寧ロ反對ニ、成績ノ良好ニシテ、ソノ醫澤ノ、次第ニ多數ノ支那內地ニ潤浸スルヲ表示スルモノト云ハサルヘカラス。

衛生施設（其三）



四平街醫院
一九〇九年設立
患者收容能力一五名

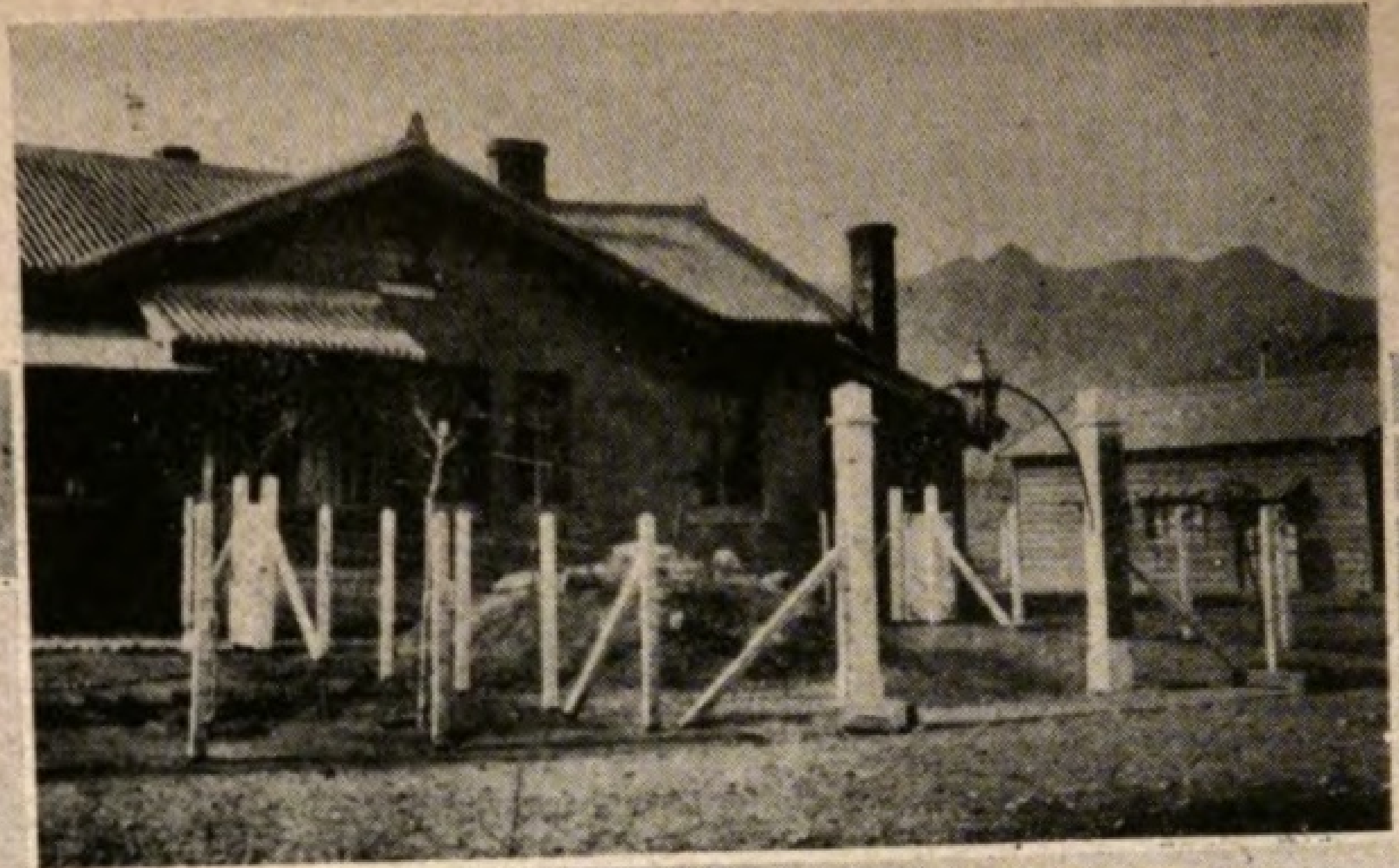


公主嶺醫院　一九〇七年設立　患者收容能力五〇名

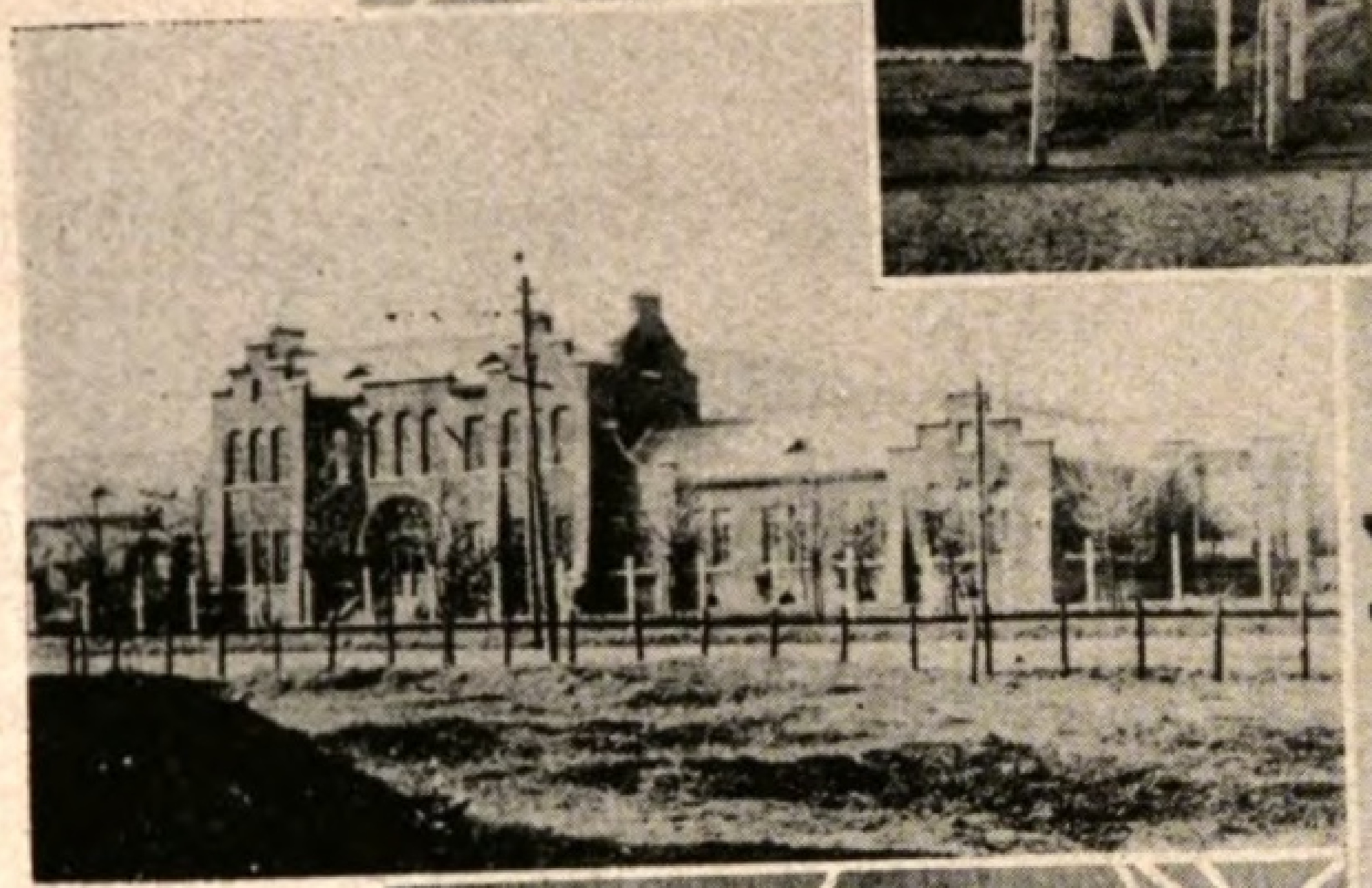


長春病院　一九〇七年設立　患者收容能力七〇名

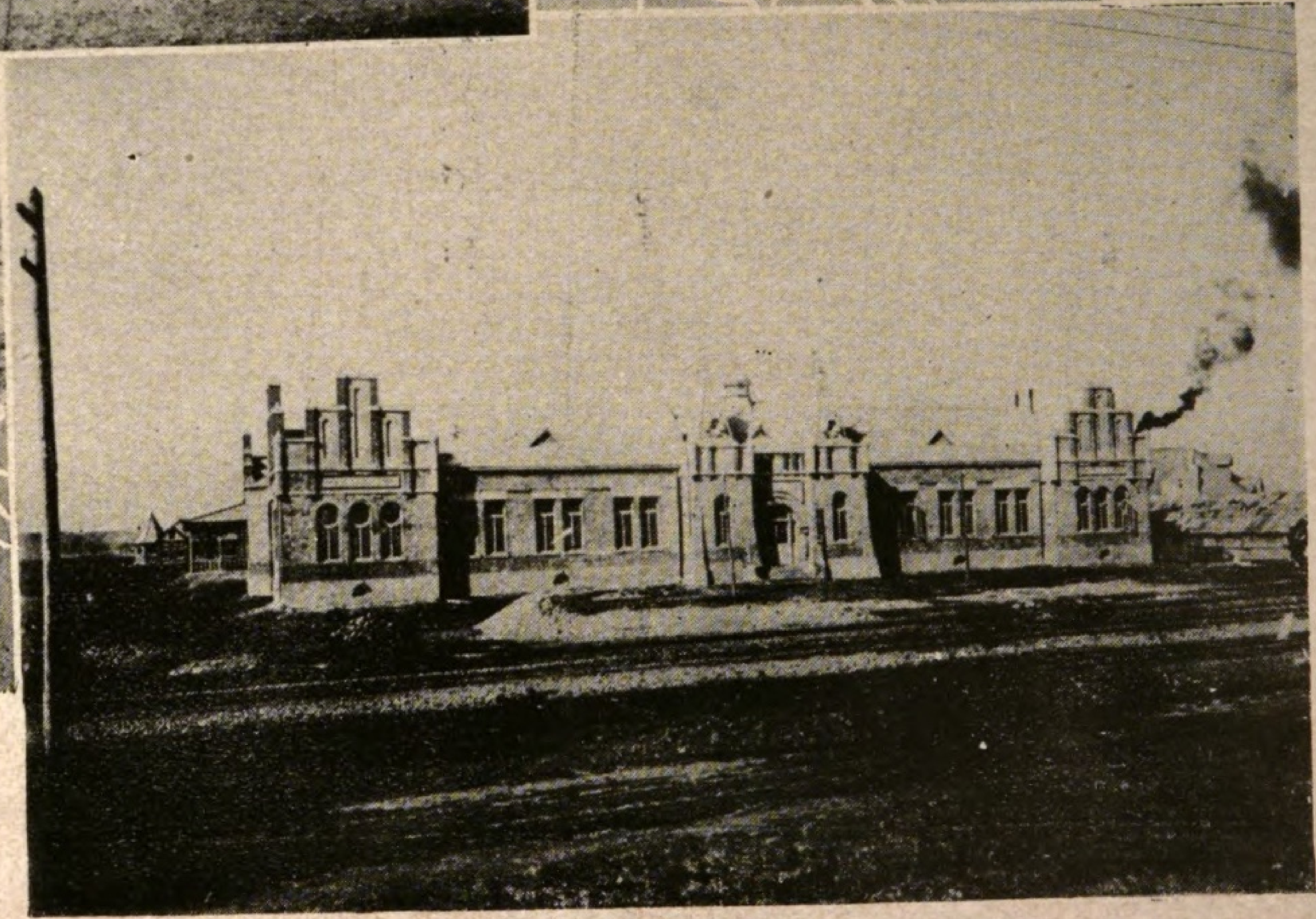
衛生施設(其四)



橋頭醫院
一九〇七年設立　患者收容能力四〇名

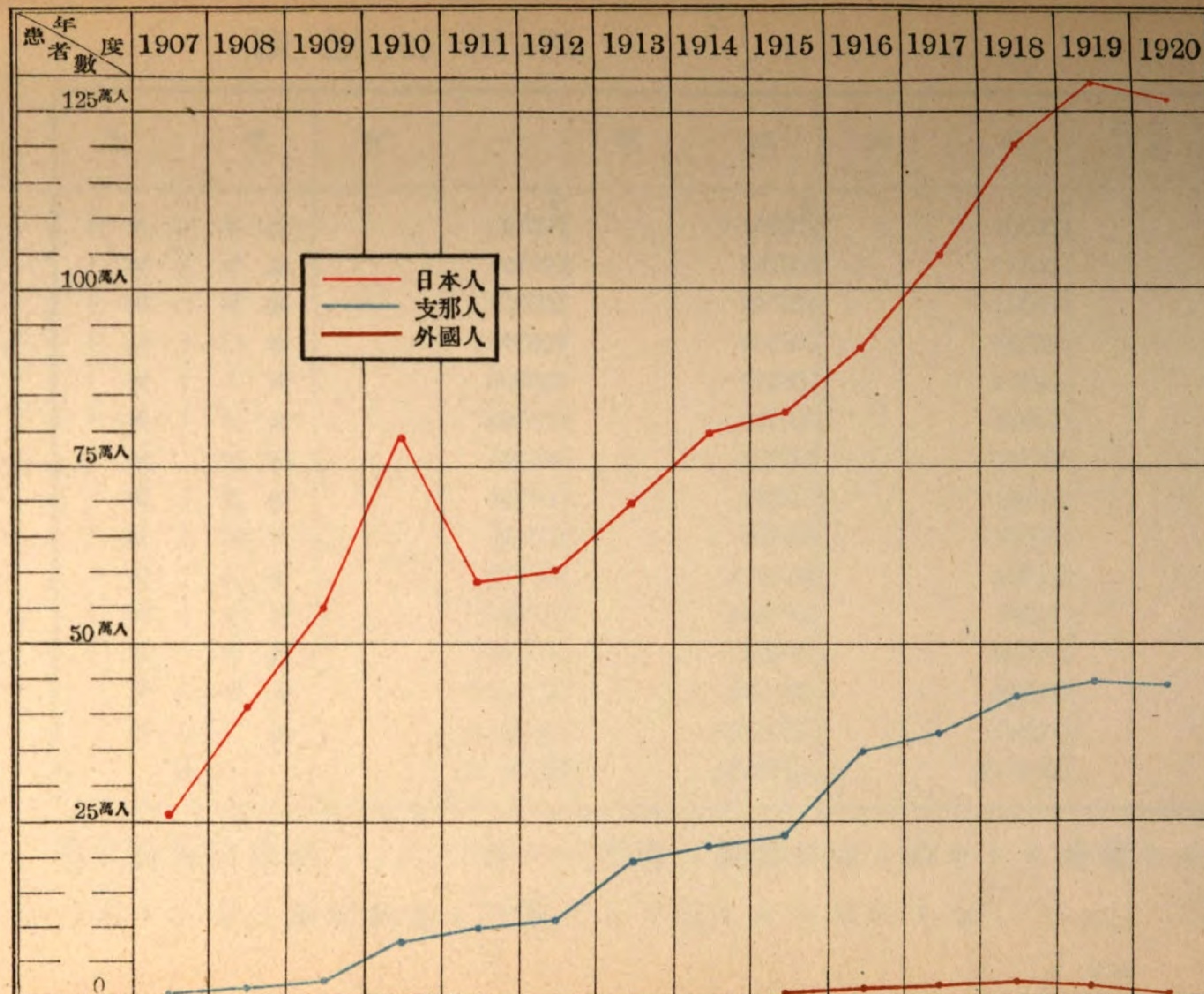


安東醫院
一九一〇年設立　患者收容能力一一〇名



撫順炭礦醫院

患者取扱數


年度
患者數
1907
1908
1909
1910
1911
1912
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1920
125萬人
100萬人
75萬人
50萬人
25萬人
0
日本人
支那人
外國人

醫院收支表

年度	收入	支出	不足	支出ニ對スル收入歩合
一九〇七年	四三,〇〇〇円	一九二,〇〇〇円	一四九,〇〇〇円	二三・四
一九〇八年	一六三,〇〇〇	二八〇,〇〇〇	一一七,〇〇〇	五八・四
一九〇九年	二三三,〇〇〇	三七一,〇〇〇	一四九,〇〇〇	五九・五
一九一〇年	二九六,〇〇〇	五六八,〇〇〇	二七二,〇〇〇	五二・三
一九一一年	三六五,〇〇〇	五八八,〇〇〇	二二三,〇〇〇	六二・九
一九一二年	五〇三,〇〇〇	七三一,〇〇〇	二二八,〇〇〇	六八・八
一九一三年	六四九,〇〇七	八二六,〇〇〇	一七七,〇〇〇	七八・五
一九一四年	七九八,〇〇〇	九六八,〇〇〇	一七〇,〇〇〇	八二・四
一九一五年	八五六,〇〇〇	九六二,〇〇〇	一〇六,〇〇〇	八八・七
一九一六年	九九七,〇〇〇	一,一〇六,〇〇〇	一〇九,〇〇〇	九〇・一
一九一七年	一,一五七,〇〇〇	一,三三二,〇〇〇	一七五,〇〇〇	八六・八
一九一八年	一,五三六,〇〇	一,九七四,〇〇〇	四三八,〇〇〇	七七・八
一九一九年	二,一一七,〇〇〇	三,〇六一,〇〇〇	九四四,〇〇〇	六九・一
一九二〇年	二,四七〇,〇〇〇	三,三三六,〇〇〇	八五六,〇〇〇	七四・一
計	一三,一七三,〇〇〇	一六,二八五,〇〇	四,一一三,〇〇〇	七四・七

衛生施設經營費ノ一半ハ、素ヨリ、設備ノ維持、改良ニ費サルル事論ナキモ、他ノ一半ハ、擧ケテ之ヲ豫防施設ニ支出スルモ、宜ナリト云フヘシ。

且ツ、一般的豫防方法ハ、專問的施設ヲ以テ、重大ナルモノトナスハ明白ナレトモ、之ト同時ニ、一般地方民ノ衞生思想ノ開發ニ俟ツ處、大ナルモノアリ。幸ニ近時支那人ノ此ノ方面ニ著眼スルモノ、次第ニ多ク、豫防注射ノ如キモ、喜ンテ之ニ應スルノ傾向ヲ見ルニ至リタルハ、本社ノ私ニ欣フ處ナルト共ニ、人類福祉ノタメ、亦賀スヘキ事トス。

三、衞生事項

附屬地及其ノ附近ニ對スル衞生事項ハ、會社カ、常ニ細心ノ注意ヲ怠ラサル所ニシテ、衞生上ノ計畫及指導監督ニ遺憾ナカラシメ、又、地方ニ於ケル事務ハ、所管地方事務所、其ノ他ノ職員ヲシテ、之ニ當ラシメ、警察官署及醫院ト聯絡ヲ保チ、施行上遺漏ナキヲ期セリ。

(イ) 衞生警察

州外附屬地ニ於ケル衞生警察事務ハ、關東廳ニ屬シ、警察官署ノ主管スル所ナレトモ、會社所屬ノ醫員、公醫及藥劑員ハ、關東廳ヨリ、醫務又ハ衞生試驗事務ノ囑託ヲ受ケテ之ニ從事ス。

(ロ) 種痘

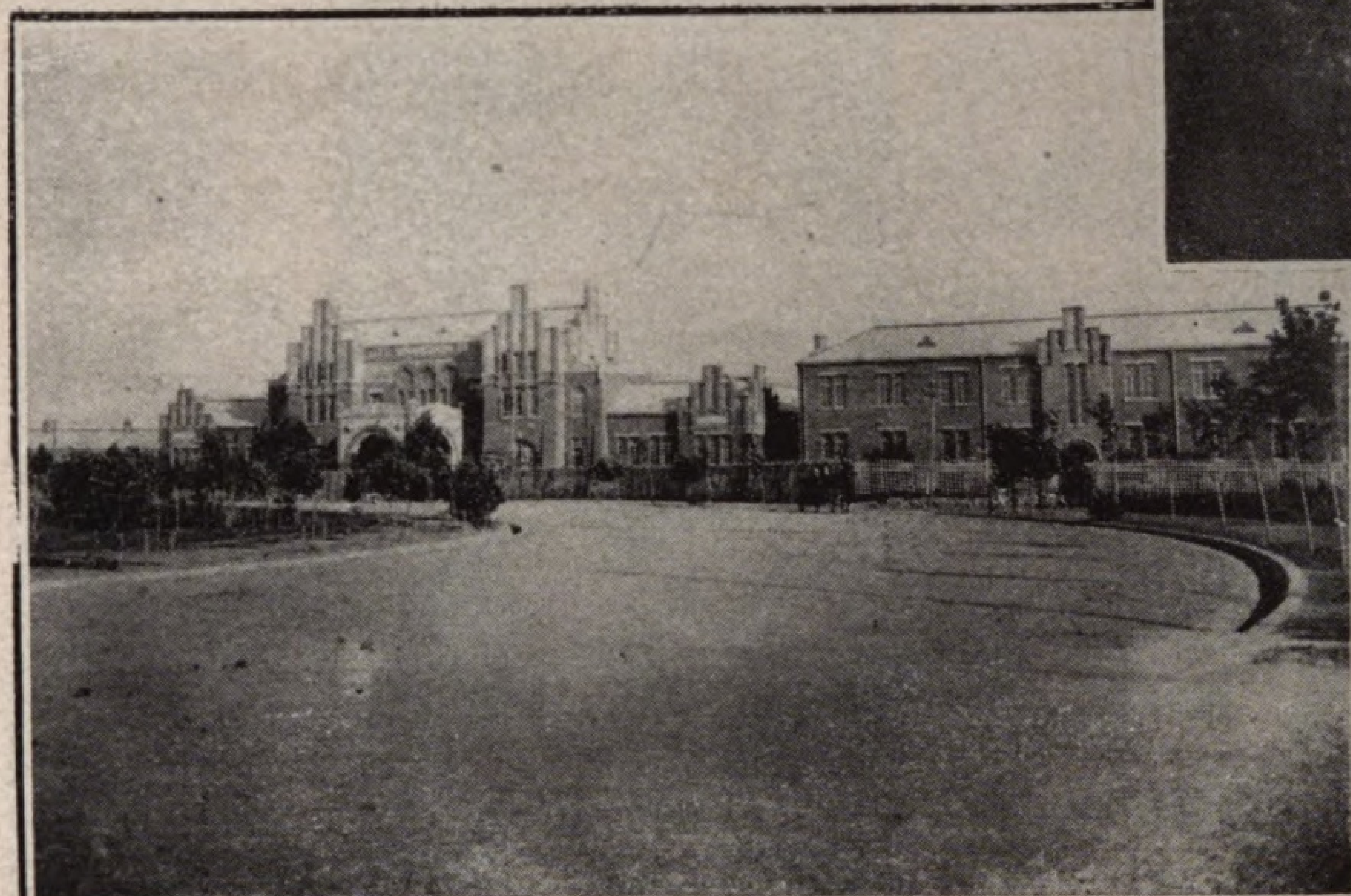


鐵嶺醫院

一九〇七年設立　患者收容能力八〇名

奉天醫院

一九〇七年設立　患者收容能力三六〇名



種痘ハ、從來春秋二季、及必要ノ場合、臨時之ヲ施行シ來リシモ、一九一三年二月都督府令ヲ以テ、種痘施行ニ關スル規定ヲ設ケラレ、定期種痘ハ、年一回ニ止ムルコトトナリタルヲ以テ、爾後之ニ準據セリ。但シ、必要ノ場合、臨時種痘ヲ行フコト勿論ナリ。而シテ、之ニ要スル費用ハ、全部公費ヲ以テ支辨ス、種痘成績ハ、關東廳管内ヲ通シ一九一一年以前五箇年間ノ平均ハ第一期種痘人員百ニ對シ、善感、日本人六四・二、支那人七一・三ニシテ、甚タ不良ナリシモ、一九一二年以降五箇年間ノ平均ハ、第一期種痘人員百ニ對シ、善感日本人九二・〇、支那人九〇・五ニシテ、漸次良好ニ趣キツツアリ。

(八)　飲料水檢查

關東州内附屬地ノ飲料水檢査ハ、所管民政署及支署ニ於テ施行セラルルヲ以テ、會社ハ特ニ必要ト認メタル場合ノ外、之ヲ施行セス。州外附屬地水道水ハ、毎月一回會社中央試驗所員ヲ派シ檢査ヲ行ヒ、井水ハ、所管地方事務所、炭礦庶務課ニ於テ、年二回、(現在ニ於テハ雨期後ト解氷期ナリトス)會社醫院配屬ノ藥劑員ニ委囑シ、檢査ヲ施行セリ。而シテ、飲料不適ト決定シタルモノニ對シテハ、當該課所ニ於テ、其ノ時時、改良ノ方法ヲ講シ、就中、甚シキ不良井水ハ、閉鎖シテ全然使用ヲ禁スル等、機宜ノ措置ヲ採レリ。

(二) 防疫

滿蒙ノ開發ニ當テ、吾人ヲ惱マス所ノ最大ナルモノハ、傳染病ノ流行ナリ。之カ爲ニ、州内ニ於テハ、關東廳ハ海務局ヲシテ海港檢疫ヲ行ハシメ、民政署ヲシテ陸上防疫ノコトヲ掌ラシメ、患者ハ、直ニ之ヲ、官立檢疫所、又ハ、療病院ニ收容セシム。州外附屬地ノ防疫事務モ亦、法規上ハ、警察官署ノ權限ニ屬スルモ、施設ハ、主トシテ、會社之ニ當リ、以テ、協力一致ノ實ヲ擧ケン事ニ力メ、病菌携帶者ノ檢索、種痘、豫防注射ノ施行、夏期ニ於ケル蠅族ノ驅除、其ノ他防疫ノ措置ニ全力ヲ傾注シ居レリ。

カノ、一九一〇年十月下旬、北滿地方ニ肺ペスト發生シ、漸次南下スルニ至ルヤ、關東廳ニ臨時防疫部ヲ設置シ、經費ノ大部分ハ國庫ノ負擔トナリシモ、當時、防疫上ノ施設ニ對シテ、會社ノ支出シタル所亦尠カラス。卽チ關東廳ニ納入シタル九三、〇〇〇圓、支那政府其他ヘ寄附シタルモノ一五五、〇〇〇圓、自衞ノ爲ニ費セルモノ三一〇、〇〇〇圓、合計五五八、〇〇〇圓ニ及ヘリ。又一九一九年滿洲一帶ノ地ニ、虎列刺流行スルヤ、同シク關東廳ト之カ豫防救治ニ努メ、其費用ノ如キハ、大半會社ニ於テ之ヲ負擔セリ。卽チ、關東廳ニ納付セルモノ三六〇、〇〇〇圓、會社自衞ノ爲ニ支出セルモノ、及、領事館内防疫費ニ寄附シタルモノ、合セテ三七六、〇〇〇圓、合計七三六、〇〇〇

衞生施設（其七）



細菌研究所
一九〇七年以後大連其他樞要地點ニ設置ス



撫順救護班練習所



苦力收容所患者運搬
一九一〇年北滿ニ於テペスト流行猖獗ヲ極メタル際撮影ニ係ル

長春清國火葬場ニ於ケル殘燒「ペスト」死體

一九一〇年北滿「ペスト」慘害ノ一部ヲ示シタルモノニシテ當時ノ死者實ニ數萬人ト算セラル





奉天ニ於ケル「ペスト」遺棄死體

〇圓ナリ。更ニ又近ク、一九二〇年八月下旬、滿洲里附近ニ線ペスト患者發生シ、漸次蔓延ノ兆アリ。十二月下旬ニ至ッテ、俄然肺ペストトナリ、十年一月ニ及ムテ、恰モ大河ヲ決スルカ如キ勢ヲ以テ、北滿一帶ノ地ニ流行シ、我鐵道沿線亦頗ル危險ニ陷ルヤ、關東廳ハ臨時防疫部出張所ヲ長春ニ設ケ、以テ病毒ノ南下ヲ防止セムト企テタリ。社ニ於テモ、社員ヲ防疫部ニ助務セシムルト共ニ、停留檢疫所及患者收容所ノ設備、竝患者ノ治療消毒ヲ引受ケタリ。而シテ、此經費、關東廳ノ負擔ノ外、會社ノ支出シタルモノ一三〇、〇〇〇圓ニ上レリ。

而シテ茲ニ、特筆セサルヘカラサルハ、此防疫ニ際シ、日支兩當局ノ協調完全ニ行レタルコトニシテ、從來ノ防疫ニ於テハ、往々兩者ノ間ニ疎隔ヲ生シ、爲ニ、意外ノ慘害ヲ惹起シ、世界人道ノ爲ニ、常ニ遺憾ノ點多カリシモ、此一九二〇年度ノ防疫ニ於テハ、支那官憲、能ク我カ助言ヲ容レ、互ニ提携シテ防疫ニ從事シタル結果、北滿洲ニ於テハ、約八千ノ生靈ヲ奪ヒタル暴君モ、長春ニ於テ食ヒ止メラレ、大事ヲ見スシテ終レリ。

(ホ) 學校衞生

會社施設ノ學校ニ在リテハ、各校ニ一人以上ノ校醫ヲ設置シ、兒童ノ健康ニ注意

セシム。校醫ノ數ハ、三一人ニシテ、醫院醫員及公醫ヲシテ兼務セシム。而シテ、每年一回、校醫ヲ本社ニ召集シ、學校衞生ニ關スル事項ヲ討議ス。又、衞生課ニ「トラホーム」專任醫ヲ置キ、各學校ニ出張シテ、患者ノ診療ニ從事ス。尙齲齒竝耳鼻咽喉疾患ニ關スル調査及治療ハ、專門家ヲ派遣シテ之ヲ行ハシム。

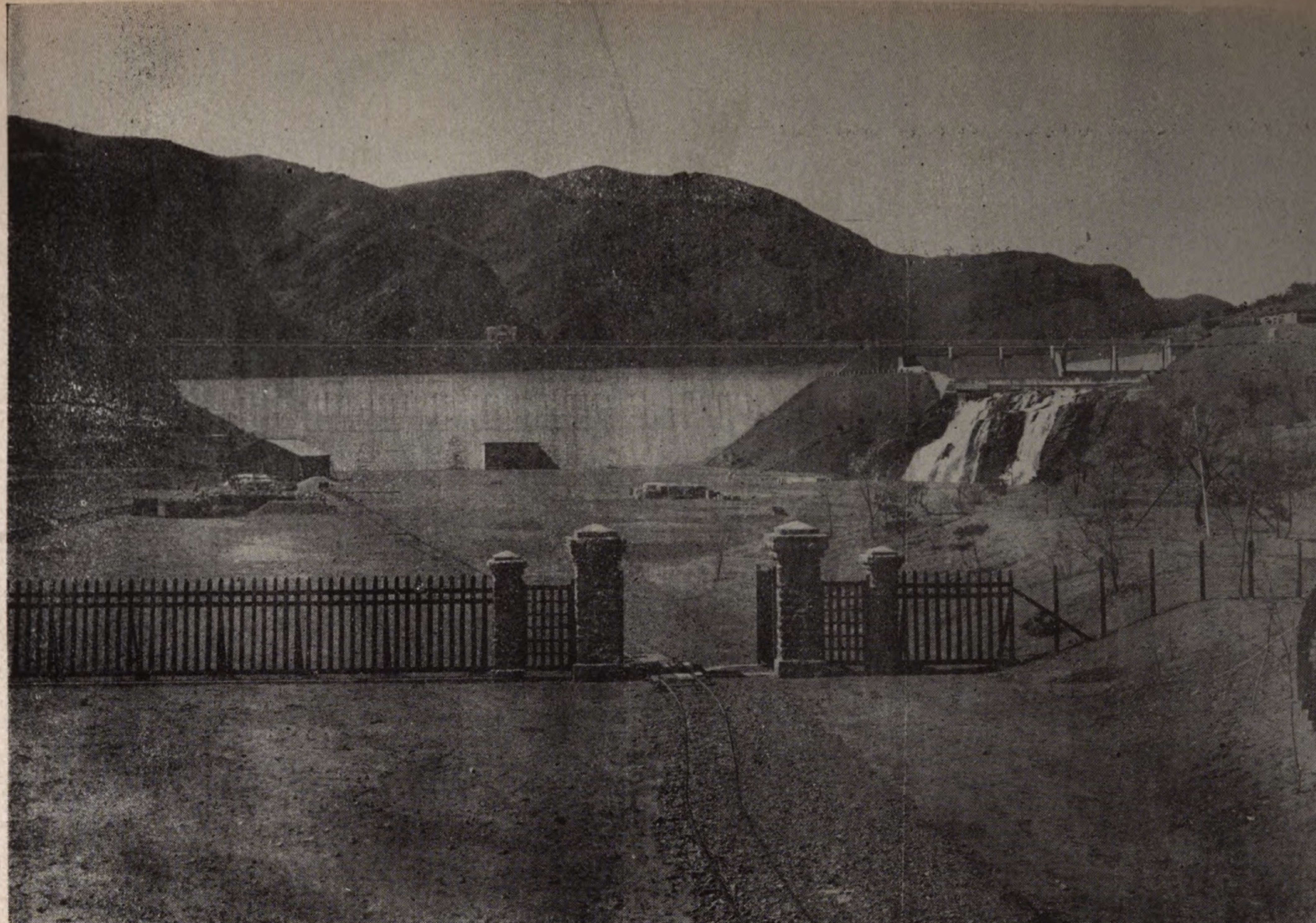
(ヘ) 鐵道、工場及鑛山衞生

一九一九年度ヨリ鐵道、工場及鑛山衞生ニ關スル調査研究ヲナス爲、衞生課ニ之ヲ擔任スル專門技術者ヲ設置セリ。

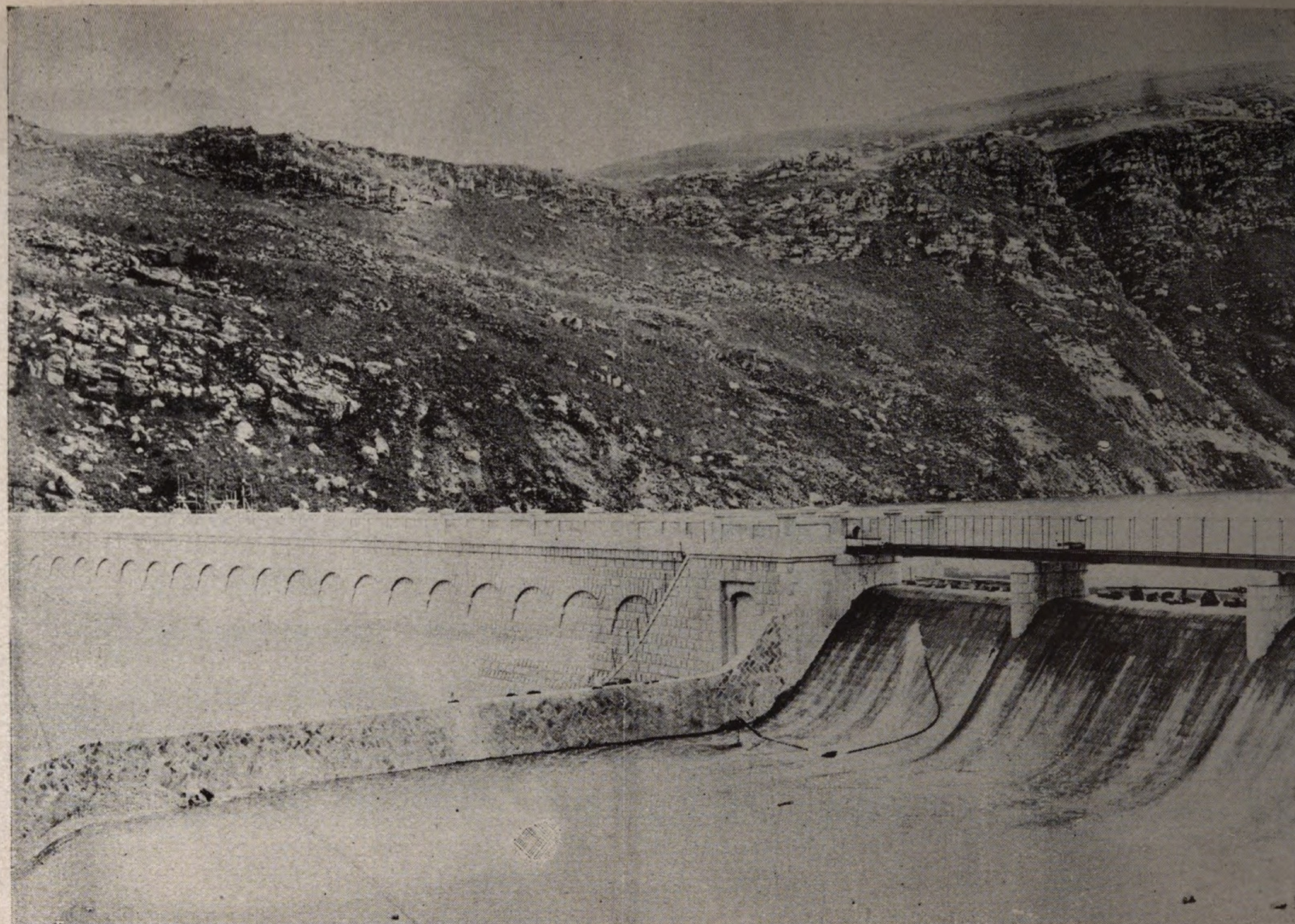
(ト) 其他衞生施設

關東廳地方行政審査委員會ノ決議ニ基キ、一九一八年、會社ニ於テハ、附屬地衞生委員會規程ヲ設ケ、各地方事務所、撫順炭鑛庶務課管內ヲ以テ一區域トシ、會社職員及警察官吏ヲ委員トナシ、當該區域內衞生事務ニ關スル諮詢機關トセリ。又、同會ノ決議ニ據リ、附屬地樞要ノ地ニ、衞生技術者ヲ配置シ、地方衞生事務ニ參與セシメ、兼テ保健、防疫ニ關スル技術上ノ作業ヲナサシメ、又、關東廳ヨリ警察醫務ノ囑託ヲ受ケ、衞生警察事務ヲ執行スルコトトナレリ。

王家店貯水池石堰堤全景



本工事ハ素ト一九〇一年露國ニヨリ著手セラレ次テ一九〇五年日本ノ經營ニ移ルニ及ンテ第一期第二期擴張工事ヲナス所要費用三、〇〇〇、〇〇〇圓現在給水能力一日一六、〇〇〇噸ナリ。尚目下豫算五、〇〇〇、〇〇〇圓ヲ計上シテ第三期擴張工事ノ設計中ニシテ此工事完成後ハ一日給水二五、〇〇〇噸ニ達スル見込ナリ



王家店貯水池溢水口

第六章　敎育

一、概說

滿蒙ニ於ケル日本ノ敎育施設ハ、會社ノ外、關東廳、居留民團、居留民會、東洋協會等ニ依テ經營セラル。

其ノ主ナルモノ總數一三〇校、內滿鐵經營ノモノ九二校

內初等學校　　六二校（內滿鐵經營三七校）

日本人敎育ヲ目的トスルモノ四四校（內滿鐵經營二六校）

支那人敎育ヲ目的トスルモノ一八校（滿鐵經營一一校）

實業補習學校　　三七校（滿鐵經營三五校）

中等學校　　二八校（滿鐵經營一九校）

高等專門學校　　三校（滿鐵經營一校）

ナリ中等程度以上ノ學校ニ於テハ、二、三ノモノヲ除キ、日本人タルト支那人タルトヲ問ハス、等シク之ヲ收容シ、混合敎育ヲ施シツツアルモ、初等學校ニ於テハ、分離敎育ヲ原則トス。蓋シ、之レ言語ノ相違ニ因ル已ムヲ得サル必要ニ基クモノナルカ故

ニ、之ノ必要ナキモノニ對シテ、希望ニ依リ、日本人小學校ニ入學スルコトヲ歡迎ス。

一九〇七年四月、會社創業ノ當時ニ於ケル我國ノ敎育施設トシテハ、州内ニ於テ、關東都督府經營ノ小學校、(日本人初等學校)及、公學堂(支那人初等學校)各二、州外ニ於テ、遼陽基督敎青年會ノ經營ニナル遼陽小學校、及、大谷派本願寺布敎師ノ創設ニカカル、千金寨小學校ノ二アリシノミ。十有餘年ノ今日ニシテ顧ミレハ、實ニ、今昔ノ感ニ堪エサルモノアリ。蓋シ、敎育ノ隆替ハ、滿蒙ノ將來ニ影響スル所重大ナルモノアルカ故ニ、會社ハ、業務開始ト同時ニ、緩急ヲ考ヘ、先ツ意ヲ普通敎育ノ普及ニ致シ、漸ヲ追ヒテ、力ヲ中等及高等敎育ニ用キ、以テ今日ニ及ヒタルモノナリ。

目下、會社ノ經營スル所、(一九二〇年三月末現在)初等敎育ニ屬スル小學校(日本人)二五、公學堂(支那人)三、補習敎育ニ屬スル實業補習學校三三、中等敎育ニ屬スル中學校二(內支那人中學堂一)實科女學校一、高等女學校一、商業學校二(內支那人商業學校一)工業學校一、簡易鑛山學校(支那人)一、高等專問敎育ニ屬スル南滿醫學堂一、此外幼兒保育ニ屬スル幼兒運動場一四、社會敎育ニ屬スル圖書館二、簡易圖書館一九、通計一二六箇所ヲ算シ、之ニ要セシ費用ハ

建設費　三〇二一、〇〇〇圓

教育施設（其一）



南滿醫學堂
一九一一年奉天附屬地ニ設立



蓋平公學堂
一九一〇年設立



旅順工科學堂　一九一〇年設立

教育施設（其二）



遼陽公學堂
一九一三年設立



同上食堂



同上寄宿舍內部

教育體操(其三)



教育施設(其三)



瓦房店小學校農事實習
一九〇七年記立



瓦房店幼稚園(外部)
一九〇九年設立



瓦房店幼稚園(内部)

機器費　三三九、〇〇〇圓
圖書費　三六、〇〇〇圓

總計實ニ、三、三九七、〇〇〇圓ニ達ス。

二、學校教育

(イ) 初等教育

初等教育ノ普及ハ、文化施設上、急務中ノ急務ナルモ、支那人ヲシテ、教化ノ必要ヲ自覺セシムルコトハ容易ノ業ニアラス。支那人子弟教育ノ困難ナルコト、蓋シ想像以上ナリ。

(1) 日本人初等教育　會社カ經營スル所ノ小學校ハ、滿洲本線ニ在リテハ約三十哩毎ニ、安奉線ニ在リテハ約四十哩毎ニ、一箇所ヲ有スル割合ナリ。兒童寄宿舍、無賃乘車通學、貨物列車ノ便乘、停車場以外一分間停車等ノ方法ヲ以テ、兒童就學ノ便ヲ計ルカ故ニ、義務教育ノ制度ハ設ケサルモ、不就學ノ兒童ハ殆ト皆無ノ狀態ニ在リ。

而シテ、二五ノ小學校中、高等科ヲ設置セルモノ二〇ニ及フ、兒童總數九、四〇〇名、學級數二一八、正教員數二六三名ヲ算ス。又、兒童寄宿舍ヲ設置スルモノ二、此收容人員四九、此外私人ノ經營ニ係ル兒童寄宿舍ノ事業ヲ補助スルモノ四箇所ニ及フ。

在滿朝鮮人ノ多クハ、支那土民ト共ニ農業ニ從事スルヲ常トシ、會社ハ、之等ノ子弟養成ノ爲ニ經營セラルル、鐵嶺ノ育英學校、奉天ノ實業普通學校、陶鹿ノ東山學校等ニ對シテ、或ハ教員ヲ派遣シ、或ハ其ノ殆ト全部ノ經費ヲ補助シテ、鮮人就學ノ普及ヲ圖リツツアリ。

(2) 支那人初等教育　會社カ、支那人ヲ教育スル目的ハ、附屬地內外ノ支那人子弟ヲ教育シテ、文化ノ促進

ヲ圖リ、兼ネテ日本語ヲ普及シ、彼我親善ニ盡瘁シ、以テ滿蒙開發ノ業ニ資センコトヲ期スルニ在リ。之カ爲ニ、關東廳ニ於テハ、特ニ師範學堂ヲ設ケ、支那人教師ヲ養成シ、會社ニ於テハ、教員養成部ヲ創メテ、支那人教育ニ從事スル日本人教師ノ養成ニ、尠カラサル苦心ヲ費シツツアリ。

會社經營ノ公學堂ハ、其ノ主トスル目的ニ從ヒ、三種ニ分ツ、即チ土民普通教育トシテ會社ノ經營スル公學堂ニハ、附屬地內ニ、比較的多數ノ學齡兒童ヲ有スル地方ニ於テ初等科ヲ置キ、附屬地內外ノ兒童ヲ收容シ、支那政府ノ初等小學ノ制度ニ則リ、之ニ實用的日本語ヲ教授シ、土著人ニ適切有用ナル兒童教育ヲ施スコトヲ目的トス。此種ノ公學堂ハ、目下瓦房店熊岳城、蓋平、奉天、開原、四平街、公主嶺、長春ノ八箇所ニシテ、生徒數一、〇八二名、學級數三一、教員數五七名ヲ數フ。

(3) 人才教育　次ニ、會社ハ又、人才教育ヲ目的トシテ、附屬地內交通ノ要地ニ、公學堂ヲ設置シ、高等科ヲ置寄宿舍ヲ設備シ、初等小學ヲ畢リタル遠近ノ支那人子弟ニシテ、前途日本語ヲ以テ、中等又ハ高等教育キ、ヲ受ケムトスル人才ヲ選擇收容シ、支那政府ノ定メタル高等小學程度ノ教育ヲ施シ、兼テ日本語ヲ教授シ、其ノ卒業者ヲシテ、內地又ハ滿洲ニ於ケル日本人ノ中等學校ニ入學スルコトヲ得セシム。目下此ノ種ノ公學堂ハ、遼陽、長春ノ二箇所ニシテ、生徒數三〇〇名、學級數一一、教員數一九名、寄宿生徒數二七三名ナリ。

(4) 日語普及事業　在留邦人ニ支那語ノ研究ヲ獎勵シ、小學校及實業補習學校ニ於テ支那語ヲ教授スルト共ニ、附屬地內外ノ支那人間ニ日本語ノ普及ヲ圖リテ、會社自ラ附屬地內適當ノ地ニ、日語學堂ヲ開設スル外、附屬地內外ニ於ケル日本語教授事業ヲ保護獎勵ス。

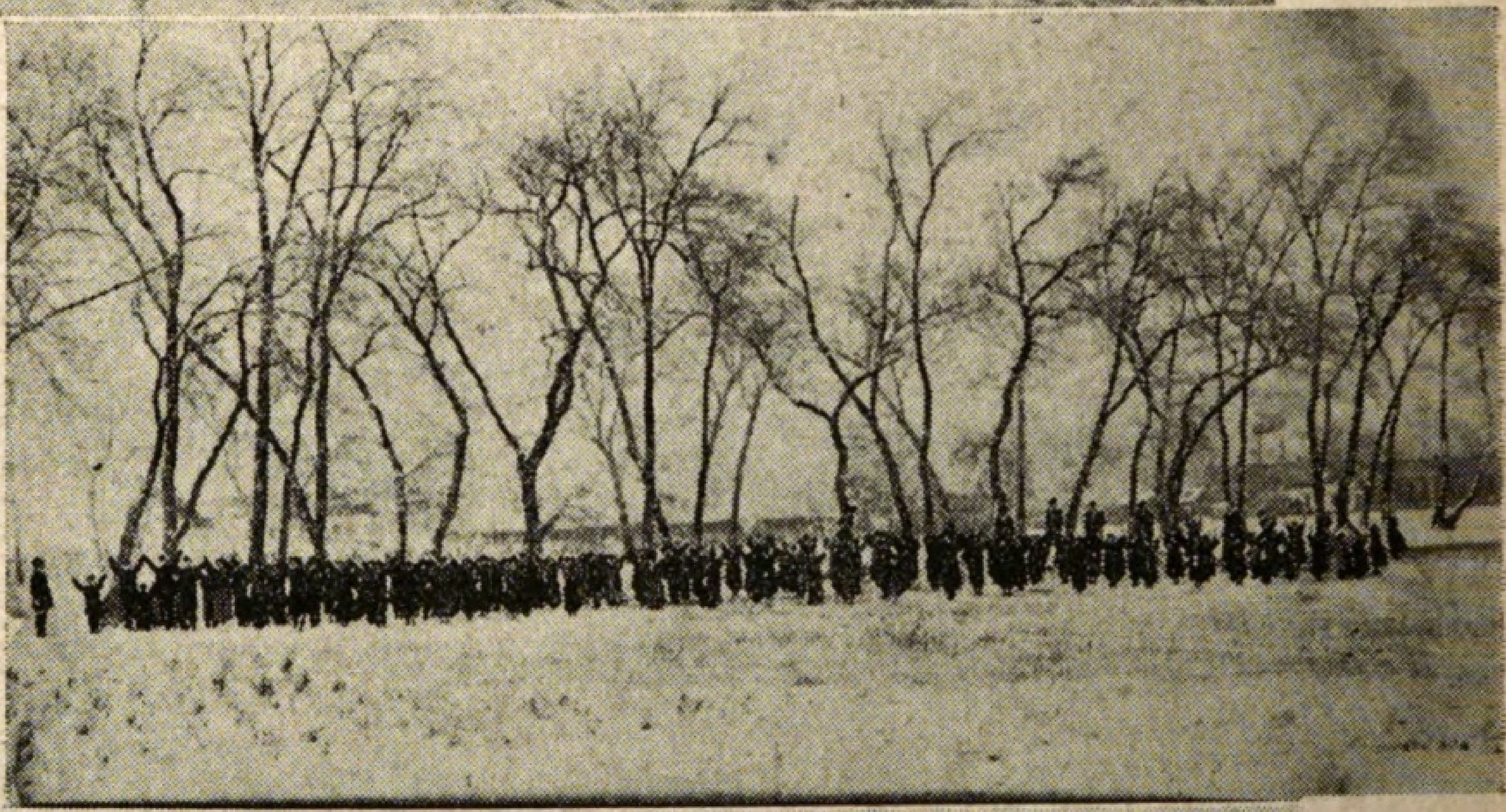
(ロ) 實業補習教育

實業補習教育トシテハ、一九一〇年五月以來、會社ハ、附屬地各小學校公學堂ニ實業補習學校ヲ附設シ、日支兩國ノ青年及少年ヲ修養界ニ導キ、各自ノ職業ニ必要ナ

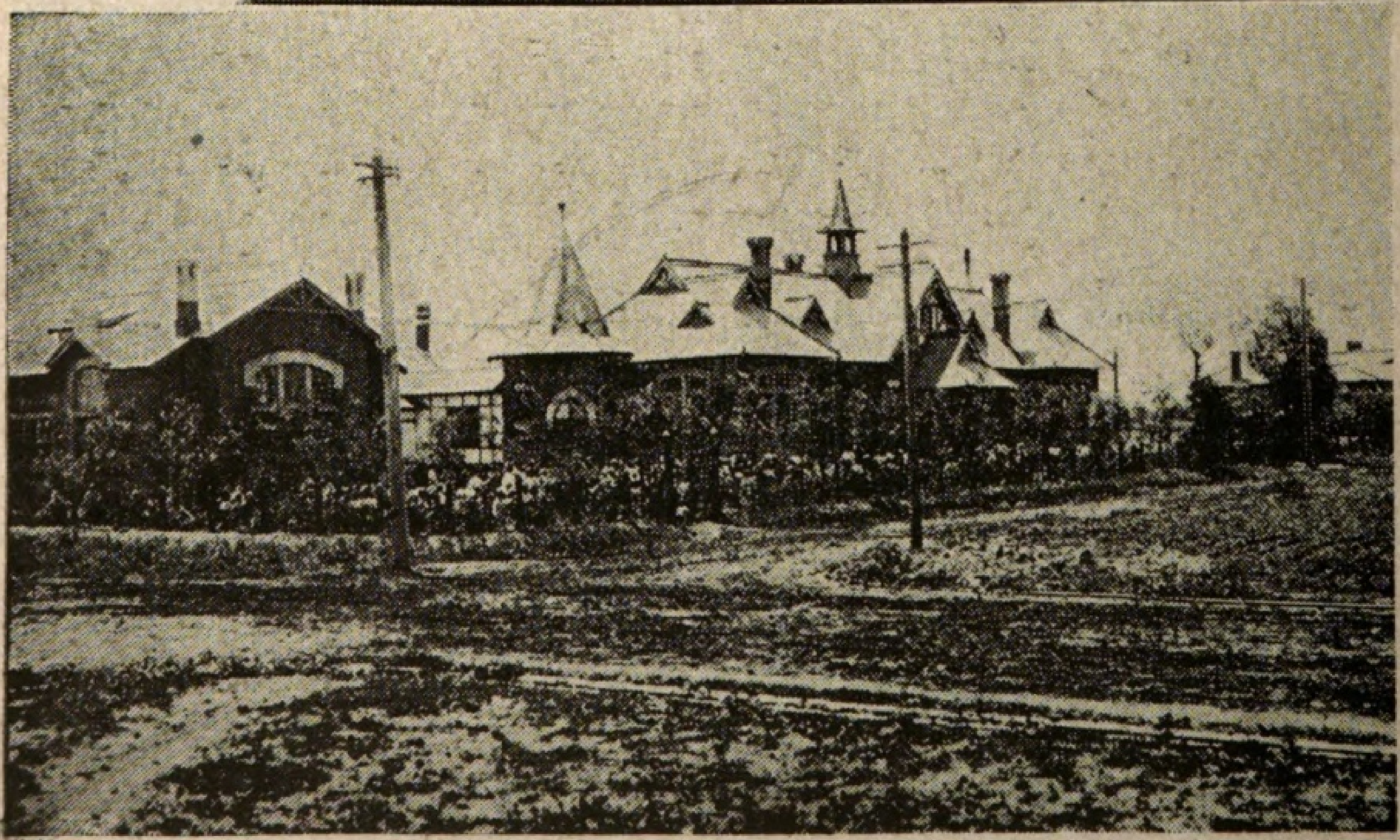
教育施設(其四)



長春小學校外部
一九〇九年設立



長春小學校野外體操
一九一三年一月九日攝氏零下一八度ノ酷寒中撮影ニ係ル



長春公學堂

ル知識技能ヲ學習セシムルト共ニ、小學教育ヲ實用化セシメンコトヲ試ム。近來、成績優良ノ生徒ニハ、會社設立ノ工業學校ニ、給費又ハ貸費入學ヲ許シ、或ハ、從事員養成所入學ニ優先ノ途ヲ開キ、又社員トシテノ採用竝ニ待遇ニ關シ、種々ノ特典ヲ附與スル等、大ニ同教育ノ普及發達ニ努メツツアリ。此ノ校數三三箇所、生徒數延人員四、八三六名、其ノ實員三、〇三八名、學級一六二、講師數三五九名ナリ。

(ハ) 中等教育

初等教育ノ施設ニ次テ、中等教育ノ必要ヲ生スルコトハ、當然ノ結果ニシテ、亦同時ニ、教育ノ向上發達ハ、滿蒙開發ノ必要條件タルヲ失ハス、本社ハ此點ニ就テモ初等教育ニ對スルト同樣遺漏ナキヲ期シツツアリ。

(1) 奉天中學校　奉天中學校ハ、一九一九年四月ノ創立ニ係ル。本年度ニ於テハ第一、二學年ヲ置キ目下生徒數一一三名。

(2) 南滿中學堂　南滿中學堂ハ奉天ニ設置シ、公學堂高等科卒業者ヲ本科ニ、支那側高等小學校卒業者ヲ豫科ニ入學セシメ、支那人ノ爲ニ、高等普通教育ヲ授クル所トシ、當分南滿醫學堂豫科ヲ附設シ、南滿醫學堂本科ト聯絡セシム。目下、生徒數一五三名、學級數七、教育數二名、寄宿生一五七名。

(3) 實科女學校及奉天高等女學校　附屬地小學校高等科卒業女子ノ數漸ク增加セルニ當リ、土地ノ狀況ニ鑑ミ、沿線各地ノ女子ヲシテ、成ルヘク其ノ地方ニ於テ、必要ナル教育ヲ受ケシメムコトヲ期シ、一九一二年度以後、土地ノ必要ニ應シ、各地小學校ニ、實科女學校ヲ附設ス。

(4) 商業學校　長春及營口ニ商業學校ヲ設置ス。現在兩校日支生徒數約二五〇名。

(5) 南滿洲工業學校　主トシテ、滿洲ノ工業ニ從事セムトスル、日支青年ニ對シ、中等程度ノ工業教育ヲ施

サムトスルニ在リ。現在生徒總數三三二人、學校職員校長一名、教諭二八名、助教諭一名、舍監五名、書記二名、助手九名、囑託講師二四名。

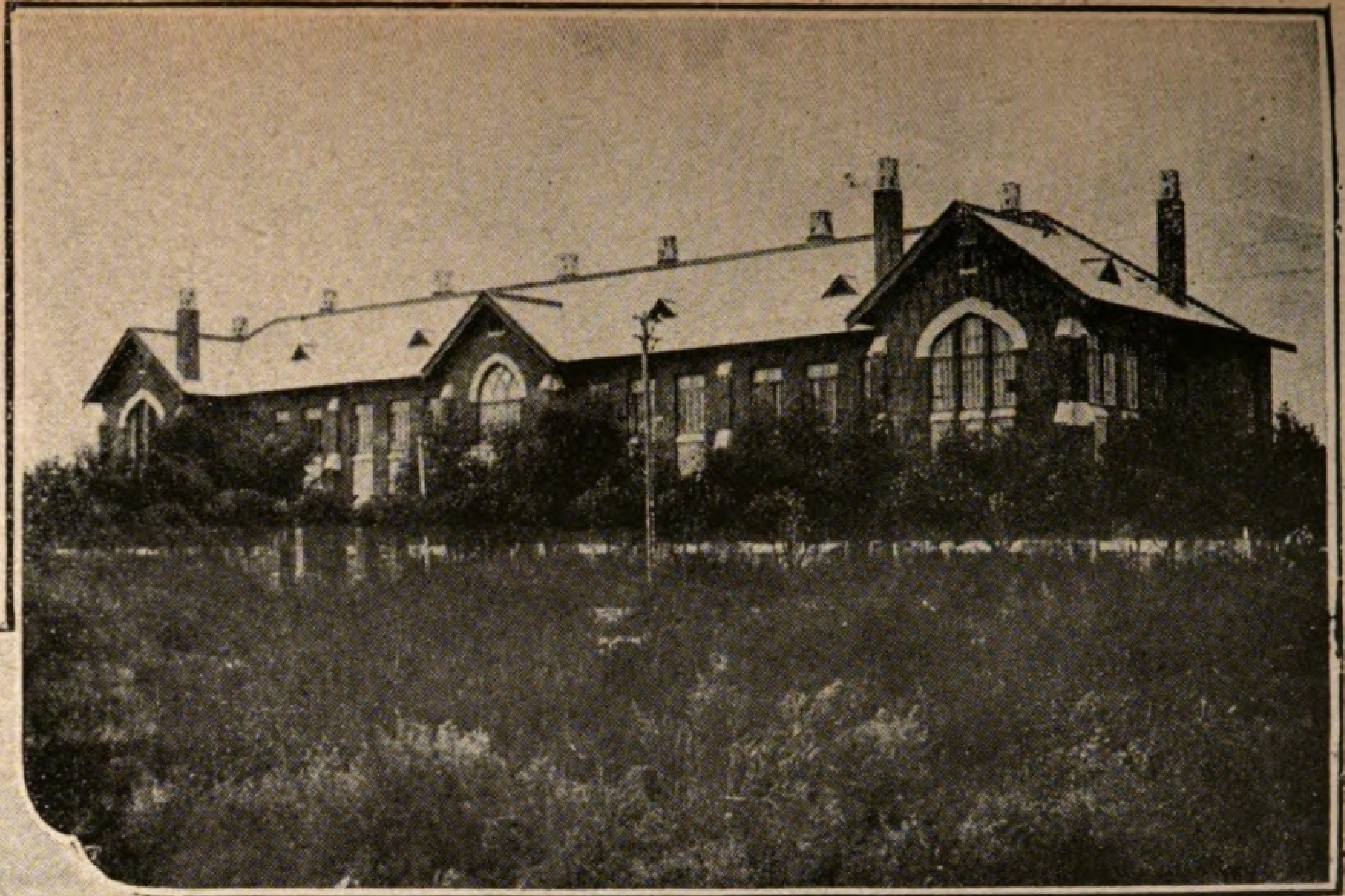
(6) 撫順簡易鑛山學校　支那人ノ職業教育ヲ目的トスル、中等程度ノ學校トシテ、上述ノ商業學校工業學校ノ外、撫順簡易鑛山學校ヲ設ク。鑛業ニ從事セントスル支那人ニ對シテ、簡易ナル鑛業上ノ知識技能ヲ授ケンカ爲、一九二一年初メテ開設ス。

(二) 南滿醫學堂

滿洲ニ醫術ヲ普及スルハ、文明的使命ノ一端タルト共ニ滿蒙開發ノ要訣ニシテ、應ニ、會社ノ努力スヘキ所ニ係ル。而シテ、醫術ノ普及ハ、醫師ノ養成ヨリ急ナルハナキヲ信シ、會社ハ、早ク滿洲ニ醫學校ヲ設クルノ意アリ、其ノ調査準備ヲ爲スコト數年、麼奉天總督、其ノ他支那官憲ト交涉シテ、其ノ賛同ヲ求メ、計畫熟スルヲ待チ、一九一一年六月、奉天附屬地ニ、南滿醫學堂ヲ設立ス。

斯クシテ支那人醫師ヲ養成スルト同時ニ、將來、此ノ方面ニ活動スヘキ日本人醫師ヲ養成スルハ、實ニ本學堂ノ主タル目的ニシテ、其ノ他一般醫學的研究、殊ニ、滿洲特有ノ疾病、竝ニ、人類的關係ヲ研究スルモ、又其ノ任務ニ屬ス。本醫學堂ハ、日支協同ノ實ヲ現ハス爲メ、東三省巡閲使兼奉天督軍兼署省長ヲ、名譽總裁トシ、奉天省長公署教育科主任ヲ名譽顧問トシ、又、支那側ヨリ幹事一名ヲ出サシム、目下學生一六五名。

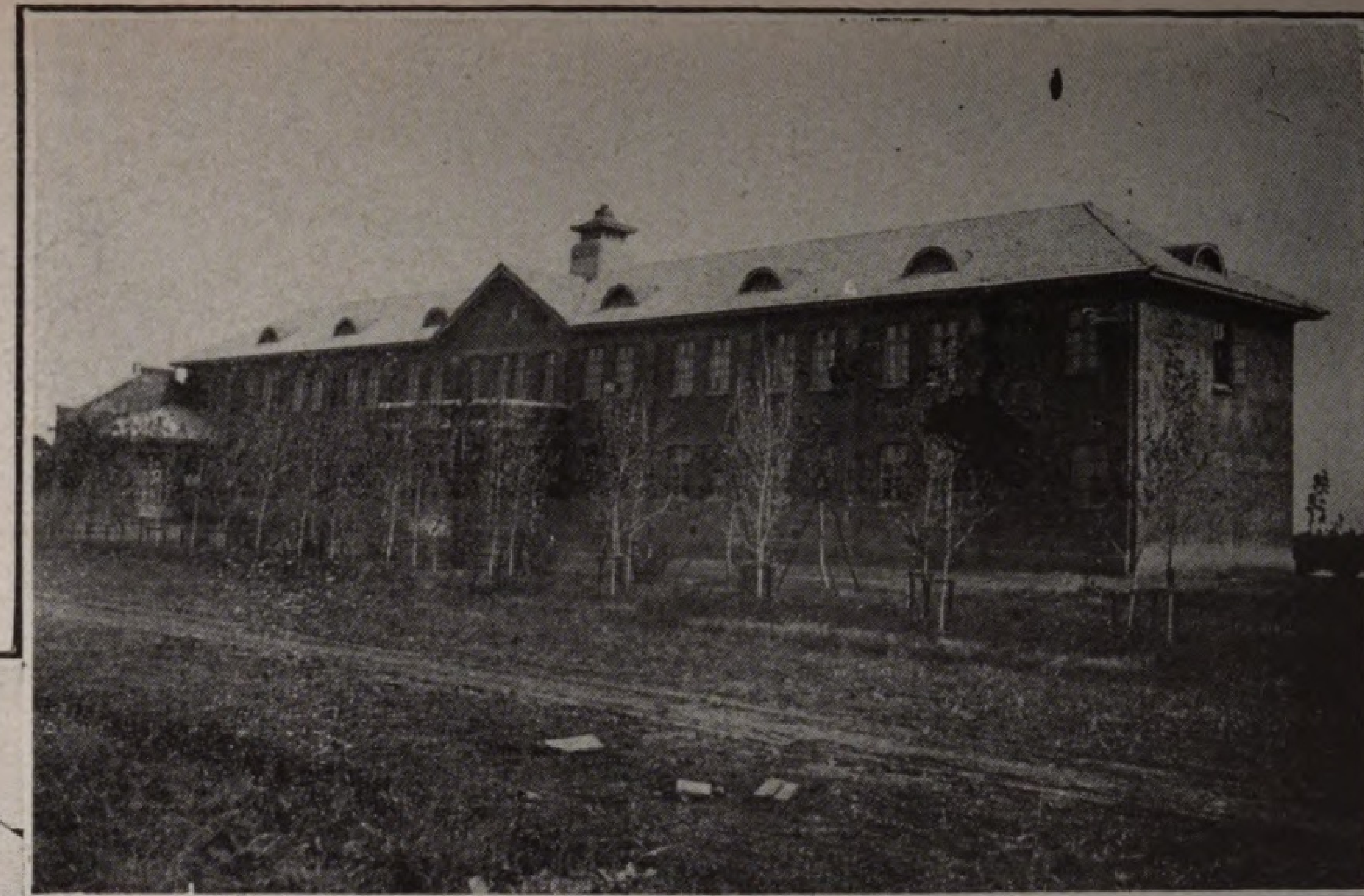
教育施設（其六）



奉天小學校外景



開原公學堂



奉天中學校



奉天實科女學校内部

學生ハ、悉ク之ヲ寄宿舍ニ收容ス、初メハ、總テ授業料ヲ免除セシモ、大正四年度ヨリ、日本人學生ニ限リ、之ヲ徵收スルコトトナセリ、現在、奉天省及黑龍江省ヨリ、官費ヲ給シ派遣セラレタル支那人學生五十二名アリ。本社ハ、本堂ノタメ、創立以來一、四〇〇、〇〇〇圓ヲ費セリ。

(ホ) 宗教教育

教育事業トシテ、宗教教育モ亦、其ノ重要ナルモノノ一タル事ハ、論ヲ俟タス。滿洲ニ於ケル、宗教教育ハ、主トシテ、キリスト教ノ施設ニ係リ、一方教化事業ト併行シテ、一般教育事業ヲモ、施シツツアリ。而シテ、近時教會及日曜學校、幼稚園ノ發達、漸次、好況ニ向ヒツツアルハ、滿洲ノ爲、洵ニ、喜フヘキ處ナリ。今、之カ概況ヲ錄取セハ次ノ如シ。

滿洲及其ノ附近ニ於ケル日本人基督教會及附帶事業概況

教會

教會	所在地	創立年	信徒數	教師數	會堂
日本基督教會 Presbyterian	長春	一九一五年	八〇	一	一

日本キリスト教會講義所	鐵嶺	一九一六年	三〇	奉天兼任	一
日本キリスト教會	奉天	一九〇七年	二〇〇	二	一
組合教會 Congregational	奉天	一九一七年	五〇	一	一
朝鮮人教會	奉天	一九二〇年	三〇	鮮人教師一人	
日本キリスト教會	撫順	一九一〇年	一〇〇	一	一
東洋宣教會 HolinesS	撫順	一九一五年	四〇	一	一
日本キリスト教會	安東	一九〇七年	九〇	一	一
組合教會	遼陽	一九一二年	三〇	一	一
組合教會講義所	鞍山	一九一六年	四〇	遼陽兼任	
同	熊岳城	一九一九年	五	大連兼任	
同	瓦房店	一九一九年	三〇	同	
美以教會講義所	營口	一九一八年	二五	一	
日本キリスト教會	旅順	一九〇七年	一二〇	二	二
日本キリスト教會	大連	一八九六年	三五〇	一	一
日本キリスト教會講義所	沙河口	一九一四年	三〇	一	一
組合教會	大連	一六一三年	一三五	二	一
聖公會 Episcopal	大連	一九一二年	一三〇	一	一
美以教會	同	一九一九年	七〇	二	一
救世軍小隊	同	一九〇九年	一五〇	二	二

救世軍分隊	沙河口	一九一五年	三〇	大連兼任	
救世軍事業部	大連	一九〇六年	救濟人員一,三〇〇名		
慈惠病院	同上	一九〇六年			
基督教青年會	大連	一九一二年	會員八〇〇	事務員七	一
英語夜學校	同上	一九一二年	生徒數二〇〇	教師數六	

其ノ教育施設

教派	所在地	日曜學校 生徒數	日曜學校 教師數	日曜學校 校數	幼稚園 生徒數	幼稚園 教師數	備考
日本基督教會 Presbyterian	長春	七〇	四	一			
日本キリスト教會	奉天	一五〇	九	一	五〇	二	
組合教會 Congregation	奉天	六〇	四	一			
日本キリスト教會	撫順	九〇	五	一			
東洋宣教會 Holiness	撫順	六〇	三	一			
日本キリスト教會	安東	八〇	五	一			
組合教會	遼陽	六〇	三	一			
日本キリスト教會	旅順	一五〇	八	二			
日本キリスト教會	大連	二〇〇	一〇	一	五〇	三	

組合教會	大連	一六〇	九	二	四〇	二
聖公會 Episcopal	同上	四〇	三			
美以教會	同上	六〇	六	一		
救世軍小隊	同上	一五〇	八	二		
英語夜學校	同上	大連青年會附屬				
留學生	大連組合教會ハ、女醫學校創設ノ目的ヲ以テ、支那婦人八名、及傳道師養成ノ爲、支那男子二名ヲ同志社ニ入學セシメツツアリ。					

三、幼兒保育

氣候風土ノ關係上、幼兒ノ健康ハ、最モ留意ヲ要スルモノアルヲ認メ、明治四十二年度以降、小學校舍、其ノ他適當ナル設備ヲ利用シテ、必要ニ應シ、幼兒運動場ヲ開設シテ、専ラ遊戲運動ノ方法ニ依リ、學齡前ノ幼兒ヲ保育ス。運動場一四箇所、幼兒數一、〇二一、保姆數三八名、此ノ外、地方有志者ノ經營ニ對シテ、會社ノ補助スルモノ六箇所。

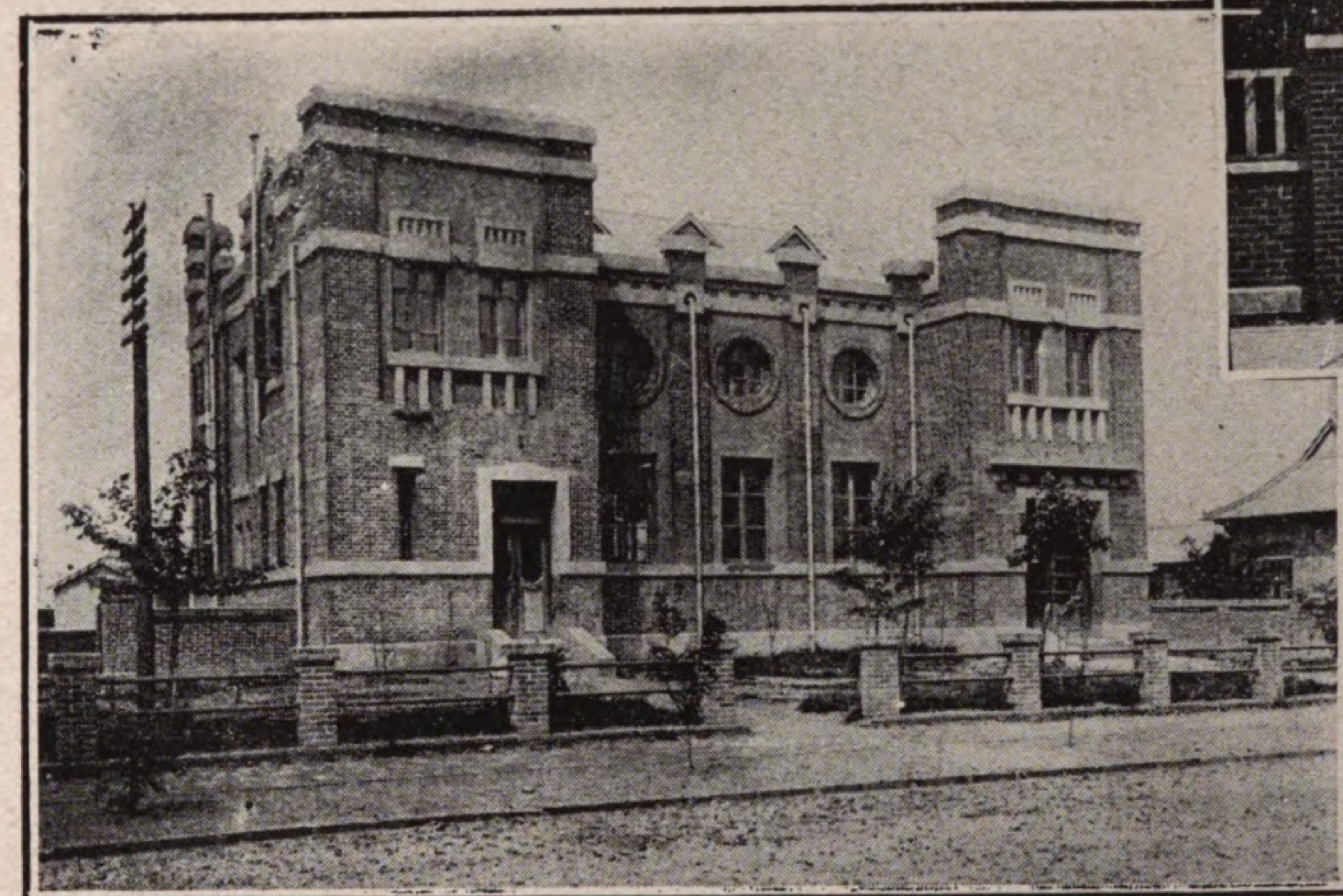
四、社會教育

社會教育ノ一端トシテ、各地ニ、智育、德育、體育全般ニ亙リテ、講習會ヲ開催シ、又大連及奉天ノ圖書館ノ外、沿線主要地ニ、簡易圖書館ヲ設置シ、常備圖書ノ外、巡回書庫

教育施設（其八）



大連滿鐵圖書館



撫順圖書館

教育施設（其八）



簡易圖書館閲覽狀況（大連）



簡易圖書館巡回書庫列車運搬狀況

ヲ編成シテ、圖書館ニ回送シ、一定期間之ヲ留置キ、常備圖書ト相俟ツテ、一般讀者ノ閲覽ニ供シ、主トシテ、貸出ノ方法ニヨリ、地方讀書趣味ノ開發向上ニ努メ、圖書館ヲ有セサル、主ナル中間驛地方ニ在リテハ、巡回書庫ノ小箱ヲ作製シ、貸出普及ノ途ヲ開ケリ。目下、之ヲ設置セルハ一九箇所、小箱ノ回付先二一〇箇所ニシテ、是等各簡易圖書館ニハ、簡易圖書館讀者會ヲ組織シ、毎月一定ノ會費ヲ徴收シ、會員ニ對シ其ノ希望スル所ノ圖書ヲ配付シ、坐ナカラニシテ自由讀書ノ便ヲ圖リ、頗ル好成績ヲ收メツツアリ。尚、列車内ニモ書庫ヲ配置シ、其ノ數十箇列車ニ達シ、讀書獎勵機關ハ、殆ムト全沿線ニ普及スルニ至レリ。

五、敎員ノ養成

本社カ、支那人敎育ノ施設ヲ始ムルヤ、先ツ、之カ敎員養成ノ目的ヲ以テ、一九一二年、附屬地小學校敎員三名ヲ選拔シ、二箇年間、奉天、北京ニ於テ、支那語及支那事情ノ實地研究ニ從事セシメ、爾來、今日ニ至ルマテ、年々二名宛、北京ニ留學セシメ、一九一三、年新ニ敎員講習所ヲ設ケ次テ一九一五年敎育研究所ト改メタリ。

六、敎科書ノ編纂

支那人ニ對スル敎育事業ノ施設經營、其ノ歩ヲ進ムルニ從ヒ、之カ敎科書ノ編纂、

亦急要ヲ感スルニ至レリ。是ニ於テカ、本社ハ、數年前ヨリ、此等教科書編纂ノ事業ヲ計畫シ來レリ。

七、教育調査

本社カ、國家的機關トシテ、公共教育ノ責任ヲ負ヘル以上、滿蒙、支那竝ニ東洋一帶ニ渉リ、風教文化ノ制度機關實際ノ情況等ヲ調査シ、以テ、隣邦輔翼ノ大業ヲ成就セシメムカタメ、適當ナル施設ヲ講スヘキ基礎的資料ヲ蒐集スル必要アルハ、言ヲ俟タス。又、一面、滿洲ニ於ケル我子弟ノ教育ヲシテ、時勢ノ進運ニ順應セシメムニハ、必スヤ、先ツ、兒童竝ニ其ノ環境ニツキテ、確實ナル科學的調査ヲ遂ケ、其ノ方法ノ基礎ヲ立テサルヘカラス。是ニ於テカ、大正七年、如上ノ目的ヲ以テ、調査事業ヲ開始シ、先ツ、兒童成績ノ評價ニ關スル謬差ノ實際、兒童カ賦有セル觀念型式ノ種類等ニツキテ、調査スルト共ニ、一方、滿蒙ニ於ケル支那政府ノ文化政策、竝ニ、其ノ施設ノ實際ニツキテ、調査ヲ遂クルコトト爲シタリ。

第七章　警備施設

一、消防

警備施設



大連消防組（一九〇八年設置）



長春消防組（一九〇八年設置）

會社業務開始當時ニ於テハ、工場其ノ他必要ノ場所ニ、若干ノ消防器具備付アリ

會社業務開始當時ニ於テハ、工場其ノ他必要ノ場所ニ、若干ノ消防器具備付アリシノミニテ、一般消防機關トシテハ、何等見ルヘキモノナカリキ。爾來、漸次戸數、人口ノ増加スルニ從ヒ、消防組織ノ必要ニ迫リ、一九〇八年七月、消防規定ヲ定メ、大連ニ本部外八組、奉天、長春外四箇所ニ消防組ヲ設置シ、相當ノ器具ヲ配置シ、同年十月ヲ以テ、役員以下消防手ヲ任命シタリ。

次ニ、一九一七年末以來、大連埠頭構内野積場ニ於テ、原因不明ノ火災頻發、被害金額亦巨額ニ上レルニ鑑ミ、之カ警防ノ爲メ、一九一八年七月、補助消防組埠頭組ニ、專務消防手日本人四名支那人一六名ヲ増置シ、又、沿線市街地發展ニ伴フ必然ノ要求、及、倉庫營業ヲ營ム主要驛ニ於ケル倉庫、並ニ野積貨物火災警防ノ爲メ、一九一九年一月以後、沿線主要驛ニ消防組ヲ設置セリ。目下、總人員一、七〇〇人ヲ數フ。

二、治安警察

大連及沿線附屬地居住者ノ安寧ヲ維持シ、圓滿ナル發展ヲ期スル爲メ各公費區ニ、當該區費ヲ以テ、巡視又ハ夜警ヲ配置シ、民政署、警務署、守備隊及憲兵隊等ト、氣脈ヲ通シ、賊難火災其ノ他ノ危害防止ノ事ニ當ラシムル制度ヲ採用シ來リタルモ、警備機關ノ統一上、一九一五年以降、大連ヲ除ク外、沿線附屬地樞要ノ箇所ニ、請願巡査

五六名ヲ配置シ、所轄警務員ト協力セシムルコトトナレリ。

（イ）　鐵道經營上ノ警備

鐵道ヲ防護スルニ付テ、滿洲ニ於テハ、特殊ナル一ノ目的アリ、开ハ天災、又ハ猛獸等ノ襲擊ヨリ鐵道ヲ安全ニ保持スルノ謂ニアラスシテ、全ク人爲的ナル强盜及人民等ノ鐵道運輸ノ妨害ヲ除キ、又ハ之ヲ未然ニ防クニアリ。交通機關ニ對シテ、如上ノ人爲的危害ヲ惹起スルカ如キハ、之カ經營ノ任ニ當レル者ヨリ見レハ、眞ニ遺憾ノ極ナルモ、之カ根源タル支那內地ノ肅正ヲ見サルニ於テハ、如何トモスヘカラス故ニ日本ハ消極的ニ鐵道ノ通過セル極メテ狹小ナル土地上ニ於テ是等ノ危害ヲ防止スルノ手段ヲ取ラサルヘカラス。這ハ露國カ鐵道ノ經營ニ當レル當時ヨリ權利トシテ執レル手段ニシテ、又警備ノ弛緩ニアリテ、如何ニ運輸上ニ危險ヲ及ホスヘキアリ、露國兵力ノ減退セル時期ニ於ケル、東支鐵道ノ例ニ見ルニ明カナル處ナリ。人爲的危害トハ、强盜團ノ襲來、汽車ニ加ヘラルル銃擊及投石、鐵道建設物ノ破壞、電信電話線ノ切斷及盜難、鐵道ニ於ケル放牧、竝ニ石塊、枕木、其他ノ物體ヲ軌道上ニ置ク運轉ノ妨害等是ナリ、此等ノ犯罪事件ハ悉ク支那人ニ依リテ爲サルルモノニシテ、又犯罪人ノ多クハ支那ノ行政地域內ニ居住セル者ナルヲ以テ、若シ支那警察

及軍隊ニ於テ完全ナル取締ヲナスニ於テハ、鐵道交通ハ他ノ文明國ニ於ケルト同樣ニ、是等ノ危險ヲ免ルヘキモノナリ。然ルニ不幸ニシテ支那側ノ取締ハ、此ノ點ニ於テ遺憾ナキノ程度ニ達セス。爲ニ鐵道ヲ利用スル旅客及商人ハ支那ノ警察力ヲ信頼シテ、生命財産ノ安固ヲ期スル能ハサルニ由リ、日本ハ責任上自己ノ警備力ヲ應用セサルヘカラサルニ至レルハ、日本ノ爲ニモ不利益ナリト謂フヘキナリ。上記犯罪ノ内、現今迄ニ判明セル事件左ノ如シ。

運轉妨害	四六三件
貨物及鐵道用品盜難	一、二九三件
列車內ノ强盜、竊盜	一四六件
電信、電話線ノ切斷及盜難	三一件（損害百圓以上ノ事件ノミ計上セリ百圓未滿ノ被害ハ一年三、四十回ニ上ルコトアリ）

(ロ) 附屬地ノ警備

以上ハ直接鐵道經營上警備ヲ完全ニスル理由ナルカ尚此ノ外ニ鐵道及附屬地ノ警備ヲ爲ササルヲ得サル理由アリ、抑モ鐵道附屬地設置ノ直接目的ハ、鐵道營業ヲ完全ニ遂行スルニ在リト雖、一般文化ノ進マサル支那內地ニ於テハ、附屬地內ニ於ケル諸種ノ施設ハ、其ノ地方ノ一般施設ノ模範トナリ、文明的都市經營及政治ハ

附屬地ヲ搖籃トシテ、漸次支那內地ニ普及スルヲ常態トス、是ヲ以テ鐵道附屬地ニ隣接セル支那市街ト、遠隔ナル支那市街トノ文明的施設ハ、其ノ市街ノ大小ニ依ルヨリモ、寧ロ附屬地トノ距離ニ依リテ、文明進步ノ程度ヲ異ニスルヲ見ル。是ニ增シテ附屬地カ支那社會ニ與フル影響ハ治安上ノ效果ナリトス。支那內地ノ治安ハ、主トシテ支那軍隊及警察ニヨリテ維持セラルルモノナルカ.由來東三省ニハ馬賊ト稱スル强盜ノ集團處々ニ出沒シ、大規模ノ奪掠ヲ行フコト頗ル頻繁ニシテ、之カ爲ニ地方人民ハ素ヨリ支那官衙ノ如キモ、損害ヲ被リタル例甚多シ。

例ヘハ邦人カ支那內地ニ於テ馬賊ノ被害ニ遭ヒタルモノ過去八年間ニ於テ三百九十二回ニ達シ附屬地及租借地ヲ襲擊シタル件數過去十五箇年ニ一千六百六回ニ達セリ。

然ルニ之ニ對スル支那軍隊及警察ノ治安能力ハ前述ノ如ク不幸ニシテ未タ徹底的程度ニ發達シ居ラサルヲ以テ、行旅者ハ勿論、屢一村落ヲ擧ケテ、奪掠者ノ犧牲トナルノ不幸事ヲ惹起スルコトアリ。而シテ渠等賊徒ノ內、鐵道ヲ利用シテ其ノ蹤跡ヲ晦マシ、以テ逮捕ヲ免レムトスル者アリ、是ニ以テ日本官憲ハ、啻ニ鐵道營業上ニ警備ノ必要ヲ感スルノミナラス、亦支那ノ治安ヲ援助スル爲ニモ、附屬地ノ警備

ヲ嚴ニスル必要ヲ生ス。

(八) 犯罪人ノ引渡

日本官憲ハ、如上ノ賊徒又ハ不逞ノ徒ヲ附屬地內ニ於テ發見セル場合ハ、悉ク之ヲ逮捕シテ附近ノ支那官憲ニ引渡シ、(賊徒等カ附屬地ニ於テ何等犯罪的行爲ナカリシ場合ニ於テモ亦然リ)之カ根絕ヲ期シツツアリ。

今右ノ如キ犯罪人ノ引渡數ヲ示セハ左ノ如シ。

犯人引渡調、自一九一四年至一九二一年(關東州內ニテ檢擧セルモノ)

年別	犯罪種別	件數	人員
一九一四年	海賊	三	三〇
一九一五年	馬賊	二	六
同	強盜	一	六
同	海賊殺人	六	二二
一九一六年	強盜人質拉去	一	四
同	馬賊	三	五
一九一七年	海賊	二	二
同	強盜	一	一
一九一八年	謀殺	一	一

同	强盜人質拉去	一	一
一九一九年	海賊	二	一二
同	馬賊	二	二
同	强盜	一	一
同	横領	一	一
一九二〇年	馬賊	二	九
同	强盜	三	五
同	殺人死體遺棄	一	一
同	窃盜	一	一
一九二一年	馬賊	二	一四
同	婦女誘拐	一	一
合計		三八	一五〇

同　上（自一九〇九年至一九二〇年（鐵道附屬地ニテ檢擧セルモノ））

竊盜	一三、一八二人
馬賊及强盜	一、四五七
其ノ他	九、三二〇
合計	二三、九五九

右ノ犯罪人ハ、日本及支那國間ニ犯罪人引渡條約アリテ、日本カ義務トシテ引渡

ヲナスニアラスシテ、唯支那ノ治安ヲ維持スル上ニ於テ斯クスルヲ必要ト認メ、日本カ其ノ義務ナキニ拘ラス、好意的ニ引渡ヲナスモノナリ。

(二) 支那ノ公安

右ノ如ク日本ハ附屬地内ニ於テ、警備ヲ嚴ニセルヲ以テ、附屬地ハ平時ニ於テ居住者ノ生命財産ヲ安全ニスルノミナラス、一旦支那内亂暴動等ノ場合ニ於テモ亦地方居住者(主トシテ支那人)ノ爲ニ好箇ノ避難地トナルモノナリ。吾人ハ、支那ノ革命ニ際シ起リタル戰亂、及其ノ擾亂ヲ利用セントシテ鋒起シタル、各地ノ匪賊ノ亂ヲ避クル爲メ、支那官民ノ多數カ生命ト財産トヲ、附屬地ノ警備ニヨリテ、安全ニ保チ得タル實例ノ枚擧スヘカラサルヲ知ル。此等避難民中、大連港ニ來リテ他地方ニ避難シタル數ハ一九一一年、十一月以降翌年三月ニ至ル間ニ於テ、八千五百五十五人ニ上レリ、是レ等ハ、他地方ヨリノ移住者等ニシテ、遠地ニ避難スルノ資力充分ナル者ノミナルヲ、記憶セサルヘカラス。

尙ホ左ニ馬賊其ノ他賊徒ニヨル被害數及其ノ檢擧數ヲ示セハ左ノ如シ。

馬賊ノ附屬地襲擊事件數

邦人旅行者ノ馬賊被害調

年次＼州別	州内 件數	州内 被害金額	州外 件數	州外 被害金額
一九〇六年	一五五	六六、三五〇円	九	五、六八三円
一九〇七年	四六	二、四三八	三三	四、〇七一
一九〇八年	四九	二、七九四	三〇	六、七五三
一九〇九年	三二	三、一〇一	四六	一九、〇三〇
一九一〇年	一九	一、三〇〇	三四	三、九五三
一九一一年	一五	五七一	五七	三、八〇六
一九一二年	九	一、六一〇	三三	三、八二四
一九一三年	一〇	五六五	六九	一〇、四二三
一九一四年	二五	一、二九六	六四	二一、五四九
一九一五年	二九	一、二六二	八六	一三、一三六
一九一六年	四三	二、五八六	七一	一三、六三〇
一九一七年	三〇	三、六三〇	九九	三五、六三七
一九一八年	二八	五、七五六	八二	六三、二五一
一九一九年	五一	七、〇六四	一〇六	六四、八三八
一九二〇年	六四	一二五、八一六	一八三	八三、八四四
計	六〇五	二一八、一三九	一、〇〇一	三七一、四一六

年別	管轄	被害件數	被害人員	賊ノ爲 死亡	賊ノ爲 重傷	賊ノ爲 輕傷	被害見積價格	賊ノ數
一九一三年	管內	七	七	一	—	—	二円	六五
	管外	一三	二一	一	三	三	五、五六九	八〇
一九一四年	管內	一二	一四	三	二	一	八、五八〇	三五
	管外	一三	一九	—	六	四	三、五三九	一七五
一九一五年	管內	一二	一五	—	六	四	二、八八三	四〇
	管外	三二	四二	—	二	一	八、一二六	三一八
一九一六年	管內	一五	一六	三	四	七	九七三	三四
	管外	四三	五三	三	八	五	八、四〇四	三〇六
一九一七年	管內	一九	二五	五	五	一一	一、三三六	六五
	管外	四九	五八	三	九	二	一五、一一八	二五四
一九一八年	管內	一七	一八	二	六	三	五、八三〇	六四
	管外	三五	四一	四	一〇	五	一六、七六八	一五一
一九一九年	管內	三五	四四	一〇	九	五	八、一九〇	七一
	管外	三六	五一	一三	八	六	一五、六九三	三二〇
一九二〇年	管內	三二	四一	三	五	二	四、八八八	六一
	管外	二四	三〇	三	一二	三	一七、八九九	三九
計	管內	一四七	一八〇	二七	三七	三四	三三、六九一	四三五
	管外	二四五	三一五	二六	五八	二九	九一、一一六	一、四四三

被害年別	被害種別	件數	價格	摘要
一九一六年	電話線竊盜	四	一〇一円	架設線ヲ切斷シ竊取ス
一九一七年	同	一三	五五一	同
一九一八年	同	九	三九〇	同
一九一九年	同	三	四九七	同
一九二〇年	同	二	三〇三	
計		三一	一、八四二	

注意　本表ニ計上セル件數ハ一件ノ被害見積金額百圓以上ノモノニシテ夫レ以下ノ被害ヲ計上スレハ年トシテ多少ノ被害ナキハナカルヘク時ニハ一箇年三、四十件ニ上ルコトアルヘク思考サル

檢擧人員表（鐵道附屬地內ニ於ケル支那人）

年別	犯罪別				
	竊盜	馬賊	強盜	其ノ他	計
一九〇九年	一、一四八	一	一〇三	四七四	一、七二五
一九一〇年	一、〇九三	一五	七〇	五三四	一、七一二
一九一一年	七九九	六	三三	八六三	一、七〇一
一九一二年	九五九	一六	三九	六七八	一、六九二

一九一三年	八〇八	三三	九六	六九七	一、六三四
一九一四年	一、〇三三	五五	六四	七二五	一、八八二
一九一五年	一、〇二四	四五	一三〇	七三五	一、九四六
一九一六年	一、〇〇三	五四	一一一	五一〇	一、六七八
一九一七年	一、〇三三	四六	一三八	七三七	一、九六三
一九一八年	一、三三八	六三	一一六	九一七	二、四二四
一九一九年	一、二八四	三	六五	一、一九三	二、五七三
一九二〇年	一、六七二	一四	一三四	一、二一一	三、〇三〇
計	一三、一八二	三七八	一、〇七九	九、三三〇	二三、九五九

第八章　產業施設

一、農事試驗場

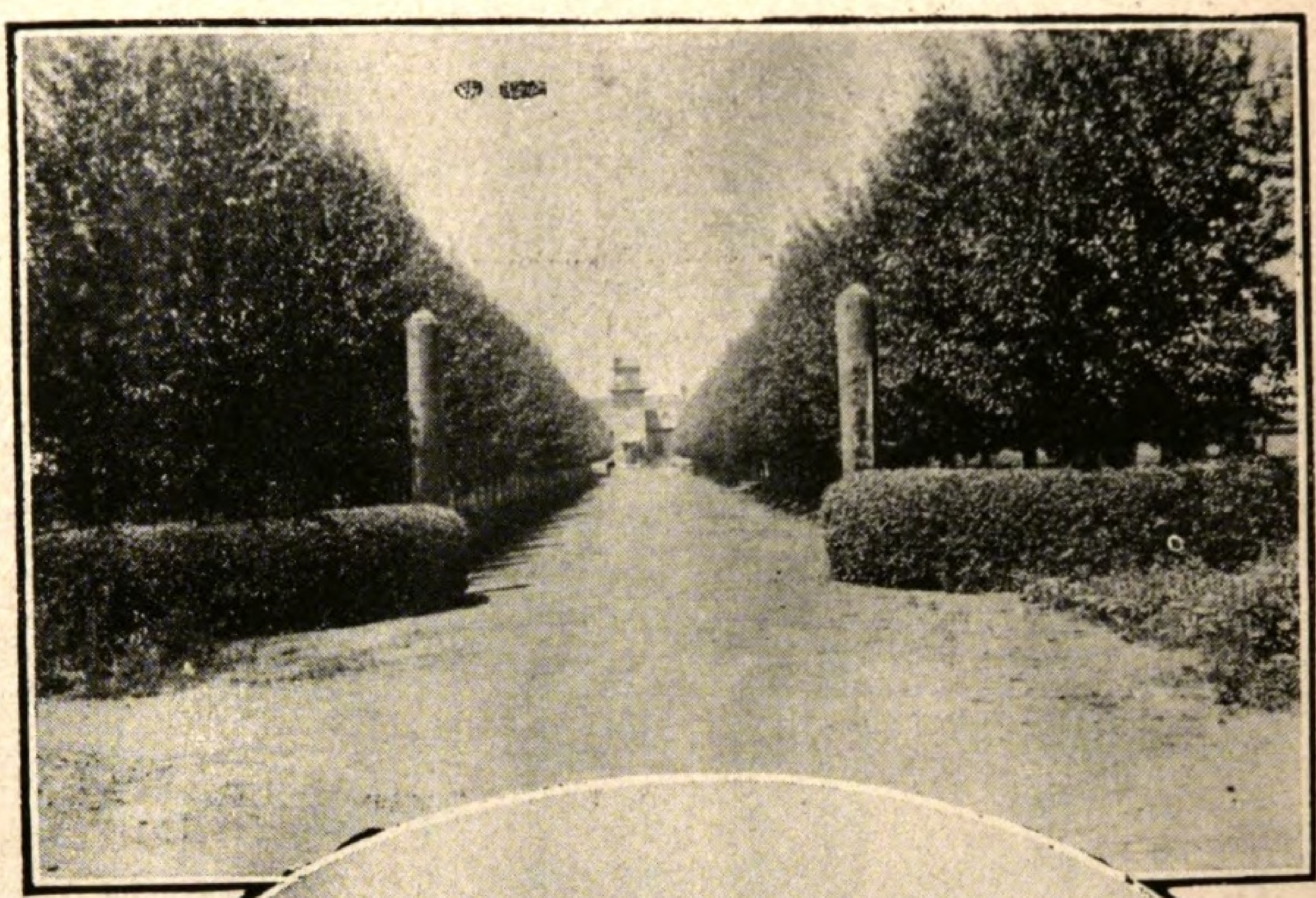
從來、本社直屬ノ熊岳城苗圃及遼陽、鐵嶺、長春各地方事務所所屬苗圃ニ於テ、樹苗育成ノ傍ラ、一部ノ地ヲ割キ、多少農作物ノ試驗ニ著手セルモ、特ニ記スヘキモノナカリシカ、滿洲ニ於ケル生產業ヲ改良シ、利源ヲ開發スルノ機運、將ニ熟セルヲ認メ一九一三年度ニ至リ、始メテ、公主嶺ニ產業試驗場本場ヲ、熊岳城ニ同分場ヲ設置シ、同年度ニ於テ、更ニ長春、鐵嶺、遼陽ノ三苗圃ヲ擇ヒ、各地方ニ必要ナル農事試驗ヲ施

行スルコトトシ、試作方法ニ改善ヲ加ヘ、一九一四年度ニ至リ、大石橋管內白旗ニ「アルカリー」試驗地ヲ設ケシカ、一九一八年度ヨリ、之レヲ湯崗子ニ移シ、試驗ヲ續行セリ。一九一七年度ニ於テ、鄭家屯ニ試作農場ヲ新設セリ。尙、從來實施シ來リタル水稻ノ委託試驗ヲ續行シ、別ニ一九一六年度ヨリ、沿線要地ノ日支篤農家ニ、甜菜委託栽培試驗ヲナセシモ、一九一九年度一先ツ打切リ、之ニ代ルニ「ジユート」ノ試作ヲ始メタリ。尙一九一八年度、新ニ鳳凰城、得利寺ノ二箇所ニ、煙草試作場ヲ設ケ、煙草ニ關スル研究改良ヲ創メタルニ、其ノ成績頗ル好良ナリシヲ以テ、米國種試驗ニ重キヲ置キシ鳳凰城試作場ハ、東亞煙草會社ノ希望ヲ容レテ、一九一九年度ヨリ、其ノ設備一切ヲ擧ケテ貸與シ、經營ヲ繼承セシメタリ。上記各試驗場ノタメ要スル地積七五〇英畝ニ及フ。

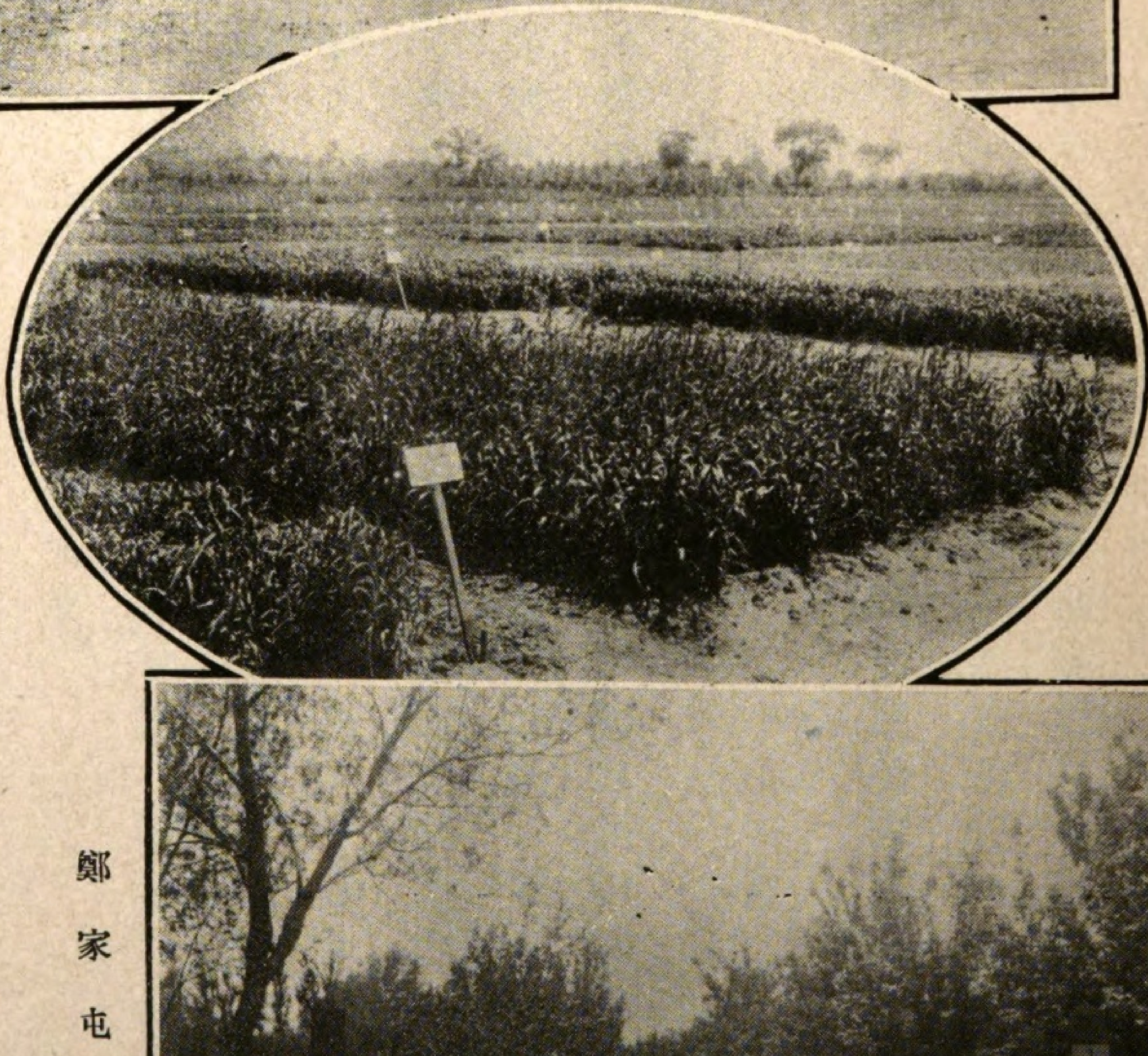
二、苗圃及植樹

鐵道沿線ノ地タルヤ、多年、土民濫伐ノ結果、看ルヘキ樹林殆トナク、滿目蕭蓼ヲ極ム。是ヲ以テ、一九〇七年來、農事試驗場ニ於テ苗木養成ヲ計ルト同時ニ、植付ヲ進メ、現今ニ於テ、沿線附屬地ヲ初メ、各地ニ植付ヲ了シタルモノ、實ニ六、二〇〇、〇〇〇本トス。

産業施設(其一)



公主嶺農事試驗場
一九一三年四月設立



熊岳城農事試驗場
一九一三年設立



鄭家屯苗圃
一九一七年設立

三、農事奬勵

本社ハ、産業上緊要ナル各般ノ施設ヲ爲シ來リタル外、附屬地居住農民ニ對シ、指導奬勵ヲ怠ラス。其ノ概要ヲ示セハ、土著農業者ノ保護、肥料ノ配附及ソノ使用方法ノ誘導、肥料ノ輸移入ニ對シテハ運賃ヲ低減シ、耕地ノ整理、排水溝ノ設置、灌漑用井戸掘鑿及無料使用、農業用種子ノ頒布、乳牛改良及資金貸付、獸疫豫防等、枚擧ニ遑アラス。

四、農耕資金貸付

附屬地外ニ於ケル本邦人及支那人ノ農耕地經營ニ對スル援助ハ、邦人ノ滿洲發展上緊要ナルコトニシテ、又農業奬勵ノ途ナリ。然リト雖、其ノ實現ニ方リテハ、事業ノ性質上、耕地ノ收得及施設等ニ巨資ヲ要シ、企業者單獨ノ資力、克ク之ニ應スルコト能ハス。而シテ、此缺陷ヲ補フヘキ金融機關ハ、尚未タ全カラスト雖、各種事業ノ勃興ニ從ヒ、漸次之カ設立ヲ見ルニ至ルヘシ、而シテ、從來、本社ノ是等企業者ニ對シ供給セル資金ハ、低利且極テ寛大ナル條件ヲ以テ供給シ、其ノ額現在金四〇八、〇〇〇圓、收得耕地ノ廣袤總計約一七、〇〇〇英畝ヲ算セリ。

五、產業調査

森林調査ヲ初メ、農事調査、内外人移入趨勢、甜菜糖業、棉花栽培等、各般ノ資源ニ亙リ、鋭意廣ク滿蒙ノ開發ニ力ムル處アラントス。

第九章　商工施設

一、商務會

從來長春、公主嶺、開原等ノ鐵道附屬地ニハ、商務會又ハ公議會ト稱スル、支那人商工業者ノ機關アリ。就中、長春商務會最モ完備シ、重要物產及外國貨幣ノ取引ヲモ經營シ來リシカ、本社ハ、是等附屬地內ニ於ケル商工業者ノ機關ヲ助長誘掖スルハ、附屬地經營上必要ノコトト認メ、一九一三年一月十五日、附屬地商務會通則ヲ制定シ、商務會公議會等其ノ名稱ノ如何ニ拘ラス、是等ノ機關ハ、凡テ、此通則ニ依ル商務會ノ組織ニ改メシムルコトト爲セリ。一九一三年二月十一日、長春頭道溝商務會ヲ、一九一四年七月一日公主嶺商務會ヲ、各之ニ依ル商務會ト認定シ、次テ一九一四年九月十五日、雙廟子商務會、一九一七年十月五日奉天日界商務會ノ設立ヲ認可シタリ。又、開原華商公議會ハ、多少通則ニ準據セサル點アルモ、漸次指導改善スルコトトシ、一九一二年八月二十日之カ設立ヲ承認セリ。長春頭道溝商務會ニ於テ施行シ來リ

シ、重要物産及外國貨幣ノ取引ハ、一九一六年四月三日關東都督府長春取引所ノ開所ト共ニ、之ヲ廢止シタリ。其ノ後一九一九年五月二十八日、四平街商務會ノ設立ヲ認可シ、而シテ、商務會ナル機關、漸次各地ニ設立セラルルニ至レリ。

二、商業會議所

地方開發上、商業會議所ノ存在ヲ必要トスルハ、謂フ迄モナキコトニシテ、本社ハ、商業機關援護ノ意味ヲ以テ、大連商業會議所ニ年額五、〇〇〇圓ノ補助金ヲ交付シ、一九一八年度ヨリ、奉天商業會議所ニ年額二、〇〇〇圓ノ補助ヲ爲ス。安東商業會議所モ、一九二〇年一月、組織改正以來、本社ニ於テモ、經費ノ一部ヲ補助スルコトトシ、最近設立ノ長春商業會議所ノ設立ニ關シテモ、本社ハ、他ノ例ニ倣ヒ、年額三、〇〇〇圓ノ補助金ヲ交付セリ

三、商品陳列所

本社ハ、株式會社鐵嶺商品陳列館ニ出資シ、其ノ事業ヲ援助スル以外ニ、長春ニ、本社一機關タル、長春商品陳列所ヲ設ク。

四、特產物市場

附屬地ニ集散スル特產物ハ、悉ク糧棧院內(穀物問屋庭內)ニ於テ受渡ヲ爲スヲ以

テ、徒ラニ糧棧敷地ヲ廣クシ、且、取引者ニ不利不便尠カラサルヲ以テ、本社ハ、特產物主要都市ニ、現糧市場經營ノ計畫ヲ立テ、一九一六年十二月、長春ニ、翌年二月公主嶺ニ、市場ヲ設定シ、今日ニ至レルモ、慣習ノ久シキ短日月ヲ以テ、之カ取引方法ヲ改善スルコト至難ニシテ、未タ、豫期ノ成績ヲ擧ケ得サルモ、近キ將來ニ於テ、之カ大成ヲ期シツツアリ。

五、商工業奬勵

(イ) 商業

商業機關ニ對スル援助、又ハ、商狀調査等、間接ニ南滿洲ニ於ケル商業ノ隆盛ヲ圖ル一方、本社ハ、直接ニ商事會社ノ創立ニ干與シ、其ノ目論見ニシテ有望ナルニ於テハ、進ムテ之ニ投資ヲ爲シ、場合ニ依リテハ、本社員ヨリ重役ヲ推薦シテ、其ノ業務ヲ監視スルト共ニ、之カ指導誘掖ニ努メツツアリ。今本社カ、滿蒙ニ於ケル貿易助長ノ意味ヲ以テ、特ニ出資シタル商事會社ハ、ソノ數一三ニ及ヒ、ソノ總公稱資本、四三、六〇〇、〇〇〇圓ニ上ル。

(ロ) 工業

本社カ、商事會社ト同樣、株式引受ケノ方法ニ依リテ援助セシ、諸種製造工業會社

ハ一八ニシテ、ソノ公稱資本總計四五、〇〇〇、〇〇〇圓ニ達ス。

尙右ノ外、製造工業會社ノ債務ヲ保證シタルモノ、約一、〇〇〇、〇〇〇圓アリ。

(ハ) 溫泉旅館

沿線其ノ他樞要ノ地ニ於ケル旅館ノ設備ハ、旅客交通ノ便益上、忽緖ニ附ス可カラサルヤ論ナシ。本社ハ、運輸部ヲシテ旅館經營ヲ爲サシムルモ、到底不足ナレハ、本社ハ緩急ニ應シ、是等ノ經營者ヲ保護シ、低利ナル資金ヲ供給シテ、業務ノ刷新施設ノ改善ヲ行ハシメ、且、漸次、沿線各地ノ發展ニ伴ヒ、樞要ノ地ニ、旅館ヲ新設經營セシメタリ。

(ニ) 一般商工企業保護及調査紹介

滿蒙ニ於ケル企業ノ勃興ハ、會社ノ最モ歡迎スル所ニシテ、事業ノ性質及必要ニヨリ、之カ保護助長ニ力ヲ惜マス。卽チ、企業者ニ對シ、低利資金ヲ融通シ、又ハ補助金ヲ與ヘ、或ハ目論見ニ對スル本社ノ意見ヲ披攊スル等、極力事業ノ助長ヲ計ルト共ニ、其ノ經營ニ對シ、必要ノ監督ヲ怠ラサルナリ。又、滿蒙ノ商工業ニ關シ、時々具體的調査ヲ發表シ、商工業者ノ參考ニ資シ、尙其ノ質疑ニ應答シ、事業ノ紹介等ヲ爲スニ吝ナラサルナリ。

六、中央試驗所

中央試驗所ハ、一九〇八年七月、關東都督府ノ設立ニ係リ、滿洲ニ於ケル天與ノ富源開發ヲ企圖シ、將來事業計畫ノ基礎ヲ、學術的研究ト其ノ結果ノ實行トニ因リ、確立セサルヘカラサルヲ認メ、主トシテ殖產工業、及衞生ニ關スル試驗ヲ施行スルノ機關タリシカ、一九一〇年五月、會社ニ於テ之ヲ繼承セルモノナリ。爾來、會社ハ、漸次之ヲ擴張シ、其ノ組織ヲ變革シ、一九一七年十月、庶務、分析、應用化學、製絲、窯業、釀造、衞生、電氣化學ノ八課ヲ設ケ、益々學術的研究ヲ進ムルト共ニ、一般ノ分析、試驗及鑑定ノ依賴ニ應シ、汎ク企業者ノ計畫ヲ確立スルノ便宜ヲ圖リ、以テ、滿洲ニ於ケル工業、及衞生上ノ改良進步ニ資スル所アラムトス。而シテ成立ノ見込アルモノニ對シテハ、試驗工場ヲ起ス方針ヲ採ル。創立以來發見シタル事項ニシテ特許權ヲ得ルモノヲ擧クレハ、

特許番號	名稱	特許年月日
二八六二號	高粱酒ヨリ乳酸石灰ヲ製造スル方法	一九一五、一一、一九
三二七七三號	モンド瓦斯「タール」ヲ利用セル新消毒防臭劑	一九一八、六、三
三三六九七號	柞蠶繭處理法	一九一九、一、二一
三四五九三號	高粱酒釀造用トシテ高粱酒蒸餾粕ヲ利用スル方法	一九一九、六、二八



中央試驗所（外部）
一九〇八年設立



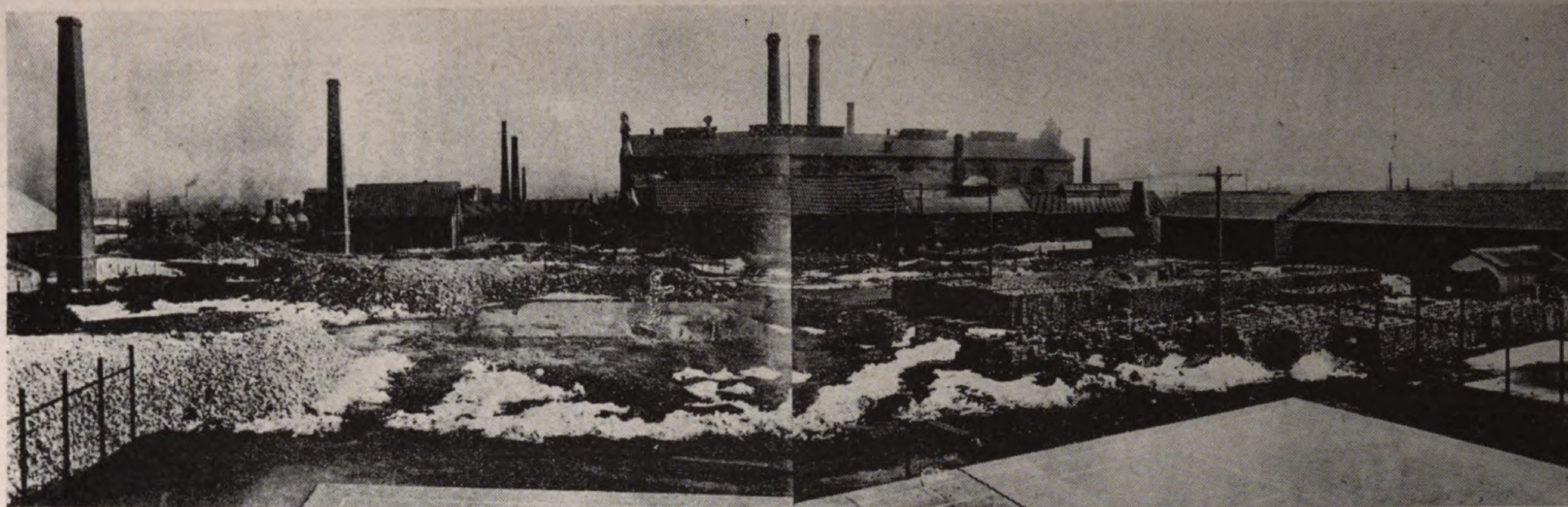
中央試驗所試驗室



中央試驗所
窯業工場硝子仕上場

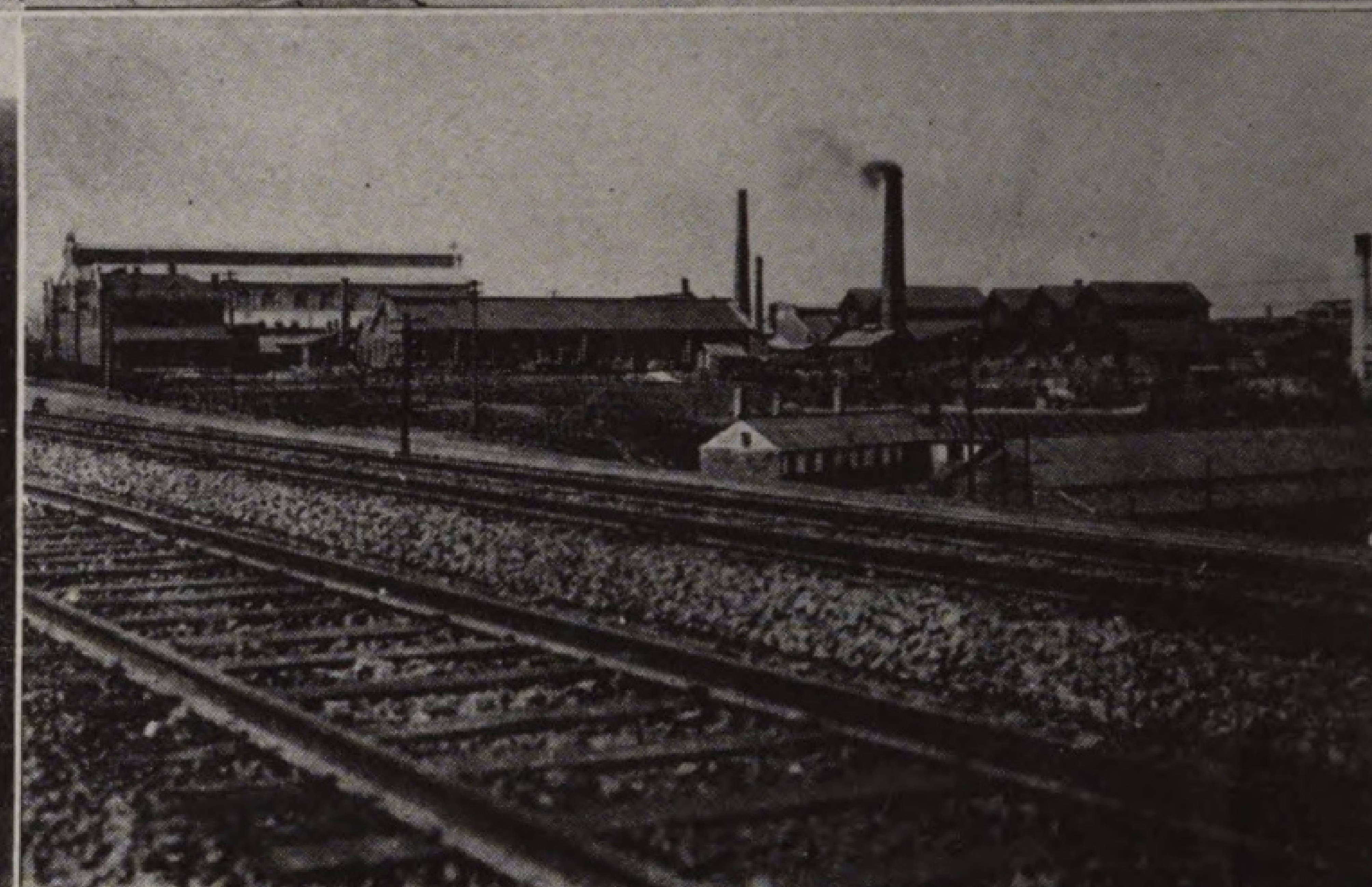
產業施設（其六）

窯業試驗所外部（其一）





窯業試驗所硝子工場



窯業試驗所外部（其二）

又茲ニ一九一二年以降ニ於ケル、依頼試驗件數ヲ擧クレハ左ノ如シ。

年次	試驗件數
一九一二年	四、〇二六
一九一三年	三、二一八
一九一四年	四〇五八
一九一五年	三、二六一
一九一六年	四、四三六
一九一七年	六、一八三
一九一八年	七、三四二
一九一九年	七、二三一

七、窯業試驗場

滿蒙ニ於ケル窯業ノ開發ヲ目的トスルモノニシテ、本社ハ研究部陶器工場耐火煉瓦工場硝子工場ヲ設ケテ、ソノ研究ヲ進メツツアリ。一箇年所要費用七〇〇、〇〇〇圓ニ及フ。研究部ニ於ケル依頼試驗件數ヲ擧クレハ次ノ如シ。

年次	件數
一九一四年	二
一九一五年	二八
一九一六年	六五

一九一七年	一八八
一九一八年	二六〇
一九一九年	九三

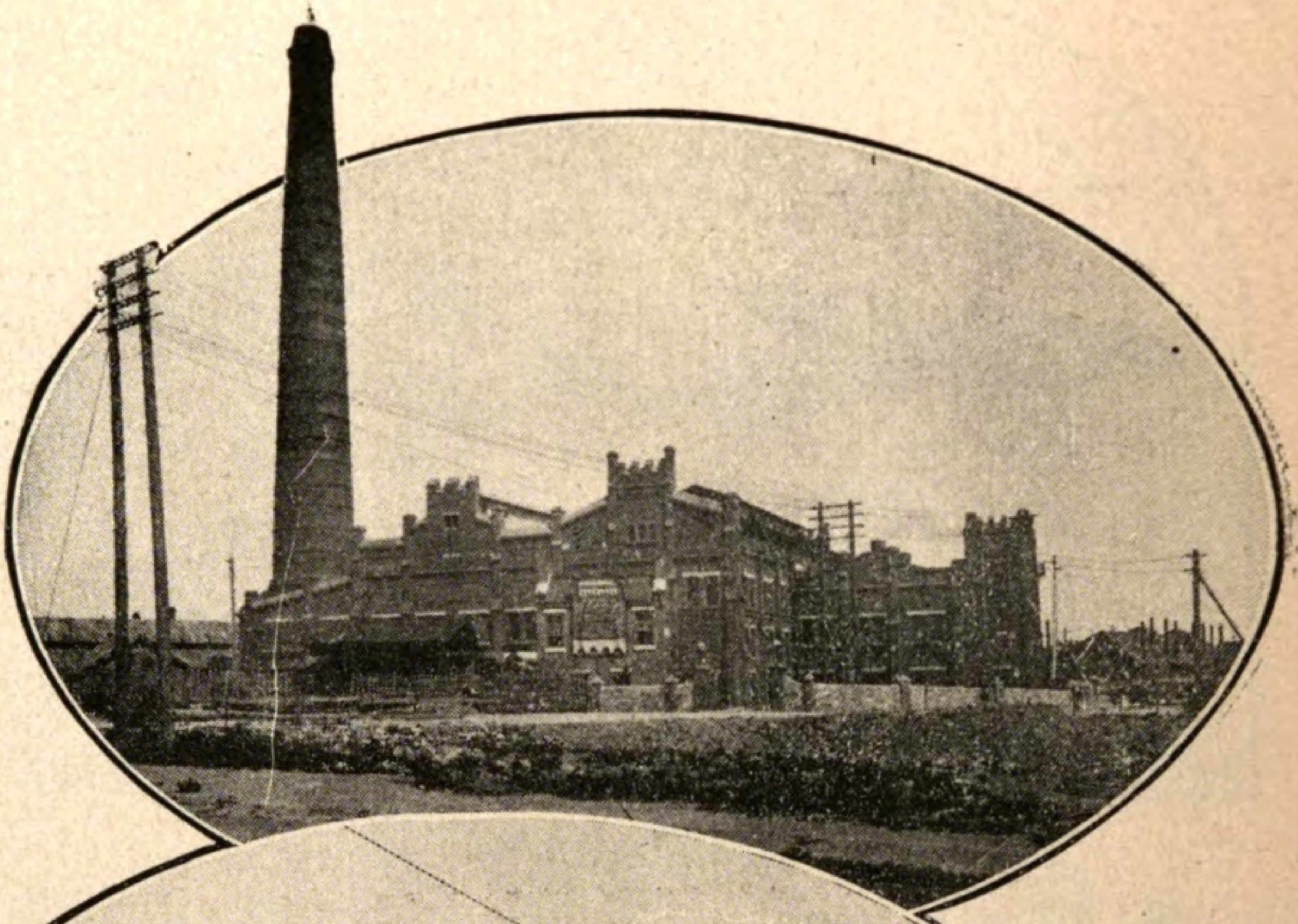
八、電氣作業所

會社ハ、一九〇七年、政府ヨリ、大連ニ於ケル不完全ナル電氣設備ノ引繼ヲ受ケ、電氣事業ヲ開始シタリ。之レヨリ曩キ、露國經營時代ニ在テハ、東清鐵道會社ノ附屬事業トシテ、船渠工業動力ヲ主トシ、住宅及市街ノ一部ニ電燈ヲ供給セシニ過キス。會社カ之レヲ繼承スルヤ、初メテ一般公衆ニ、電燈及電力ヲ供給スルニ至レリ。

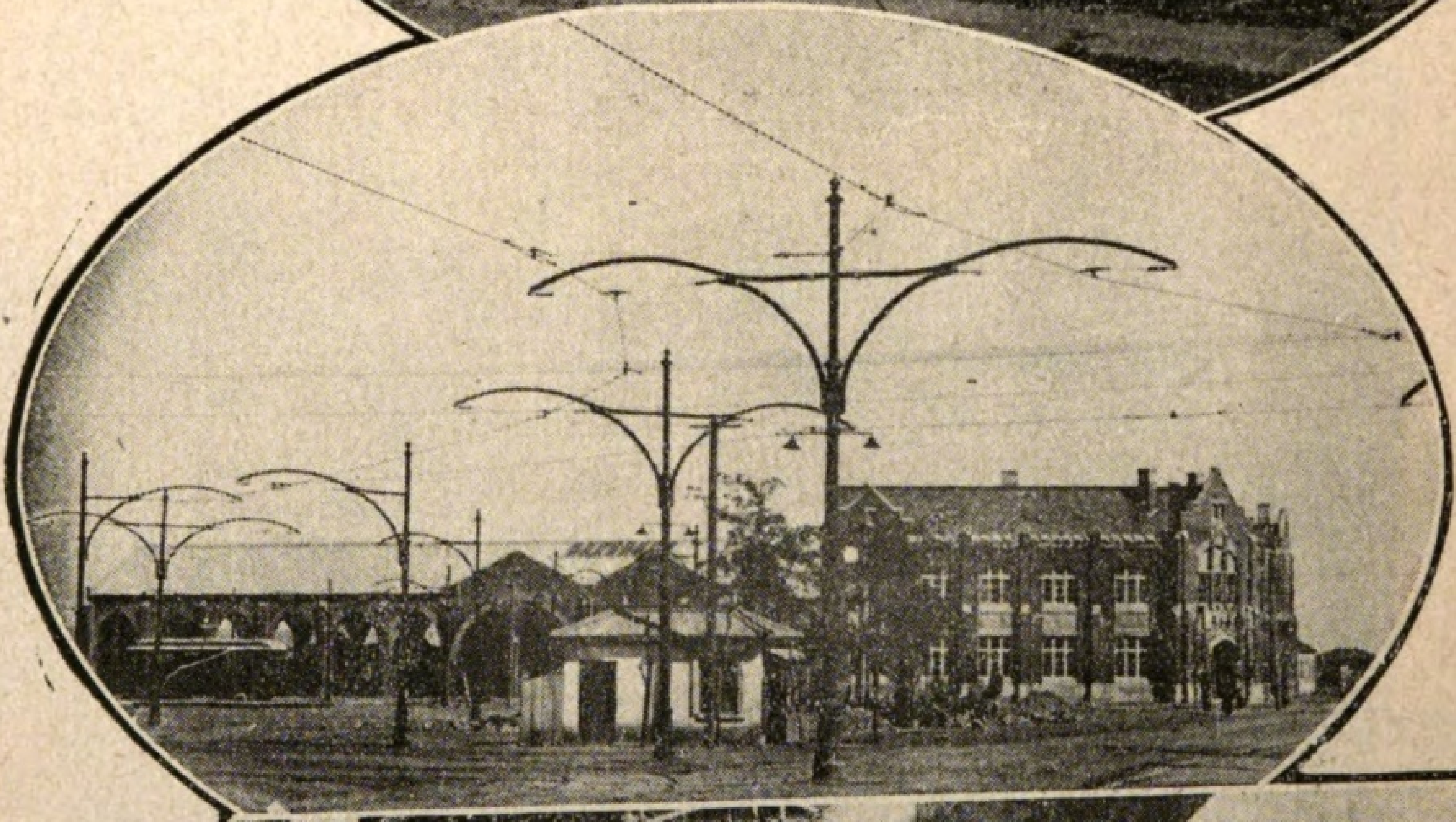
近世都市ノ經營ニハ、電燈及電力供給ニ關スル施設ノ必要ヲ、缺ク可ラサル要件タルニ鑑ミ、會社ハ、一九〇八年十二月電氣作業所ヲ設ケテ、電力電燈及電氣鐵道、竝、社內電話ニ關スル事項ヲ掌理セシメタリ。又鐵道沿線ニハ、奉天、長春、安東ニ、各電燈營業所ヲ置キ、創設以來、之等各地ノ長足ナル發達ニ伴ヒ、逐年事業ノ擴張ヲ行ヒツツアリ。

今會社カ、電氣作業所開設以來一九二〇年末迄ニ、投シタル興業費ヲ擧クレハ、大連六、二四五、〇〇〇圓、奉天七九五、〇〇〇圓、長春八九〇、〇〇〇圓、安東一、五四〇、〇〇〇

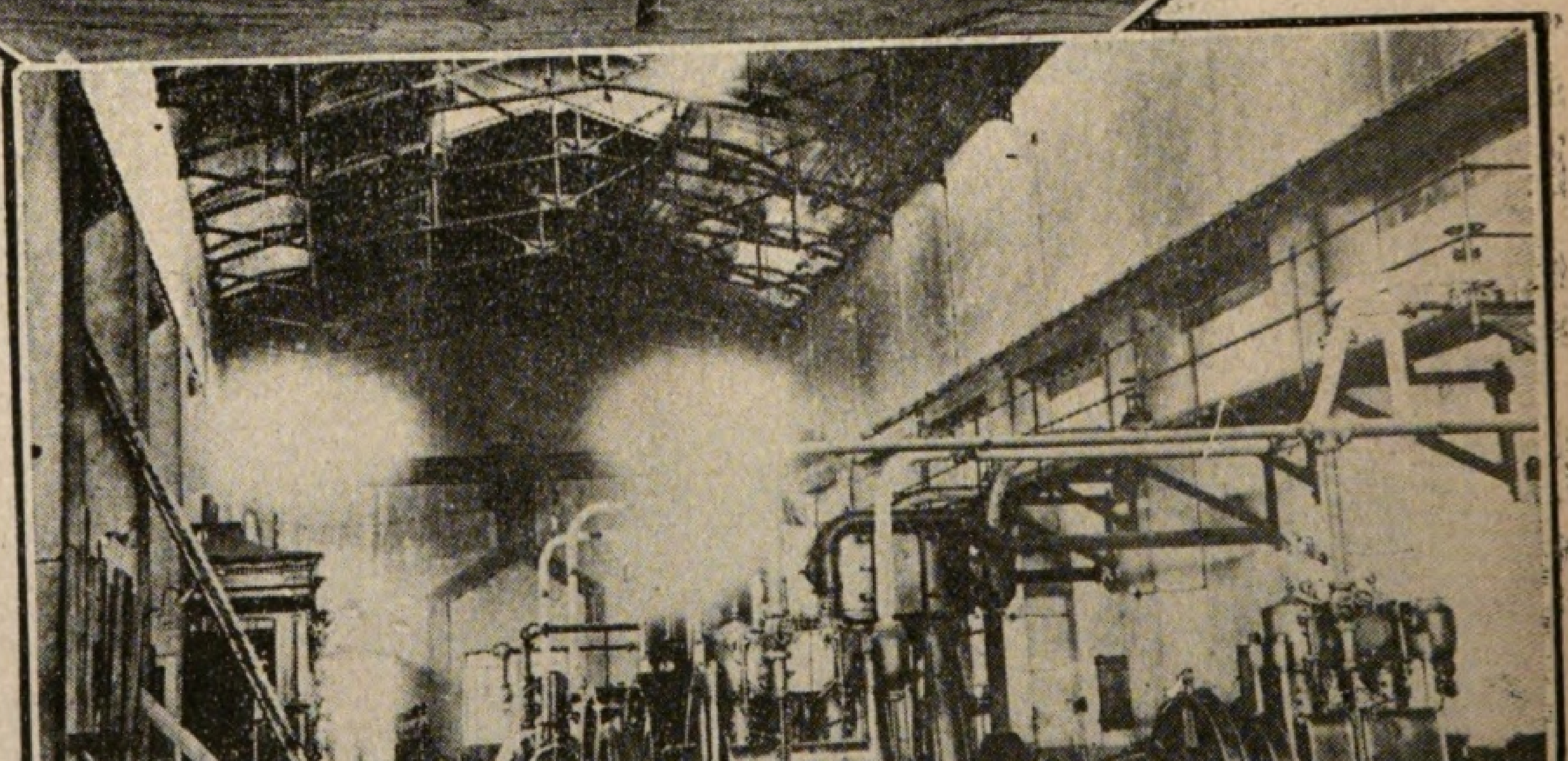
工業施設（其六）



大連發電所外部

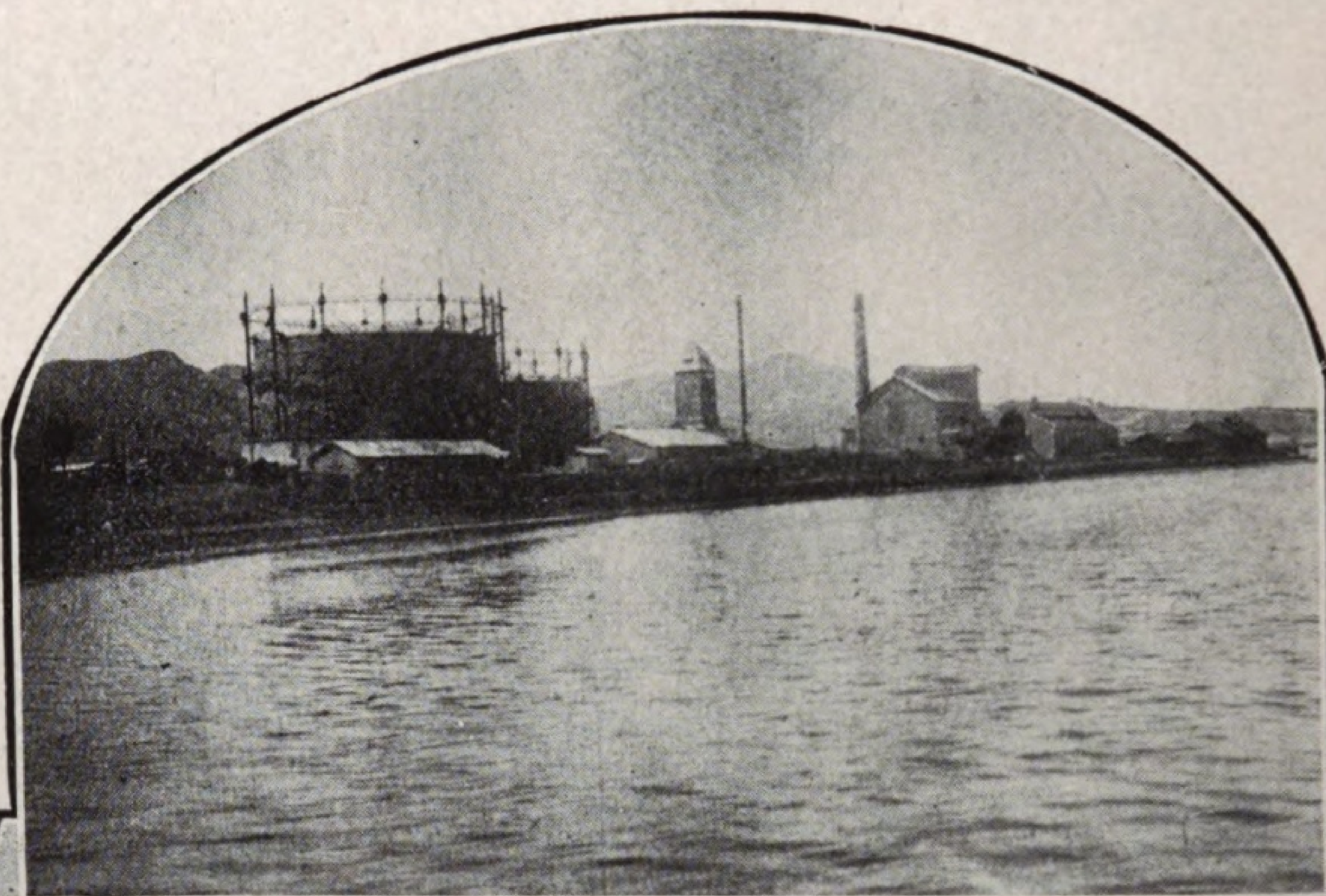


大連電氣作業所外部



大連發電所內部

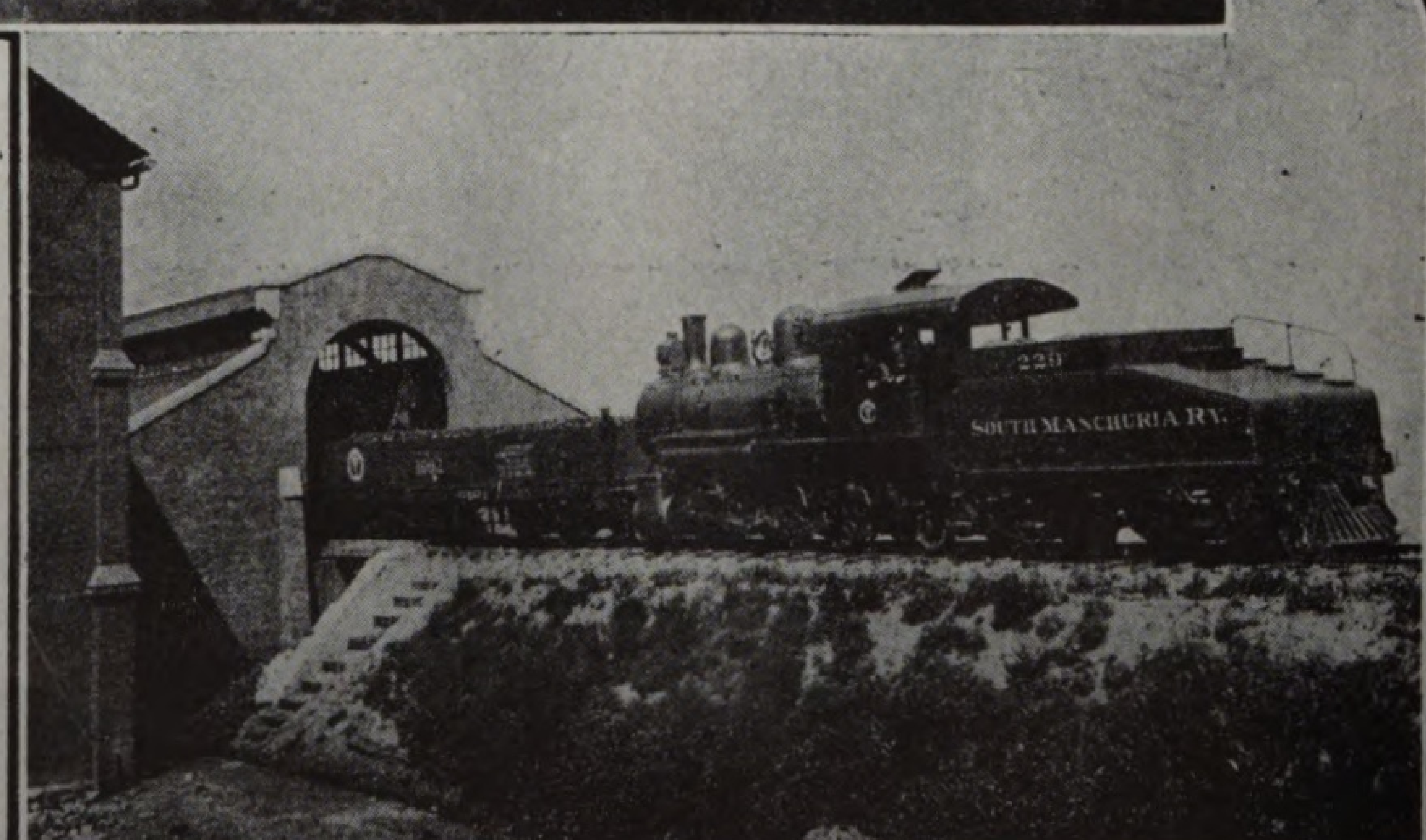
工業施設（其三）



大連瓦斯工場外部



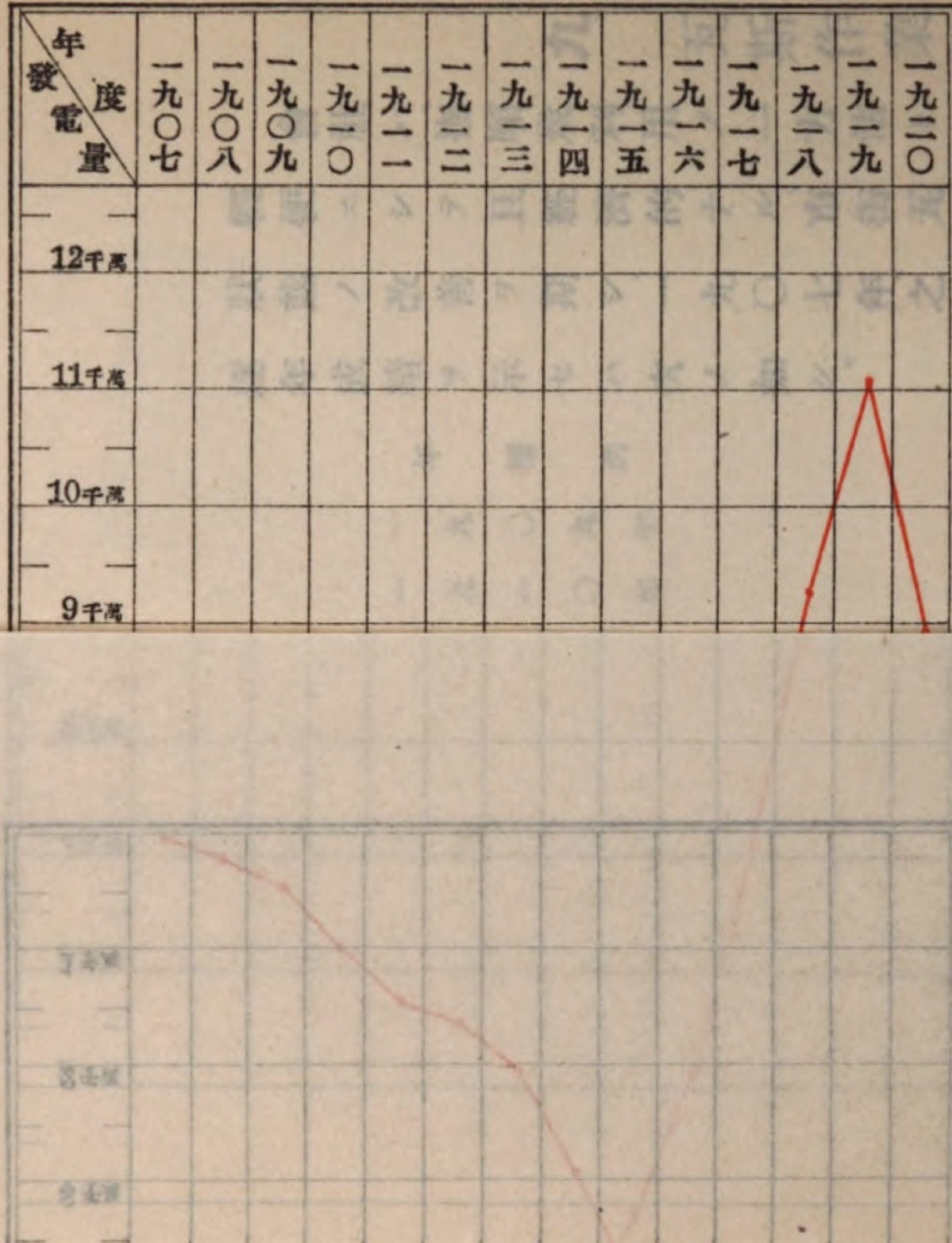
同上



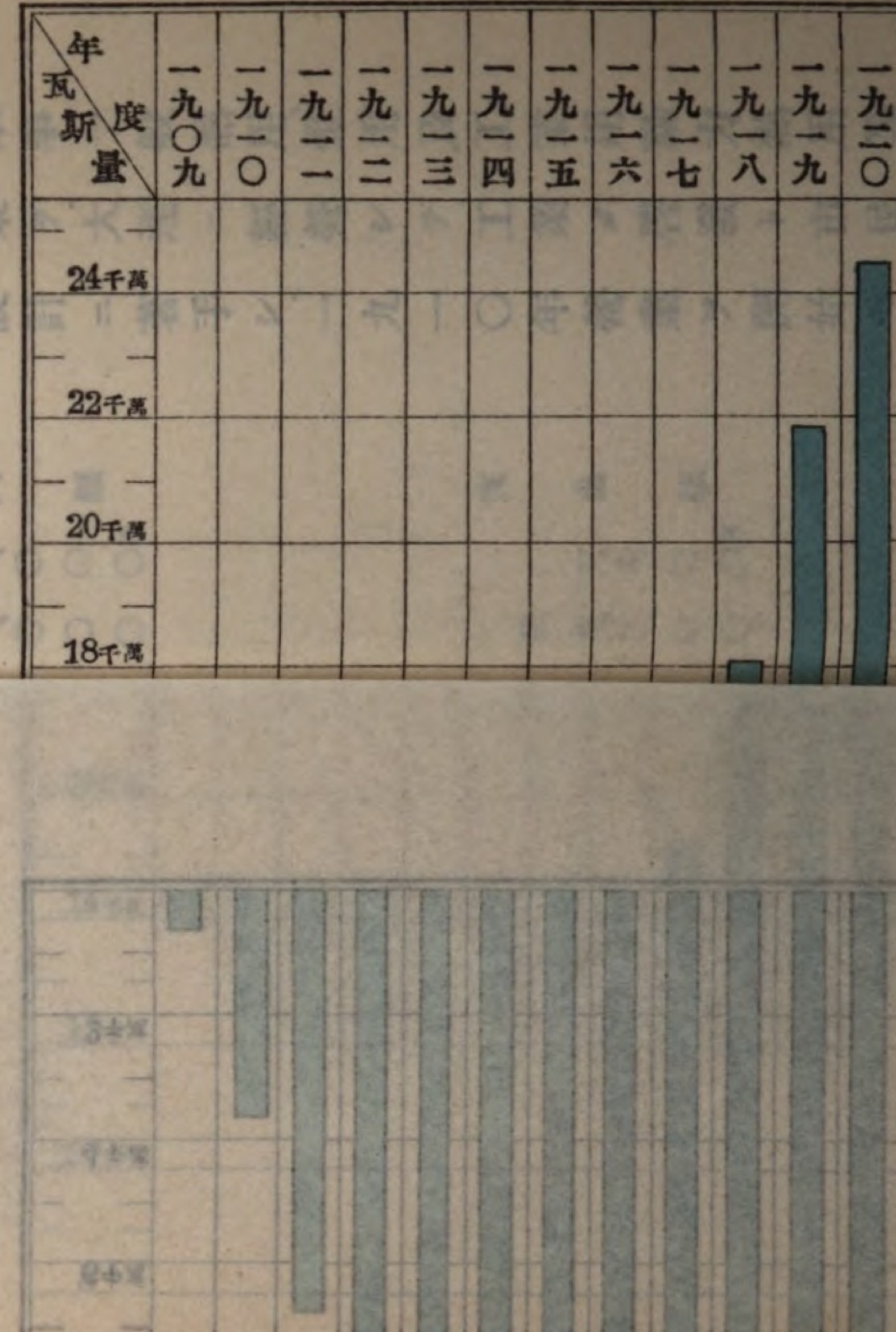
大連瓦斯工場石炭置場

電氣及瓦斯

發電量
（單位キロワット時）



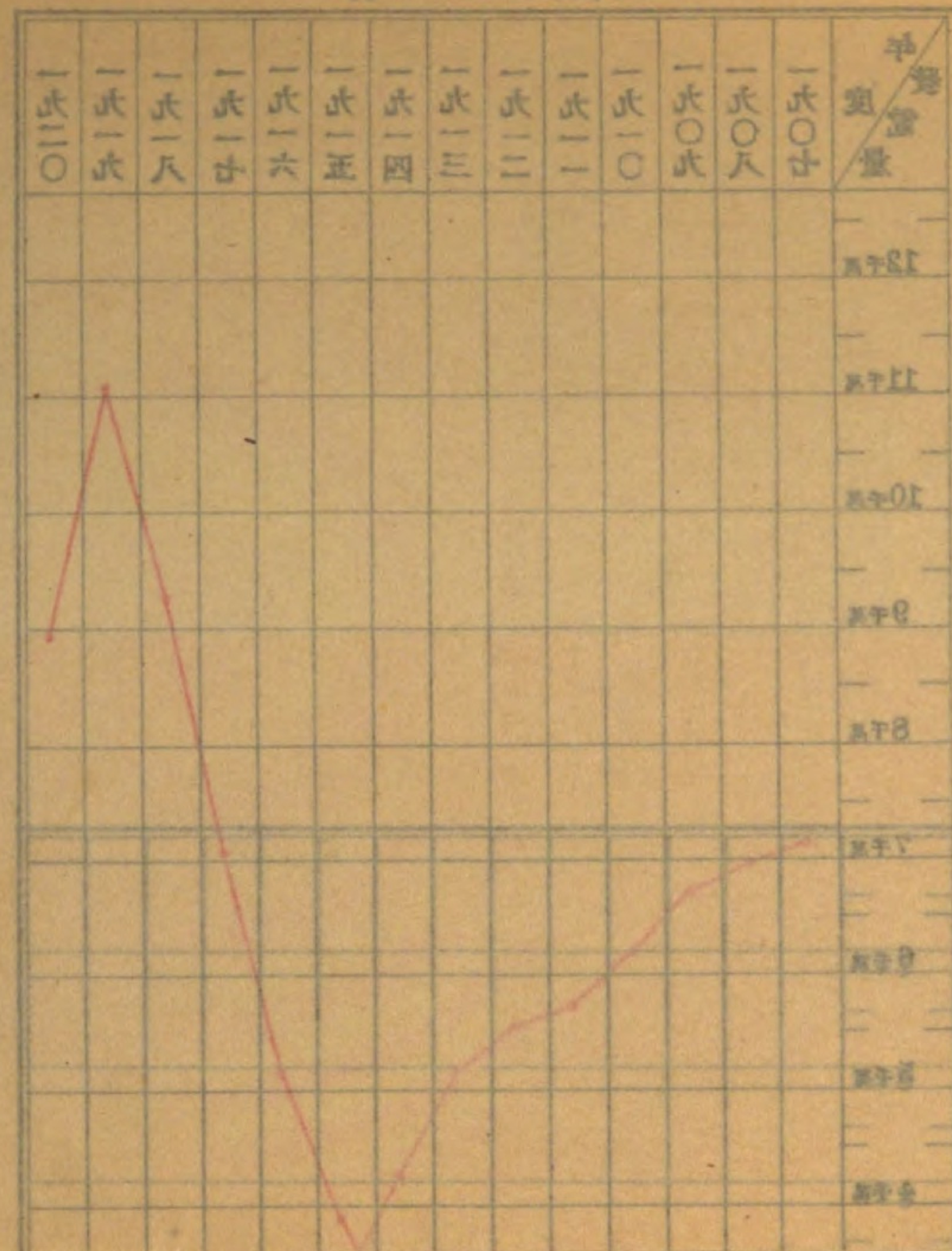
瓦斯發生量
（單位立方呎）



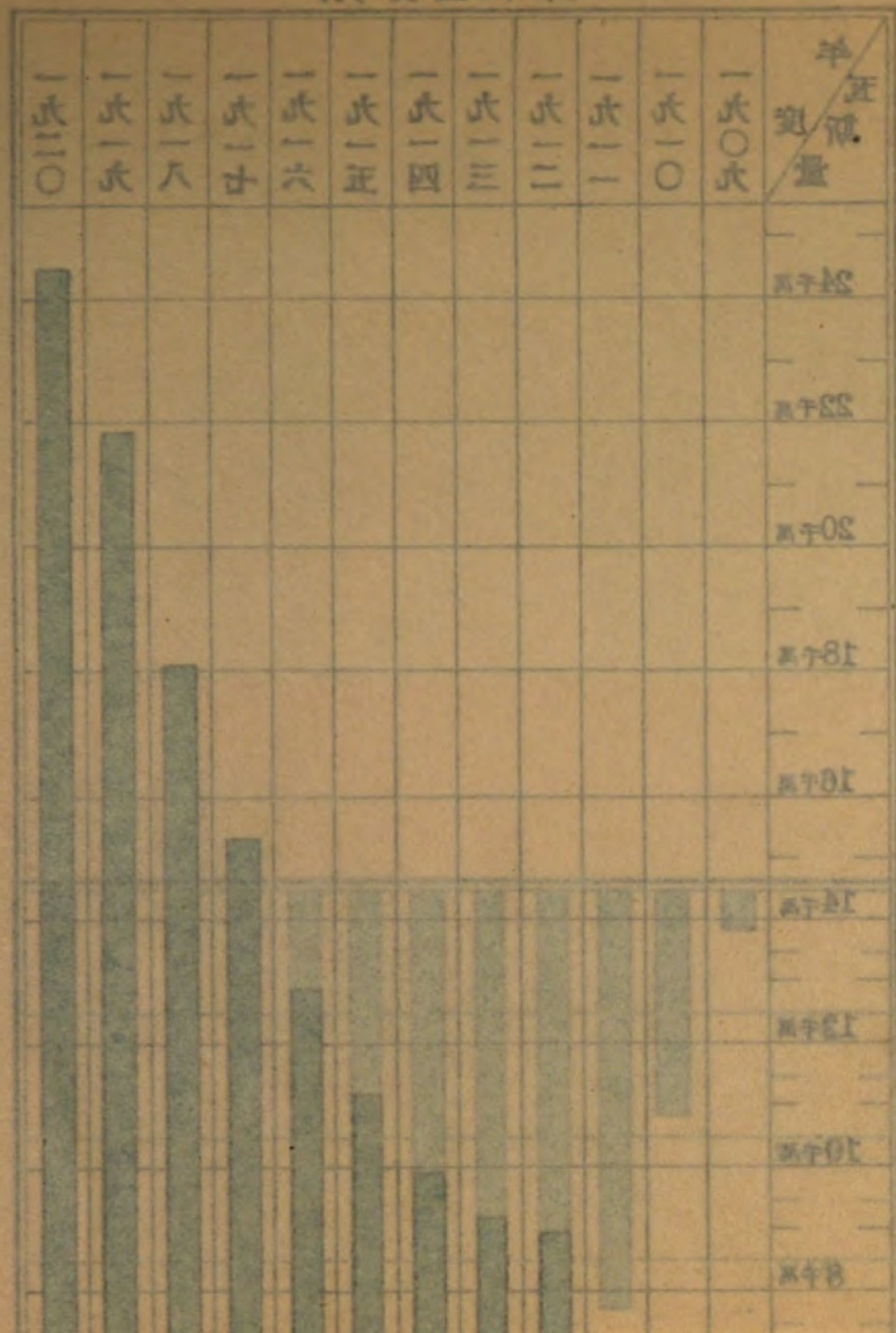
…五〇〇,〇〇〇圓ニ達セリ。

電氣及瓦斯

發電量
(單位キロワット時)



瓦斯發生量
(單位立方呎)



圓、合計約九、五〇〇、〇〇〇圓ニ達セリ。

九、瓦斯作業所

會社ハ、撫順炭利用ノ一方法トシテ、家事一般熱用、燈用及工業用動力熱用等ニ、最輕便ニシテ且經濟的ナル、市街瓦斯事業ヲ、大連ニ經營シテ、工業ノ啓發ト市民生活狀態ノ改善ヲ期シ、一九〇七年、之レカ設計ニ著手シ、一九一〇年營業ヲ開始セリ。今逐年成績ヲ示セハ次ノ如シ。

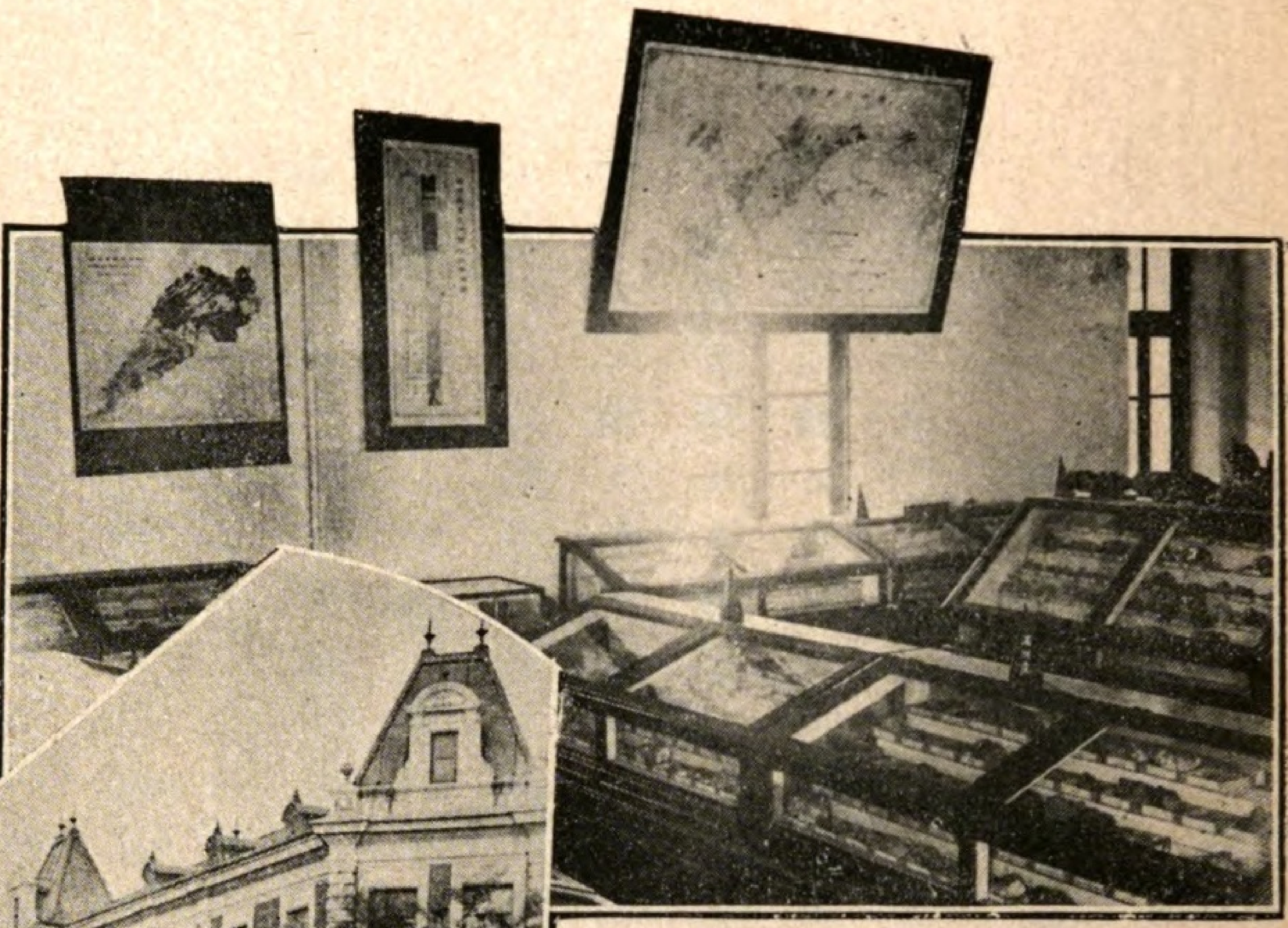
年種別	收入額	支出額
一九〇九年	一、〇〇〇円	一、八〇〇円
一九一〇年	六〇、〇〇〇	四七、〇〇〇
一九一一年	一三〇、〇〇〇	七七、〇〇〇
一九一二年	一七〇、〇〇〇	九三、〇〇〇
一九一三年	一八〇、〇〇〇	一〇六、〇〇〇
一九一四年	二〇〇、〇〇〇	一一四、〇〇〇
一九一五年	二四〇、〇〇〇	一三四、〇〇〇
一九一六年	二七〇、〇〇〇	一四七、〇〇〇
一九一七年	三五〇、〇〇〇	一九〇、〇〇〇
一九一八年	五〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇
一九一九年	七二〇、〇〇〇	五三〇、〇〇〇

一〇、地質調査所

地質調査所ノ事業ハ、當初、撫順炭礦ノ開發ニ資スルカタメ、同炭田ノ地質調査ヲ主トシ、一九〇七年四月事務所ヲ撫順炭礦ニ置キシカ、後大連ニ移シ、一般的ニ南滿洲ノ組織的、地質調査ヲ、行フコトトセリ。

從來ノ事業中、主ナルモノハ、鞍山外七鐵鑛ノ發見、蓋平、及海城兩縣下ニ於テ、菱苦土鑛ノ發見、及、加里長石產地ノ發見、各地炭田ノ地質調査、及、地形測量等ニシテ、此外炭坑、隧道、溫泉、水源鑿井、其ノ他各方面ノ應用地質及、窯業、冶金、機械、土木等ニ要スル、諸原料ノ調査ヲ爲シ、滿洲開發ノ資料ニ供シツツアリ。

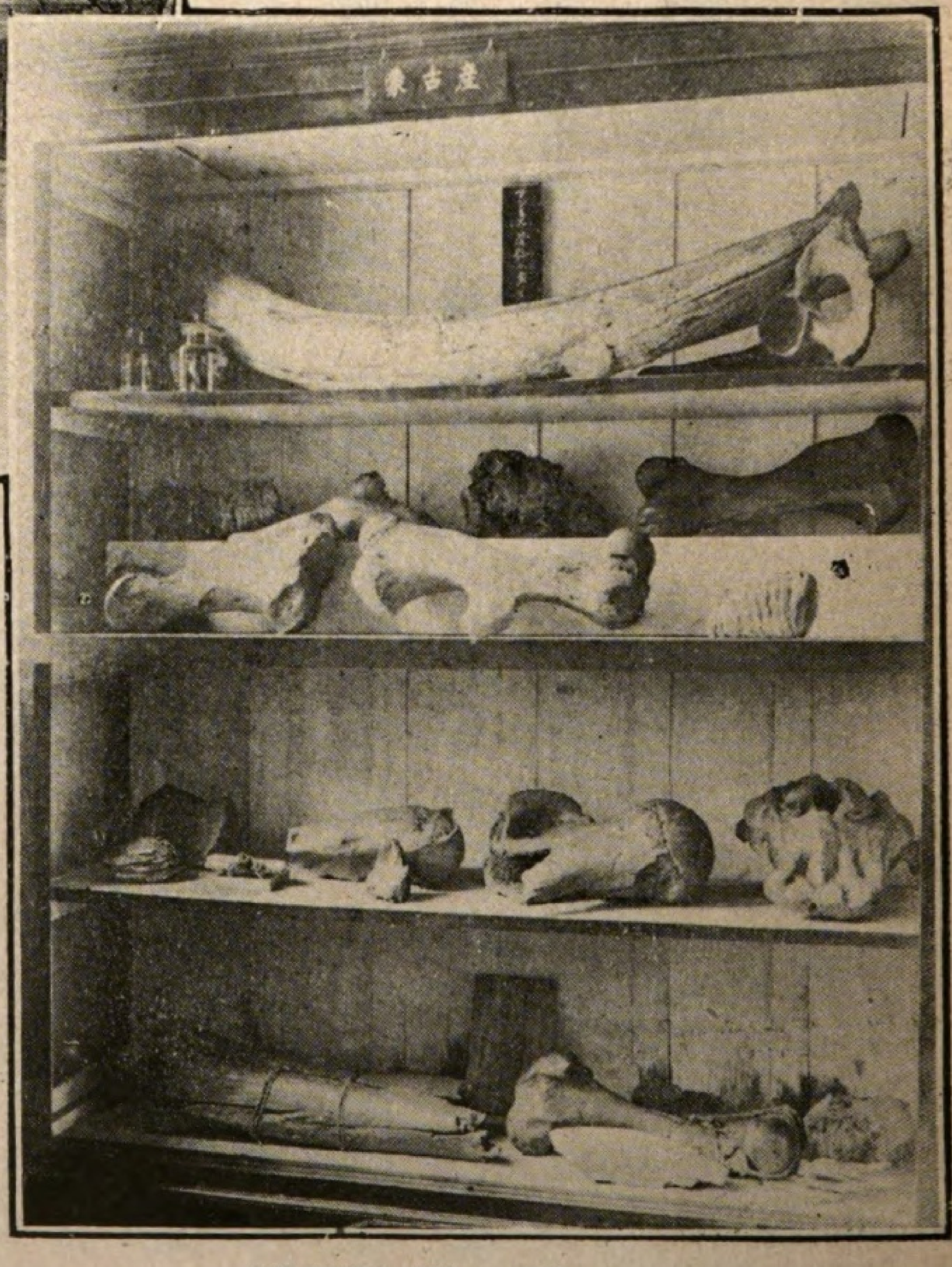
産業施設（其七）



同所（標本室）



㈣地質調查所（外面）



同所（參考品）

第四編　交通運輸

第一章　沿革概要

西暦一九〇五年八月、時ノ米國大統領ルーズヴエルト氏ノ好意的斡旋ト、平和ヲ愛好シ、正義ニ與スル、米國國民上下ノ援助ニ締結セラレタル、ポーツマス條約ニ據リ、露國政府ヨリ繼承シタル、東清鐵道南部線ノ一部南滿洲鐵道線ハ、既ニ、一九〇二年一月ニ於テ、幹支線トモ竣工シ居タルカ、爾後專ラ、軍事輸送ニ使用セラレテ、未タ、一般的ニ旅客及貨物輸送ヲ爲スノ運ヒニ至ラサリシカ、南滿洲鐵道株式會社創立後、鋭意諸般ノ施設完備ニ努力シ、鐵道ノ建設及設備ノ整頓ト共ニ、運輸狀態ノ改良發達ヲ圖リ、同時ニ、附帶事業トシテ、倉庫竝旅館營業ヲ開始シ、他方工場ノ完成ト共ニ、車輛ノ充實ニ盡ストコロアリ。其ノ根本精神トスル機會均等、人種無差別待遇ト相俟ツテ、滿蒙開發ノ大使命ヲ逐行シ、文化ノ普及ニ貢獻スル處多ク、逐年生產工業ノ旺盛ヲ招クニ至レリ。一方輸送機關ノ完備ト運賃政策ノ宜敷ヲ得タルニ因リ、農民ハ、擧ツテ耕作ノ利益ヲ自覺シ、荒蕪地ノ開墾ト、農耕地ノ改良ニ努力シ、今ヤ、一般

ニ金融圓滑トナリ、生活ノ向上ヲ來シテ、往年ノ荒涼タリシ全滿洲ヲ一大生產地化シ、其ノ大豆、豆粕、小麥、豆油、石炭等ノ如キハ、世界的名聲ヲ博スルニ至レリ。

鐵道附屬地ノ總面積ハ僅々五七、九一八英畝ニ過キサルモ、之レ滿洲開發ノ大動脈ニシテ、新市街ノ建設、其他總ユル文化的社會施設ハ、此處ヲ策源地トシテ畫セラルルナリ。又、滿洲名物ノ兇暴極ル馬賊ノ襲來ニ對シテハ、守備兵ヲ置イテ之ニ備ヘ、安寧秩序ノ維持ニ力ム。又附屬地內ニ於テハ、如斯、生命財產ノ保障慥カナル外、重稅釐金稅ノ賦課ヲ免レ得ル等ノ事由ニ依リ、支那商工業者爭ツテ轉住シ來レリ。一九○七年當時ニ於テハ、日本人一七、○○○人、支那人一二、○○○人餘ニ過キサリシカ、一九一九年度ニ於テハ、日本人七二、○○○、支那人一一○、○○○外人四○○名ニ達ス、卽チ日本人ニ於テ四倍半、支那人ニ於テ九倍ノ增加ナリ。

第二章　滿鐵ノ世界的地位

南滿洲鐵道ハ其營業哩、六八六哩、線路延長一四、二九○哩ニシテ起點ヲ大連港ニ發シテ北延シ、京奉線ノ終點タル、清朝發祥ノ地、奉天省ヲ縦貫シ、四平街ニ於テ、蒙古鐵道四洮線ト丁字形ニ結ヒ、更ニ大小幾多ノ都鄙ヲ點綴シテ、遼河及松花江流域ノ

停車場ノ今昔



一九〇四年當時ノ大連驛



現時ノ大連驛

停車場ノ今昔



一九〇四年當時ノ奉天驛



現在ノ奉天驛

分水嶺ヲ超エ、吉林省長春ニ於テ、東清及吉長兩鐵道ト聯絡スル、四百七十哩ノ全線、

分水嶺ヲ超エ、吉林省長春ニ於テ、東清及吉長兩鐵道ト聯絡スル、四三七哩ノ幹線ト、鴨綠江畔安東ヲ起點トシ、奉天ニ於テ滿鐵幹線ニ合スル安奉支線七〇哩、竝ニ其他ノ五支線九六哩ヲ有シテ、滿洲ノ動脈ヲナシ、東洋歐洲間聯絡鐵道トシテ、東支線ト緖ニ世界交通路ノ一部ヲ成ス。傍ラ、豐富ナル農產物ノ輸送機關トシテ、滿洲及蒙古開發ノ任務ニ從フモノナリ。卽チ、大連港ニ於テ、日本內地、上海方面ニ聯絡シ、奉天ニ於テハ、京奉線ニ由リテ、天津及北京ニ達シ、津浦線ニ由リ濟南府ニテ山東鐵道ニ會スヘシ。南行スレハ南京上海ニ至ルヘク、北京ヨリハ、京漢鐵道ニテ漢口ニ達シ、楊子江航行ノ便ヲ藉リテ南淸各地方ニ、長春ニ於テハ吉長鐵道ニテ吉林ニ至リ、北行シテハ東支鐵道ニ由リテ、哈爾賓ニ達シ、東シテ浦鹽港ニ、西シテハ後貝加爾、西比利亞諸鐵道ヲ經由シテ歐露ニ達スル、僅カニ一週日ヲ出テサルナリ。又安奉線ヲ經由シテハ、朝鮮ヲ縱貫シテ釜山港ニ至リ、更ニ、聯絡船ニテ日本內地ニ通ス。

第三章　建　設

一、引繼當時ノ狀況

一九〇四及五年ニ於ケル戰役ノ進展ニ伴ヒ、我カ大本營ハ、野戰鐵道提理部ヲ編成シテ之ヲ遼東半島ニ派遣シ、一九〇四年六月ヨリ、五呎軌間ヲ、三呎六吋軍用軌間ニ改修ノ工事ニ著手シ、順次、軍用列車ノ運轉ヲ開始セリ。

尙日露兩國間ノ終點停車場ノ位置ニ關シテハ、一九〇七年四月露都ニ於ケル協定ニヨリ、十里堡ヲ以テ分界點トセリ。是ヨリ先一九〇四年十一月、交戰中我第一軍ハ安東縣ヨリ鳳凰城間ニ二呎六吋軌間ノ輕便軍用線ヲ敷設シ、橋頭ヨリ奉天ニ向ハシムルコトトナシ、一九〇五年十二月ニ至リ安東奉天間ノ線路全ク成リ、軍事輸送ヲ開始スルニ至リ、次テ、同年同月北京ニ於ケル日清滿洲善後協約附屬條約第六條ニヨリ、同線ハ永久的ノ平和交通機關タル性質ヲ具備スルコトトナリ、一九〇六年一月ヨリ一般民衆ノ運輸ヲ開始シタリ。而シテ、翌一九〇七年四月、南滿洲鐵道會社ノ創立セラルルニ及ヒ之ヲ現狀ノ儘同會社ニ引渡セシカ、鐵道一般施設物ニツキテハ、直ニ之カ改良ヲ要スルモノ多ク、且ツ政府ハ、歐亞交通ノ完成ヲ迅速ナラシム可ク、會社ニ命シテ、急速ニ、諸施設ノ改良ヲ促セリ。

二、廣軌改築

此處ニ於テ、會社ハ、一九〇七年五月ヨリ全線廣軌改築工事ニ著手シタリシカ、其

ノ施工ノ困難ハ名狀スヘカラサルモノアリタリ。殊ニ交叉點使用ノ「ポイント」及「クロツシング」ノ如キハ廣狹軌共通ヲ要セシタメニ、三線式或ハ四線式、五十六種ノ多キニ達シタリ、而シテ地面橋梁材料軌條用及附屬品ハ、米國會社ニ依賴製作セシメタリ。卽チ、橋梁用桁ハ「アメリカンブリツヂ」會社ニ、軌條ハ「アメリカン、ソサイチーオブシヴル、エンヂニアー」ノ制定スル形式ヲ採用シテ、米國「ステーツ、スチール、プロダクト、エキスポート」會社ノ供給ヲ受ケ「フイツシユプレイト、ボールト、ナツト、スパイキロツクナツト」ノ如キハ「カーネギー、スチール」商會ヲ初メ「オリーバーアイロン、エンド、スチール」會社「デルウオースポーター」其他、悉ク、米國ノ製品ヲ採用シ、軌條ノ延長、實ニ三百六十哩、此ノ用材重量ハ七萬三千噸ニ達シタリ。

斯クテ、一九〇八年五月ニ至リ、大連長春間ノ改良工事竣成シ、尋テ安東、奉天間輕便線モ清國政府ノ援助ニヨリ、單線線路建設ニ必要ナル、最少限度ノ用地買收ヲ遂ケ、一九〇九年八月以後、部分的ニ廣軌改良工事ニ著手シタリシカ、本線、ハ地形氣候ニ於テ、全滿洲中最モ峰巒重疊、溪谷多ク、剩ヘ幾多ノ大河支流アリ、加フルニ雨期ニ際シ、慘タル水害ニ遭遇シ、叉沍寒ハ、著シク工程ニ支障ヲ與ヘタリト雖、幸ニ、當局者ノ拮据奮勵ニヨリ、一九一一年十一月ニ至リ、茲ニ、滿洲全線ノ開通ヲ見ルニ至レリ。

三、復線工事一般

尋テ一九〇七年、政府命令書ニ基キ、大連蘇家屯間ニ於ケル復線工事ヲ起シ、米國各會社ノ材料供給ヲ受ケ、一九〇九年十月ニ至リ、全ク開通スルニ至リヌ。

斯クテ、滿蒙ノ幹線ヲ達成スルニ至リタルコトハ、世界交通史上ニ一新紀元ヲ畫セルモノニシテ、之レニ依テ中華民國ノ文化ニ及ホス影響ノ顯著ナル元ヨリ贅言ヲ要セサル所ナリ。

第四章　運轉

一、一般設備

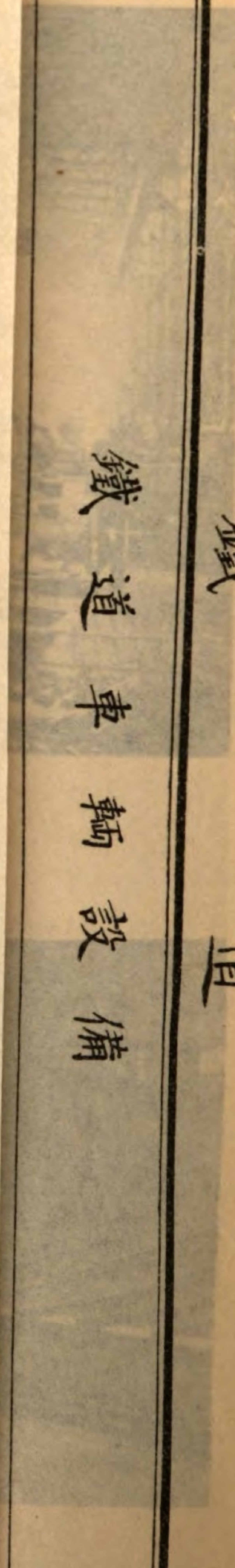
(イ) 停車場

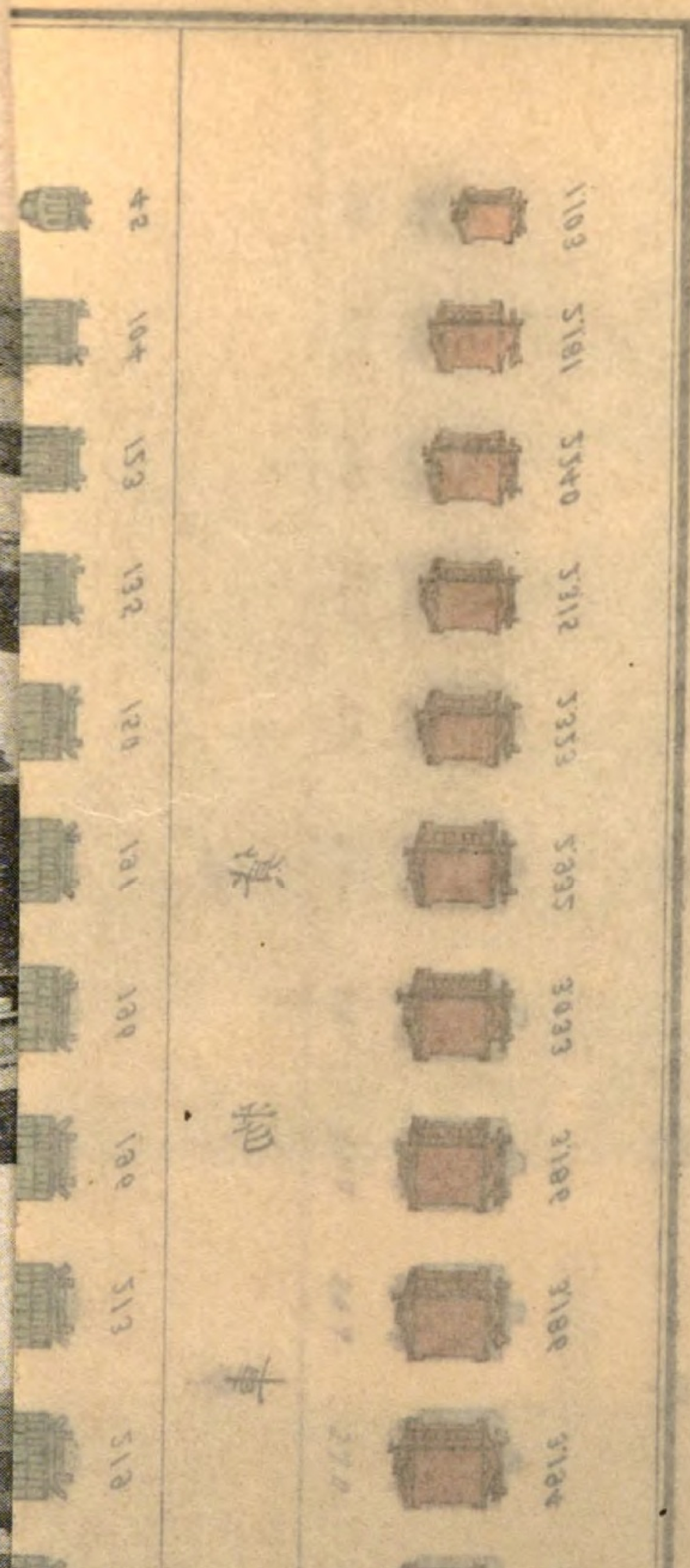
一般沿線住民ノ利便ヲ計ルコトニ忠實ナル本社ハ、列車ノ數ヲ增加スルト共ニ、沿線停車場ノ增設ニ力メツツアリ。卽チ、開業初年ニ於テハ、僅ニ五十四驛ヲ算スルニ過キサリシカ、一九〇七年五月以後、逐次增設ノ結果現在百十四ノ完備セル停車場ト、四箇ノ信號所ヲ有スルニ至レリ。

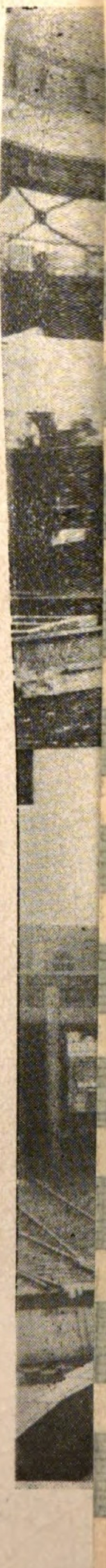
(ロ) 機關庫及客車庫

鐵 道

鐵道車輌設備



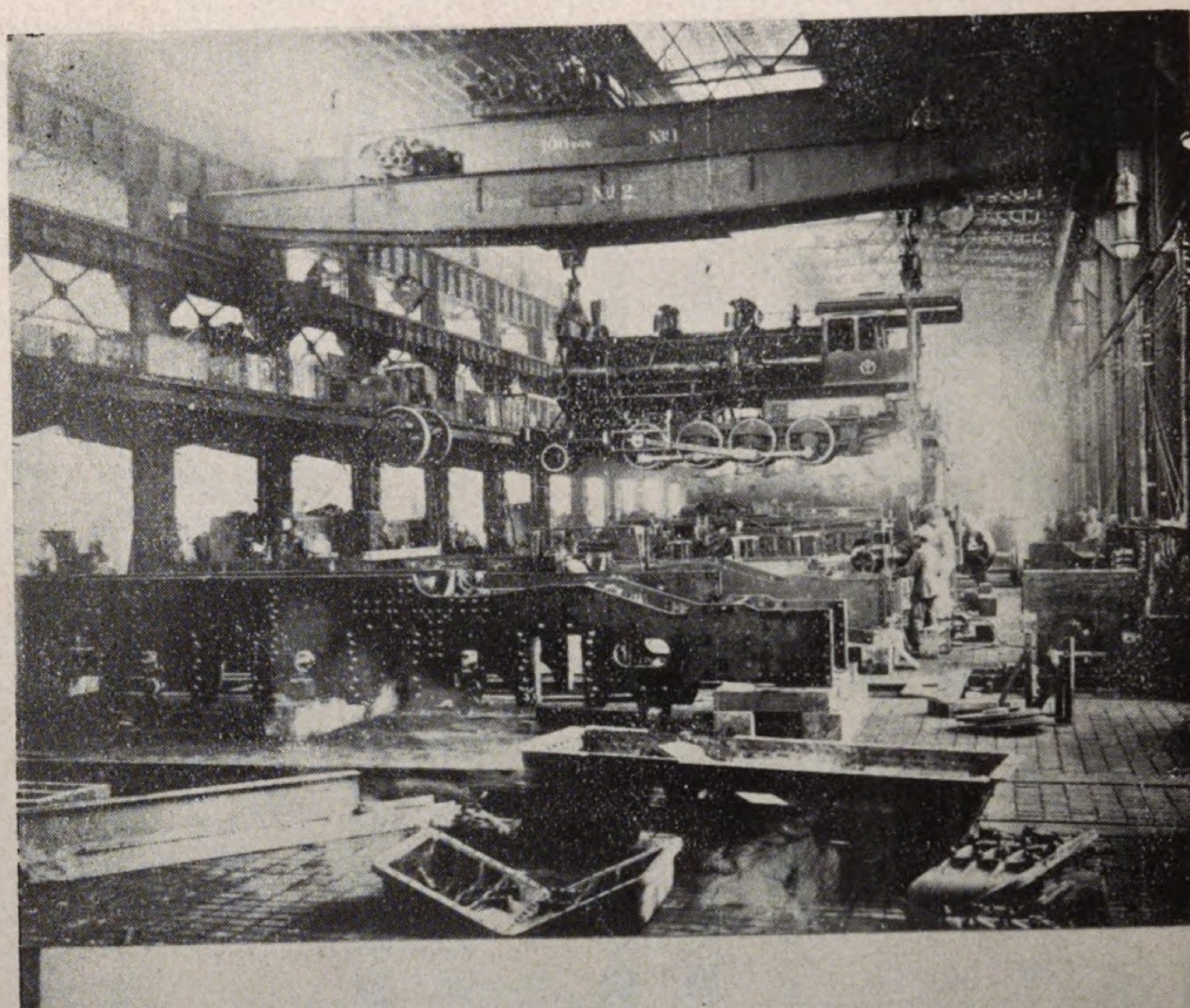


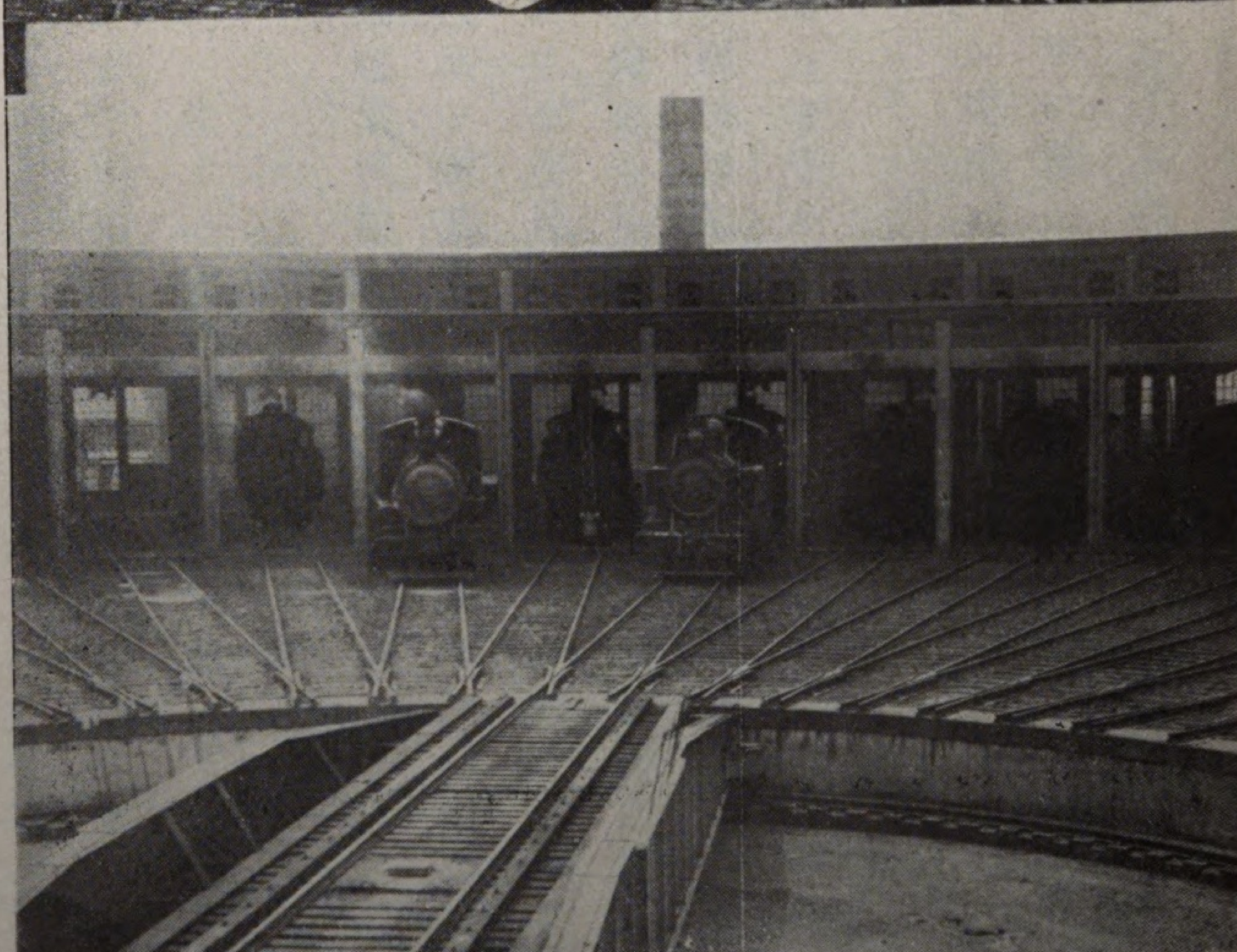


三、復線工事一般

尋テ一九〇七年、政府命令書ニ基キ、大連蘇家屯間ニ於ケル復線工事ヲ起シ、米國

沙河口工場ノ內部





機關庫

東清鐵道ヨリ繼承シタル九機關庫ハ、概ネ假建物ニシテ且狹隘使用ニ堪エサリシカハ、爾後大ニ改廢擴張新築ヲ行ヒ、現在十二機關庫ヲ設ケテ、全ク面目ヲ一新セリ。客車庫モ亦同樣殆ト見ルニ足ル可キモノ無カリシヲ以テ、主要地點二箇所ニ之ヲ新築シ、一箇所ヲ改造シ、舊態ヲ止メサル程度ニ改善シタリ。

(ハ) 倉庫

倉庫ハ、一九一一年、倉庫營業開始當時ニ在リテハ、大連埠頭及沿線主要十六驛ニ過キサリシカ、貨主ノ便宜ニ應セム爲メ、順次追加シテ、二十九驛ニ達セリ。蓋シ、滿洲ノ如ク、資力比較的薄弱ニシテ、文化ノ程度低キ土地ニ於テ、之カ營業實施ヲ開始シタルハ、最モ適當ノ措置ト云フ可ク、幾多ノ生産原料ヲ有スル住民ニ對シテ其利用ヲ促シ、需給ノ調節ヲ全カラシメ、滿蒙開發ノ眞意義ヲ彼等ニ徹底セシメ、併セテ交易奬勵ノ一助タラシメタルハ、別項倉庫營業成績ノ統計ニ見テ明カナリ。

二、車輛類

車輛ハ一九〇七年四月、會社經營當時ニ於テハ、總テ狹軌及輕便式ノモノニシテ標準軌條ニ改築ノ結果車輛モ亦新造ヲ要シ、機關車初メ客貨車ハ、曩ニ「**アメリカン、カア、エンドフアウンドリー**」會社、其他ノ米國會社ニ註文シタルモノノ到著ヲ待ツ

テ、一九〇七年八月以後沙河口工場ニ於テ之カ組立ニ著手シ、同年十二月以後、一九一一年八月ニ至ル間ニ於テ、機關車二百五十一輛、客車百五十輛貨車二千二百二十四輛ヲ全線ニ亙リ運轉シ、廢車ノ一部ハ之ヲ清國政府ニ讓渡シ、一部ハ之ヲ解體シテ内地ヘ送還シ、或ハ防疫其他ニ流用シタリシカ、爾後年々各種車輛ノ必要數ヲ增加シ現今ニ於テハ機關車三百五十輛、客車三百三十三輛、貨車五千三百五十二輛ヲ運轉營業シツツアリ。

三、通信信號

通信信號ハ東清鐵道時代ニ於テハ、設備極メテ不完全ニシテ、電線延長僅カニ二、四一八哩、電柱八、一〇二本ニ過キス。且ツ、到底滿洲ノ實情ニ副ハサリシヲ以テ、漸次之カ改良ヲ試ミ、現今ニ於テハ、電線延長一四、二九〇哩、電柱三八、五〇〇本ヲ算ス。其他信號設備、運轉保安方法等舊態ヲ一新セルハ勿論ナリ。

四、運轉

(イ)運轉系統、及其經過竝成績

廣軌復線工事ノ完成、特產物輸送增加、歐露客貨聯絡等ノ事由ニヨリ、運轉狀態ニ一大革新ヲ招致シタルハ勿論ニシテ現今ニ於テハ、旅客及混合列車六十九箇列車、

貨物列車四〇三ニ達シ、而カモ尙增加ノ必要ニ迫ラシツツアリ。

一九一四年度ニ於ケル列車一日一哩通過囘數ハ、僅ニ合計一九五囘ニ過キサリシカ、一九二〇年度ニ於テハ約一倍强ニ達シ、又列車走行哩モ、一日一三、四八二哩ヨリ一九、八八三哩ニ進ミタリ。

(ロ) 旅客列車

旅客列車ノ聯絡ハ、一九〇八年、東淸鐵道ト長春ニ於テ、又大連ニ於テハ、上海航路ト聯絡ヲ保ツ爲メ、本線ニ直行急行列車ヲ運轉シ、客車ハ全部美麗ヲ極メタル「**プルマン**」式一等寢臺車、一等客車及食堂車ヲ以テ組織シ、一九一一年、安奉線廣軌開通ト同時ニ、滿線直通列車運轉開始シタリ。然ルニ、露國革命以來、歐露トノ交通頓ニ減少シタルハ頗ル遺憾トスル處ナリ。

(ハ) 貨物列車

又、貨物列車ニ就テハ逐年激增スル出貨ニ適應スヘキ列車囘數ノ增加ト、牽引力ノ加重、及、運轉時間ノ短縮等、輸送ノ敏活、擴大ノ施設ニ就テ最善ノ努力ヲ盡シタリ。卽チ、往時ニ於ケル狹軌七•七噸車四十五輛(三五〇、噸)ノ一箇車ハ、最近三十三噸車三十七輛(一、二二一噸)ヲ牽引スルニ至リ、一日二、九六〇哩ノ走行哩ハ、一五、〇〇〇哩ト

ナリ、非常ナル進歩ヲ示シタリ。

第五章　營業

一、旅客

一九〇八年以後、廣軌改築工事ノ進捗ニ伴ヒ、車室ノ廣濶、運轉速度ノ増加、採暖施設等完備シ、尋テ上海、東清及京奉線ニ聯絡スル急行列車ノ運轉ヲ開始シ、一九一一年鴨緑江ノ架橋工事完成ト共ニ、長春京城間ノ直通列車ヲ運轉シ、茲ニ歐亞交通乘客ノ數ハ漸次多數ヲ加フルニ至リ、滿洲線ニ於ケル旅客增加ノ狀況ハ、開發當時ニ比シ約六倍强ノ增加ヲ示セリ。其統計左ノ如シ。

乘客統計表

年度	乘車人員	客車走行一哩平均收入
一九〇七	一、五〇〇、〇〇〇	二八九圓
一九〇八	一、八〇〇、〇〇〇	四七六圓
一九〇九	二、八〇〇、〇〇〇	四九六圓
一九一〇	二、三〇〇、〇〇〇	四三一圓
一九一一	三、一〇〇、〇〇〇	四八八圓
一九一二	三、九〇〇、〇〇〇	七〇一圓

附屬地外奥地冬期運搬



馬車



橇　氷上橇ノ運搬

列車施設

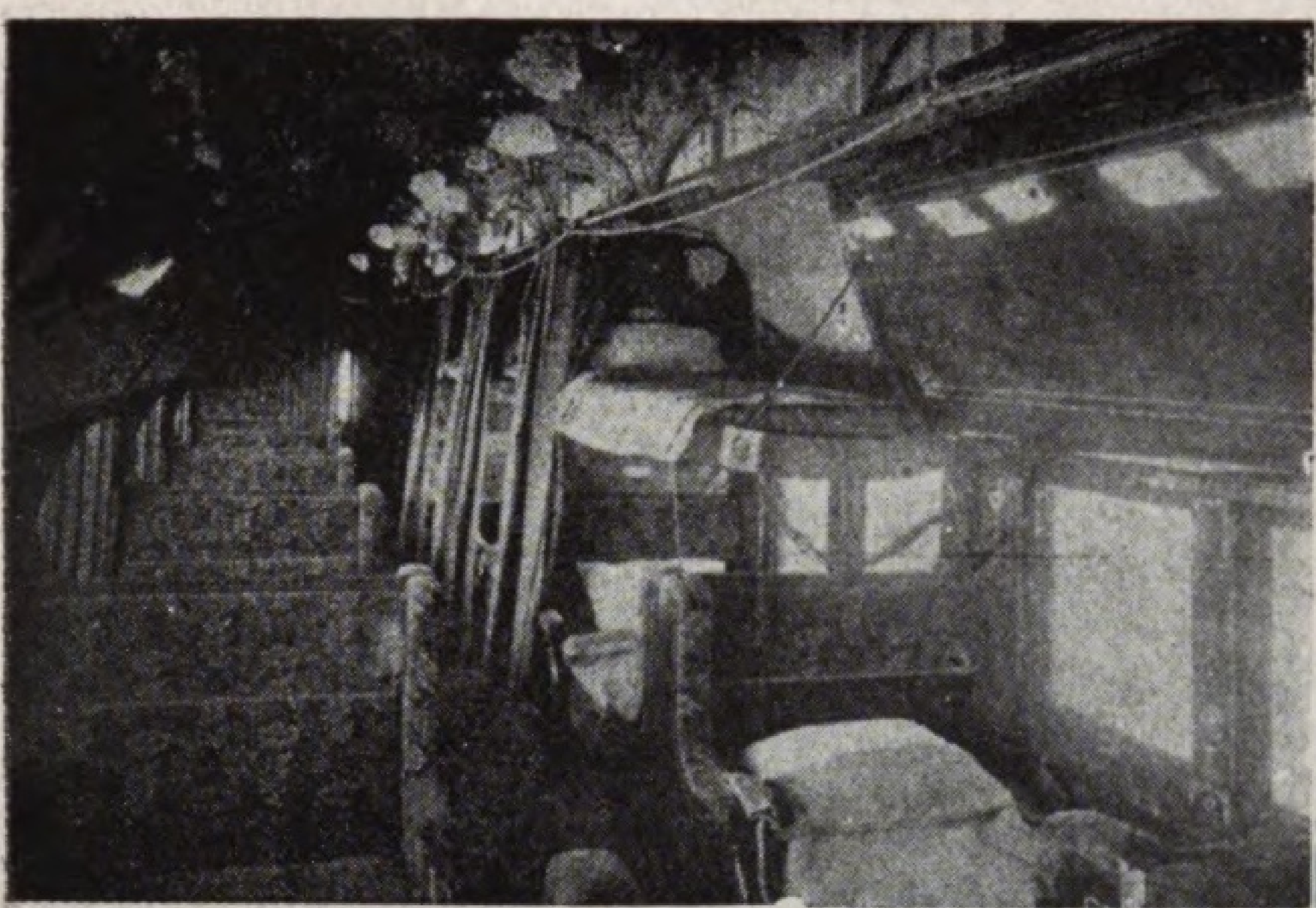


急行列車



長春ニ於ケル日露聯絡

列車施設（其二）



一等寢臺車



食堂車

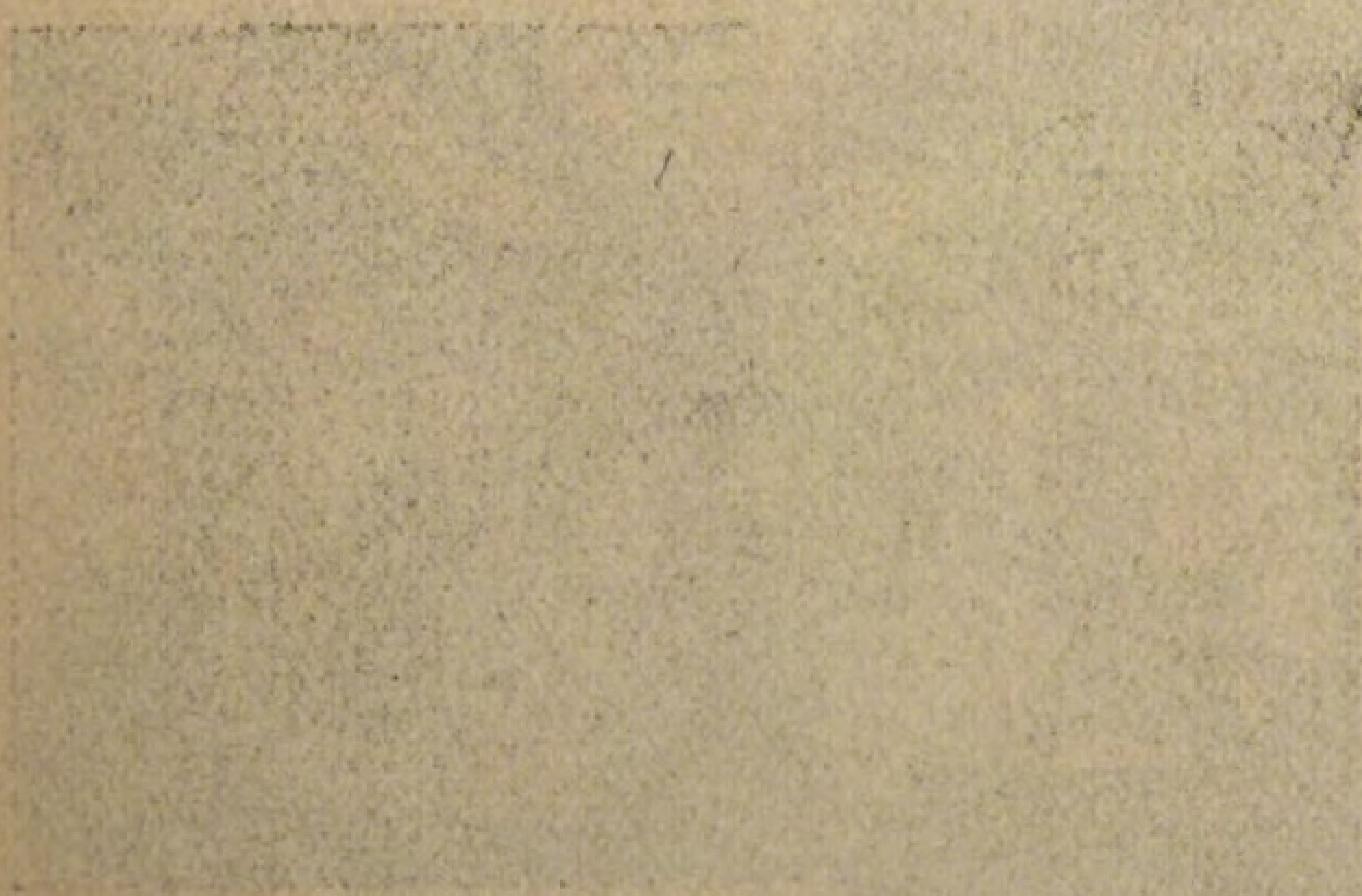


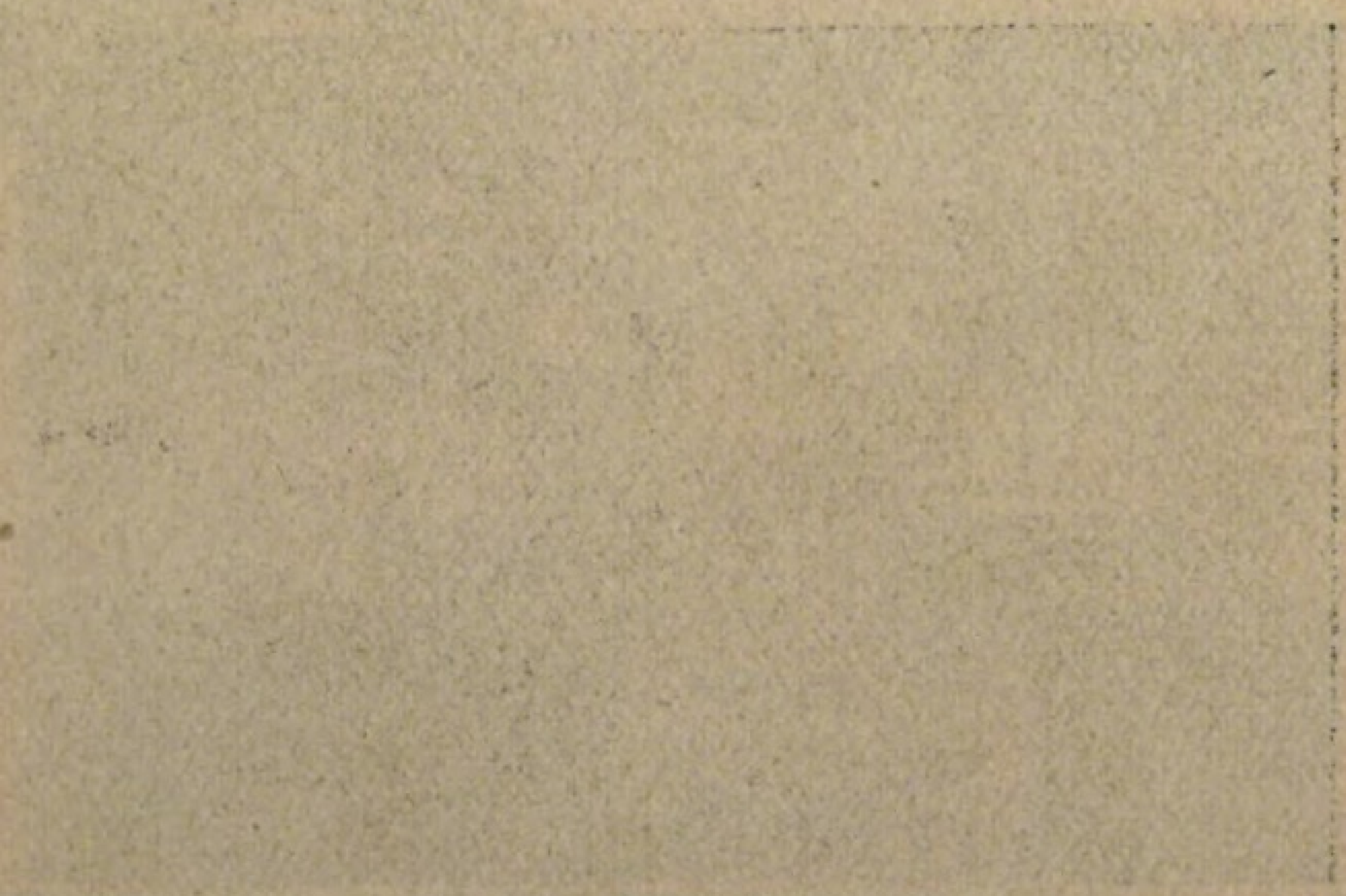
二等車



三等車









一九一三	四、一〇〇、〇〇〇	五三六圓
一九一四	三、六〇〇、〇〇〇	四六二圓
一九一五	三、七〇〇、〇〇〇	四九一圓
一九一六	四、四〇〇、〇〇〇	五八三圓
一九一七	五、八〇〇、〇〇〇	七一九圓
一九一八	七、四〇〇、〇〇〇	八三一圓
一九一九	九、二〇〇、〇〇〇	九七三圓
一九二〇	九、八〇〇、〇〇〇	九六二圓

(註) 支那人ノ列車利用率ハ、特ニ著シク增加シ、同旅客數ノ三分ノ二ハ、支那人三等旅客之ヲ占メ、內地人及外國人、僅カニ、其ノ三分ノ一ニ過キサル狀況ニアリ。

(イ) 客車等級及運賃

一九〇八年、引繼以後、銳意、旅客輸送ノ施設改良、車輛編成改廢等ニ力メタル結果、一九一二年、一車一哩平均乘車人員三七・八人ナリシカ、一九一九年ニ至リテ、四二・五人ニシテ、七箇年間ニ、四八七分ノ增加ヲ示セリ。


又賃金ハ、一九〇八年、開業當時ニ於テハ、便宜上野戰當時用ヒタル賃率十錢ヲ單位トスル運賃ナリシモ、之ヲ以テ、直チニ滿洲ニ施行スルコトノ、不可能ナルハ勿論本鐵道經營ノ本旨ニ悖ルモノアルヲ以テ、同年七月、單位ヲ半減シテ五錢トシ更ニ一哩當リ一錢八厘トシタリシカ、一九〇九年愼重審議運送規定ノ改正ニ著手シ、諸

外國ノ規定ヲ參酌シ、最文明的ナル法律觀念ヲ基礎トシテ、詳密ナル運送規程及附屬諸規程ヲ制定シ、運送ニ關スル法律關係ヲ明確ニシ、會社ノ責任ヲ明ナラシムルト共ニ、旅客貨主ニ對シテ最善ノ保障ヲ與ヘ作業ノ圓滑簡捷ヲ計リ、歐亞交通ノ國際的機關タルノ性質ニ恥チサラン事ヲ期シ、運賃率ニ就テモ、亦支那諸鐵道及本國、朝鮮線等ヲ參酌シ、遠距離遞減法ヲ廢シテ距離比例法トシ、從前ノ賃金率ヲ繼續シタリシカ、一九一九年、歐洲戰亂ノ餘波ヲ受ケタル財界ノ變動ハ、遂ニ從來ノ運賃改正ヲ餘儀ナクセシメ、三等ニ於テ一哩二錢五厘、二等四錢五厘、一等七錢トシ、現今此ノ率ニ依リツツアリ。


(ロ) 聯絡運輸

會社ハ本來ノ主義トシテ、獨リ社線內ノミノ交通完備ヲ期圖スルノミヲ以テ滿足スヘキニアラス、歐亞交通ノ要路ニ當ルカ故ニ、茲ニ充分此ノ機能ヲ全フセシムルコトハ、機會均等主義ニ副フモノトシ、聯絡運輸ノ圓滿ヲ圖ルヘキ當初ノ方針、益實現スルコトニ努メ、一九〇八年、十月先、上海航路ヲ開キ、一九〇九年ニ至リ、京奉線トノ連續ヲ開始シ、一九一〇年ニ、東清線トノ聯絡成リ、次テ、大阪商船ヲ介シテ、本國鐵道、及朝鮮鐵道トノ聯絡ヲ保チ、更ニ、一九一一年ニハ、日滿露聯絡成立シ、一九一五

主要貨物發送噸數



1,907
1,908
1,909
1,910
1,911
1,912
1,913
1,914
1,915
1,916
1,917
1,918
1,919
1,920
300
250
200
150
100
50
萬噸
大豆
豆粕
高粱
石炭



年ニ及ヒ、日支週遊旅客運輸ヲ開始シ、其ノ他、西比利經由ノ旅客、加奈太經由、世界一週ニ關スル旅客ノ國際運輸實施セラレ、著々トシテ豫定ノ方針ヲ進メタリシカ、一九一八年以來、露國內ノ政變ハ、一部西比利亞鐵道ノ杜絕ヲ見タリト雖モ、尙、日滿鮮及南支那トノ聯絡狀態ハ、依然トシテ舊ノ如ク繼續シツツアリ。

今、最近ニ於ケル聯絡旅客成績ノ一般ヲ見ルニ、一九二〇年ニ於ケル各交通路經由人員ハ、左ノ如シ、卽チ、上海方面ヨリ海路ニ依ルモノ、一箇年發著合計三二、〇〇〇人、營口海路ヨリ四〇、〇〇〇人、支那國有京奉線一〇〇、〇〇〇人、東支線發著一〇、〇〇〇人、朝鮮線經由八〇、〇〇〇人ヲ算セリ。

二、貨物

開業當初ニ於テハ、未タ、鐵道利用者尠ク、又物資ノ輸送モ見ルヘキモノナカリシカ、遂年、滿洲特產物タル大豆及豆粕ノ出廻多キト、大連營口兩港ニ於ケル、海運聯絡ノ擴大ト相俟ツテ、輸送數量頓ニ多キヲ加ヘタリ。現在ニ於ケル荷主割合ハ、支那人七一%、日本人二五%、外人四%ニシテ、將來ニ於テモ、此割合ヲ持續スル豫想ナリ。

(イ) 運賃等級

等級ハ之ヲ四級制トシ、外ニ、火藥類及生獸類ハ、別扱トシ居レリ。運賃ハ、出貨奬勵

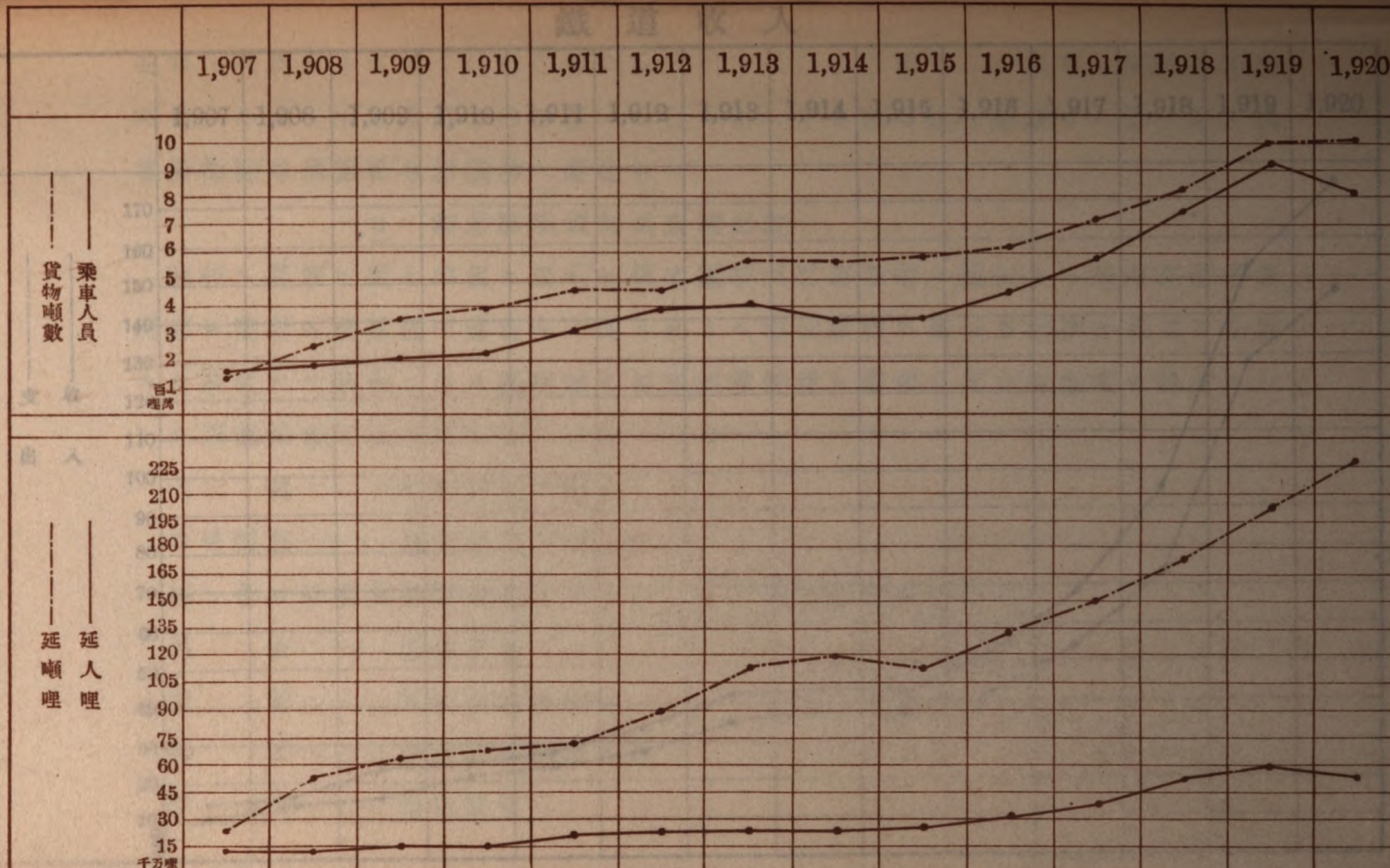
ト、生産保護ヲ其ノ基礎トシテ算出シ、主要ナル區間ニハ、三〇%ノ特定割引運賃ヲ制定シ、生活必要品及家屋建築材料ニ對シテハ、普通運賃竝上記特定割引運賃ノ外ニ、二五%引ト爲シ、又救恤輸送品ニ對シテハ、五〇%ノ割引ヲ行ヒ、一九一八年ノ、朝鮮饑饉、及一九二〇年ノ北支那饑饉ニ際シ、此ノ半減運賃ニテ、特ニ多額ノ食糧品輸送ヲ行ヒ、救恤ノ實ヲ擧ケタルハ世間周知ノ事實ナリ。

(ロ) 運送噸數噸哩

曩ニ述ヘタルカ如ク、産業奬勵ト、運賃減額ニ由ル出貨勸誘ニ、全力ヲ傾注シタルノミナラス、開業當初ハ、輸送貨物ノ、馬賊ノ被害相踵キタルヲ以テ、百方苦心ノ結果、守備兵ヲシテ、充分之カ監視ヲナサシメ、多大ノ犧牲ヲ拂ヒテ、漸ク其ノ脅威ヨリ免カルルヲ得、近時、成績大イニ看ルヘキモノアリ。即チ、開業當初ニ於テハ、一日一哩平均輸送噸數一、四一五噸ニ過キサリシカ、一九二〇年度ニハ、九、一二五噸ニ達シ、之ヲ全體ヨリ見ルトキハ、一箇年間取扱噸數ハ、一、四二六、〇〇〇噸ヨリ、一〇、一五四、〇〇〇噸ニ激増セリ。

(ハ) 重要貨物

開業以來ノ輸送貨物ノ種類ハ、凡テ當初ヨリ一貫シ、運賃收入ノ最モ多額ナル輸


1,907
1,908
1,909
1,910
1,911
1,912
1,913
1,914
1,915
1,916
1,917
1,918
1,919
1,920
乘車人員
貨物噸數
百萬
延人哩
延噸哩
千万哩

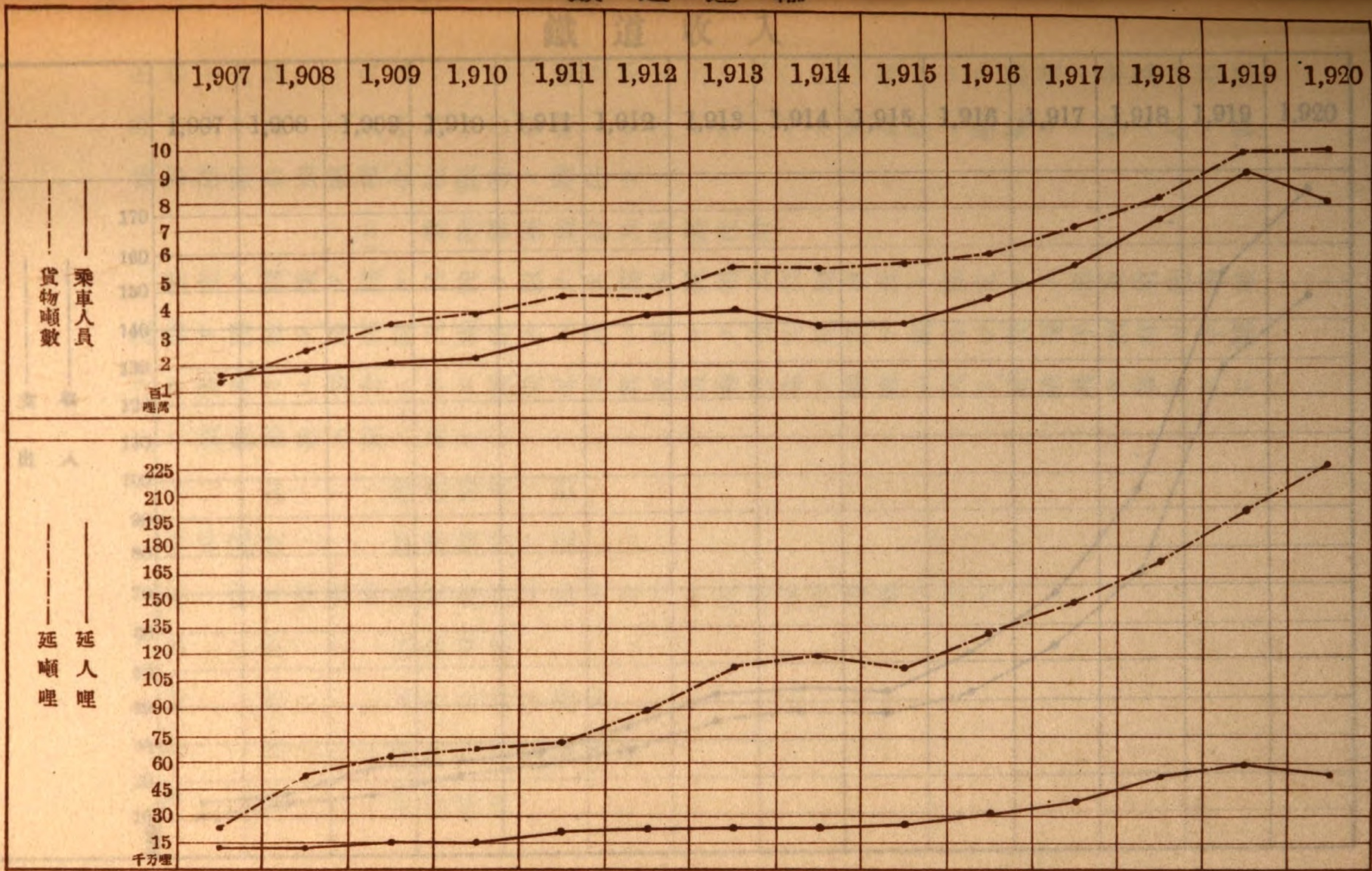
ト、生産保護ヲ其ノ基礎トシテ算出シ、主要ナル區間ニハ、三〇%ノ特定割引運賃ヲ制定シ、生活必要品及家屋建築材料ニ對シテハ、普通運賃竝上記特定割引運賃ノ外ニ、二五%引ト爲シ、又救恤輸送品ニ對シテハ、五〇%ノ割引ヲ行ヒ、一九一八年ノ、朝鮮饑饉、及一九二〇年ノ北支那饑饉ニ際シ、此ノ半減運賃ニテ、特ニ多額ノ食糧品輸送ヲ行ヒ、救恤ノ實ヲ擧ケタルハ世間周知ノ事實ナリ。

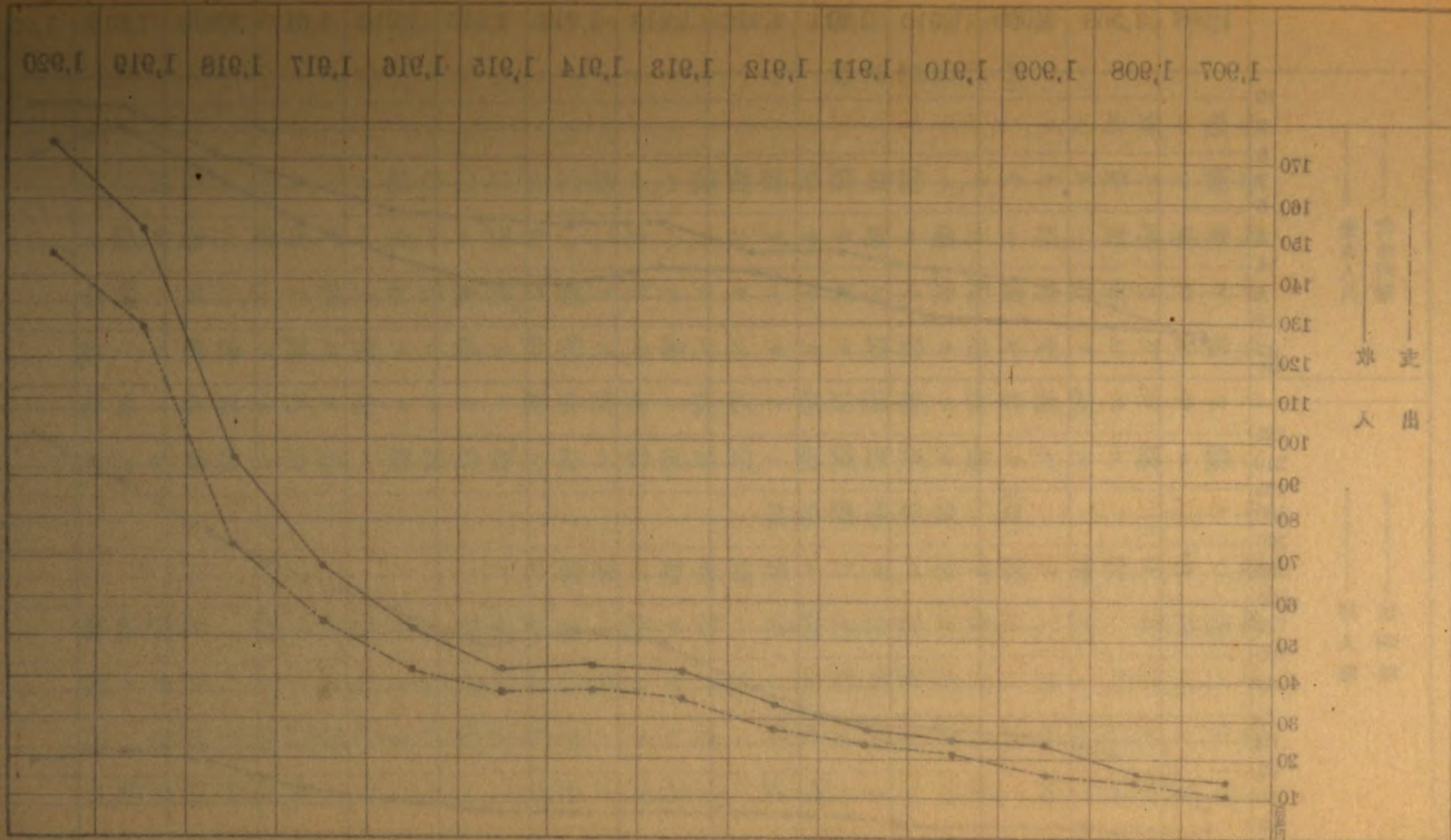
(ロ) 運送噸數噸哩

曩ニ述ヘタルカ如ク、産業奬勵ト、運賃減額ニ由ル出貨勸誘ニ、全力ヲ傾注シタルノミナラス、開業當初ハ、輸送貨物ノ、馬賊ノ被害相踵キタルヲ以テ、百方苦心ノ結果、守備兵ヲシテ、充分之カ監視ヲナサシメ、多大ノ犧牲ヲ拂ヒテ、漸ク其ノ脅威ヨリ免カルルヲ得、近時、成績大イニ看ルヘキモノアリ。卽チ、開業當初ニ於テハ、一日一哩平均輸送噸數一、四一五噸ニ過キサリシカ、一九二〇年度ニハ、九、一二五噸ニ達シ、之ヲ全體ヨリ見ルトキハ、一箇年間取扱噸數ハ、一、四二六、〇〇〇噸ヨリ、一〇、一五四、〇〇〇噸ニ激增セリ。

(ハ) 重要貨物

開業以來ノ輸送貨物ノ種類ハ、凡テ當初ヨリ一貫シ、運賃收入ノ最モ多額ナル輸


1,907
1,908
1,909
1,910
1,911
1,912
1,913
1,914
1,915
1,916
1,917
1,918
1,919
1,920
乘車人員
貨物噸數
10
9
8
7
6
5
4
3
2
百1
哩萬
延人哩
延噸哩
225
210
195
180
165
150
135
120
105
90
75
60
45
30
15
千万哩


支出
收入
170
160
150
140
130
120
110
100
90
80
70
60
50
40
30
20
10
1,907
1,908
1,909
1,910
1,911
1,912
1,913
1,914
1,915
1,916
1,917
1,918
1,919
1,920

出品ハ、大豆ノ一、八六一、〇〇〇噸、豆粕ノ三一六、〇〇〇噸ニシテ、數量ノ最高ハ、石灰及、コークスノ三、五〇四、〇〇〇噸トシ、之ニ次テハ、小麥、高粱ノ順位ニテ、輸入品ハ、綿絲布、砂糖、石油、機械、金物類等ノ順序ナリ。

（ニ）貨物聯絡施設及通關代辨

貨主ノ利便ヲ圖ル目的ヲ以テ、主要各鐵道、及汽船會社ト協定シテ、相互貨物聯絡運輸ヲ開始シ、滿洲輸入聯絡十一品ニ對シテ、特定運賃ヲ制定シ、發著手數料ヲ半減スル等、大イニ努力シタル結果、逐年、取扱貨物增加ノ趨勢ニ向ヒ、好結果ヲ擧ケツツアリ、聯絡系統ハ左ノ如シ。

上　海……航路聯絡二線
日本諸港……航路聯絡二線
（其ノ中日本郵船會社航路ニ由ルモノハ孟、米、濠、歐諸港ヲ含ム）
天　津……航路聯絡
南　清……楊子江沿岸諸港
山　東……航路及山東鐵道線
香　港……航路聯絡

吉　林……………鐵道線聯絡
東　清……………鐵道省線、朝鮮線、東清及烏蘇里線、航路
朝　鮮……………鐵道線
鐵道省……………航路及鐵道線、二線


其ノ他四鐵道、青島、哈爾賓等數箇聯絡アリ。而シテ何レモ通關代辨ヲ協定鐵道及汽船會社ニ於テ行ヒ、貨主ノ手數ヲ省略シツツアリ。

(ホ)　就業人員

日支兩國人從事員ハ、規律ヲ遵守シ、語學ニ通シタル者ヲ選ミ、其ノ配下ニ在ル支那苦力ハ、延人員四、一一五、〇〇〇人ヲ超エ、一日平均約一二、〇〇〇人ヲ算シ、コレカ爲メ、沿線地方勞働者ハ、生活ノ安定ヲ得ルト同時ニ、其ノ原始的生活ヨリ脫シテ、漸次、文化ノ恩惠ニ浴シ、凡テノ方面ニ於テ向上シツツアリ。

三、倉庫

一九〇八年、大連埠頭ニ於テ、繼承倉庫ニヨリ、埠頭保管ナル名義ノ下ニ、鐵道又ハ船舶ニヨリ、埠頭ニ到著シタル貨物ノ保管業務ヲ開始シ、又沿線地方ニ於テハ、運送取扱業者カ、堆貨ノ保管ヲ取扱ヒ居タルヲ、一九一一年、運送規定改正ト同時ニ、主要


(大連港) 着埠汽船及輸出入貨物比較
輸出貨物
輸入貨物
1.907
1.908
1.909
1.910
1.911
1.912
1.913
1.914

大文化ノ恩惠ニ浴シ、凡テノ方面ニ於テ向上シツツアリ。

倉庫

一九〇八年、大連埠頭ニ於テ[illegible]倉庫ニヨリ埠頭保管ナル名義ノ下ニ又[illegible]

取扱業者カ、堆貨ノ保管ヲ取扱ヒ居タルヲ、一九一一年[illegible]規定改正ト同時ニ主要

驛ニ於ケル倉庫、上家及野積場ヲ修築シテ、發送貨物保管ヲ開始シテ、現今ニ至リタリ。

營業倉庫ハ、百三十九棟、約六六八英畝坪ノ面積ヲ有シ、此他、埠頭及主要各驛ニ、尨大ナル面積ヲ有スル野積保管場ヲ有セリ。倉庫料金ハ、徹頭徹尾、滿蒙開發ト、産業奬勵ノ主旨ニ副ヒ、倉敷料及諸手數料ノ如キモ、可能ナル範圍ニ於テ、最モ低廉ニテ取扱居レリ。

營業成績モ、逐年、倉庫ノ利便ト、之カ利用ノ途漸ク周知セラルルト共ニ、益々好成績ヲ擧ケツツアリ。今、其ノ一部ヲ數字ニテ示セハ左ノ如シ。

一九一一年度	受入噸數	七一九、〇〇〇噸
	證券發行數	八、五〇〇通
一九一九年度	受入噸數	五、六一六、〇〇〇噸
	證券發行數	一〇〇、〇〇〇通

第六章　海運業

沿革、航路及成績

鐵道廣軌列車開通シテ、東清線ト接續シ、次テ、一九〇八年上海港トノ聯絡ヲ企圖

シ、更ニ青島ニ寄港スルコトトシテ、山東鐵道ト相互聯絡ヲ施行シタルモ、現在ニ於テハ、定期船榊丸一隻ヲ以テ營業スルニ至レリ、蓋シ諸汽船會社ノ健實ナル發達ニ基因シ、滿鐵會社ニ於テ、之カ營業ニ直接從事スルノ必要ヲ感セサルニ至リシヲ以テナリ。

一九一三年、大連港中繼貨物吸集ノ必要上、香港及廣東ノ船便ト相俟テ、南支沿岸航路ヲ開始シ、三千噸餘ノ汽船四隻ヲ以テ、渤海灣內主要各港及廣東香港航路ニ就航セシメタリ。

上海航路ノ營業成績ハ左ノ如シ。

一九一四年度	旅客人員	八、四〇〇人
	貨物噸數	一三二、四〇〇噸
一九一七年度	旅客人員	二四、六〇〇人
	貨物噸數	一五七、七〇〇噸
一九二〇年度	旅客人員	二二、三〇〇人
	貨物噸數	六六、七〇〇噸

第七章　港灣及埠頭

東淸鐵道會社ノ大連都市計畫ニ依レハ、市街區域ノ面積ハ、三二、五〇〇英畝築港


関東半島
金州湾
大連湾
旅順
小平島
現在
露時代施設略圖
倉庫課
立
地
小崗子棧橋

海面約二、五〇〇、〇〇〇英畝ニシテ、第一期工事トシテ、東清鐵道ハ、一千萬留ヲ以テ、附近部落ヲ買收シ、市街ノ建設ニ從事シ、而シテ、築港工事モ、亦、一千噸級ノ船舶百隻ヲ同時ニ繫留スル設備ヲ整ヘ、一箇年、五、八〇〇、〇〇〇噸ノ貨物ヲ、呑吐セシムルノ豫定ヲ以テシタリシカ、日露戰役ノ結果、遂ニ我會社ノ經營ニ歸スルニ至レリ。

會社繼承當時ハ、全部ノ工程尙未タ其ノ半ニ達セサリシカ、會社ハ、種々畫策ヲ囘ラシ、遂ニ延長一二、五〇〇呎ノ西北防波堤ト、一、二二一呎ノ東防波堤ヲ以テ抱擁スル港內中、五千噸級ノ船舶三〇隻一五〇、〇〇〇噸ヲ同時ニ繫留シ得ヘキ、岸壁延長一三、四七七尺ヲ有シ、水面ノ面積、九十四萬坪(七六八英畝)年額四、〇〇〇、〇〇〇噸ノ貨物ヲ呑吐スルノ能力ヲ具備スルニ至レリ。

尙、沿岸航行ノ「ジヤンク」ニ對シテハ、別ニ荷揚場ヲ設ク。

而シテ、會社カ本港灣改築ノミニ投シタル費用ノミニテモ、其ノ金額ハ、實ニ一三、〇〇〇、〇〇〇圓ニ達セリ。顧ツテ、過去二十年前ニ於ケル荒寥タル一灣頭ハ、今ヤ極東自由貿易港トシテ、上海ニ次ク良港トナリ、東亞進展ノ要衢ト化セルハ、轉タ今昔ノ感ニ堪ヘサル處ナリ。

一、大連埠頭

(イ) 沿革

繼承當時ニ於テハ、埠頭設備ヲ殆ト缺如シ、僅ニ不完全ナル繫船設備、及木造倉庫其ノ他十三棟ヲ存セシニ過キサリシヲ以テ、漸次、之カ完成ヲ計リ現今ニ至レリ。

一九〇七年、埠頭ノ利用及貨物取扱ニ要スル諸規則ヲ制定シテ、公衆ノ便ニ供シ一九一一年、倉庫營業ヲ開始シ、同時ニ、保管貨物ニ對スル無料火災保險ノ制度ヲモ開始セリ、翌年、更ニ、大豆其ノ他特產物ノ檢查事務ヲ開始シ、次イテ、豆粕混合保管ヲモ開始ス。

陸揚設備モ、漸ヲ追フテ完成ヲ期シ、一九一四年ニ於ケル、倉庫及上家三七棟、三〇英畝モ、一九二〇年ニハ、七三棟六六英畝ニ達シ、著埠頭汽船數モ、二二八〇隻ヨリ二、九四四隻ニ增加スル盛況トナリ、其ノ他鐵道引込線ハ、之ヲ三五哩ニ延長シ、其ノ他ノ設備モ亦東亞ノ要港タル資格ヲ整フルニ至レリ。



大連埠頭特産物積込ノ状景

（ロ）貨物取扱

貨物ハ、戎克貨物ヲ除ク外、凡テ、埠頭ニ於テ取扱ヒ、増加ノ趨勢、年ト共ニ顯著ナリ。

（ハ）輸出物貨噸數

一九〇九年	七五八、〇〇〇噸
一九二〇年	三、五三〇、〇〇〇噸

（ニ）輸入貨物噸數

一九〇九年	三一二、〇〇〇噸
一九二〇年	八三一、〇〇〇噸

右表ノ示スカ如ク、輸出貨物ノ大激增ヲ來セル所以ハ、其ノ如何ニ鐵道經營ニ由リテ、滿洲ノ啓發セラレシカヲ啓示シ、又、埠頭設備ノ完備ヲ證明スルモノニシテ、尙貨物聯絡運輸開始ノ效果モ預ッテ力アルモノト信ス。

（ホ）荷役作業

荷役作業ハ、埠頭ノ重大作業ニシテ、之カ迅速正確ヲ期スルニ力メツツアリ、天候、貨物種類其ノ他ニ依リテ一定セサルモ、所要時間ハ大約左ノ如シ。

石炭船積	一船	四口	十時間	三、〇〇〇噸
大豆雜穀船積	同	同	同	二、五〇〇噸

豆粕船積	一船	四口	十時間	三、〇〇〇噸
木材揚陸	同	同	同	一、五〇〇噸
重量レール揚陸	同	同	同	九〇〇噸

營業開始以來ノ荷役作業狀態ノ概況ハ、左記ノ如ク、平均一日一人ノ取扱貨物高ノ増加ハ、荷役作業力ノ進歩ヲ啓示スルモノナリ。

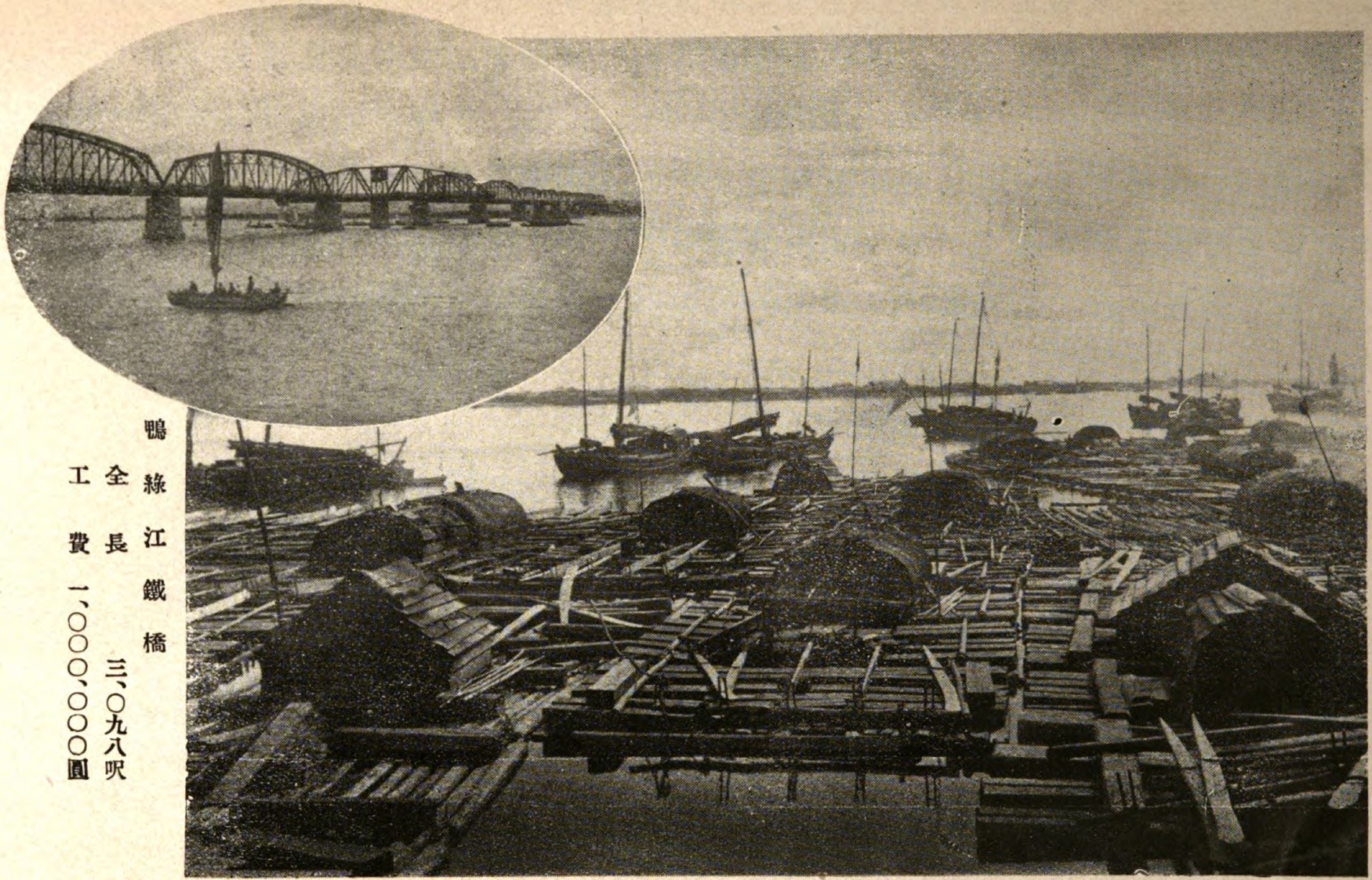
一九〇七年	取扱貨物噸數	一、一五九、〇〇〇噸
	就業延人員	四四二、〇〇〇人
	一日一人取扱貨物	二六噸
一九二〇年	取扱貨物噸數	一三、六九九、〇〇〇噸
	就業延人員	二、七一五、〇〇〇人
	一日一人取扱貨物	五一噸

(ヘ) 檢査、代辨

一九一三年、大豆其ノ他檢査規程ヲ制定シ、各種特産物ノ檢査請求ニ應シ、重要物産取引所ニ於ケル取引ノ格付ヲ爲シ、一面品質ノ改良進歩ヲ促シツヽアリ。

又貨主ノ便宜ヲ圖リ、貨物停滯防止策トシテ、埠頭構内ニ於ケル貨物ニ對シ、代辨事務ヲ開始シタルカ、頗ル好評ニテ成績又良好ナリ。

二、安東埠頭



鴨綠江鐵橋
全長 三、〇九八呎
工費 一、〇〇〇、〇〇〇圓

安東埠頭

安奉支線廣軌開通ト同時ニ、北清輪船公司ヲシテ、近海定期航路ヲ開始セシメ、一九一二年以後、護岸築造、棧橋架設、江床浚渫、貯水地等ノ土木工事ヲ興セリ。現在、倉庫及上家九二・二英畝ヲ有ス。

往時ニ於テハ、物資ハ多ク船舶ニ依リテ輸出入セラレタルモ、鐵道線ノ完備ト共ニ漸次之ニ吸集セラレ、殊ニ、一九一三年、國境關稅二分ノ一減、竝翌年滿鐵、鐵道省、及朝鮮鐵道三線連帶運賃割引政策ノ實施セラレテヨリ、輸入品ハ多ク鐵道ニ由ルコトトナレリ。

安東埠頭取扱ニ係ル輸出入貨物噸數ハ、鐵道ノ發達聯絡制度ノ完備ト共ニ、最近輸入貨物ハ逐年減少ノ傾向アリ。

一九一二年	輸出噸數	四、五〇〇噸
	輸入噸數	四〇、〇〇〇噸
一九一七年	輸出噸數	二二、〇〇〇噸
	輸入噸數	二九六、〇〇〇噸
一九二〇年	輸出噸數	三一、〇〇〇噸
	輸入噸數	一八〇、〇〇〇噸

安東埠頭ノ生命ハ、木材ニ在ルヲ以テ、貯木池及貯木場ヲ設ケ、倉庫證券ヲ發行シテ金融ノ便ヲ圖リ、同業者ヲシテ多大ノ便益ヲ得セシメツツアルカ、該輸出數量ハ、

一九一二年　一九、九〇〇噸

一九一六年　二〇三、〇〇〇噸

ニシテ、爾後益材木業旺盛トナリ、其ノ數量モ激增ヲ來セリ。

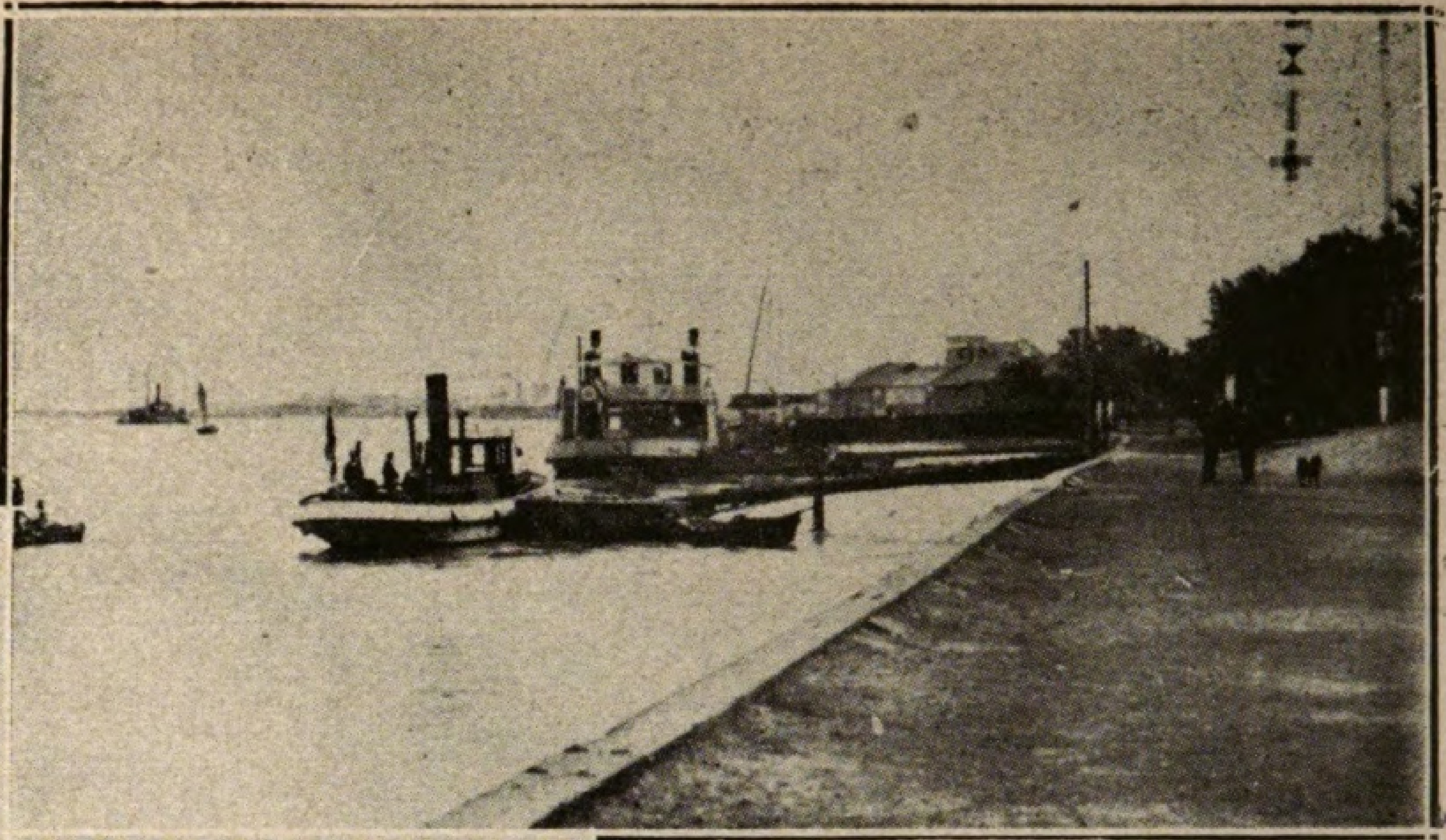
三、營口埠頭

一九一〇年開業シタルモ、設備不完全ヲ極メタルヲ以テ、鋭意設備ノ完成ヲ期シ、海口聯絡ノ必要上、舊牛家屯埠頭ヲ現在ノ場所ニ移轉シ、一九一四年其ノ工ヲ完成シタリ。

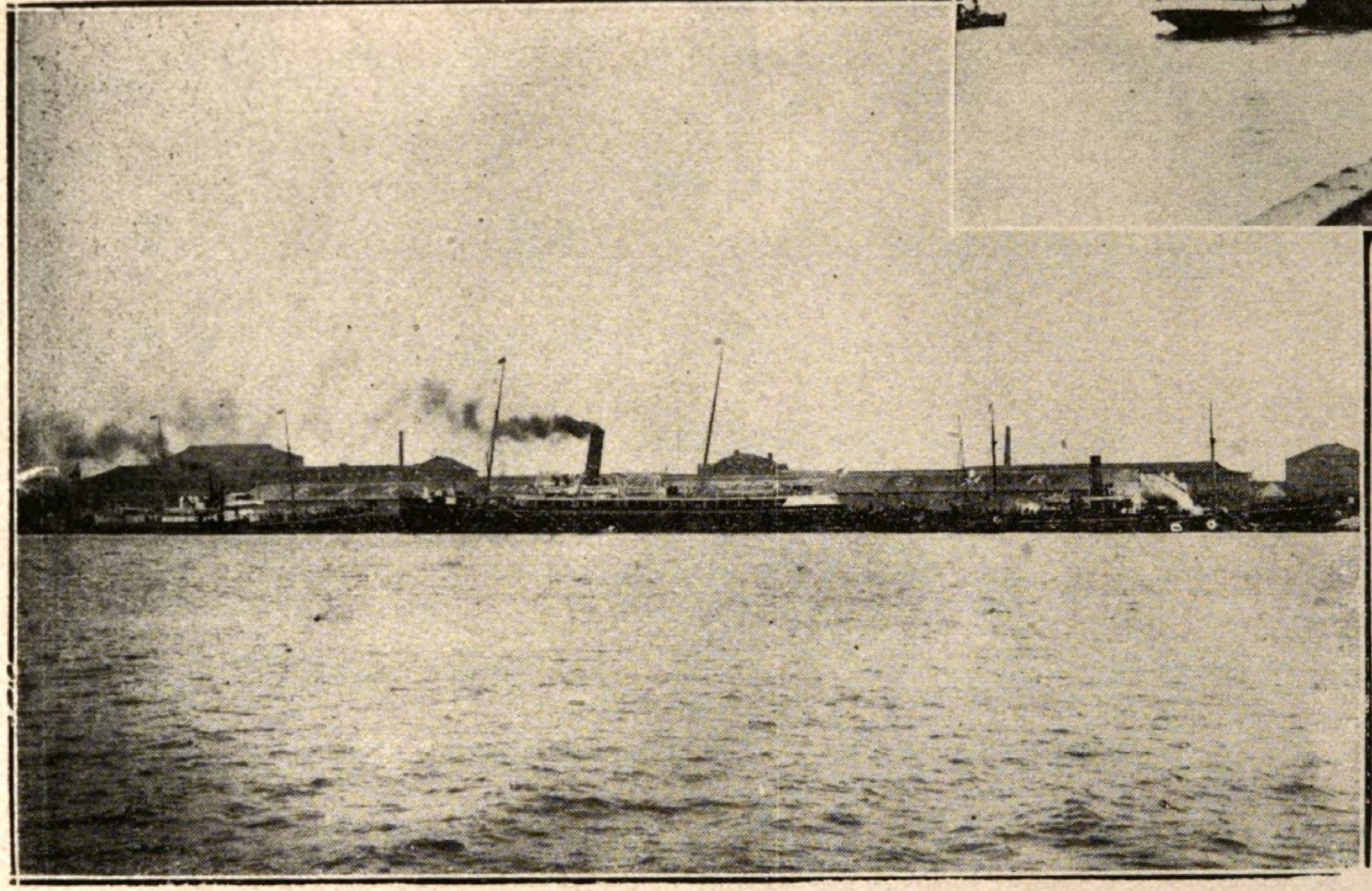
現在ニ於テハ、護岸工事延長四、二〇〇呎、倉庫六棟一四・五英畝ノ他、尨大ナル野積場ヲ有シ、輸出入貨物、一九一四年ニ於テハ、輸入四七、七〇〇噸輸出四三九、〇〇〇噸ナリシカ、一九二〇年ニハ、輸入九六、〇〇〇噸ヲ超エタルニモ拘ラス、輸出ハ實ニ一・六六、八〇〇、〇〇〇噸ニ減少シタリ。要スルニ、大連港ノ發達ニ基因スルモノニシテ、當然ノ歸趨ナリトス。

四、上海埠頭

上海航路ノ發展ヲ確實ナラシメ、且、大連ニ一般船舶ヲ招致スル目的ヲ以テ、上海ニ、棧橋埠頭、竝附屬倉庫業ヲ經營スルノ計畫ヲ立テ、一九一一年、黃浦江下流ニ棧橋埠頭竝附屬土地二萬餘坪倉庫十棟四千坪其ノ他ヲ購入シテ、海面ノ浚渫及護岸工



營口滿鐵埠頭



上海滿鐵會社埠頭

事ヲ施行シ、茲ニ漸ク開業ヲ見ルニ至レリ。

輸出入狀況左ノ如シ。

一九一一年

輸出貨物	二一、〇〇〇噸
輸入貨物	二九、六〇〇噸
著埠汽船	七〇隻

一九二〇年

輸出貨物	五二、九〇〇噸
輸入貨物	一四三、〇〇〇噸
著埠汽船	一七三隻

右數字ノ示スカ如ク、年々發展ノ機運ニ向ヒ居レルカ、今後、滿洲上海聯絡ノ利用者增加ト共ニ、一層順調ニ發展スル見込ナリ。

第八章　附屬旅館營業

一、旅館設置ノ主旨

歐亞聯絡鐵道幹線ノ一部ニシテ、且ツ、新開地滿洲ヲ縱貫スル鐵道ナレハ、外國人旅客宿泊ニ適當ナル洋式旅館ノ開設ハ、誠ニ、焦眉ノ急トスルトコロニシテ、此ノ必要ヨリ、大連、旅順、奉天、長春及大連ノ近郊星ケ浦ノ五箇所ニ、內容外觀共ニ完備セル歐米式旅館ヲ建設シテ、一般旅客ノ便ニ供スルニ至リタリ、而シテ、本社ノ**ホテル**經

營ハ、營利ヲ目的トスルモノニアラスシテ、一ニ鐵道水運業ノ補助及之カ培養機關タルニ在リ。

二、各旅館及設備一般

（イ）大連ヤマトホテル

露國時代ノ舊式ホテルヲ改造シテ、一九〇七年夏ヨリ營業ヲ開始シタルニ、踰エテ歐亞聯絡成ルニ及ムテ、大連市中央ノ地域ヲ選定シテ、近世「ルネサンス」式四階建、新式ホテルヲ建築シ諸般ノ設備ヲ完全セリ。

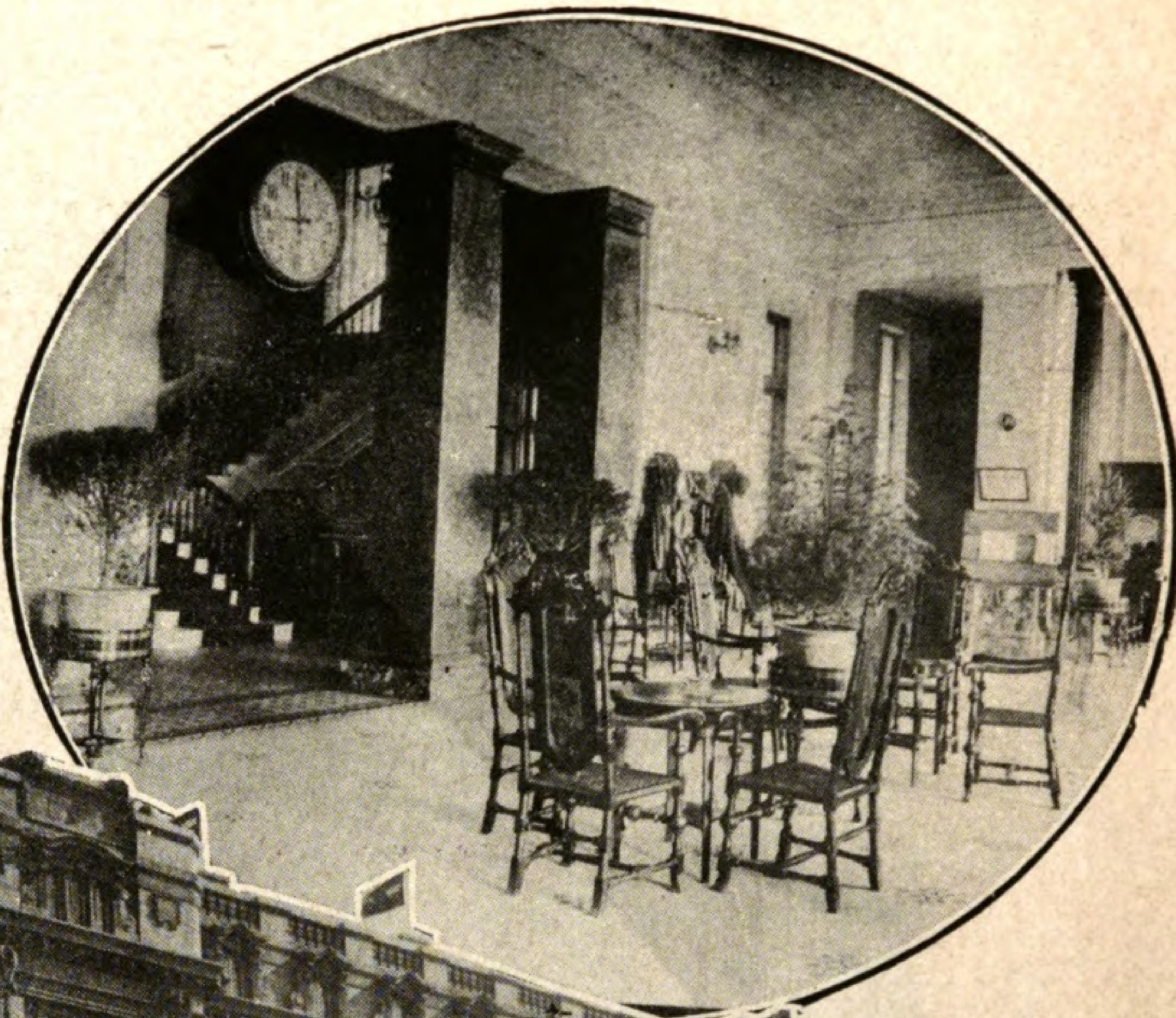
（ロ）星ケ浦ヤマトホテル

大連市街ニ近接セル、滿洲唯一ノ風光明媚ナル海濱、星ケ浦ノ地ヲトシテ、貸別莊及娛樂的設備ヲ施シ、一大公園化シテ、此處ニ洋式五棟、日本式三棟ヨリ成ルホテルヲ建設シ、庭園海水浴場ヲ設ケテ開放シ、隣接地ニゴルフ、グラウンドヲ作ル等、別莊地的設備遺憾ナシ。

（ハ）旅順ヤマトホテル

一九〇八年、風光絕佳ニシテ、舊蹟名勝ニ富ミ、東洋無比ノ要塞地トシテ知ラルル旅順ニ於テ、露治時代ノ未竣成建物ヲ修繕シテ、ホテルヲ開業シタルカ、遊覽觀光ノ

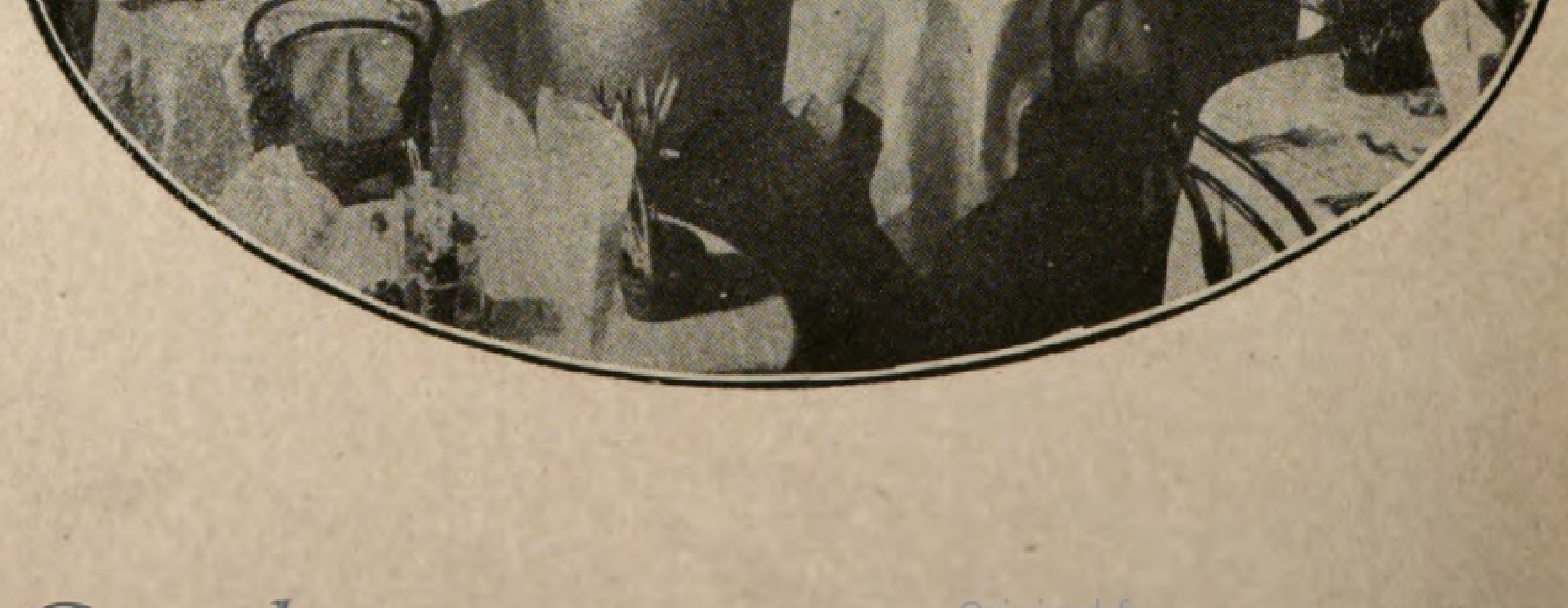
旅館設備（其一）



大連ヤマトホテル（玄關）

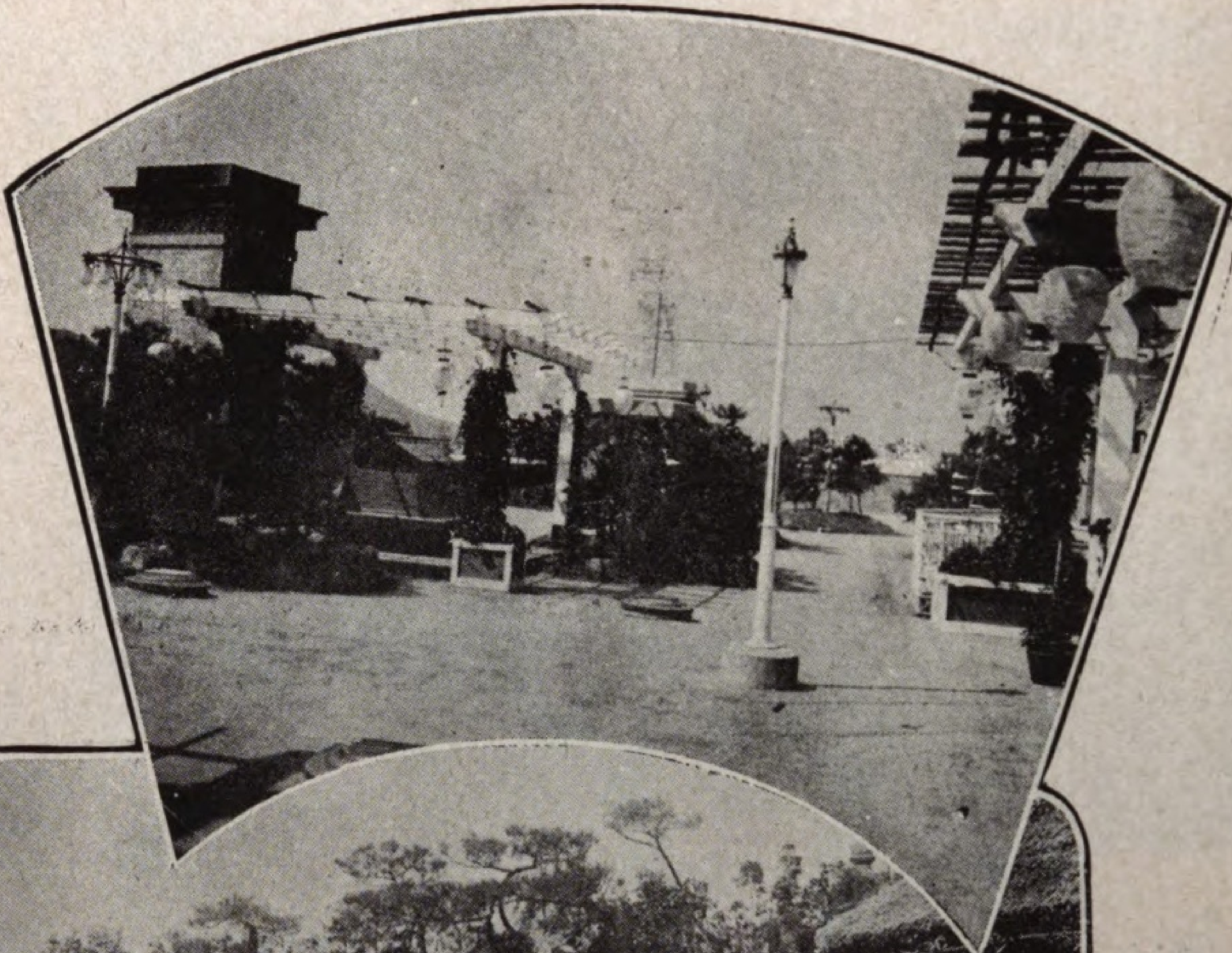


同上（全景）



同上（食堂）

旅館ノ設備（其二）



大連大和ホテル屋上庭園（其一）



同上（其二）



同上（其三）

旅館設備（其三）



星ケ浦ヤマトホテル



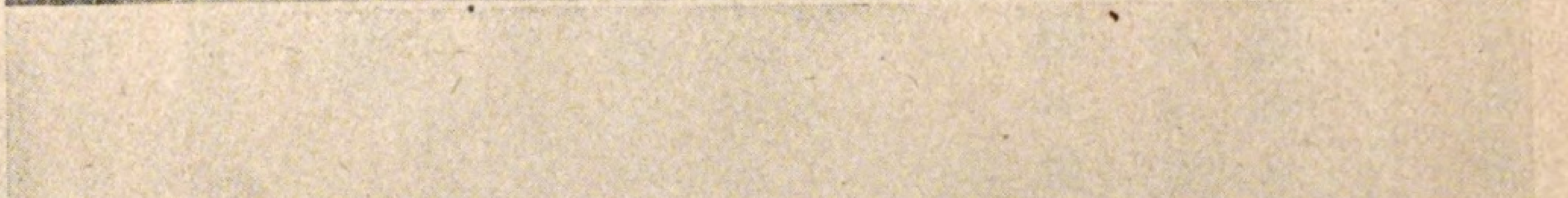
星ケ浦海邊ニ臨ム大和ホテル「ヘランダ」



星ケ浦海邊

長春停車場





長春大和ホテル

旅客陸續相次キテ好況ヲ極メ、逐年發展シツツアリ。

（ニ）　奉天**ヤマトホテル**

一九一〇年、奉天停車場ノ新築成ルト同時ニ、其ノ階上及階下ノ一部ヲ**ホテル**ニ充テ、所謂鐵道**ホテル**ヲ開業ス。滿洲ノ開發ト共ニ、逐年宿泊客增加シ、到底需要ニ應シ能ハサルニ至リシヲ以テ、目下新築擴張ニ就キ考慮中ニテ、近ク、一大**ホテル**ヲ建設スヘキ機運ニ遭遇シ居レリ。

（ホ）　長春**ヤマトホテル**

一九〇八年、長春倶樂部ノ建物ニ應急施設ヲ加ヘタルニ初リ、一九一〇年近世式設備ヲ具備シタル**ホテル**ヲ新築シタリ。而シテ長春ハ、其ノ地理上、日露支官民ノ社交場トシテ、或ハ、視察旅行者ノ宿泊ニ利用セラレ、成績頗ル良好ナリ。

第九章　運輸從事員

配備區域數百哩ニ亙リ、人物經濟難容易ニアラス。而カモ、直接貨主及旅客ニ接スル運輸從事員ノ事故、之カ選擇ト敎養ニ、細心ノ注意ヲ拂ヒ、尙ホ、其ノ鐵道カ、滿洲開發ヲ、使命トスルモノナルカ故ニ、可能ナル範圍ニ於テ、幾多ノ不便ト不利益ニ堪エ

ッツ、支那人ヲヨリ多ク使用スルコトトシ居レルカ、現在從事員ハ左ノ如シ。

日本人運輸從事員	七、八〇〇人
支那人運輸從事員	三、〇〇〇人
支那人夫使役人員	一日平均 一九、四〇〇人

而シテ、日本從事員ハ、中等敎育者以上ノモノヲ重ニ採用スル方針ヲ執リテ、內容ノ充實ヲ期シ、特ニ、英支兩國語ニ優秀ナル技量ヲ有スル大學及專門學校出身約二百五十名ヲ各驛所ニ配屬シテ、貨客ノ便ヲ圖リ居リ、尙ホ、日本人從事員ニ支、英兩國語ヲ專念ニ修學セシメ、以テ遺漏ナキヲ期シ居レリ。

第十章　支那鐵道トノ成績比較

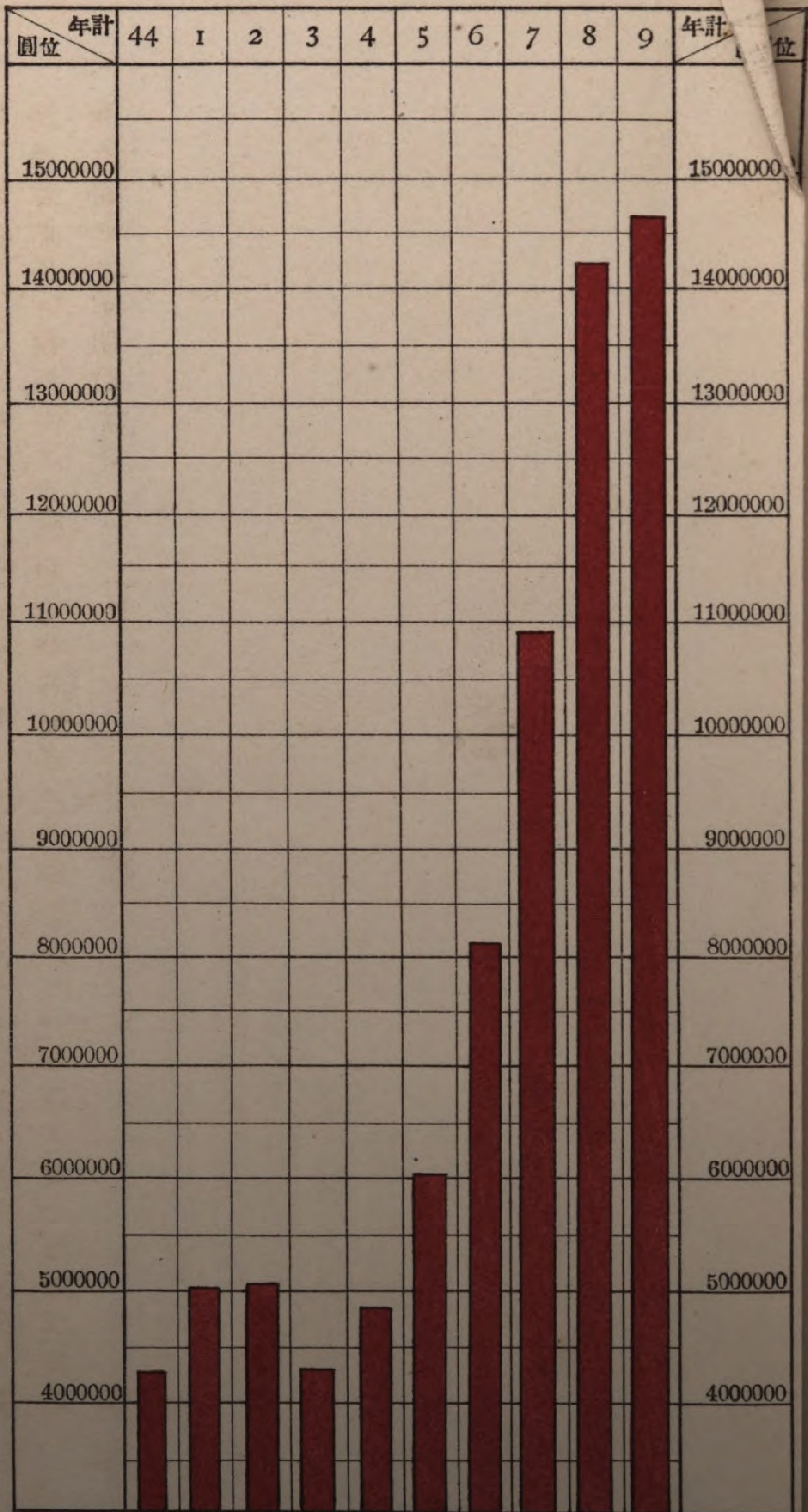
支那鐵道ハ、各自其位置優勝ニシテ、住民及物資亦豐富ナルモ、我南滿洲鐵道ハ、新開地滿洲ヲ縱貫シ、輸出入貿易漸ク之ヨリ旺ムナラムトスル狀態ニアリ、土地ノ開墾、農產物ノ產出高等モ、未タ其ノ道程ニアリト謂フ可ク、住民ノ消費物貨モ亦、決シテ多額ナリトセス。然モ、北ニ東淸鐵道及浦鹽港アリ。朝鮮鐵道ハ、日本貿易貨物ヲ之ニ吸集セムトシ、天津ヲ控エテ京奉線ノ競爭アル等、他鐵道ニ比較シテ、頗ル不利益ナル立場ニアリト云フ可シ。然ルニ、一九一八年度ノ成績ヲ數字ニテ示セハ、

滿鐵線	列車走行哩	五、九八二、〇〇〇哩
	旅客輸送人員	七、四九二、〇〇〇人
	貨物輸送噸數	九、五六三、〇〇〇噸
京漢線	列車走行哩	三、七五四、〇〇〇哩
	旅客輸送人員	三、六一六、〇〇〇人
	貨物輸送噸數	三、九三二、〇〇〇噸
京奉線	列車走行哩	三、四九六、〇〇〇哩
	旅客輸送人員	三五七八、〇〇〇人
	貨物輸送噸數	六、〇一四、〇〇〇噸
津浦線	列車走行哩	二、三三九、〇〇〇哩
	旅客輸送人員	二、四四六、〇〇〇人
	貨物輸送噸數	二、三一六、〇〇〇噸
滬寧線	列車走行哩	一、四四六、〇〇〇哩
	旅客輸送人員	六、三九九、〇〇〇人
	貨物輸送噸送	一、一三一、〇〇〇噸

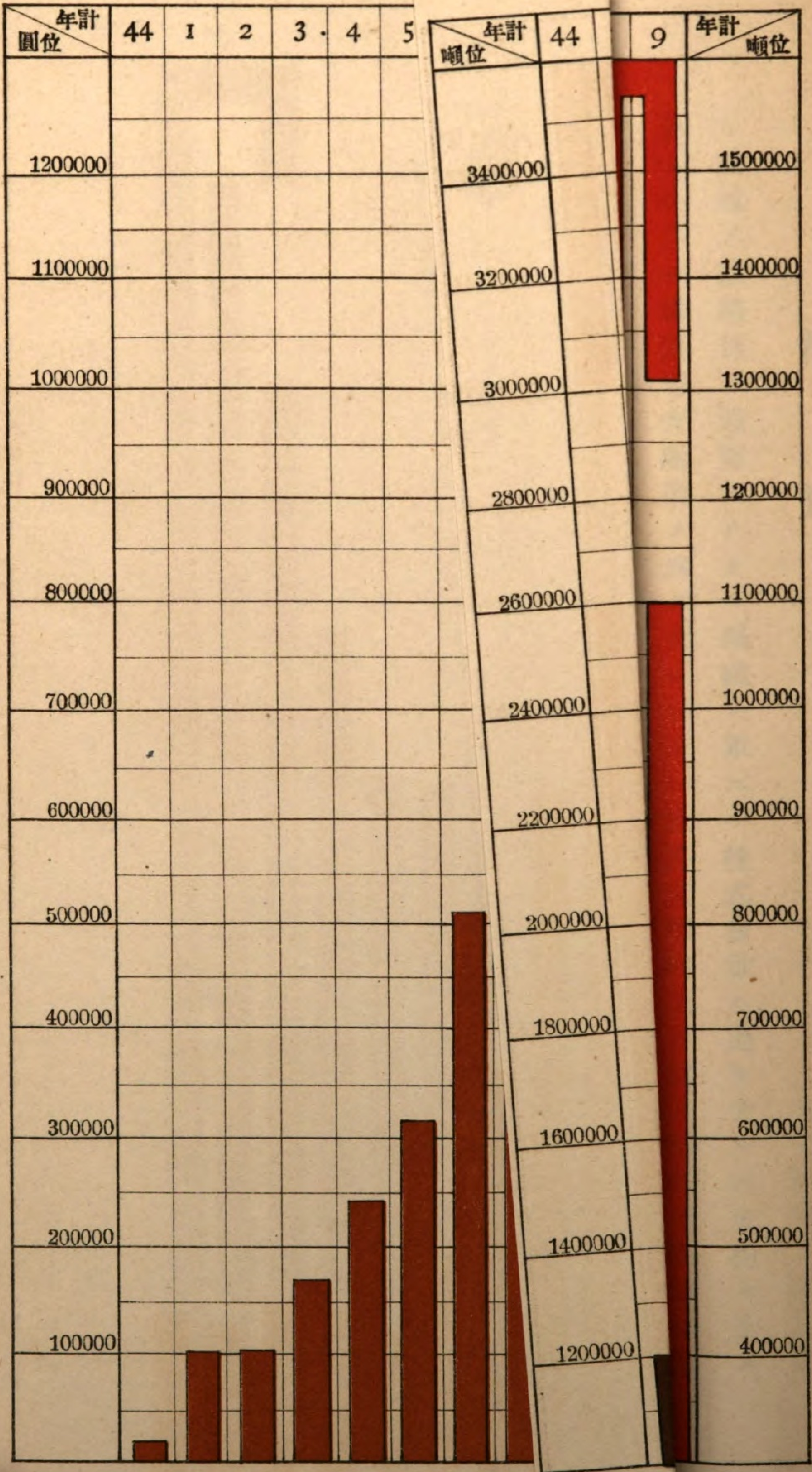
右表ノ如ク、其ノ何レノ鐵道ヨリモ、優秀ナル成績ヲ擧ケ得タル所謂ノモノハ、南滿洲鐵道會社カ、如何ニ沿線産業ノ奬勵ト、貿易發展ニ貢獻シ、荒漠タリシ滿洲ノ天地ヲ開拓シテ、世界的生産地化セシメツツアルノ證左ナリト信ス。而シテ、滿蒙開發

ハ、尚今後ニヨリ多ク望ミヲ囑スヘク、從ツテ、鐵道成績モ年ト共ニ向上シ、露國カ經濟及政治的ニ復活シテ、東清鐵道利用ノ多キヲ加ヘムニハ、相俟テ尚一層好成績ヲ擧ケ得ルコト明白ナリ。

客車收入


年計
圓位
44
1
2
3
4
5
6
7
8
9
15000000
14000000
13000000
12000000
11000000
10000000
9000000
8000000
7000000
6000000
5000000
4000000

倉庫



年計
圓位
44
1
2
3
4
5
1200000
1100000
1000000
900000
800000
700000
600000
500000
400000
300000
200000
100000
年計
噸位
44
9
3400000
3200000
3000000
2800000
2600000
2400000
2200000
2000000
1800000
1600000
1400000
1200000
年計
噸位
1500000
1400000
1300000
1200000
1100000
1000000
900000
800000
700000
600000
500000
400000

概括

前述ノ諸項目ヲ通覽スルトキ、滿鐵ハ單ニ一株式會社ニ過キサルニモ拘ハラス、小ニシテハ滿蒙地方開發ノ爲メ、大ニシテハ世界文明向上ノ爲メ、特殊ノ使命ヲ帶ヘルモノナルコトヲ看取スヘシ。

既ニ特種ノ使命アリ、諸種ノ點ニ於テ、世間一般ノ營利會社ト其趣ヲ異ニスルハ當然也。而シテ其特種ノ色彩コソ則チ滿鐵會社ノ誇トシテ中外ノ認ムル處ナラスンハ非ス。

滿鐵ハ其創立以來夙ニ日支共存共榮ノ主義ヲ一大方針トナシ、常ニ之ヲ嚴守シテ之カ遂行ト、其主旨ノ徹底ノ爲メニ最善ノ努力ヲ費シ來レリ。而シテ從前ニ於テハ萬般ノ施設ニ對シ反ツテ、疑惑ノ眼ヲ以テ見ラルルノ傾向アリタルモ、近時支那人殊ニ滿蒙地方ノ近接在住民間ニ、漸次該主義ヲ諒解スル者、增加シ來リタルハ、日支兩國ノ爲メニ誠ニ慶賀スヘキ現象ナリ。滿鐵ノ事業カ日本ニ採リテ有益ナルハ勿論、之カ直接間接ニ支那殊ニ滿蒙ノ開發トナリ滿蒙ノ開發カ又滿鐵ノ事業ヲシテ活潑ナラシメ、互ニ循環的ニ相助成シテ、日支兩國カ密接ニシテ離ルヘカラサル

共同利害關係ニ立ツヘキコトハ、正ニ理論上ヨリ然ルノミナラス、之ヲ從來ノ實際ニ徵スレハ益々其ノ然ルコトヲ容易ニ發見シ得ヘシ、其最モ著シキ例トシテハ、鐵道運輸ノ利便カ滿蒙一帶ニ於ケル農產物ノ需要ヲ喚起シ、茲十數年來ニ亙ル大豆、高粱、粟等ノ耕地面積及產額ノ增加ハ頗ル顯著ナルモノアリ。其他之ニ附隨シテ商工業ノ勃興トナリ、滿蒙ニ於ケル生活狀態ニ著シキ變化ヲ與ヘタリ。又單ニ之ヲ多數支那人滿鐵從業者ノ現ニ受ケツツアル利益ニ就テ見ルモ、簡明直截ニ日支共存共榮ノ實ヲ發見シ得ヘク、其他直接間接其例ニ乏シカラスト雖モ、一言ヲ以テ掩ヘハ滿鐵ノ事業一トシテ然カラサルハナキ也。然ルニ滿鐵側、其他日本人カ、日支共存共榮ノ主義ニ基キテ、滿蒙ノ開發ヲ高唱スルニ當リ、稍モスレハ之ヲ以テ侵略方針ナリト中傷スルモノアリ、思ハサルモ甚シト謂ハサルヘカラス。尙ホ日支共存共榮主義ヲ以テ、他ノ諸外國ヲ排斥スルモノト誤解スルモノアルモ、亦大ナル誤ナリ。支那ニ於ケル列國ノ機會均等ト、日支共存共榮トハ全ク別箇ノ問題ナリ。支那開發ハ何國カ之ヲ行フモ、同樣ニ世界ノ福祉ヲ增進スルモノナルコトハ自明ノ理ナリ。唯日本ト支那、殊ニ滿蒙トハ地理的ニモ其他總ユル點ニ於テ密接ナル關係ヲ有シ、支那開發ノ大使命ヲ負フモノハ、日本ヲ措イテ他ニ求ムヘカラス。又日本ハ支那ヲ開

發スルニ非レハ、商工業ノ發展ヲ期シ能ハス。年々七十萬ノ過剩人口增加ノ處置ニ窮シ、遂ニ自滅スルノ外ナカルヘシ。而シテ支那ハ一般ニ文化ノ程度幼稚ニシテ自ラ文明的施設ニヨリテ、其富源ヲ開發スル能力ヲ缺クヲ以テ、日本カ滿蒙ニ文明的施設ヲ提供シ、共存共榮ノ實ヲ擧ケンコトヲ欲スルノミ、是レ軈テ世界ノ福祉ヲ增進スル所以ニシテ、人類共同ノ目的ニ副フコトヲ期スルノ外、斷シテ他意アルニ非ルナリ。

以上、本書各段ニ於テ述ヘタルカ如キ諸般ノ經濟的施設カ、如何ニ日支兩國ノ福利ヲ增進シ、世界的ニ貢獻スル所アリタルカハ、天下周知ノ事實ニシテ、之又本社ノ一大誇トナス所タルハ論ヲ俟タス。而シテ滿鐵ノ主眼トスル所ハ、純然タル經濟的觀念ニ基キ、合理的ニ滿蒙ノ開發ヲナスニアリテ、毫モ政治的色彩ヲ加味セス、而シテ滿鐵カ今日ノ隆盛ヲ來シ、益々其基礎ヲ鞏固ニスルヲ得タルモ、一ニ此純然タル經濟的施設ノ賜ト稱スルコトヲ得ヘク、現時ノ如キ、世界經濟組織ニ於テ、不合理ナル投資カ遂ニ有終ノ美ヲ完ウシ能ハサルコトハ、何人ト雖モ、容易ニ首肯シ得ル所ナルヘシ。然ルニ、滿鐵ノ經濟的施設ヲ以テ、日本ノ獨占的利益ヲ云々非難スルモノアリ、是レ等ハ全ク事情ノ不知ヨリ來ルカ、又ハ世界的經濟關係ニ對スル智識ノ缺

陷ヲ物語ルモノニシテ、元ヨリ採ルニ足ラス。滿鐵ノ滿蒙開發ニヨリテ、如何ニ支那人及外國商人ノ利益ヲ齎シ、如何ニ滿蒙ノ物資ヲ歐米諸國ニ供給シ、如何ニ支那ノ購買力ヲ增進シテ、歐米ノ物資ヲ支那ニ吸收シタルカハ、ヨク經濟統計ノ示ス所ニシテ、滿鐵ノ經濟的施設ト世界的經濟トノ緊密重大ナル關係ヲ諒得スルニ難カラサルヘク、單ニ、滿鐵カ滿蒙開發ノ爲メニ直接ニ歐米諸國ヨリ輸入シタル鐵類、機械、器具、其他諸材料カ、如何ニ莫大ナル額ニ達シタルカヲ見テモ亦、近眼者流ノ蒙ヲ啓クニ足ルモノアラム。

滿鐵カ一營利株式會社タル一方ニ於テ、都市經營、敎育、衞生等不生產的ナル文化的施設ニ莫大ナル資金ト努力トヲ拂ヒツツアルハ、又其一大特徵トスル所ニシテ、舊時、露國カ滿鐵ヲ經營シタリシ當時ニ於テ、露國カ殆ン文化的施設ヲ顧ルノ、餘裕ナク、要塞ノ設備、軍隊ノ駐屯等專ラ軍事的施設ニ銳意シタルトハ、全ク其選ヲ異ニスル所ナリ。滿鐵創立以來、十數年來ニ亙ル文化的施設ニヨリテ、支那人カ受ケタル幸福ハ、蓋シ甚大ナルモノアリ、今茲ニ一々之カ施設ヲ詳記スルノ煩ヲ避クヘシト雖モ、文化ノ普及ハ、苦心ノ割合ニ頗ル困難ナル事業ニシテ、滿鐵沿線附屬地ニ於テハ、稍ヤ成功ノ域ニ向ヒツツアルモ、之ヲ滿蒙一帶ニ普及セシムル事ハ難事中ノ難

事ト謂ハサルヘカラス。茲ニ特ニ注意ヲ喚起セント欲スルハ、文明普及ノ主體カ關東州及滿鐵沿線附屬地ノ一小區域ヲ一足場トスル少數ノ日本人ニシテ、其客體カ廣大ナル滿蒙一帶ノ地域ト、多數未開住民ナルコト即チ是ナリ。然モ滿鐵ト滿蒙トノ關係ハ行政廳ト植民地トノ關係トハ全ク異ナリ、滿蒙ハ支那ノ領土ナレハ、種々ノ點ニ於テ自ラ行動ノ不便ト、制限トヲ受ケサルヘカラス。一般植民地ニ於テスラ未開住民ノ文化的普及ハ、頗ル難事トスル所ナルニ、況ンヤ滿鐵ト滿蒙トノ關係ノ如キ場合ニ於テハ、一層困難ナルコト想像ニ難カラス。若シ滿鐵カ滿蒙ノ文化普及ニ於テ成功スルトセンカ、寧ロ、植民政策上ノ一大革新トモ稱スヘキナリ。然ルニ斯カル狀況ニ於テ尚ホ且ツ、滿鐵ノ文化的施設ハ、著々進行シテ、成功ノ期待ヲ繋クニ足ルモノ大也。コレ又本社ノ私カニ誇ル處ナリ。

滿鐵ハ文化的、經濟的施設ニ鋭意スルト同時ニ一方ニ於テ列國機會均等主義ヲ嚴守シ、更ニ進ンテ、諸外國ニ對シテ公平ニ、出來得ル限リノ便宜ヲ計ルニ甚大ノ注意ヲ拂ヒ來レリ。然ルニ運輸取扱、支那人ノ待遇等ニ關シ屢々無根ノ揣摩憶測ヲ受ケ少ナカラサル誤解ヲ生シタル事アルハ、誠ニ遺憾トスル所ニシテ、此等ノ點ニ就テハ極力釋明ニ努ムル所アリタルヲ以テ、略ホ諒解シ得タルヘシト確信スルモノ

ナルカ、殊ニ支那人ノ待遇ニ關シ虛構ノ風說ヲ喧傳スルモノアルハ、實ニ心外千萬ナリ。滿鐵附屬地帶ニ於ケル支那人ノ平等待遇乃至優遇ハ恐ラク諸外國ノ植民地等ニ於テハ、其類例ヲ見サル所ナルヘク、是ノ現象ハ一度ヒ足ヲ滿洲ニ入レタルモノノ直チニ發見スル所ニシテ、此種虛構ノ宣傳カ常ニ主トシテ、支那遠隔ノ地、又ハ外國ヨリ起ルモノナルコトハ深甚ノ注意ヲ要スヘキ事項タラスンハアラス。

凡ソ滿鐵ニ對スル誤解ノ原因ハ、大別シテ、全ク事情ノ不知ヨリ來ルモノト、及ヒ陰謀的宣傳ニ因ルモノトノ二系統ニ分類スルコトヲ得ヘシ、前者ハ支那其他諸外國ヨリ來ル共通的ノモノニシテ、事情ノ分明ト共ニ氷解スルノ性質ヲ有スルモノナレハ、然カク恐ルルニ足ラス。後者ハ主トシテ、日本ニ反感ヲ有スル外國人ヨリ起ルモノノ如ク、斯クノ如キハ啻ニ滿鐵ノ迷惑トスル所ナルノミナラス、滿蒙開發ノ世界的大使命ニ對シ妨害ヲ試ミントスルモノニシテ、斷シテ輕視シ能ハサル所ナリ。

沿道ノ風光

千山　南滿本線湯崗子驛ヨリ十哩鞍山驛ヨリ八哩欝峯重疊眞ニ掬スヘシ



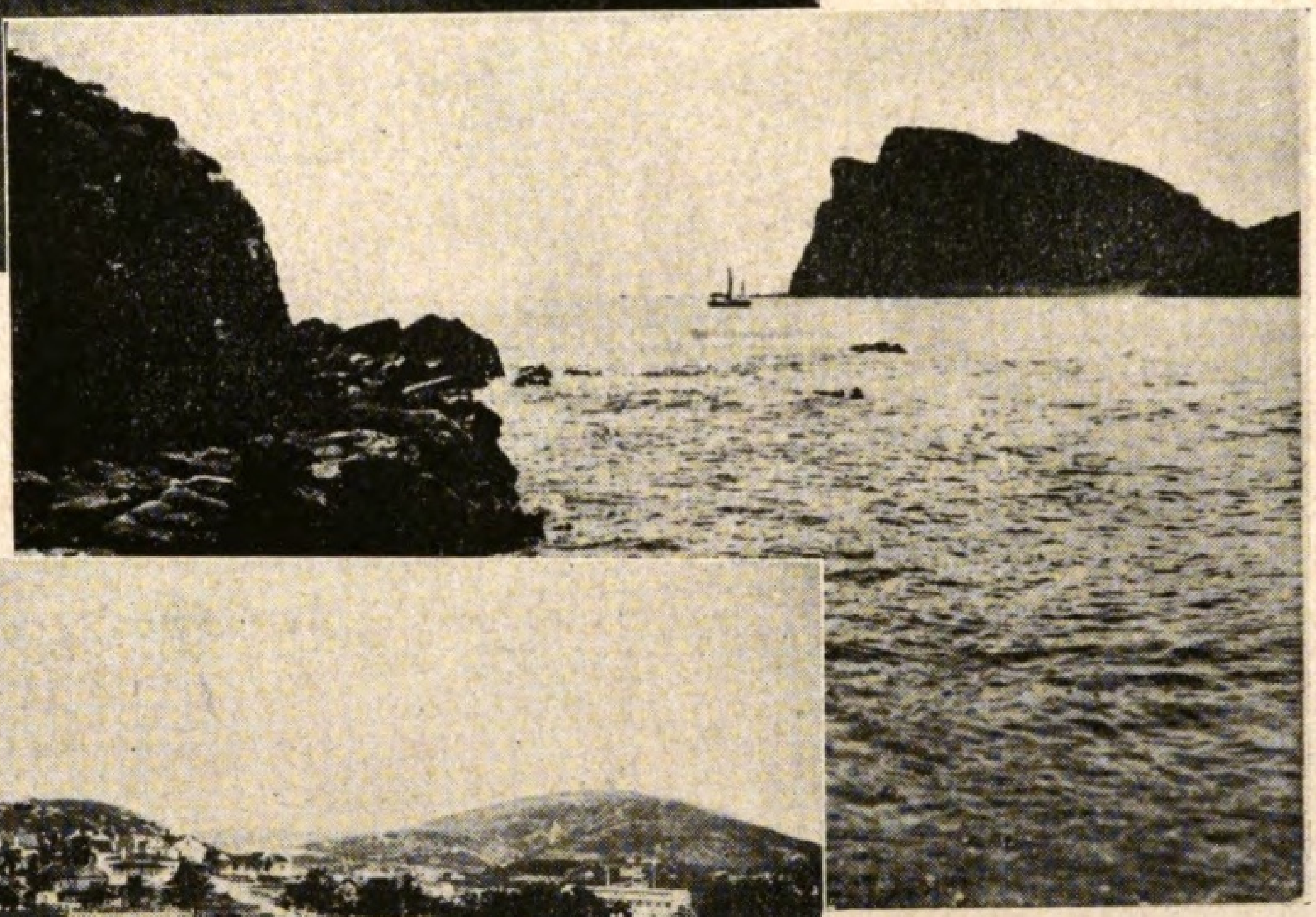


釣魚臺　安奉線橋頭驛附近ニ在リ山紫水明風光絶佳

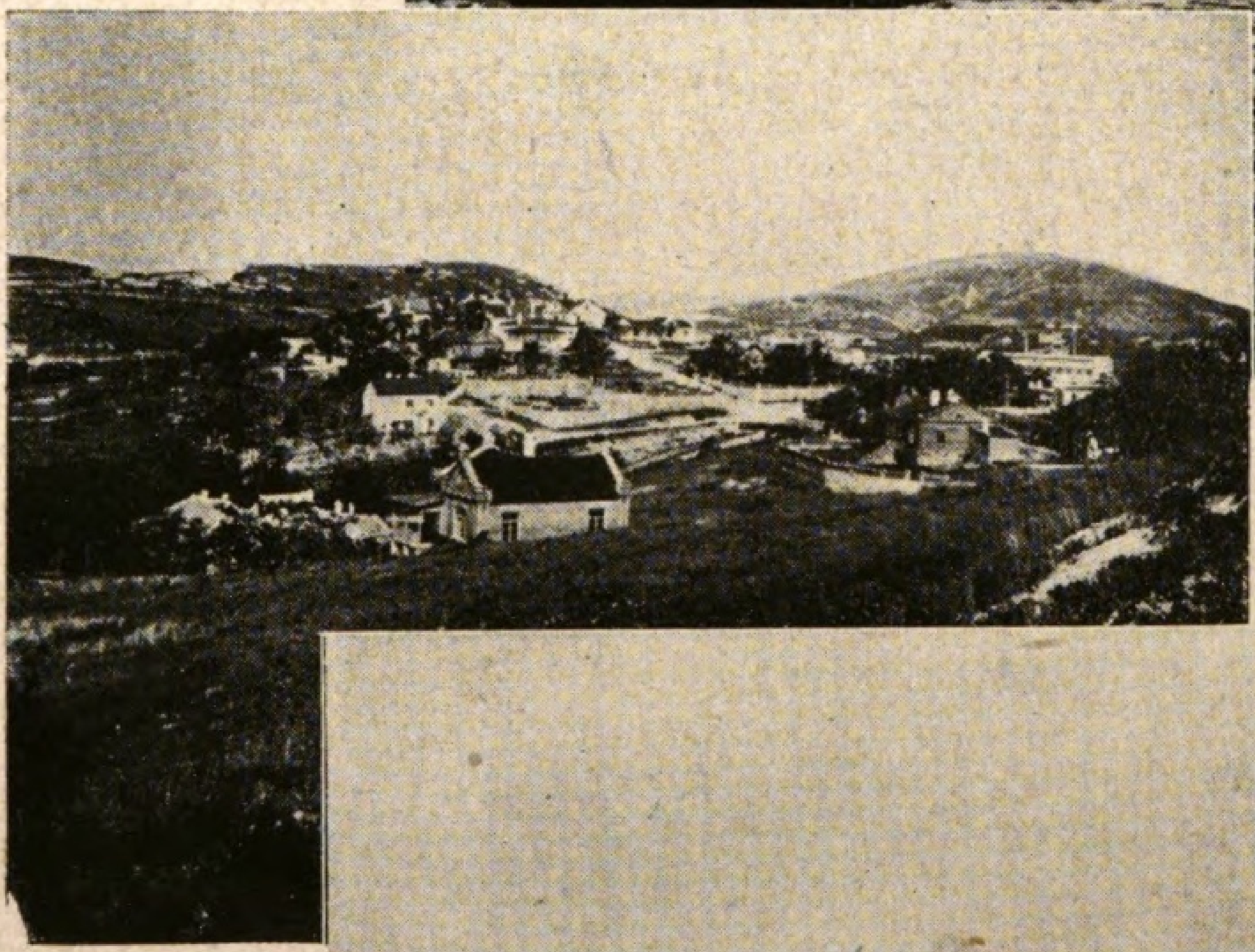
沿道ノ風光



星ヶ浦ゴルフリンク
大連西南方三哩黄海ヲ俯瞰シテ風景東洋一ト稱セラル



老虎灘
大連ノ南方二哩奇怪石亂浪ノ巖間ニ起伏ス



旅順黄金臺貸別莊
旅順ヲ一眸ノ中ニ收メ一味清風眞ニ三伏ノ苦ヲ忘ルニ足ル



鳳凰山　安奉線鳳凰城驛附近

附　録

第一章　滿鐵運輸取扱ノ公平

一、貨物ノ賃率及引受數ノ平等待遇

滿鐵ハ其ノ政策トシテ、日本人以外ノ國人ニ對シ、貨物乘客共差別取扱ヲ爲ストノ邪推ヲ受クルモ斯ノ如キ事實ナシ、左ニ分別說明スヘシ。卽チ貨物ノ運賃ハ本社運賃表ニ示ス如クニシテ、何國人タルヲ問ハス、一律ニ適用サルルモノナリ。其ノ他諸割引特定運賃ノ如キモ同樣トス。又貨物運送ノ順位等ノ如キ、當社運送規程、第六十三條ニ明定スル如ク、運輸上正當ノ事由、(例之危險品、火藥類、又ハ減損シ易キ品、等ノ如キ急送ヲ要スルモノ、)又ハ公益上ノ必要(例之罹災地優先輸送等)ヲ除キ、總テ受託ノ順序ニ依リ、之ヲ爲スコトトセルヲ以テ、其ノ間些ノ不公平アルコトナシ。

二、乘客ノ等級ト人種平等待遇

當社ニ於ケル客車等級ハ、一、二、三、等ノ三階級ニ區別サレ、之ニ相當スル運賃ヲ支拂フ旅客ハ、歐米人タルト、支那人タルト、黑人タルト、日本人タルトヲ問ハス。均シク、之ヲ利用スルコトヲ得ルモノニシテ、國籍若ハ人種ノ如何ニ依リ、客車ヲ異ニシ、又ハ列車ヲ異ニスル等、差別的待遇及取扱ヲ爲スカ如キハ、絕對ニナキ處ナリ。

殊ニ、支那人旅客ハ、當社鐵道ノ主タル顧客ニシテ、之ヲ劣等視スルコトナキハ勿論、現ニ、日本人、及其ノ他ノ諸外國人、ト同一ノ設備ヲ有スル客車ニ乘車シ居レリ。今試ニ、主要列車ニ於ケル、支那人ノ乘車割合ヲ調査スルニ、左記ノ通ニシテ、之ニ依テ觀ルモ、何等ノ制限セラルルコトナク、鐵道ヲ利用シツツアルハ明カナリ

種別＼等級	一等	二等	三等
日本人	四六%	四二%	一一%
支那人	二五%	五八%	八九%
外國人	二九%	―	―

三、三線聯絡ノ運賃割引

三線聯絡ノ割引運賃ハ、日本品ノミヲ割引スル規定ニ非ス。世ニ所謂、三線聯絡特定運賃ハ、朝鮮經由鐵道省線發、奉天及其ノ以北著、綿糸布外九品種ニ對シ、運賃約三割ヲ低減シ、一九一四年五月初メテ之ヲ實施シ、其ノ後海路ニヨリ、大連營口經由同一著地ニ至ル同品種ニモ、同率ノ低減ヲナシ、而シテ、一九一六年十一月更ニ金物外十九品種、及滿洲發、雜穀外四品種ヲ追加シ、爾來一箇年間ノ輸送數量、百五十噸ニ充

タサルモノハ、削除スル事トシテ、今日ニ及ヘルモノナリ。

本運賃ノ創定ハ、從來、內地滿洲間ノ貨物輸送、主トシテ、阪神ト大連トノ間ニ於ケル、大阪商船其ノ他ノ汽船便ニ依リシモ、安奉線ノ改築、竝ニ、鴨綠江架橋工事成リ、南北滿洲ト內地トノ主ナル交通ハ、前記航路ニ依ルモノト、朝鮮ヲ經由スルモノトノ二途ヲ生スルニ至レルノミナラス、鮮滿國境通過貨物ニ對スル、支那關稅三分ノ一減稅ノ特典ヲ得タルヲ機トシテ、對滿貿易ノ增進ヲ計レルモノナリ。

(イ) 國際的質疑

然ルニ、本運賃ノ創定ヲ以テ、滿洲ニ於ケル機會均等主義ニ反スルト言フ理由ノ下ニ、屢次、抗議ヲ受ク。今其ノ質疑ノ概要ヲ擧ケンニ、

(1) 日本發、大連經由、滿洲著、綿糸布以下十一品種ニ對スル運賃ハ、外國ヨリ來ル同一貨物ニ對シテモ適用セラルルモノト思考ス、如何。

(2) 第二回(一九一六年十月實施)協定ノ滿洲發、雜穀以下五品種、竝、內地發、金物以下二十品種ニ對シ、運賃ノ適用如何。

(3) 新運賃ハ、貨物ヲ直通ノ海路ヨリ、日本及朝鮮經由ノ徑路ニ誘致スルコトヲ目的トスルモノニ外ナラス、然ルニ、滿洲ヘノ輸入品ハ、獨リ日本發ノモノニ限ラス、外國ヨリ來ルモノアリ、然ルニ、直行ノ海路ヨリ迂廻セル徑路ニ貨物ヲ誘致セントスルハ、假令、日本ヲ經由スル場合ニハ、外國ヨリ來ル貨物モ同一ノ低減運賃ヲ適用サルルトスルモ、尙外國商人ニ取リテハ重大ナル問題ナリ。

(4)今回ノ新運賃モ、先年ノ運賃モ、同一趣旨ノ下ニ設ケラレタルモノト考ヘラルルカ故ニ、兼テ宣セル滿洲開放主義、機會均等主義ニヨリ、先年同樣、無差別ノ處置ヲ採ラレンコトヲ望ム。

(5)日本郵船、大阪商船、滿鐵トノ間ニ、大連竝營口ヲ經由スル綿糸布外數種ノ貨物ニ對シ、聯絡特定運賃ノ取扱ヲナシ、外國船トノ協定ヲ排斥スルハ如何。

(ロ) 質疑ニ對スル釋明

以上ハ、國際關係ノ名ニ於テ提出セラレタル質疑ナルモ、

(1)ハ既ニ一九一四年十月ヨリ、大連、營口經由外國航路ニ依ル貨物ニモ、本特定賃ヲ適用セリ。面カモ、本特定賃實施當初ヨリ適用ヲ受クル貨物ノ品種ニ對シテハ、内外國品タルヲ問ハサルハ勿論ナリ。

(2)新賃率ノ貨物モ、亦第一回協定ノモノト等シク、貨物ノ發送地及其ノ仕向地ノ何レナルヲ問ハス、同一事情ノ下ニ於テハ、同一ノ取扱ヲナスモノナリ。而テ滿洲出入貨物ハ、大連、營口、及安東ノ三港以外、尙釜山ニ由ルノ便利ナルモノアルヲ認メ、連續セル長距離輸送ヲ行フ場合、安東發著海港賃率ノ二割乃至三割ヲ低減シタルモノヲ以テ、滿洲線内ノ新特定賃ヲ設ケタルモノナリ。卽チ、長距離鐵道輸送ヲ爲スニ當リ、遠距離低減ノ主義ニヨリ、特殊貨物ニ對シ運賃ヲ低減シタルモノナリ。右特定賃制定ノ爲ニ、營口、大連、安東發著貨物ニ對スル、三港同一ナル低減運賃ニハ、何等變更ヲナシタルモノニアラス。

(3外國ヨリ直接滿洲ニ輸入セラルル貨物ニ對シテハ、前記海港運賃ヲ制定シ、距離ニ依リテ多少割引歩合ヲ異ニスルモ、一割五分見當運賃ノ低減アリ。

(4)本運賃ニ關スル範圍ニ於テハ、荷主ノ國籍及內外貨物ノ如何ニヨリ、取扱上差別ヲ付セサルハ勿論ニテ、單ニ、各鐵道ニ於ケル貨物輸送上、各事情ヲ異ニセル點ヲ考慮シ、之ニ適應スヘキ運賃ヲ設定シタルノミナルヲ以テ、毫モ機會均等主義ニ牴觸スル處ナシ。(別紙特定運賃品目參照)

(5)海路ヨリ聯絡スル貨物ノ輸送ニ就テ、內外汽船ト連帶ノ契約ヲナシ、其ノ貨物ノ運賃ヲ特定スルコトハ、大ニ希望スル處ナリ。既ニ、アドミラル汽船會社ノ當事者ハ、鐵道貨物ノ輸送ヲ希望スル旨ヲ申出テタル際モ、喜ンテ貴意ニ應スルノ意ヲ答ヘ、取極メ案ヲ提出セラレンコトヲ以テシタルモ、以後何等ノ申出ナク其儘トナレリ。之ニ徵スルモ、邦商船ニ限リ契約ヲナスモノニ非ラサルコトヲ證シ得ヘシ。

如上記述ニヨリ、本社運賃制定カ、何等機關均等ニ牴觸スルモノニ非サルコトヲ釋明シ得タリト信ス。

四、支那人及各外國人ニ與フル便宜

以上ノ如ク、滿鐵ニ對シテ從來加ヘラレタル非難ハ、全ク謂レナキモノニシテ、滿鐵ハ決シテ自國人ノ利益ヲ不平均ニ擁護スルモノニアラサルノミナラス、更ニ進ンテ、支那其他各國ニ對シテ、出來得ル限リノ便宜ヲ供與シツツアルコトハ、以下各諸項ノ例ニ就テ見ルモ、充分諒知セラルル所ナルヘシ。

(イ) 共存共榮主義

本社ハ、運輸取扱上內外ヲ通シテ、公平ノ措置ヲ執リ居ル事前述ノ如シト雖モ、尙ホ

進ンテ、共存共榮ノ主義ヲ確立シ、從來外國人ニ對シテ爲シタル好意的態度ハ、其例ニ乏シカラス。

會社ハ、沿線數停車場ニ對シ、外國語、特ニ露英及支那語ニ堪能ナル係員ヲ增置シ、外人旅客ノ便ヲ計リ、或ハ、每年春冬期ニ於テ山東省ヨリ北滿地方ニ出稼スル、夥多ノ苦力ニ對スル半賃輸送ヲナシツツアリ。又、日支學童及外國基督教布教師ニ對スル割引運送ノ制ヲ設ケ、又ハ、一九二〇年九月ヨリ一九二一年二月ニ於ケル、支那本土山東、河南地方ノ饑難民約二萬人ヲ無賃ヲ以テ滿洲ニ移住セシメ、或ハ、一九二〇年以來、**ルーマニア**、及**ポーランド**、竝ニ露本國、及西比利亞ヨリ避難セル支那人ニ對シテ、乘車賃五割減ヲ實施シ、一九二一年三月ヨリ七月ニ亙リ、庫倫ヨリノ避難民約九千ヲ、無賃ニテ輸送シタルカ如キハ、滿洲鐵道カ人類ノ福祉ニ盡セル僅少ノ實例ニ過キスト雖モ亦以テ、世界文化ニ貢獻スルノ方針ヲ窺フニ足ラム。

(ロ) 外國軍隊輸送數

種別＼年別	一九一六	一九一八	一九一九	一九二〇	一九二二
露國軍隊	八、六六二人	—人	—人	—人	—人
英佛軍用品護送者	—	三	—	—	—

英國軍隊	一	一	一	一五	一
佛國軍隊	一	一	四五	五	一
伊國軍隊	一	一,六〇七	一	一	一
伊國浮虜團	一	一,一〇四	一	一	一
支那軍隊	一	四,六六〇	一	五,二〇一	五,八五三

備考　本輸送運賃ハ日本軍隊同樣、何レモ五割引チ爲シタリ。

(八) 避難民等輸送數

種別	輸送年月	員數	運賃
ルーマニア及ホーランド避難民	一九二〇年八月以來	約三〇〇人	五割引
露本國及西比利亞引揚支那避難民	同右	二,五六〇	同右
山東河南地方避難民	一九二〇年九月ヨリ一九二一年二月ニ亙リ	約一二,〇〇〇	無賃
庫倫ヨリ引揚支那避難民	一九二一年三月ヨリ七月ニ亙リ	約九,〇〇〇	同右

(ニ) 其他運賃ノ割引

公共的貨物、救恤品、鐵道用材料、軍需品ニ對シテハ、左記ノ如ク運賃ヲ割引セリ、又支那官用軍需品ニシテ、支那官憲ノ證明アルモノハ、定メラレタル範圍ニ於テ、運賃ヲ半減スルコトニ規定セリ。

最近ノ例

一、吉長四洮兩鐵路局鐵道材料類ニ對シ、五割乃至七割ノ割引運賃ヲ以テ輸送シ居レリ右何レモ、時々、車輛類、建設材料ノ輸送申込アリテ、割引運送ヲ爲シ居レリ。

一、一九一九年十一月、中國海軍府ヨリ、松花江碇泊支那軍艦行貨物ニ對シ、運賃半減セリ。

一、一九二〇年七月二十八日ヨリ、同八月末日迄、蓋平縣饑饉救濟用粟千五百噸ニ對シ、三割減トセリ。

一、一九二〇年四月十五日ヨリ、同年八月末日迄、奉天城內道路修繕用碎石約一萬八百噸ニ對シ、運賃二割五分引トセリ。

一、一九二〇年十一月十五日ヨリ、一九二一年六月二十六日迄、直隸、河南、山東地方飢民救恤用米、麥、雜穀、衣類等ニ對シ、五割減ノ取扱ヲ爲シ、約四萬噸ヲ輸送セリ。

一、一九二一年一月一日、面坡方面ニテ、戰死セル巡閱使衞隊戰死者死體ヲ、五割引ニテ運送セリ。

一、一九二一年四月十五日ヨリ、同八月十五日迄、奉天城內道路修繕用碎石約七千五百噸ニ對シ、二割五分引ニテ運送セリ。

一、一九二一年七月以來、支那蒙疆計略使託送征蒙及歸還軍軍需品ニ對シ、運賃五割引ニテ運送セリ。

一、遼河改修用石材ヲ、毎年夏季中二割五分引ニテ運送シ居レリ。

一、支那官鹽、年額六萬ニ對シ、約三割强ノ割引率ニテ運送シ居レリ。

以上ハ、單ニ、一部ノ例ニ過キサルカ、此ノ外、前記取扱手續ノ範圍内ニテ、驛又ハ運輸事務所限リ、取扱ヒタルモノ相當ノ件數ニ上ルヘシ。

尙ホ、此ノ外、其ノ他ノ外國軍需品、赤十字社用品ニ對シテモ、割引運送ヲ爲セリ。此レカ一例ヲ擧クレハ、左ノ如シ。

一、一九一九年八月、申出ノ、佛國軍需品車輌類ヲ、半賃運送セリ。

一、一九二〇年八月、申込、佛國軍需品麥粉三車ニ對シ、五割減ニテ運送セリ。


一、一九二〇年十月、申出ニ依リ、米國赤十字社支那**ミツシヨンホスピダル**行、藥品及備品ニ對シ、運賃二割五分減トセリ。

第二章　密輸入及脫稅ノ防止共助

今茲ニ貿易ノ項ヲ終ルニ當リ、密輸入及脫稅ノ防止ニ關シテ、滿鐵ト大連稅關ト


ノ關係ニ付、一言スルノ必要アリ。從來滿鐵ニ加ヘラレタル批難ノ一トシテ、滿鐵ハ大連稅關(支那ノ管轄ニ屬ス、關東州租借地ト支那內地トノ境界地點ニ設置セラルヘキモノヲ、特ニ海港タル大連ニ設置スルコトヲ日本側カ許容セルモノナリ)ノ禁制品密輸入ノ防止及脫稅防止ニ援助ヲ與ヘストノ一項アリ、這ハ、滿鐵ニ對スル批難ナルト同時ニ間接ニ日本官憲ニ對スル批難ト見ルヲ得ヘシ。然レトモ此批難モ亦、滿鐵ハ內外貨客ニ對シ、差別的取扱ヲ爲シ居レリト云フト均シク、全ク根據ナキ推斷ニ過キス。滿鐵ハ其ノ運輸規定ニ於テ、租借地ノ境界ヲ越エテ、支那內地ニ輸送セラルル貨物(租借地ノ一地點ヲ仕向地トスル貨物ハ、輸入無稅ニシテ、境界ヲ越ユル貨物ノミカ、他ノ諸港ヨリスル貨物ト同樣輸入稅ヲ課セラル)ハ、稅關手續ノ完了セル證明アルモノノミ、發送スヘキコトヲ定メアリ。而シテ此規定ハ、貨主ノ國籍ニヨリテ、何等ノ變更ナキヲ以テ、滿鐵ニ依ル支那內地輸送貨物ハ、全部大連稅關ノ檢査ヲ受クヘキモノナリ。實際上稅關員ハ、貨物ホーム、停車場、列車內ニ於テ、隨意ニ脫稅及密輸入ノ防止ニ必要ト認ムル手段ヲ取リツツアリ。

而シテ日本官憲ハ、單ニ稅關取締ノ儘ニ放任スルニ滿足セス、阿片、銃器彈藥、食鹽(食鹽モ支那ニ於テハ輸入禁制品ナリ)等ノ輸入ヲ取締ル爲、夫々罰則ヲ附シタル取



一、一般支那人ノ待遇

滿洲ニ於ケル租借地及鐵道附屬地ハ、其ノ性質ニ於テ、支那諸港ニ於ケル專管居



ノ關係ニ付、一言スルノ必要アリ。從來滿鐵ニ加ヘラレタル批難ノ一トシテ、滿鐵ハ大連稅關(支那ノ管轄ニ屬ス、關東州租借地ト支那內地トノ境界地點ニ設置セラル

締規則ヲ制定シ、稅關吏ヨリモ尙一層嚴重ナル方法ヲ以テ、警察官吏ヲシテ、取締ヲ爲サシメツツアリ。其ノ他日本官憲ノ取扱ニ歸スヘキ郵便物ノ如キモ、稅關吏ノ檢查ノ爲ニ郵便局ヨリ提示セラル。禁制品ハ單ニ密輸入ヲ防止スルノミニテハ、其ノ目的ヲ完全ニ達成スル能ハサルヲ以テ、此取締ハ鐵道附屬地ノ全部ニ亙リテ、嚴重ニ施行セラレツツアリ。過去十年間ニ於ケル禁制藥品ノ檢擧ノミニテモ四千四百五十件ニ上レリ、是レ稅關側ノ及ハサル處ニシテ、是ニヨリテ鐵道ヲ利用スル是等ノ不正業ヲ、殆ト遺憾ナク取締ルコトヲ得ルモノナリ。唯タ遺憾トスヘキハ、滿洲ノ出入口ハ單ニ滿鐵ノミニアラス、又警察力完全ニ、普及セラレサル滿洲ニ於テハ、到底我官憲及滿鐵ノミノ力ヲ以テ、是等ノ不正業ヲ遺漏ナク取締ルコト能ハサルコトナリ。

第三章　日本官憲及滿鐵會社ハ地方支那人ヲ如何ニ待遇シツツアリヤ

一、一般支那人ノ待遇

滿洲ニ於ケル租借地及鐵道附屬地ハ、其ノ性質ニ於テ、支那諸港ニ於ケル專管居

留地ニ相似タルモノ甚多シ、即チ其ノ地域内ノ行政權ハ租借國タル日本ニ屬シ、支那國民モ、亦日本官憲ノ統治ヲ享クルコト、猶專管居留地内ニ居住セル支那國民カ、該居留地内ノ行政ニ支配セラルルカ如シ。

（イ） 支那法令習慣ノ準據

關東州租借地内ニ於ケル行政方針ハ、一々縷述セサルモ、全然日本内地ニ於ケル法令ニ準據スルモノニハアラス。又支那國内法ヲ襲踏セルニモアラスシテ、支那人民ノミニ關スル事項ハ、可成支那ノ習慣法令ヲ尊重シテ之ニ準セシメ、日本人ニ關スル場合ハ、主義トシテ日本ノ國内法規ニ據ルヲ大方針トセリ。其ノ著シキ例ハ、土地ニ關スル裁判ハ舊慣ニ依ルコトヲ定メタルカ如シ。之在住日本人ノ爲ニハ甚シキ不便ナリト雖モ、住民ノ多數ヲ占ムル支那人ノ利益ヲ尊重セル一例ナリ。

（ロ） 自治機關

租借地内ニ於ケル地方部落ニ於テハ、土地人口ノ大小ヲ案シテ、簡易ナル自治團ヲ組織セシメ、官憲ハ之ヲ監督シテ、可成地方民ノ意嚮ニ副フ政治ヲナシツツアリ。又鐵道附屬地ノ諸施設ハ、滿鐵會社カ多大ノ犧牲ヲ拂ヒテ之ヲ爲シツツアリ、其ノ費用ノ一部ハ、附屬地内ノ在住者ニ分擔セシメツツアルカ、是カ爲ニ各地方ニ會社

ノ施設ニ對スル諸問委員ヲ設ケタリ。此委員ハ、從前ニ於テハ會社之ヲ指定スル規定ナリシモ、今年制度ヲ改メ、居住民ノ選擧ニヨルコトトシ、各國人共ニ選擧被選擧ノ權利ヲ有ス。唯日本人以外ノ國民ハ、被選擧者ノ總數二分ノ一以上ニ上ルコトヲ得サル定ナリ。故ニ此範圍内ニ於テハ、支那人民モ共ニ附屬地內ノ行政ヲ議スルコトヲ得ルモノニシテ、他ノ專管居留地ニ於ケル居住支那人ノ權利ニ優ルトモ劣ルコトナキナリ。

（八）社會的優遇

支那人ノ社會的地位ハ、全然日本人トノ間ニ差別ナシ、之ヲ例ヘハ汽車、汽船、電車等ニ於テハ何國人ト雖モ座席ヲ區別スルコトナキハ他項ニ詳述セル通ナルカ其ノ他公園、劇場、病院、學校等ニ於テモ何等ノ差別ナク支那人ヲ日本人ト同様ニ待遇シ、公共的設置ノ如何ナル部分ト雖モ、支那人ニ閉鎖セル處ナシ。是又他ノ專管居留地ニ勝ルトモ劣ルコトナキ支那人優遇ナリ。旅順ニハ現ニ、支那人教員ノ養成機關タル師範學校一校有リ、然ルニ未タ日本人ノ爲ノ師範學校アラス、是ノ如キハ支那人子弟カ日本人子弟ニ比シテ、ヨリ、勝レル幸福ヲ享クルコトヲ示スモノニ非スヤ。

支那人ハ、衞生、風俗等ノ點ニ於テ、日本其ノ他ノ諸外國人ト同一地區ニ居住スル

ニ不便ナル習慣アリ、此不便ハ、支那人自ラカ感スルヨリモ、寧ロ隣接セル外國人ノ多ク感スル所ニシテ、之カ爲ニ、露國カ關東州ヲ租借セル時代ニ於テハ、一定ノ地域ニハ、支那人ノ居住(外人ノ婢僕等ヲ除ク)ヲ許容セサル方針ナリシカ、日本ハ斯クノ如キ制限ヲ全然設ケス、市街ノ如何ナル部分ヲモ、各國人均シク居住使用シ得ルコトトセリ。之カ爲ニ、衞生保安等ノ見地ヨリ、一部ニハ、支那人ヲ區別居住セシムルノ利益ナルヲ唱道スル者スラ有レトモ、日本官憲ハ、差別的ニ友邦人ヲ取扱フコトヲ不可ナリトスル方針ヲ變セサルナリ。

(二) 笞刑ノ不可避

日支人ヲ差別的ニ取扱フ殆ト唯一ノ例ハ、支那人犯罪者ヲ笞刑ニ處スルコトナリ。

笞刑ハ、支那人ノ犯罪ニシテ、三箇月以下ノ懲役百圓以下ノ罰金及拘留、又ハ科料ノ刑ニ處スヘキ犯罪ノ換刑ニシテ、關東州租借地内ニ住所ヲ有セサルトキ、及無資產ナル場合ノ情狀ニ依リ施行セラルル刑ナリ。此刑ハ勿論、一定年齡ノ支那人男子ニノミニ課セラルルモノニシテ、一日ニ一回三十以下ノ鞭ヲ加フル方法ニ依レリ。換刑ノ標準ハ、刑一日ヲ笞一ニ、又金一圓ヲ笞一ニ換算スルナリ。倘笞刑ヲ課スル

ニ堪ヘサル身體ノ健康狀態ナル場合ハ、猶豫又ハ免除ノ規定アリ。笞刑ハ純人道上ノ見地ヨリスレハ、之ヲ行ハサルヲ可トスレトモ、浮浪ノ支那人ニシテ、資産ナキ常習的犯罪者ハ之ヲ罰スルノ方法ナク、投獄スレハ彼等ノ日常生活ヨリモ、遙カニ愉快ナル衣食住ヲ供給セラルルヲ以テ、却テ、之カ爲ニ彼等ノ入獄ヲ目的トスル犯罪ヲ誘起スルノ弊ヲ生シ、罰金ヲ課セムニハ資産ナク、結局、彼等ハ犯罪ニ對シ、何等ノ恐怖ヲモ抱カサルニ至リ、社會ノ安寧ヲ脅カスコト甚シキヲ以テ、現ニ支那ニ於テ輕徴ナル犯罪者ニ行ヘル笞刑ヲ施行スルノ外ナキカ爲、之ヲ今尙實施セルモノニシテ其ノ施行ノ方法ノ如キモ、支那在來ノ方法ニ比シ著シク人道的ナリ。

二、支那人勞働者ノ待遇

本社ノ支那人勞働者ニ對スル待遇方針ハ、可成彼等ノ風俗習慣ヲ尊重シ、之ニ文化的指導並施設ヲ施シ、彼等ノ生活向上ヲ計ルノ趣旨ニ基キ、大略左記ノ如ク實施シツツアリ。

(イ) 支那人勞働者ノ採用方針

(1) 土著人ノ採用　其ノ採用ハ、可成土著人中ノ就職希望者ヲ先ニシ、不足分ニ對シ之ヲ外部ヨリ募集ス。例令ハ、鞍山製鐵所ニ於ケル、本年七月末支那人勞働者現在ハ、四千五百九十八人ニシテ、其ノ内約八十パ

ーセントハ鞍山附近ノ土著民ナルカ如シ。

(2) 土著人以外ノ採用　外部(卽山東、直隷、關內外等)ヨリ募集スル場合ニ於テハ、之カ海陸ノ旅費ハ勿論、家族ニ對スル安家錢ノ前渡ヲナス。

例令ハ、撫順炭礦ニ於テ募集スル山東、直隷、關內外等ノ採炭人夫ノ如キハ、全部之等ノ旅費ヲ會社ニ於テ負擔スル而已ナラス、尙、彼等カ不在中、一時ノ生計費補助トシテ、其ノ家族ニ對スル、所謂安家錢ナルモノヲ、各人ニ對シ、數十圓宛ヲ前渡スルヲ例トセリ。右ハ支那人勞働者ニ對スル特別優遇ニシテ、日本人勞働者ニ對シテハ此ノ種ノ待遇ヲ爲サス。

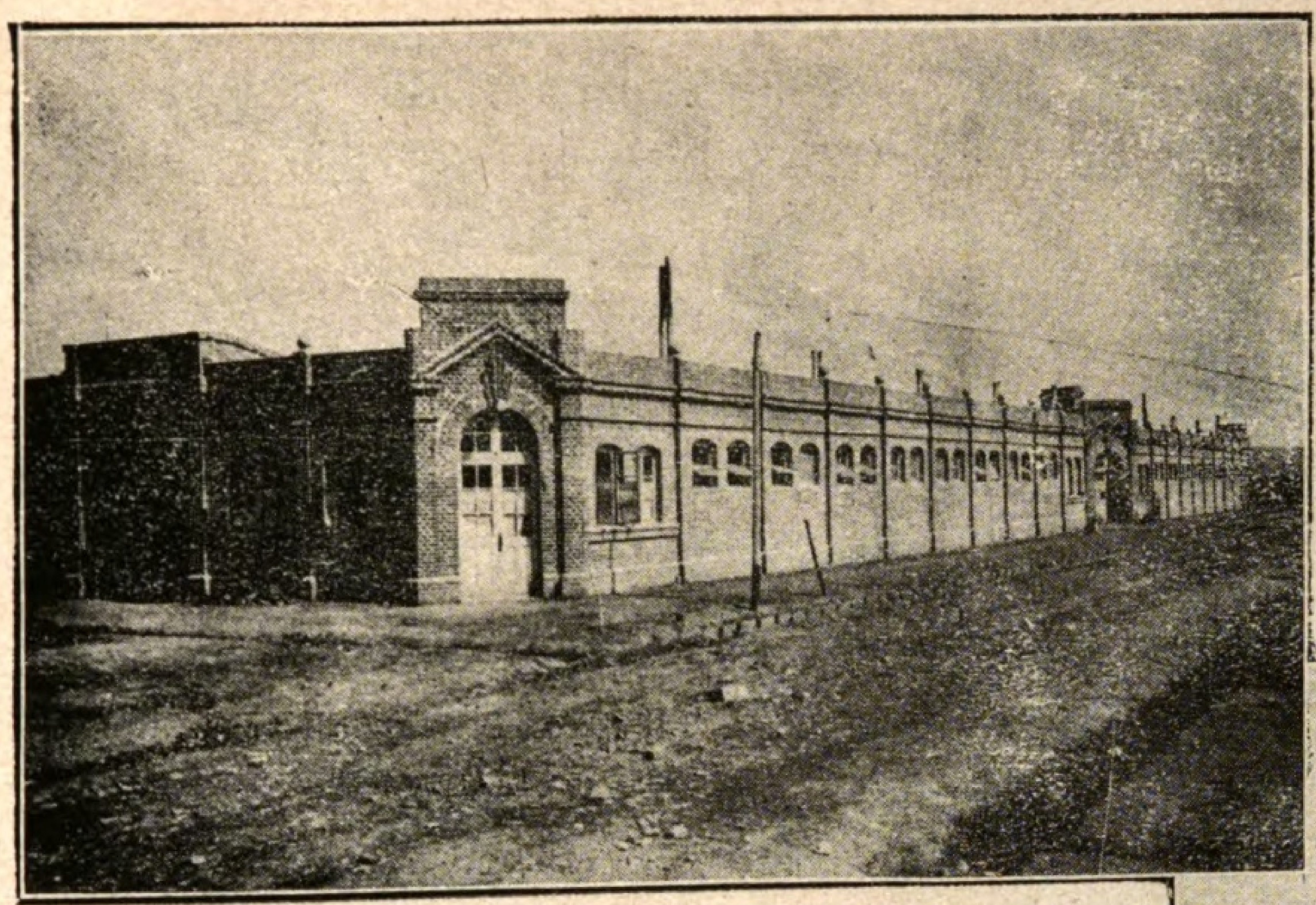
(ロ) 勞働者ノ優遇

(1) 休日ノ附與　支那人勞働者ニ對シテハ、特ニ其ノ風俗習慣ヲ尊重シ、宗教其ノ他ノ習慣ニ依ル一般國民ノ休息日ニハ、會社モ等シク之ニ休日ヲ與フ。例令ハ沙河口、鞍山、撫順等ニ於テ支那正月、仲秋其ノ他支那特殊ノ祭日ニ於テ多數ノ休業日ヲ與フルカ如シ。

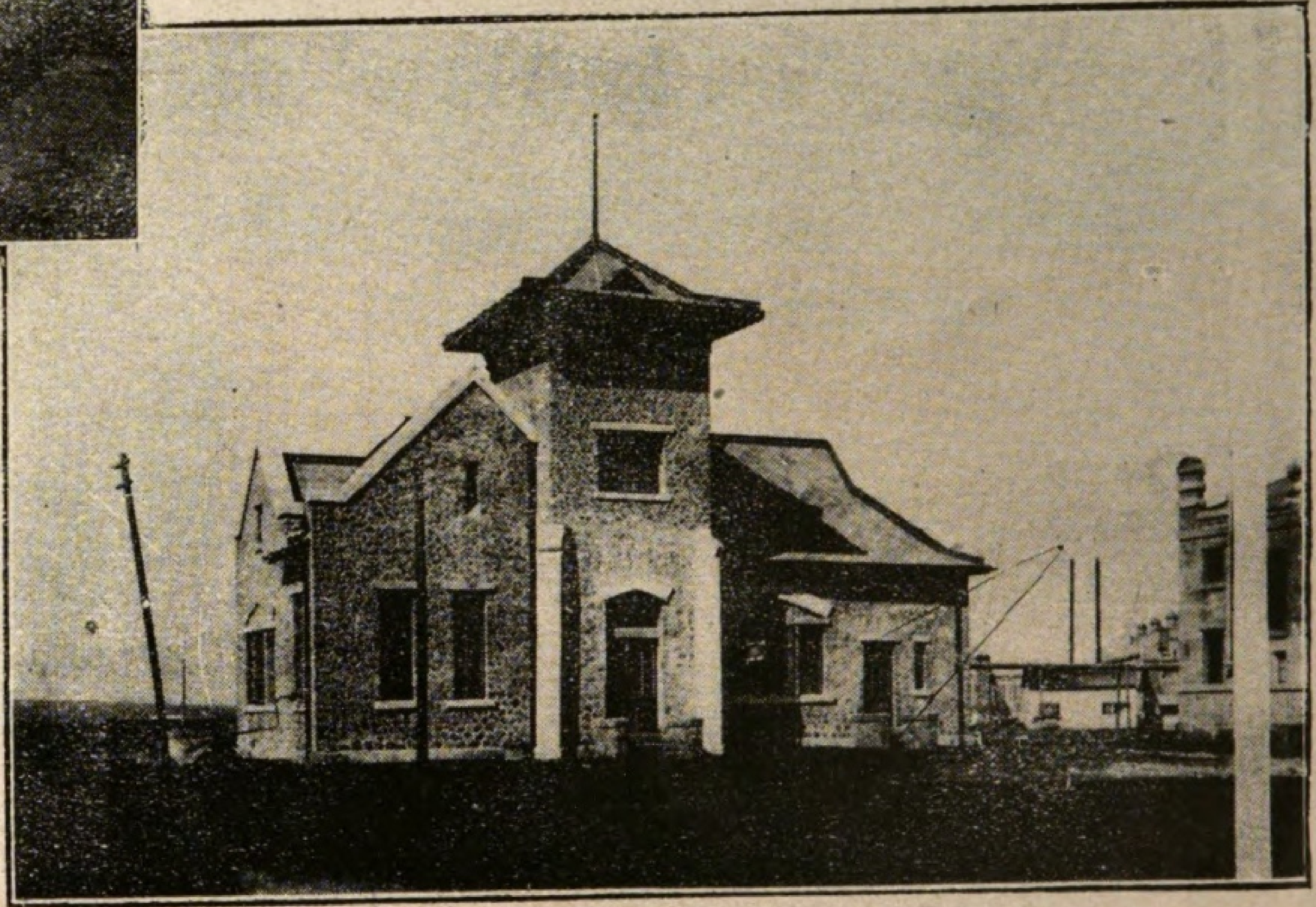
(2) 勞働時間　心身過勞ノ職務ニ從事スル者ニ對シテハ、八時間勞働制ヲ實施シ、其ノ他ノ者ト雖、均シク日本人ト同一取扱ヲナシ、尙食後三十分乃至一時間ノ休憩時間ヲ與ヘツツアリ。例ヘハ、撫順炭礦ノ採炭夫ノ如キハ、殆ト全部三交代(卽八時間制)ニシテ、其ノ他沙河口、鞍山等皆日本人ト同一待遇トシ、十時間制度ヲ原則トセリ。

(3) 支那勞働者ノ優先利益　支那人ヲ以テ充當シ得ヘキ仕事ハ、成ル可ク支那人ヲ用ヒ、日本人ハ極メテ少數ニ止メ、以テ支那人ノ職ヲ奪ハサラム事ニ勉ム。例ヘハ、撫順、鞍山、沙河口等ニ於テモ監督者、又ハ特殊ノ技能ヲ要スル仕事ニ從事スルモノノ外、殆ト日本人ヲ用ヒ居ラス。且支那人ニテモ、其ノ技能ニヨリ、或ハ監督者トナリ、又ハ日本人以上ノ職ニアルモノ決シテ少ナカラス。

工業施設（其三）

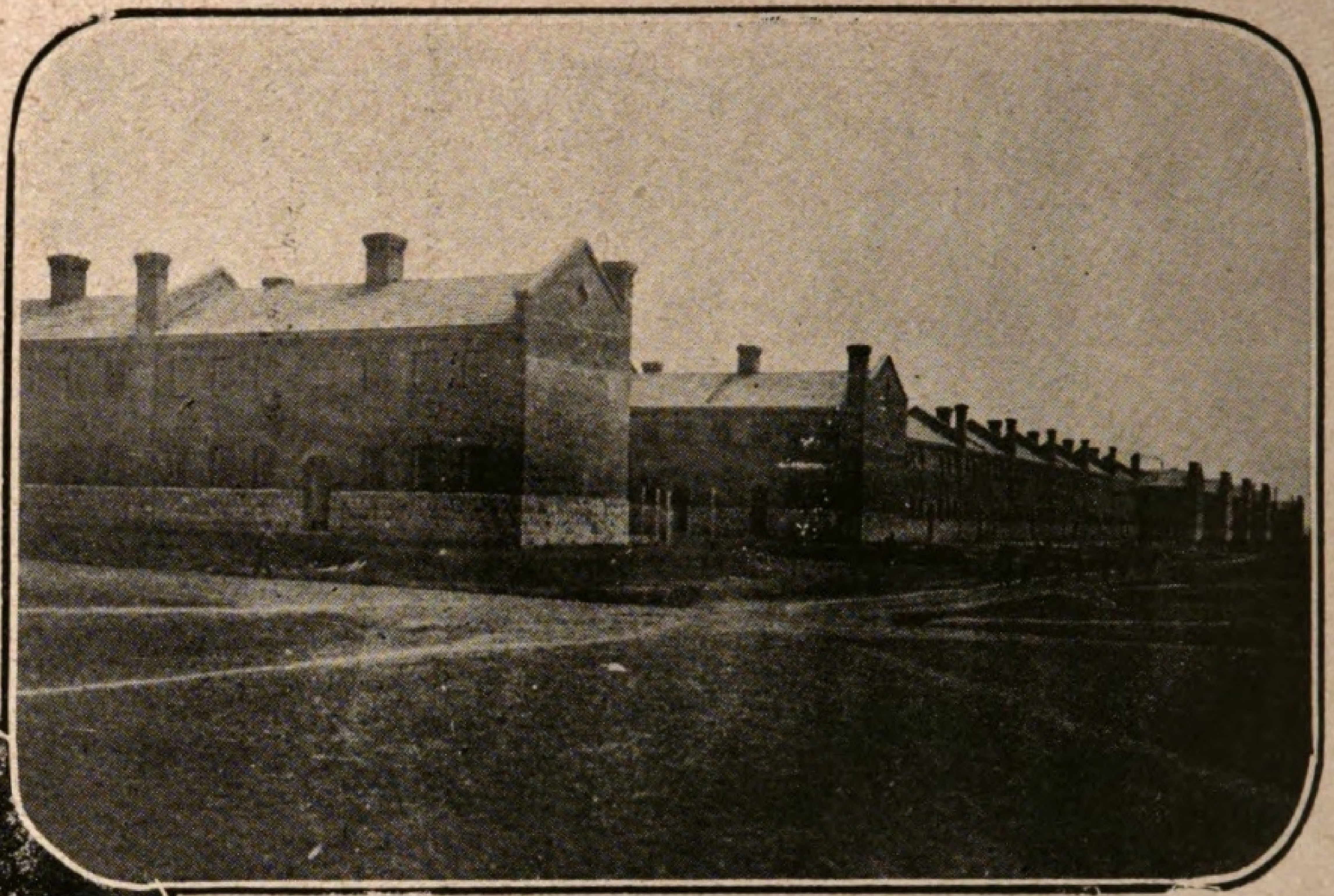


撫順苦力宿舍

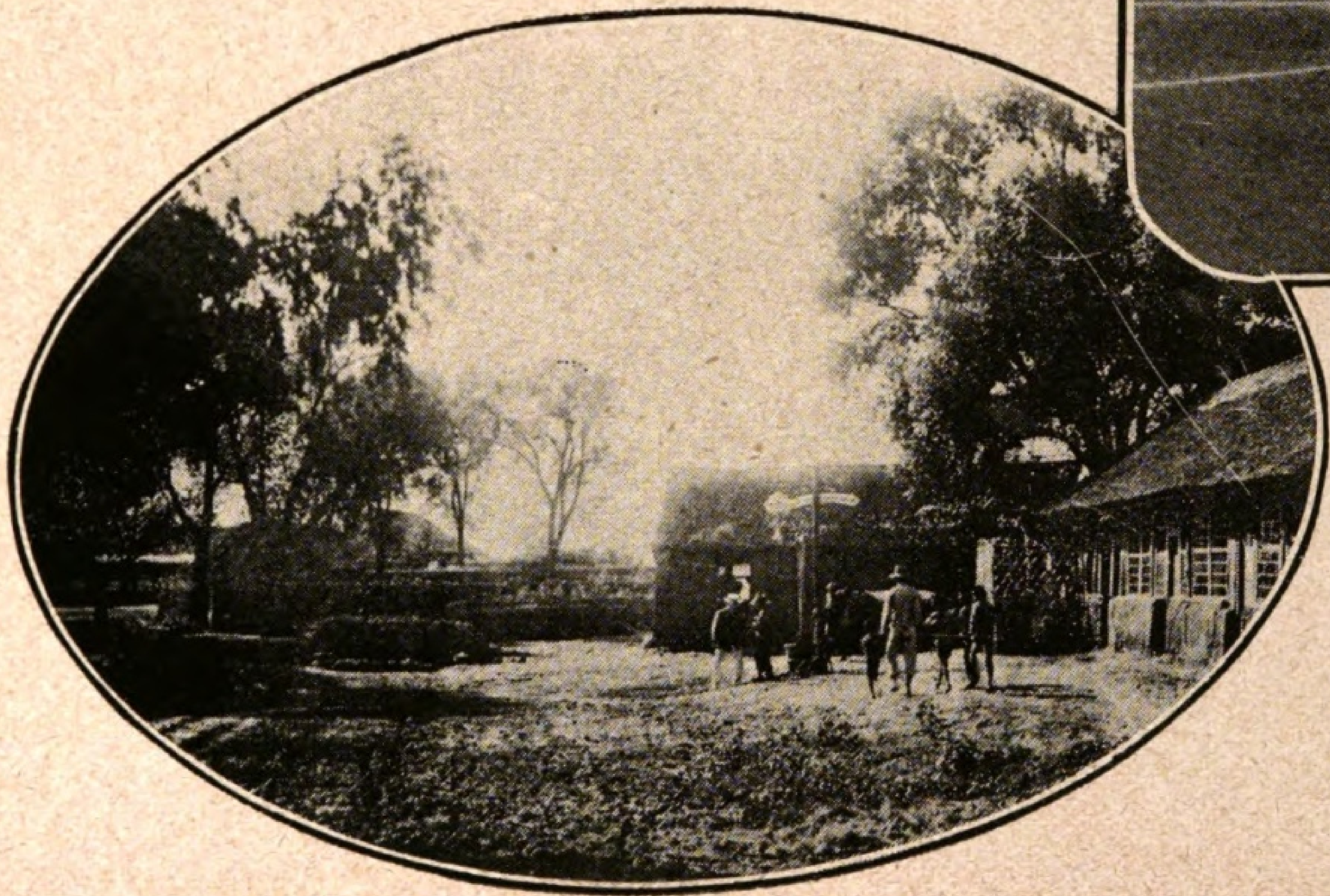


撫順地方住民貸家

工業施設（其五）



鞍山製鐵所支那人家族持住宅



鞍山製鐵所附近支那人農家

(4) 請負制度ノ防止　支那人勞働者ハ、成ル可ク直隷制度トシ、中間者タル把頭、卽請負人、又ハ小頭ノ如キ中間ニ在リテ、手數料ヲ取ル者ヲ用ヒス。會社ハ直接勞働者ニ給料ノ支給ヲナシ、以テ、其ノ收入ノ增加ヲ計ル。右ハ、支那從來ノ勞働組織ニ反クモノナルモ、勞働者ノ利益ノ爲ニ之ヲ斷行シ、各工場ノ常役人夫ハ勿論、撫順炭礦等ニ於ケル量仕事、卽其ノ働キ高ニ應シテ賃金ヲ支給スル一種ノ請負制度ニ對シテモ、同樣會社ノ直隷トシテ苦力ノ收容增加ヲ計レリ。

(5) 勞働賃銀　會社ヨリ得ル所ノ賃金ハ、一般支那人間ノ賃金ヨリモ、多額ヲ支給シツツアリ。且生活程度ニ比較スル時ハ、寧ロ日本人ノ夫レヨリモ高率ナリ。例ヘハ、農業勞働者ノ一般賃金ハ、食糧雇主持ニテ一箇月二元(目下ノ相場ニテ九十錢ヨリ一圓內外)又ハ三元ニ過キス、農繁期ノ短期雇傭ニテ酷使セラルル場合ニ於テモ、其ノ日給ハ、五十錢內外ナルニ反シ、鞍山製鐵所ニ於ケル、各種支那工人ノ平均日收額ハ、五十二錢ニシテ撫順、沙河口ニ於ケル工賃モ之ヲ下ラス。尙技量優秀ノ者ニ至リテハ、一日二元乃至三元ノ收入ヲ得、日本人勞働者ノ收入ヨリモ大ナルモノ少ナカラス。

此ノ外時間外勞働ニ對シテハ、日本人同樣、割增工賃ヲ支給シ、且一箇年二回、每回日給ノ十五日分ニ相當スル賞與金ノ支給アリ。而シテ彼等ノ生活費ハ、一箇月四圓ニテ足ルヘク、平均生活費ノ四倍ニ近キ賃金ヲ得ツツアル次第ナリ。

(6) 宿舍其ノ他ノ給與　家族持ト獨身者タルニ論ナク、日本人ト等シク宿舍ヲ供給シ、然モ支那人ニ對シテハ、毫厘ノ宿舍料ヲ徵收セス。尙附設浴場、洗濯所、俱樂部、物品販賣所等ヲ設ケ、以テ彼等ノ生活ノ向上、並衞生經濟ヲ保チ、尙獨身者ニ對シテハ共同賄所ノ施設アリ。

挿入寫眞ノ示ス如ク、其ノ宿舍ハ、支那人中流以上ノ宿舍ト、之ヲ比較スルモ尙數等優秀ニシテ、加フルニ架設スルニ電燈、水道等ノ文明具ヲ以テシ、且建大ナル共同浴場ヲ設ケテ、晝夜ノ別ナク、隨意ニ無料

入浴セシメ、洗濯所ヲ附設シ、彼等ノ衞生思想ヲ養ヒ、撫順炭礦ノ如キハ、各坑所ニ廣大ナル倶樂部ヲ設ケテ彼等ノ娯樂場ニ充テ、尙、物品販賣所ヲ設置シテ、物品ノ無賃輸送ヲナシ、支那人就業員ニ廉賣セシム

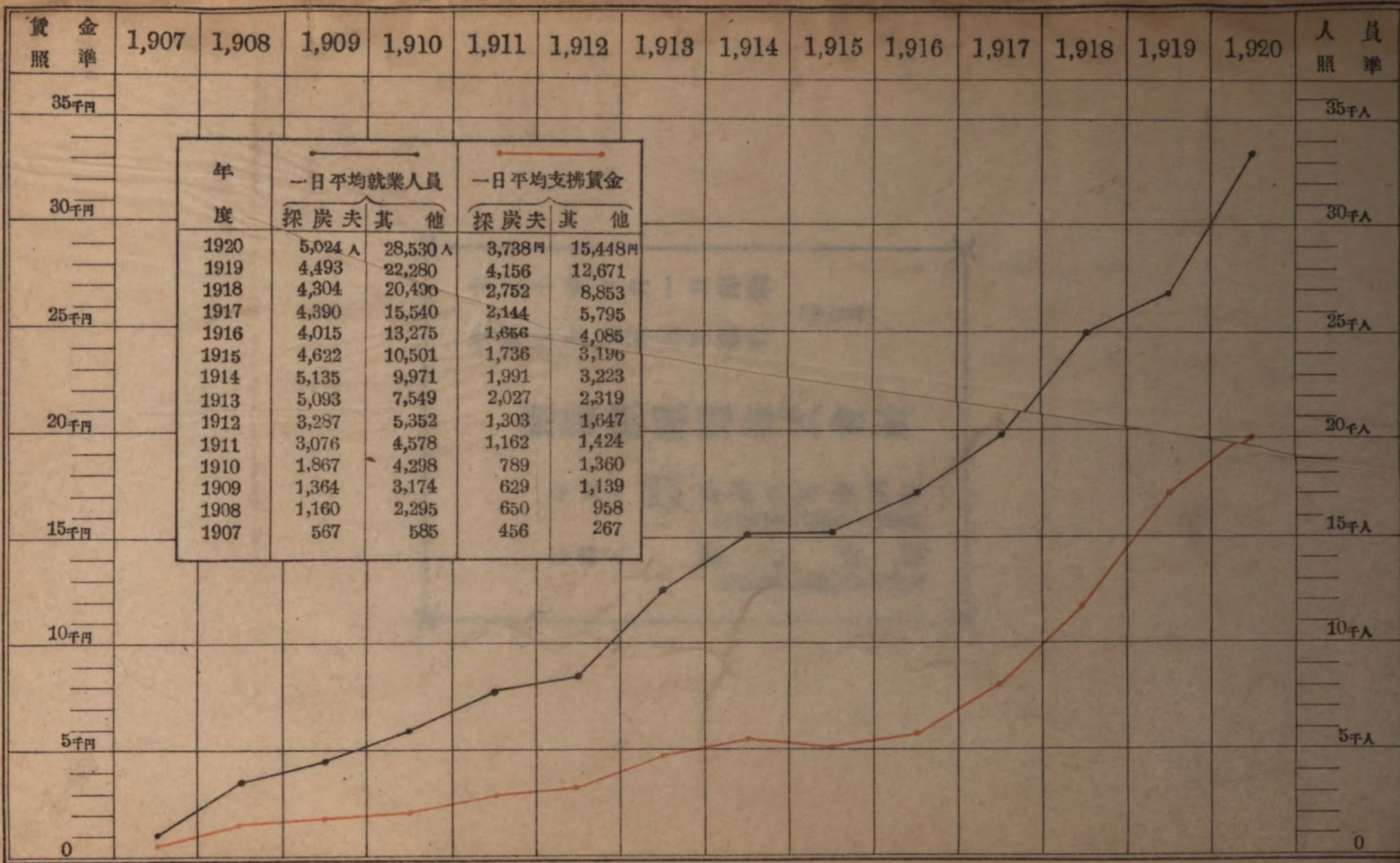
(7) 施療　施療ニ付テハ各箇所ニ宏大ナル醫院ヲ設ケ、優秀ナル醫師竝看護婦ヲ置キ、日本人同樣公傷病者ノ無料治療ヲ爲スハ勿論、撫順炭礦ノ如キ、採炭夫及其ノ家族ノ施療、竝一般貧困者ノ施療ヲモナシツツアリ。

(8) 傷病者ノ保護　公傷病者ニ對シテハ、其ノ傷病中之カ日給ヲ支給スルノ外、不具トナリタル者、若クハ死亡者ニ對シテハ、本人若クハ其ノ遺族ニ對シ、夫々一定ノ手當及弔慰金ヲ支給シツツアリ。

(9) 徒弟教育　又、會社ハ、學校ヲ建設シテ、徒弟ノ教育ヲナシツツアリ。撫順炭礦ニ於テハ既ニ早々ヨリ簡易鑛山學校ノ設アリ。支那人徒弟ニ對シ、鑛業及工業ニ關スル普通教育、竝日語ノ教授ヲナシ、日勤勞働者ニ對シテハ夜學校ヲ設ケテ、普通學、日本語等ノ教育ヲナシツツアリ。尙沙河口其ノ他沿線各地ニ於テモ、普通教育ノ爲、公學堂ヲ設ケ、鞍山ニ於テハ目下之カ計畫中ニ屬ス。

之ヲ要スルニ、會社ハ、其ノ勞力ヲ土著支那人ニ仰クコトヲ以テ、會社自身ノ爲ニモ、將又、支那人ノ爲ニモ、有利ナルコトヲ確信スルモノナルカ故ニ、支那人、勞働者ニ、破格ノ待遇ヲ爲シ彼等ヲシテ、爭ツテ會社ノ使用人タルコトヲ志願セシムルノ方策ヲ採リ、彼等ノ利益ヲ土臺トシテ會社ノ利益ヲ計ルコトヲ念トセリ。其ノ勞銀、及諸給與カ、歐米其ノ他ノ各國ニ比シテ低廉ナルハ、支那ニ於ケル一般物價、及賃銀ノ低廉ニ基因スルモノニシテ、斯ノ如キ賃銀及給與モ、滿洲ニ於テハ、尙且異數トシテ彼等ノ歡迎スル所ナリ。

撫順炭礦就業支那人労働者一日平均人員及賃金



年度	一日平均就業人員		一日平均支拂賃金	
	採炭夫	其他	採炭夫	其他
1920	5,024人	28,530人	3,738円	15,448円
1919	4,493	22,280	4,156	12,671
1918	4,304	20,490	2,752	8,853
1917	4,390	15,540	2,144	5,795
1916	4,015	13,275	1,656	4,085
1915	4,622	10,501	1,736	3,196
1914	5,135	9,971	1,991	3,223
1913	5,093	7,549	2,027	2,319
1912	3,287	5,352	1,303	1,647
1911	3,076	4,578	1,162	1,424
1910	1,867	4,298	789	1,360
1909	1,364	3,174	629	1,139
1908	1,160	2,295	650	958
1907	567	585	456	267

大正十年十月一日印刷
大正十年十月五日發行
（非賣品）

南滿洲鐵道株式會社

印刷所 株式會社 滿洲日日新聞社
大連市東公園町十七號地

印刷人 安井源吉
大連市東公園町十七號地